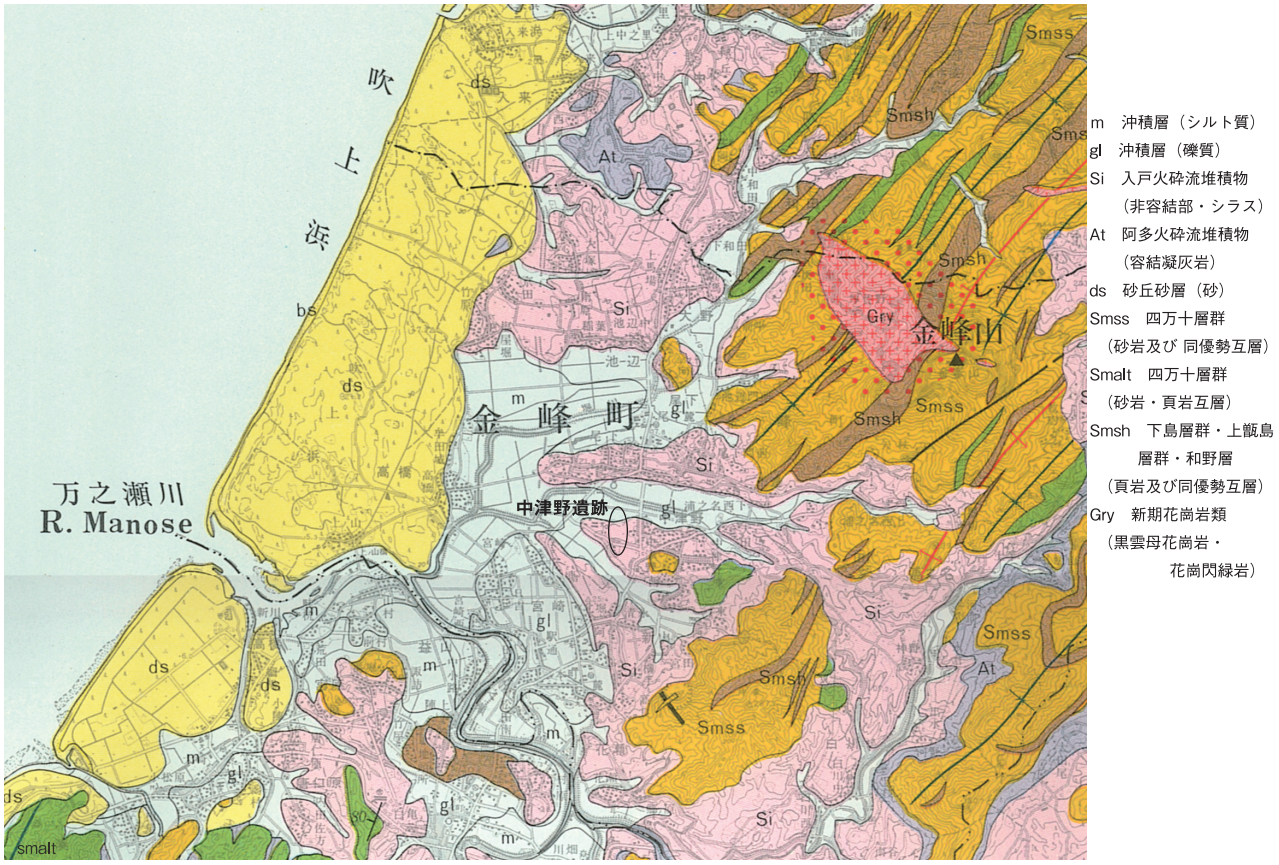


第３図　中津野遺跡周辺地形分類図（縮尺任意・鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変）

第４図　上空から見た中津野遺跡周辺地形 1974 ～ 1978 年頃（国土画像情報国土交通省より）

第１表　国道270号関連遺跡の一覧表

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
1	南下	南さつま市金峰町尾下 低地・低湿地	H18年度 H19年度 終了	H21年度 H22年度 刊行 県セ(157)	縄文		石鏃, 二次加工剥片, 石核, 凹石, 敲石, 石皿
					弥生		入来式土器
					古墳	杭列	中津野式, 東原式, 辻堂原式, 笹貫式, 丸底甕形土器, 壺形土器, 鉢形土器, 坏, 坩型土器, 高坏, 土師器, 須恵器, 木製品
					古代		土師器, 須恵器, 滑石製品
					中世		土師器, 青磁, 白磁, 青白磁, 青花
		古墳時代を中心とした遺跡である。2条の杭列に伴い,木製品(組み合わせ二叉鍬等)が出土している。木製農耕具は,基本的に弥生時代後期から古墳時代における木製農耕具の発達・変遷過程の中に位置づけられ,在地色の強い三叉鍬も出土している。また「ナスビ形」鍬については, 着柄した状態で出土しており, 本県で初めての例となった。					
2	中津野	南さつま市金峰町中津野 台地	H18年度 H19年度 H20年度 H21年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H24年度 H26年度 R1年度 刊行 県セ(202)	旧石器	礫群, 土坑	ナイフ型石器, スクレイパー, 石錐, 石核
					縄文草創期		土器
					縄文早期	集石	吉田式, 平栫式, 打製石器, 二次加工剥片, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 敲石
					縄文前期	集石, 土器集中	曽畑式, 深浦式, 条痕文系土器
					縄文中期		春日式, 船元式
					縄文後期	集石, 土坑, 石器制作跡	指宿式, 松山式, 市来式, 西平式, 打製石鏃, 異形石器, 石匙, スクレイパー, 石錐, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 敲石, 礫器, 石皿, 舟形軽石製品
					縄文晩期		土器
					弥生	竪穴住居跡	高橋式, 入来式, 石鏃, スクレイパー
					古墳		成川式, 線刻土器
					古代		土師器, 須恵器
					中近世	掘立柱建物跡, 土坑, 炉跡, 溝状遺構, 古道跡	土師器, 白磁, 青磁, 古銭, 青花, 薩摩焼, 陶器, 磁器, 砥石
		旧石器時代の礫群や, 縄文時代早期～後期の集石, 石器製作跡, 弥生時代前期の竪穴住居跡, 中近世の掘立柱建物跡や炉跡等, 当時の生活をうかがえる遺構を検出した。特に縄文時代前期の土器集中をなす条痕文系土器や縄文時代中期に該当する全面に縄文を施す土器, 5つの山状突起をもつ土器などがほぼ完全な形で出土している。					
		南さつま市金峰町中津野 低地・低湿地	H18年度 H19年度 H20年度 H21年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H24年度 H26年度 R1年度 R2年度 R3年度 刊行 本報告書 県セ(217)	縄文早期		塞ノ神式土器
					縄文前期		曽畑式, 轟式
					縄文中期		春日式, 阿高式
					縄文後期	集石, 土坑, 埋設土器, 遺物集中, 集積遺構, 特殊遺構	磨消縄文系土器(福田K2式, 小池原下層式, 小池原上層式, 鐘崎式), 宮ノ迫式土器, 岩崎上層式土器, 南福寺式土器, 出水式土器, 指宿式土器, 松山式土器, 市来式土器, 丸尾式土器, 円盤形土製品, 土製品, 打製石鏃, 石錐, 尖頭器, 異形石器, 石匙, スクレイパー, 石核, 磨製石斧, 擦切石器, 打製石斧, 磨石・敲石, 礫器, 石皿・台石, 軽石製品, 石製品
					縄文晩期		黒川式
					弥生	竪穴建物跡, 集石, 土坑, 柱穴	夜臼式土器, 刻目突帯文土器, 高橋式土器, 板付式土器, 入来式土器, 管玉, 磨製石鏃, 石包丁, 石錐, 柱状片刃石斧, 木製品(舷側板・梯子・農具)
					古墳	溝状遺構	成川式土器(中津野式土器・東原式土器), 木製品(鳥形製品)
					古代		土師器, 須恵器, 曲物
					中世	掘立柱建物跡, 土坑, 炉跡, 溝状遺構, 柱穴, ピット, 足跡, 土木遺構	土師器, 青磁, 白磁, 青花, 古瀬戸, 備前焼, 常滑焼, 東播系須恵器, 樺万丈産須恵器, 瓦質土器, 木製品(杭, 縄, 曲物), 石鍋, 砥石
					近世		薩摩焼, 肥前産染付, 木製品(杭)
					時代不明	土坑, 柱穴	鉄製品, 鉄滓
		縄文時代後期の集石, 埋設土器, 土器集中, 加工軽石出土, 弥生時代前期の竪穴建物跡, 土坑, 中近世の掘立柱建物跡や炉跡等, 土木遺構等の当時の生活をうかがえる遺構を検出した。 また, 縄文時代後期～近世までの各時代の土器や石器などが出土した。特に縄文時代後期の指宿式土器や市来式土器, 弥生時代早期の刻目突帯文土器は多量に出土しており, 土器型式を考える上で重要な資料となる。また, 弥生時代に該当する船材の一部(舷側板)が出土しており, 当時の外部との交流や船の構造を考える上で, 貴重な資料である。					
3	小中原	南さつま市金峰町宮崎 舌状台地	H11年度 H12年度 H16年度 終了	H20年度 刊行 県セ(142)	縄文晩期	土坑	土器, 石器
					古墳	竪穴住居跡	土器
					古代	溝状遺構, 掘立柱建物跡, 竪穴式建物跡, 焼土, 土坑	土師器, 須恵器
		古代の遺構群がまとまって検出された。					
4	市薗	南さつま市金峰町宮崎 舌状台地	H10年度 終了	H20年度 刊行 県セ(142)	古代～中世	柱穴	
		古代から中世の柱穴が検出された。					

南さつま市
金峰町大野
金峰町池辺
金峰町尾下
金峰町中津野
金峰町新山
金峰町宮崎
金峰町花瀬
金峰町浦之名
加世田村原（三）
加世田村原（二）
加世田村原（五）
加世田村原（一）
加世田村原遺跡
中岳
堀川
方之瀬川
0
（ 1 ： 25000 ）
1Km

第５図　周辺遺跡地図

第２表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	220	321	小堀	南さつま市金峰町池辺	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
2	220	323	地頭堀	南さつま市金峰町池辺	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
3	220	301	玄同堀	南さつま市金峰町池辺					●		●		平成10年　農政分布調査
4	220	206	南原A	南さつま市金峰町大野	台地		●						
5	220	326	南原外堀	南さつま市金峰町大野	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
6	220	324	宮薗	南さつま市金峰町池辺	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
7	220	325	原口	南さつま市金峰町大野	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
8	220	317	寺下	南さつま市金峰町大野	台地						●		平成11年　農政分布調査
9	220	315	本寺	南さつま市金峰町大野	台地				●				平成11年　農政分布調査
10	220	314	峯ノ前	南さつま市金峰町池辺	平地		●						平成11年　農政分布調査
11	220	224	牟礼ヶ城跡	南さつま市金峰町池辺	丘陵						●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(4), 中世城館跡
12	220	313	宮の前	南さつま市金峰町池辺	平地		●			●			平成11年　農政分布調査
13	220	300	稲葉下	南さつま市金峰町池辺					●				平成10年　農政分布調査
14	220	299	島田	南さつま市金峰町高橋					●				平成10年　農政分布調査
15	220	319	高取	南さつま市金峰町高橋	台地			●	●				平成11年　農政分布調査
16	220	320	萩ノ上	南さつま市金峰町池辺	台地				●				平成11年　農政分布調査
17	220	238	牟田城跡	南さつま市金峰町高橋	平地						●		
18	220	214	下小路	南さつま市金峰町高橋	平地			●					「鹿児島考古」11号
19	220	330	高橋	南さつま市金峰町高橋	平地			●					
20	220	213	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	台地			●					「九州考古学」18号
21	220	298	篠田	南さつま市金峰町尾下	台地					●			
22	220	215	尾下	南さつま市金峰町尾下	丘陵			●					
23	220	216	松木薗	南さつま市金峰町尾下	台地			●					「鹿児島考古」第14号 , 「鹿大史学」第 29号
24	220	211	山野原	南さつま市金峰町尾下	台地	●	●	●	●	●	●	●	金峰町埋蔵 文化財発掘調査報告書(5) (7)
25	220	236	鳥追薗	南さつま市金峰町尾下	台地		●	●		●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
26	220	251	田布施	南さつま市金峰町尾下	台地		●		●		●		平成2年　分布調査
27	220	225	亀ヶ岡城跡	南さつま市金峰町尾下	台地						●		相州島津家友久・運久・忠良　居城跡
28	220	227	上床城跡	南さつま市金峰町浦之名	台地	●	●		●		●		南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書(5), 上床氏　居城跡
29	220	220	上床原	南さつま市金峰町浦之名	台地	●	●	●					
30	220	311	貝曲り	南さつま市金峰町中津野	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
31	220	217	筆付	南さつま市金峰町尾下	平地		●	●	●	●	●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
32	220	329	南下	南さつま市金峰町尾下	平地		●	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)
33	220	237	上山野	南さつま市金峰町中津野	台地		●			●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
34	220	230	中津野城跡	南さつま市金峰町中津野	台地						●		
35	220	218	中津野	南さつま市金峰町中津野	台地～低地	●	●	●	●	●	●	●	本報告書, 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(202) 「鹿児島県考古学会紀要」2号
36	220	241	平畑	南さつま市金峰町中津野	台地		●	●	●		●		平成10年　発掘調査
37	220	222	中津野下原	南さつま市金峰町中津野	台地		●	●					
38	220	205	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●				金峰町埋蔵文 化財調査報告書(1)
39	220	243	堀川貝塚	南さつま市金峰町宮崎	台地		●						「鹿児島考古」第10号
40	220	210	上焼田	南さつま市金峰町宮崎	台地	●	●	●	●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)　金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
41	220	209	天神原	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●				
42	220	208	下堀	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●		●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
43	220	262	上花立	南さつま市金峰町宮崎									
44	220	272	西立石原	南さつま市金峰町宮崎				●	●				
45	220	310	三反田	南さつま市金峰町新山				●	●				平成11年　農政分布調査
46	220	309	立野原	南さつま市金峰町新山					●				平成11年　農政分布調査
47	220	240	小中原	南さつま市金峰町新山	台地	●	●	●	●	●	●		鹿児島県 埋蔵文化財発掘調査報告書(57)
48	220	308	白糸原	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●		●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(86)
49	220	264	上川原	南さつま市金峰町宮崎	平地			●	●				
50	220	273	市薗	南さつま市金峰町宮崎	台地		●				●		
51	220	248	松田南	南さつま市金峰町宮崎	台地		●		●		●		
52	220	327	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	平地		●	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)　峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
53	220	277	渡畑	南さつま市金峰町宮崎	平地		●		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(151) (159)
54	220	278	芝原	南さつま市金峰町宮崎	平地		●		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(149) (158) (170) (178) 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(21)
55	220	297	大迫田	南さつま市金峰町花瀬	平地						●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
56	220	245	花瀬今城原	南さつま市金峰町花瀬	台地		●	●	●				
57	220	244	中岳山麓古窯跡群	南さつま市金峰町花瀬	山地					●			平成27・28・29年度　鹿児島大学発掘調査　古文化談叢(14) (15) 中岳山麓窯跡群の研究（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター2015.3）
58	220	223	荒平古窯跡	南さつま市金峰町花瀬	山地					●			
59	220	296	森山	南さつま市金峰町花瀬	平地		●	●	●	●	●		平成12年　発掘調査
60	220	246	花瀬	南さつま市金峰町花瀬	台地				●			●	
61	220	295	上水流	南さつま市金峰町花瀬	台地	●	●			●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(113) (121) (136) (150) 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
62	220	294	上水流B	南さつま市金峰町花瀬	台地	●	●			●	●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
63	220	255	宇治野原	南さつま市金峰町白川	台地	●	●		●				金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
64	220	305	白樫野B	南さつま市金峰町白川	台地	●	●		●		●		
65	220	13	栫ノ原	南さつま市加世田村原	台地	●	●	●	●		●	●	国指定史跡, 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) (5) (15) (17) (20)

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理作業・報告書作成作業の方法について記載する。

１　発掘調査の方法

中津野遺跡低地・低湿地部の調査は，平成18～21，25～29年度に確認調査及び本調査を実施した。調査面積は累計で42,370㎡であった。

本遺跡の調査区割り（グリット）は，平成18年度の確認調査及び本調査において，工事用基準杭（センター杭）№154～№185を結ぶ直線を基準に10×10mの調査区割り（グリット）を設定した（第６図参照）。

その後，調査範囲が長大で，調査期間が長期に亘ったため，年度ごとで座標値の原点が異なる事態が発生した。座標値の整合性をとるために，低地・低湿地部はＡ・Ｂ－29・30区境を原点（０，０）として，縦軸をＸ，横軸をＹとし整理作業を行った。なお，29区から南は－座標として観察表等に記載している。センター杭及び座標値原点（０，０）の位置は，第６図に記しているので参照して欲しい。

発掘調査は基本的に重機で表土や撹乱層を除去した後，確認調査の結果に基づき，人力にて遺物包含層の掘り下げを行った。遺構は移植ゴテ等の遺構調査に適した道具を使用して慎重に調査し，実測，写真撮影等を行い，平板とトータルステーションを使用して位置とレベルを記録し，小破片はグリットごとに一括して取り上げた。

また，低地・低湿地は湧水の影響及び安全対策等で調査区内と外の境には，１～２m安全帯を残した。

各年度の発掘調査方法及び概要は以下のとおりである。なお，概要は第１章日誌抄等に記載してあるので，参照していただきたい。

平成18年度はＤ－19・20区にトレンチを１本設定し，確認調査を行った。遺物包含層が確認されたため，本調査が必要であることと，さらに遺跡が北へ広がることを確認し，当該年度の調査を終了した。

平成19年度は７本のトレンチを設定し，確認調査を行った。確認調査の結果，古墳時代から古代の遺構・遺物と，近世の遺物が発見されたため，Ｚ～Ｆ－２～７区の本調査を行った。また，縄文時代から近世の包含層が確認された３・４トレンチを含むＺ～Ｅ－８～12区は，次年度の調査対象とした。

平成20年度は平成19年度の確認調査の結果を受け，Ｚ～Ｅ－８～12区，表面積約2,000㎡の本調査を行った。調査は，古墳時代から近世の包含層を対象とした。

平成21年度は，表面積約1,280㎡を対象に本調査を行った。縄文時代から近世の包含層を対象とした。遺物量が非常に多かったため，10mグリッドをさらに４分割し，層位ごとに一括で取り上げを行った。Ｄ・Ｅ－12～15区を中心に縄文時代後期の遺物が多量に出土したために調査を終了することが困難となった。平成21年度に終了できなかった範囲（約150㎡）については，道路下部分の調査時に併せて実施することとした。

平成25年度は，Ｂ～Ｅ－24～29区，表面積1300㎡の本調査を行った。調査は，縄文時代後期から近世の包含層を対象とした。

平成26年度は，Ｄ～Ｆ－６～11区，表面積790㎡の本調査を行った。おびただしい数の縦杭や横木が検出され，実測等に時間を費やしたため，調査は近世から近代の包含層までを対象とした。

平成27年度は，Ｂ～Ｅ－21～23区，表面積820㎡の本調査を行った。調査は，縄文時代後期から近世の包含層を対象とした。

平成28年度は，Ｂ～Ｅ－12区，Ｄ～Ｅ－13～15区，Ｂ・Ｃ－16区，Ｂ～Ｄ－29区の４つの調査区，表面積500㎡の本調査を行った。Ｂ～Ｅ－12区の市道の一部分とＤ～Ｅ－13～15区は，縄文時代後期から近世の包含層を対象に行った。Ｂ～Ｄ－29区の市道部分は，弥生時代から中世の包含層を対象に行った。Ｂ・Ｃ－16区は平成21年度に確認調査を実施しているが，その未調査部分との境が不明瞭であったため，Ⅱ層まで掘り下げて境の検出を行った。

平成29年度はＤ～Ｆ－６～11区，Ｂ～Ｆ－11～13区，Ｄ・Ｅ－12～15区，Ｂ～Ｅ－15～21区，Ｂ～Ｅ－22・23区の５つの調査区，表面積4000㎡の本調査を行った。Ｄ～Ｆ－６～11区は，平成26年度調査の継続として調査を進め，縄文時代後期から中世までの包含層を対象とした。Ｂ～Ｆ－11～13区は，平成28年度に調査を行った市道部分の全面調査を行った。縄文時代後期から中世の包含層を対象とした。Ｄ・Ｅ－12～15区は平成21年度の継続部分の調査を行い，縄文時代後期から中世を対象とした。Ｂ～Ｅ－15～21区とＢ～Ｅ－22・23区は，共に縄文時代前期から近世の包含層を対象として調査を行った。調査終了後に引き渡しを行い，９年に及ぶ本遺跡の調査を全て終了した。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

(1)　遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，調査担当者で検討した上で遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居跡は，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土などから総合的に判断した。溝状遺構は，底面に硬化面を有するもの，硬化面はないが溝状に明らかな掘り込みをもつものとしたが，湧水のため床面の状況が十分掴めなかったものもあった。土坑及び柱穴については，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土などから総合的に判断した。検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが，埋土の色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては，詳細な時期判定ができなかった。また，掘立柱建物跡の時期認定は，埋土の状況や出土遺物の状況を総合的に検討した。なお，発掘調査時の認定を整理作業の際に再度検討して，遺構の認定や時期を変更したものもある。

(2)　遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に，黒色土に掘り込まれた遺構埋土が黒色系になることが多い中近世の遺構については，掘り過ぎるものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので，調査のあり方を再検討し，今後の調査に生かしていきたい。また，撹乱や削平を受けている箇所が多く，中世の遺構でも表土直下で検出されることもあり，遺構の時期認定に手間取り，調査の進捗に支障をきたすこともあった。この場合，ミニトレンチの設定，撹乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

水洗作業の方法は，土器や石器の一部に関しては，ブラシを用いたが，黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は，水洗い終了後順次行った。注記を行う際，薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり，遺跡名を表す記号を「ナカツノ」とした。その後に出土区，層，取り上げ番号等が記してある。作業の効率化を図るためにジェットマーカーを用いて注記した遺物もある。

分類・接合作業は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し，接合する方法をとった。

石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため，実測委託を行った。

遺物出土分布図は，平板で取り上げたものをデータとして取り込み，トータルステーションで取り上げたデータと統合し，図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて，発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。また，必要に応じて第２原図を作成した。遺構配置図は，個々の遺構の再検討で確定したものを統合して作成した。

土層断面や遺構の原図データの点検・修正後，デジタルトレースを行った。

平成24年度……水洗い・注記・遺物分類接合
平成26年度……水洗い・注記・遺物分類接合
平成30年度……水洗い・注記・遺物分類接合・図面整理・台帳整理
令和元（平成31）年度……遺物分類・接合・遺物実測・拓本・トレース
令和２年度……遺物実測・拓本・トレース・遺物分類・図面整理・文章作成・近世～縄文時代晩期種本作成
令和３年度……遺物実測・拓本・トレース・写真撮影・文章作成・報告書作成

第２節　層序

本遺跡は，金峰山地中岳の北西麓から伸びる標高約30ｍの舌状を呈する中津野台地・河岸段丘と境川の河川氾濫により形成された沖積地に位置する。

基本層序は，地形に沿って台地・河岸段丘と低地・低湿地部の２つに大別した。本報告書は低地・低湿地部の調査成果を掲載することから基本層序も低地・低湿地部のみとした。台地部の層序については，「中津野遺跡台地部編」を参照いただきたい。

低地・低湿地部は，土層の堆積状況や遺物の出土状況から，さらに３つに分かれる。低地部は，調査区南側の15区から29区に該当する。主としてⅡ層が近世・中世・古代・古墳時代・弥生時代，Ⅲ層からⅣ層が縄文時代後期の遺物包含層である。Ⅱ層は幅広い時代の遺物を包含するが，湧水の影響や近現代の撹乱・削平等のため細かい分層は困難であった。なお，近世から弥生時代にかけての遺構・遺物は，ほぼ同一レベルで検出・確認されている。

低湿地部は，層序をさらに２分した。調査区の北側の２区から11区では，表層直下に粘質土と泥炭層が確認されている。ここのⅡ層では近世から弥生時代の遺物が確認されているが，その数は少ない。また，足跡・土木遺構の遺構が確認されたのは，この区域である。

調査区の中央部，11区から15区も同じく低湿地部であるが，Ⅱ層が近世から弥生時代，Ⅲ層が縄文時代後期の遺物包含層であることを確認した。この区域のⅡ層も湧水の影響等で細分が困難であった。Ⅲ層は，主にⅢａ層で松山式土器と市来式土器が出土し，Ⅲｂ層で指宿式土器の出土があったため分層をおこなった。

なお，包含層や遺構・遺物の年代を把握する上で手がかりの一つとなる火山灰層は第３表のとおりである。

第３表　中津野遺跡低地部・低湿地部基本層序

低地(15～29区)			低湿地(11～15区)			低湿地(2～11区)		
Ⅰ	表土		Ⅰ	表土		Ⅰ	表土	
Ⅱ	暗褐色～黒色土	近世～縄文時代晩期	Ⅱ	黒褐色土	近世～縄文時代晩期	Ⅱa	灰～暗灰色粘質土	近世～古墳時代
						Ⅱb	泥炭層	古墳時代～縄文時代晩期
						Ⅱc	青灰色土	
Ⅲ	茶褐色～黒色土	縄文時代後期～早期	Ⅲa	黒褐色粘質土	縄文時代後期～早期	Ⅲ	泥炭層	
			Ⅲb	黒褐色砂質土				
Ⅳa	黄橙色火山灰土(アカホヤ二次堆積土)	縄文時代後期～早期	Ⅳ	灰黄褐色～にぶい黄橙色土(シルト質)(アカホヤ火山灰)				
Ⅳb	黄橙色火山灰土(アカホヤ火山灰)							
Ⅴ	褐色土		Ⅴ	オリーブ褐色土				
Ⅵ	黒褐色土＋暗褐色土		Ⅵ	黒褐色土				
Ⅶ	橙色土(チョコ層)							
			Ⅷ	シラス堆積				

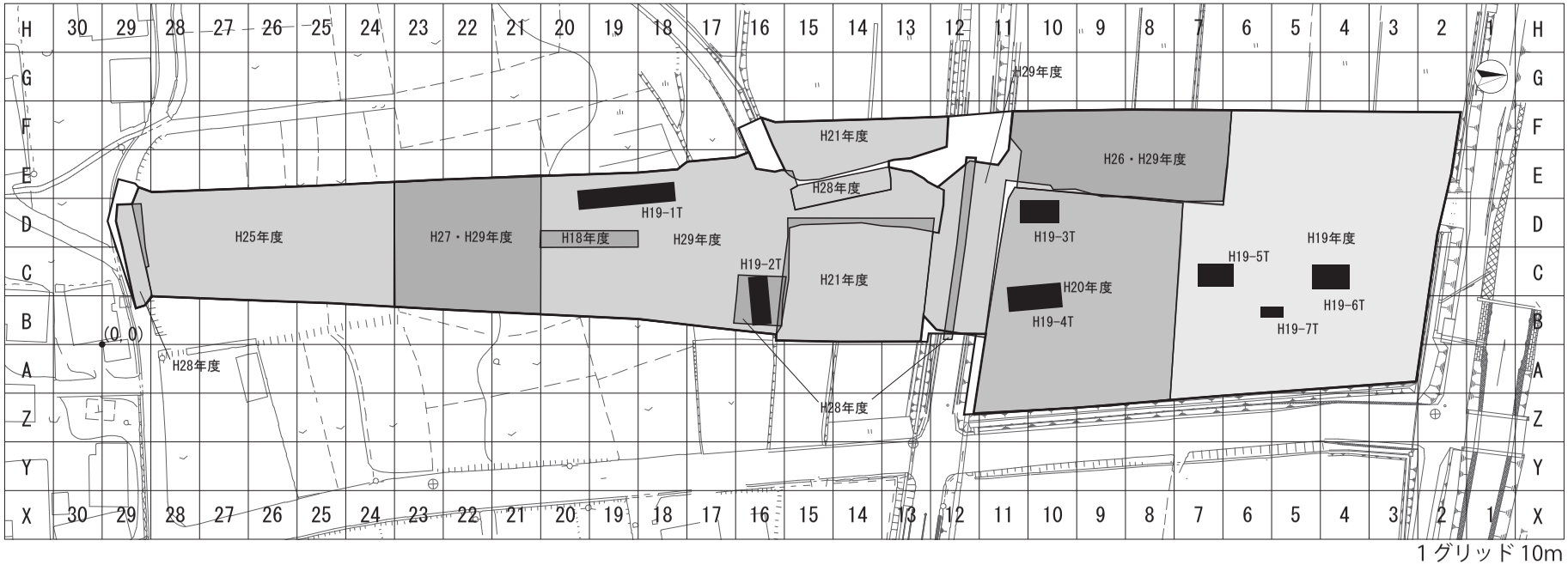
網掛け:包含層

Ｄ－28・29区西壁

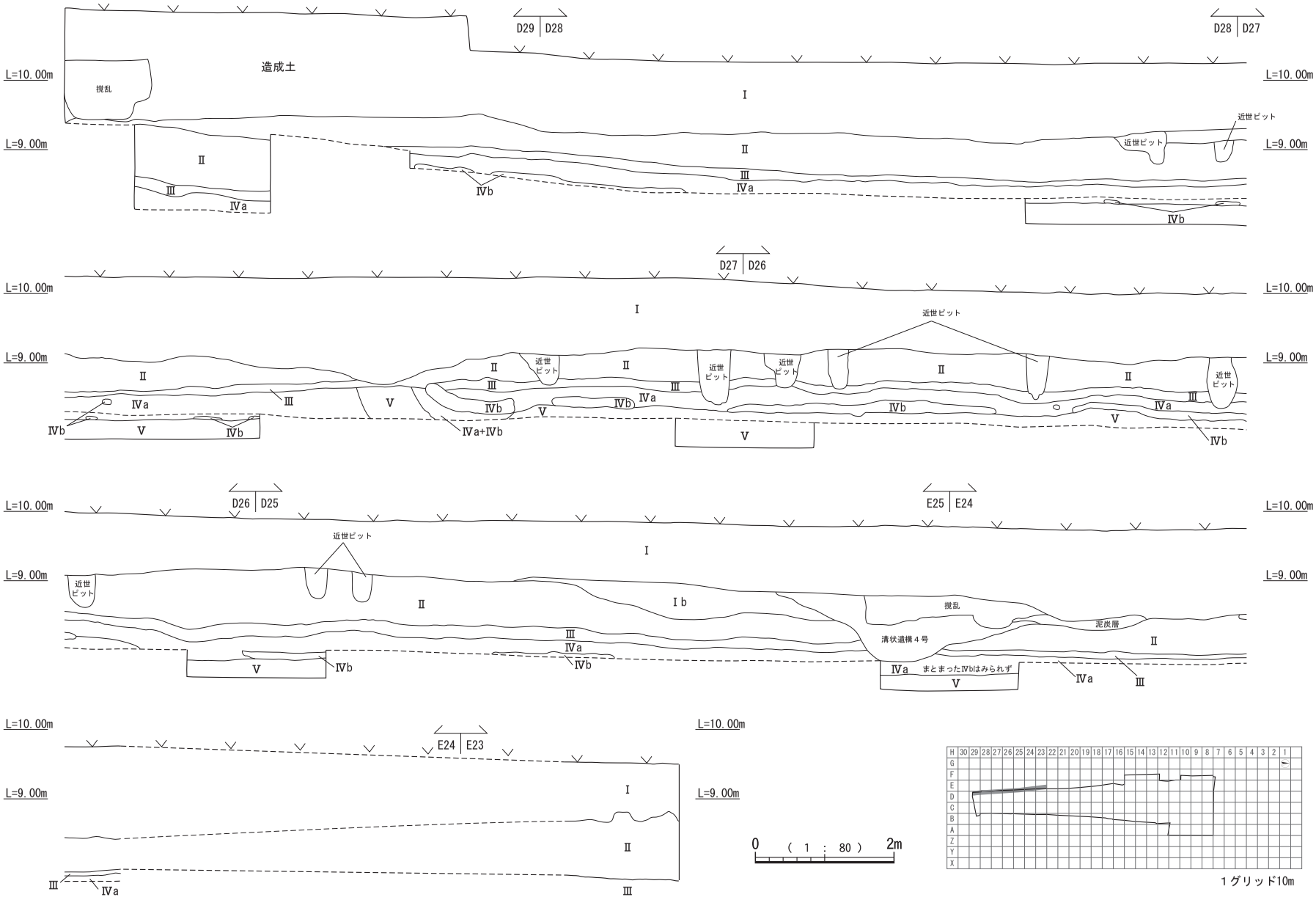
Ｅ－19～21区西壁

Ｆ－10区西壁

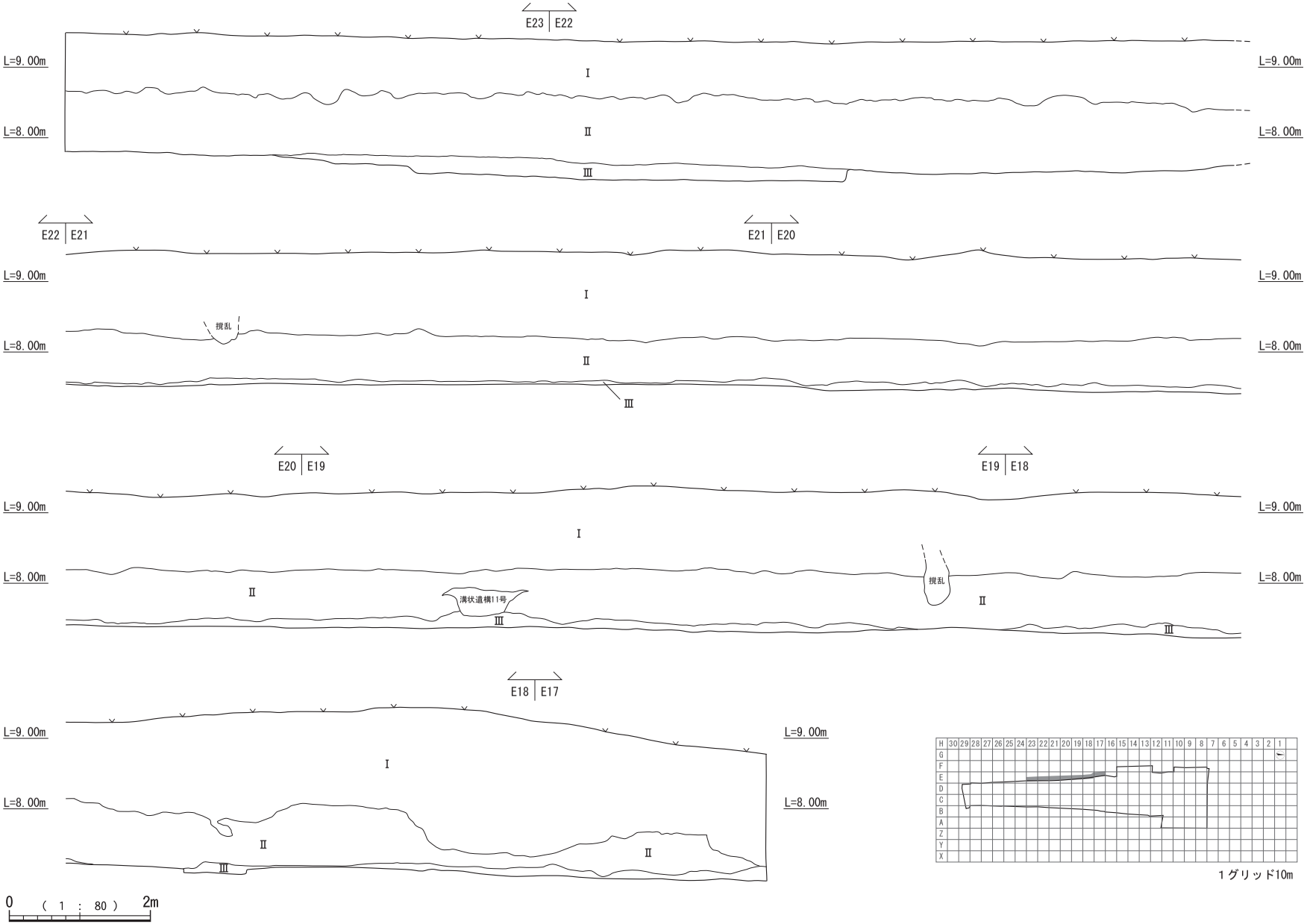
Ｅ－８～９区西壁



第６図　低地・低湿地部調査範囲

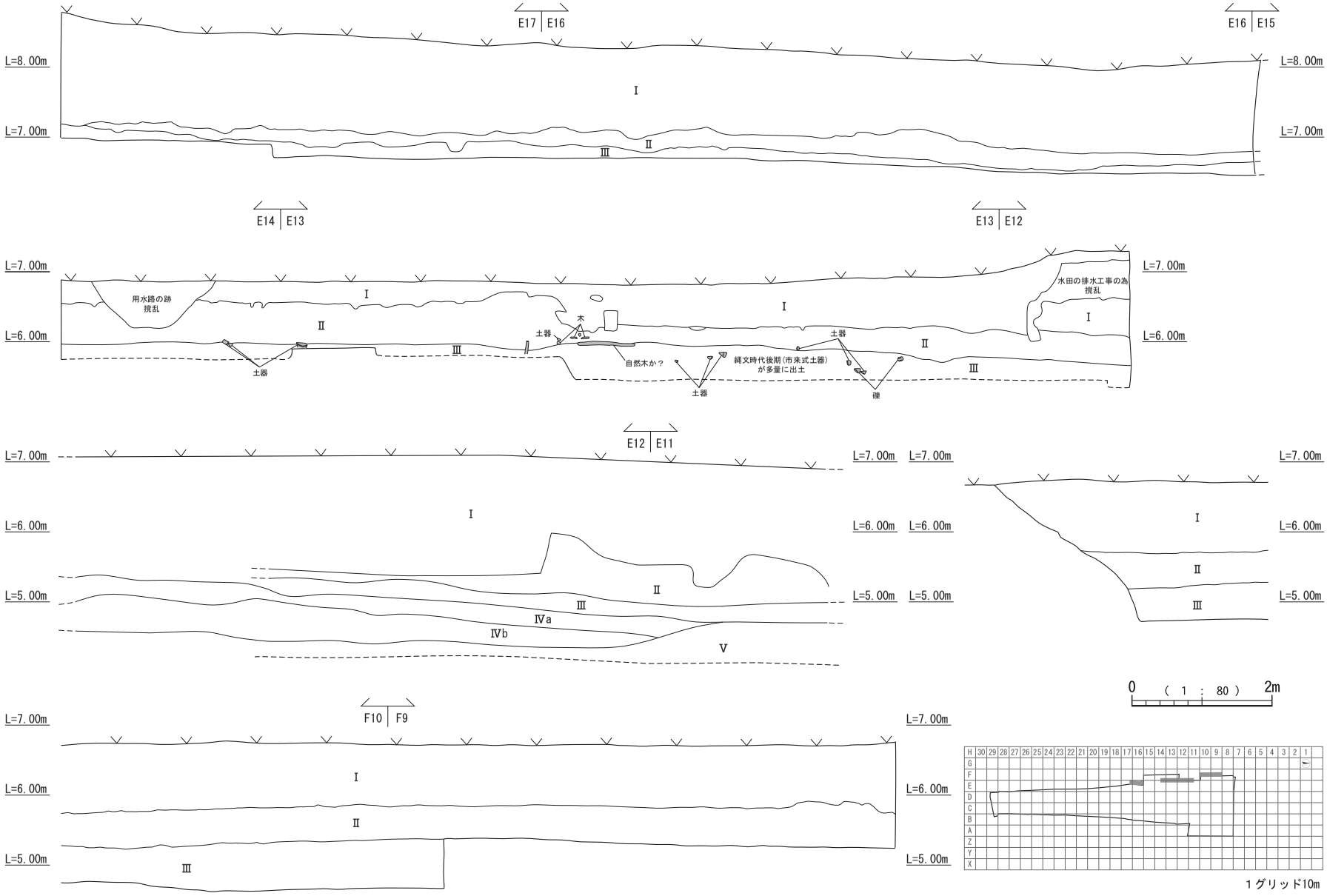


第７図　土層断面図（１）D-25～29区・E-23～25区

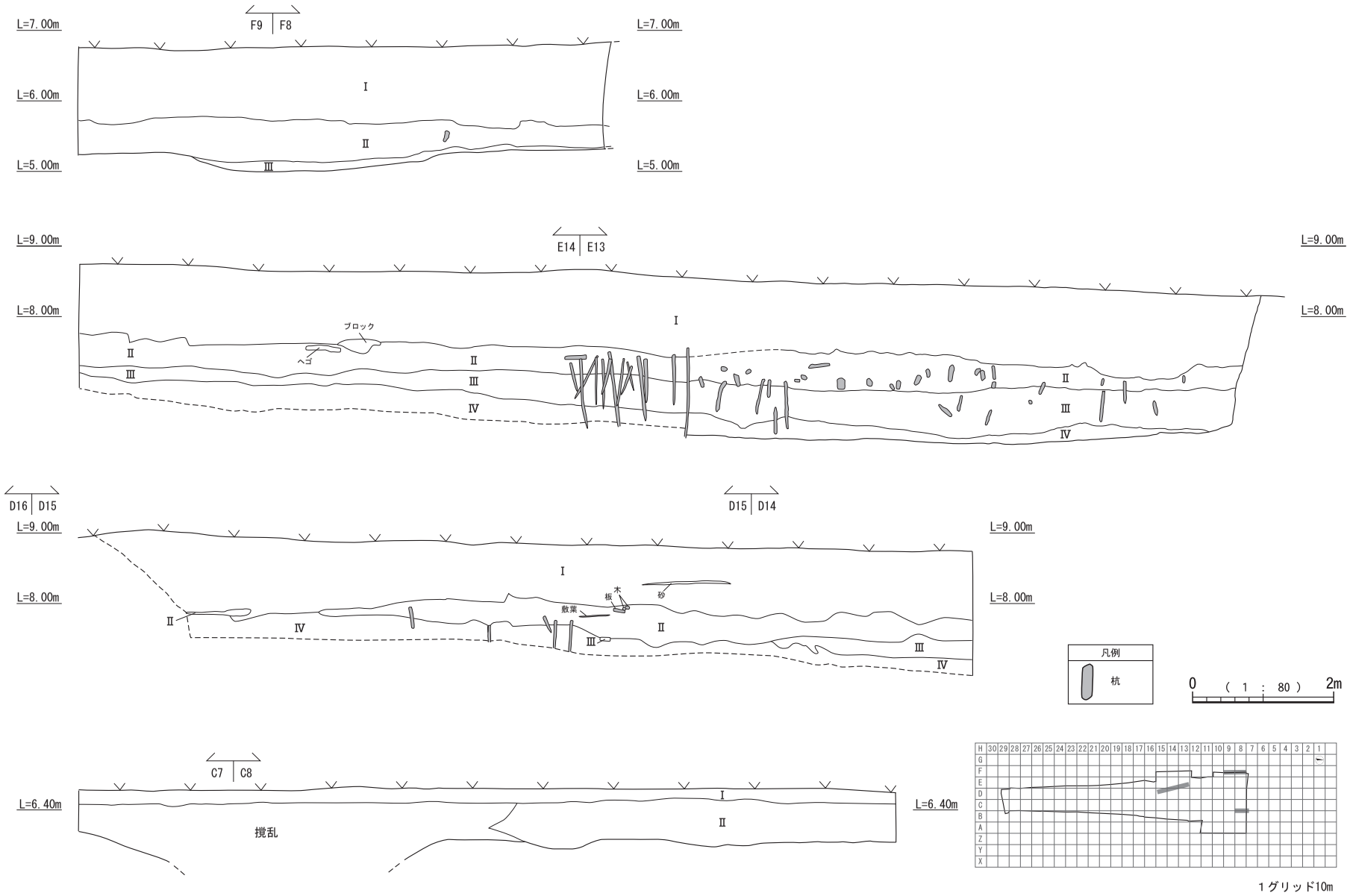


1グリッド10m

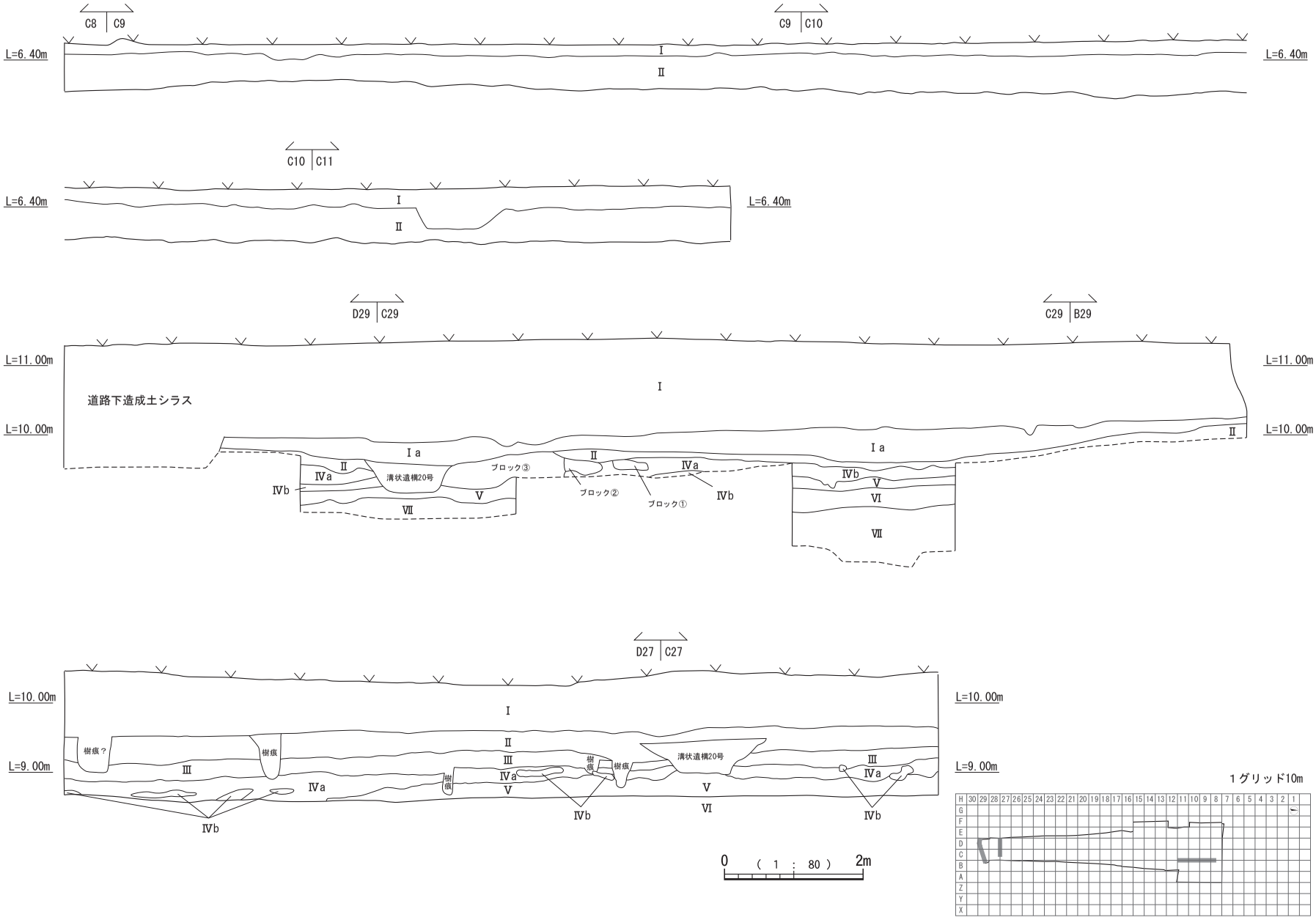
第８図　土層断面図（２）E-17～23区



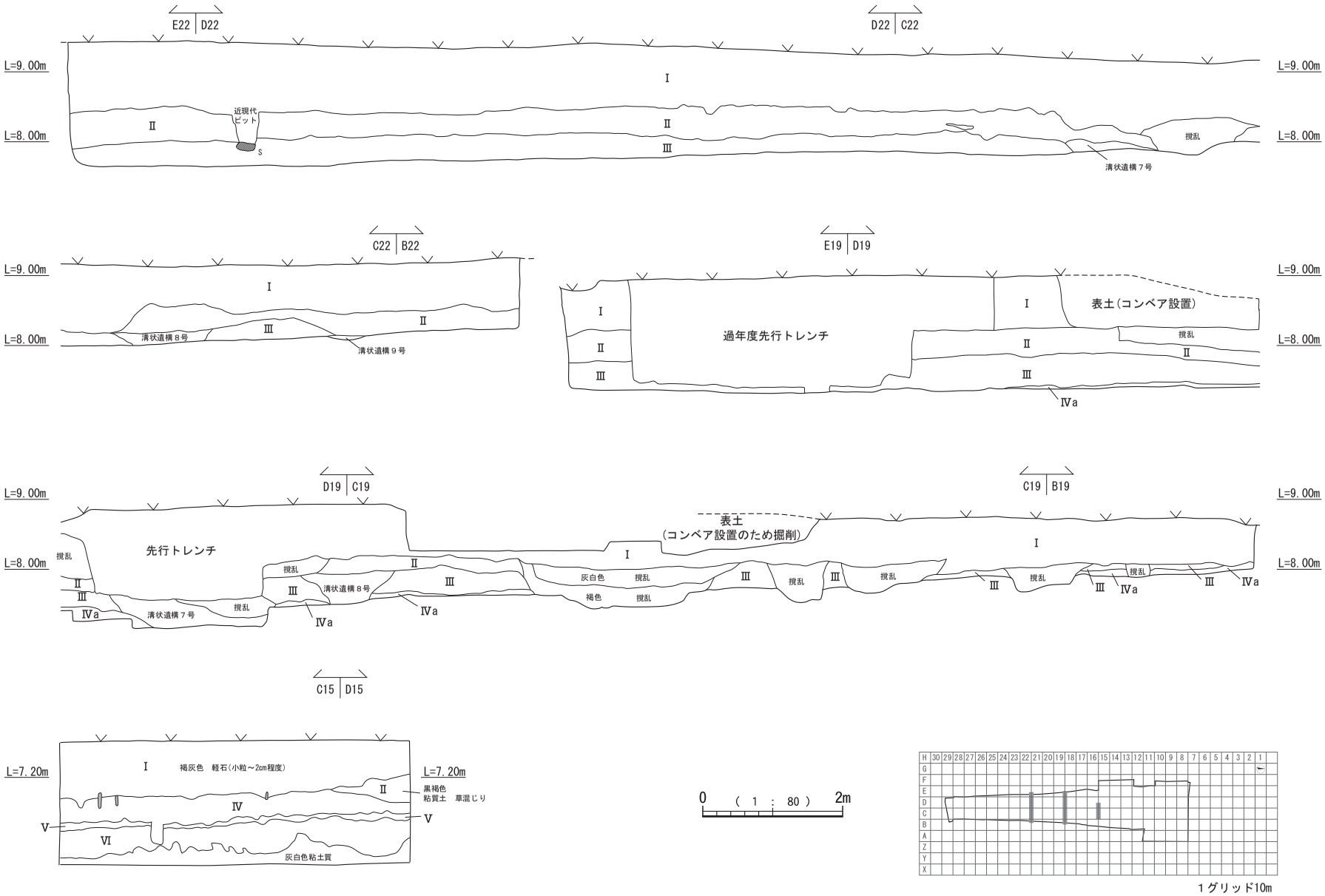
第９図　土層断面図（３）E-16～17区・E-11～14区・F-9・10区



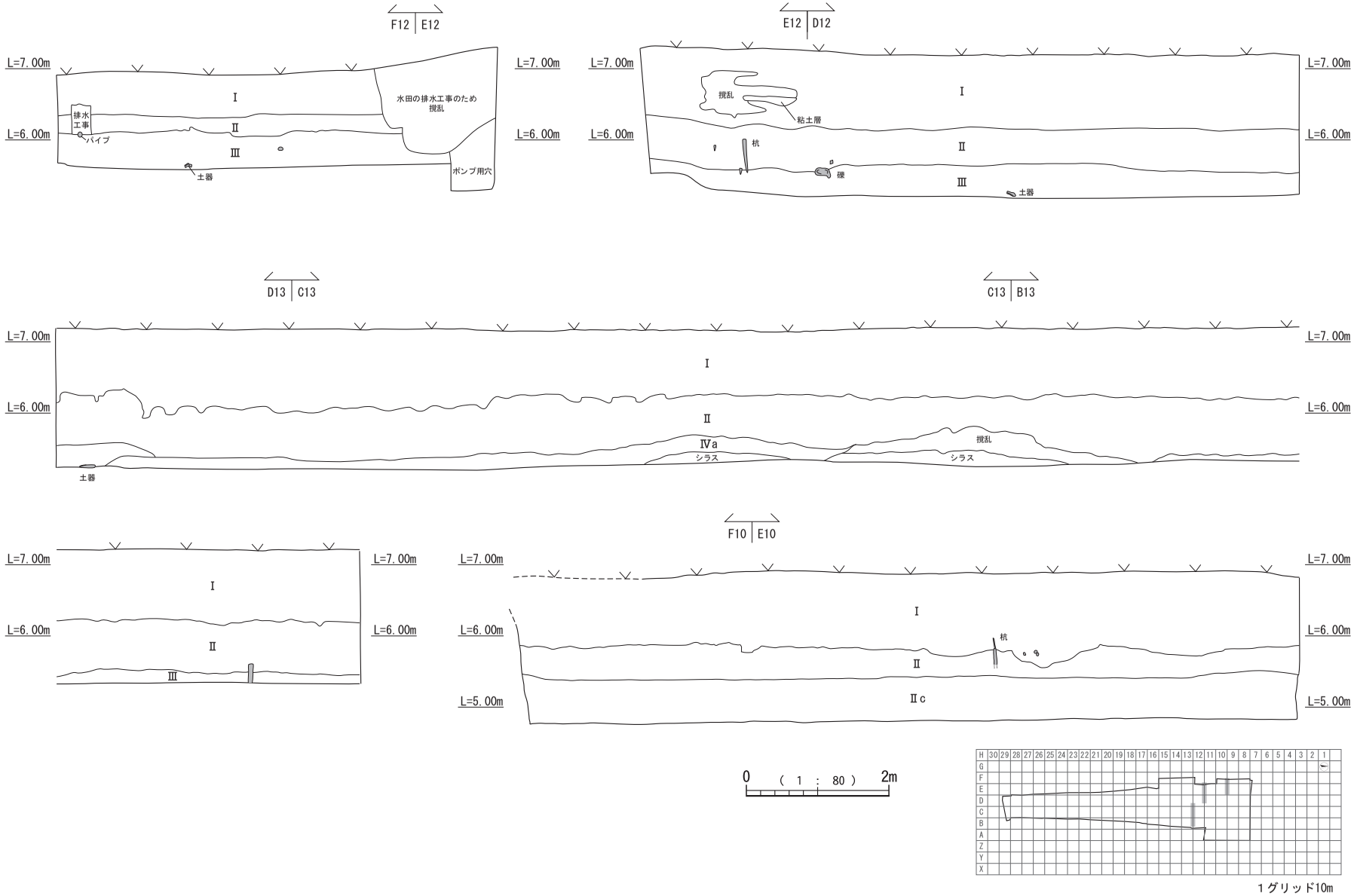
第10図　土層断面図（4）F-8・9区・E-13～15区・E-7・8区



第11図　土層断面図（5）C-8～11区・B～D-27～29区



第12図　土層断面図（６）B～E-22区・B～E-19区・C～D-15区



第13図　土層断面図（7）E～F-12区・D～E-12区・B～D-13区・E～F-10区

第４章　古代～近世の調査

第１節　遺構

調査は大まかに15区から29区にかけてを低地部，７区から15区にかけてを低湿地部と分けて実施した。調査区全域において近代以降の撹乱や土地改変による削平が多く見られ，発掘調査の進捗に支障をきたした。同じ時期の遺構であっても撹乱等の影響で検出できる層位が異なり，残存状況が極端に悪いものも見られた。そのため，遺構検出や遺構の時期を特定する作業にかなりの時間を要した。遺構の時期認定には，検出層位・遺構の埋土・遺構内から出土した遺物・遺構の切り合い関係を判断材料とした。

低地部においては掘立柱建物跡７棟，柱穴５基，ピット1,019基，炉跡２基，土坑13基，溝状遺構19条が基本的にⅡ層で検出された。ただ，15区の南端からさらに北東方向へ延びると考えられた溝状遺構７号は，15区南端で湧水のため検出が不可能となった。15区以北にも他の遺構が残存していた可能性はあるが，同様の理由で確認できなかった。低地部で検出された遺構の埋土は基本的に褐色から黒褐色を呈し，低地部基本層序のⅡ層に近い。Ⅱ層は，縄文時代晩期から近世までの遺物包含層である。しかし，包含層から縄文時代晩期から古代の遺物の出土が少なく，遺構内からも縄文時代晩期から古代の遺物の出土を確認できなかったことから，Ⅱ層検出の遺構は中世もしくは近世と判断した。ピットについては15区から29区にかけて数多く検出されているが，Ⅲ層以下で検出されたピットは先述のとおり撹乱等による影響で，検出された層位で時期を特定することはできなかった。そのため，Ⅲ層以下で検出されたピットも本章で一括して取り扱うこととした。

低湿地部の７区から15区にかけてと低地部北端にあたる16・17区のⅡ層から足跡・土木遺構が多数検出された。低湿地部基本層序のⅡ層は中・近世に比定され，また，検出された杭の年代測定からもこの時期の数値が示されていることから低湿地部の遺構は中世及び近世を主体とすると考えられる。

以上のようにⅡ層検出の遺構やⅡ層に近い埋土をもつ遺構は，中世及び近世に属する可能性が高い。しかし，埋土内から遺物が出土しない遺構や放射性炭素年代測定を行ってもさらなる細分はできない遺構もあり，明確な時期を区分できなかった。従ってこれらの遺構の時期は「中・近世」とし，中世及び近世に属する遺構を一括して取り扱った。

なお，遺構配置図は第14～17図に示した。以下，低地部の遺構から順に記述する。

１　掘立柱建物跡（第14図）

７棟の掘立柱建物跡は，平成25年度の調査で低地部の南端にあたる26区から28区の範囲にまとまって検出された。全てⅡ層検出，標高９ｍから9.5ｍ付近の検出であった。柱穴の埋土は，暗褐色土を主体とする。

７棟の掘立柱建物跡のうち，長軸を略南北とするものが２棟，略東西とするものが５棟である。また，想定も含めて，総柱が３棟であった。時期については４・７号が出土遺物から近世，その他は中・近世とする。なお，各掘立柱建物跡の項で記述している柱穴の長径・短径・深さの平均値は，小数第二位を四捨五入して記載してある。各掘立柱建物跡の柱穴計測表はまとめて第４表に示した。

掘立柱建物跡１号（第18図）

Ｄ－28区のⅡ層で検出され，一部27区に及ぶ。Ｓ２°Ｗを長軸とする２間×３間の総柱と考えられるが，北東隅と南東隅の柱穴は確認できなかった。梁行約500㎝，桁行約690㎝と考えられる。柱穴の形状はほぼ円形で，平均して長径36.7㎝，短径33.7㎝，深さ37.6㎝を測る。ｐ９の底面から10㎝大の礫が確認された。

掘立柱建物跡２号（第19図）

Ｃ－28区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡１号の東側約７ｍに位置する。Ｓ76°Ｗを長軸とする２間×２間の建物で，平面形は長方形を呈する。梁行（ｐ１－ｐ３）208㎝，桁行（ｐ３－ｐ８）405㎝を測る。柱穴の形状はほぼ円形で，平均して，長径20.9㎝，短径18.5㎝，深さ17.4㎝であった。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

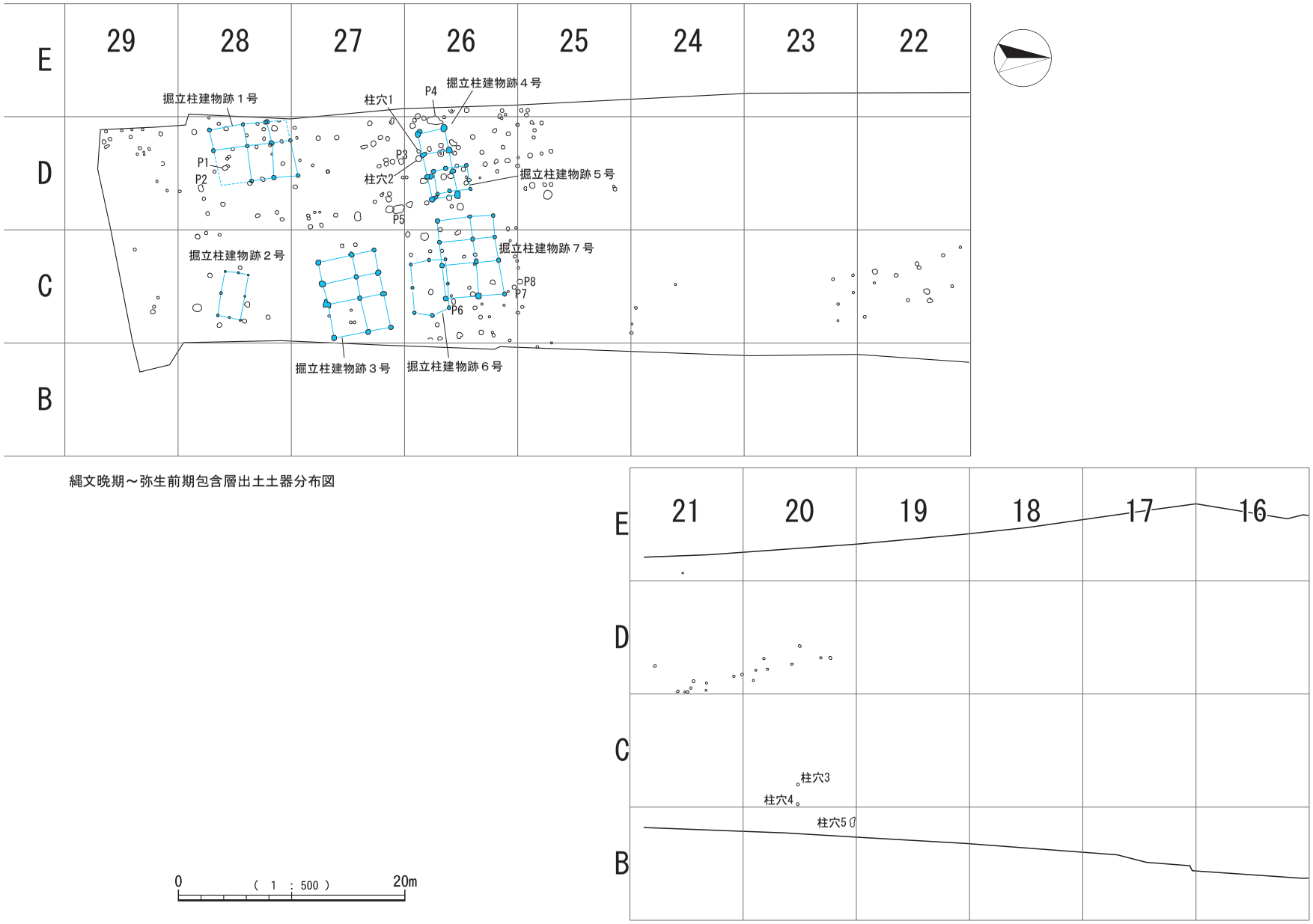
掘立柱建物跡３号（第20図）

Ｃ－27区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡２号から北側へ６～７ｍの距離にある。Ｓ97°Ｗを長軸とする２間×３間の総柱で，平面形は長方形を呈する。梁行（ｐ１－ｐ３）513㎝，桁行（ｐ３－ｐ12）701㎝を測る。柱穴の形状は円形もしくは方形に近い円形であるが，不定形のものもある。柱穴は平均して長径47.3㎝，短径41.3㎝，深さ45.1㎝であった。７棟の掘立柱建物跡の中で最も規模が大きい。

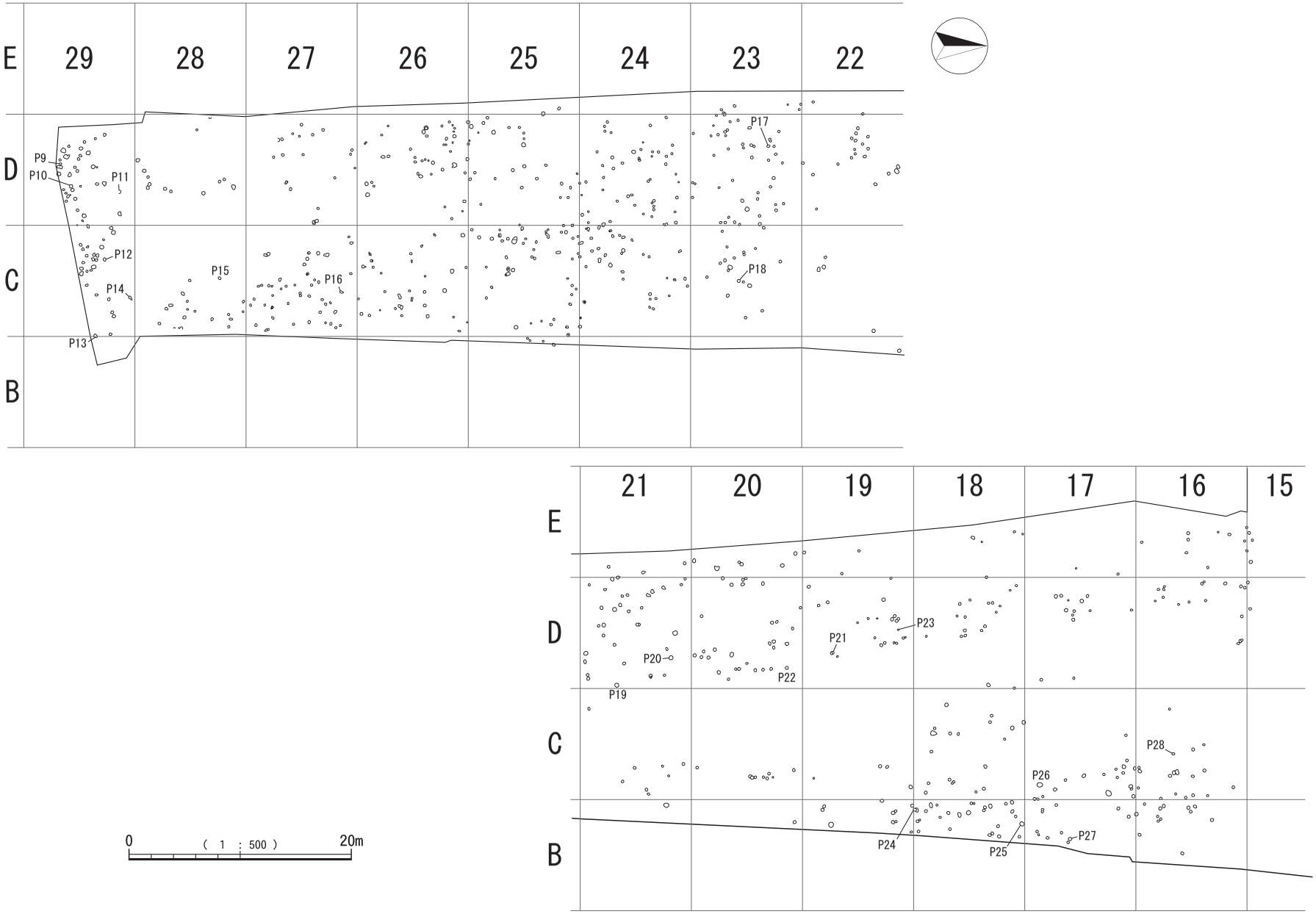
ｐ３から16世紀に比定できる青花の口縁部片と備前焼の小片が出土した。ｐ４からは近世陶器片を確認したが，小片のため図化しなかった。

掘立柱建物跡４号（第19図）

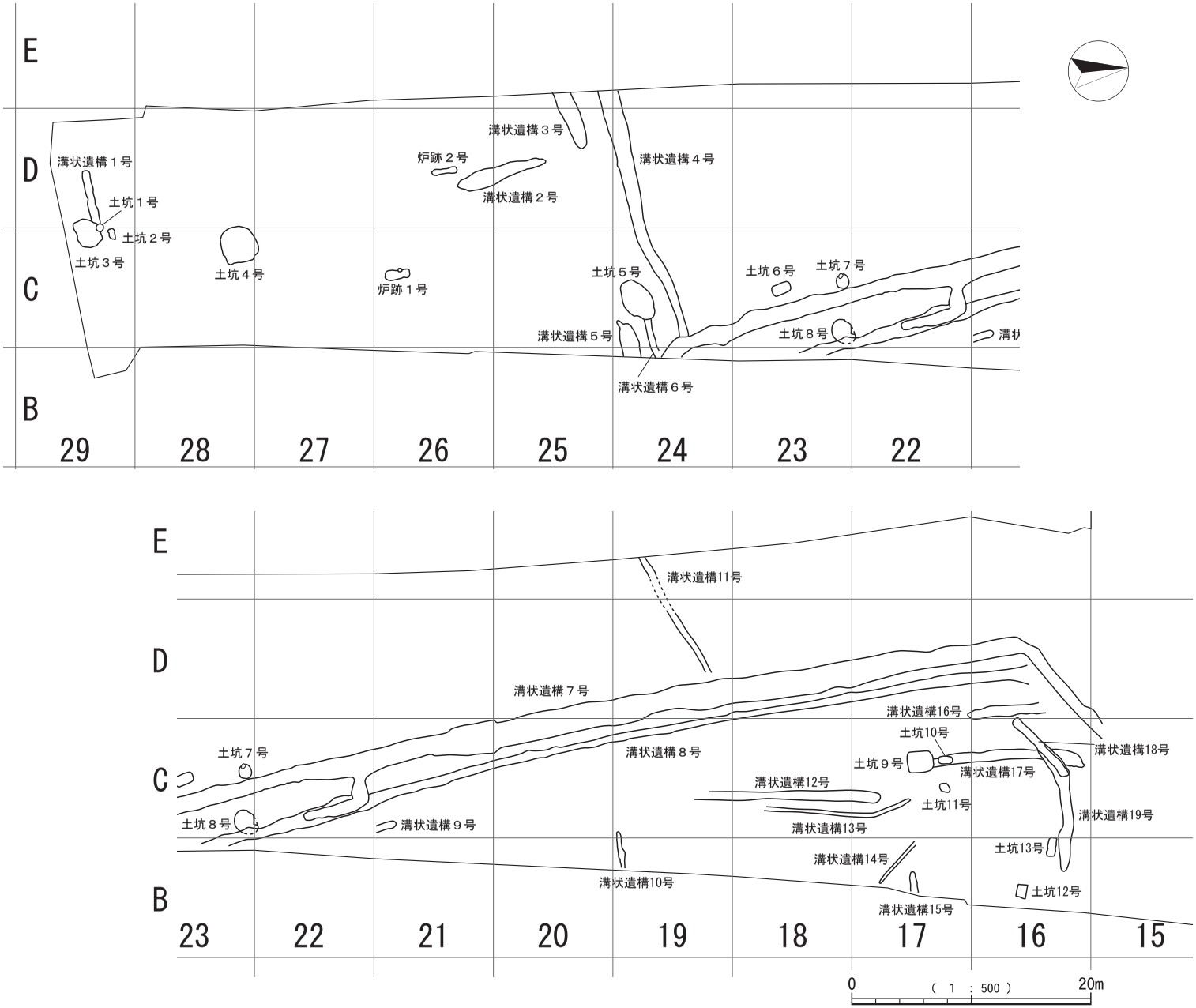
Ｄ－26区のⅡ層で検出した。Ｓ96°Ｗを長軸とする１間×３間の建物である。梁行（ｐ１－ｐ２）221㎝，桁行（ｐ２－ｐ８）585㎝を測る。柱穴の形状は不定形なものが多く，平均して長径66㎝，短径39㎝，深さ70.5㎝



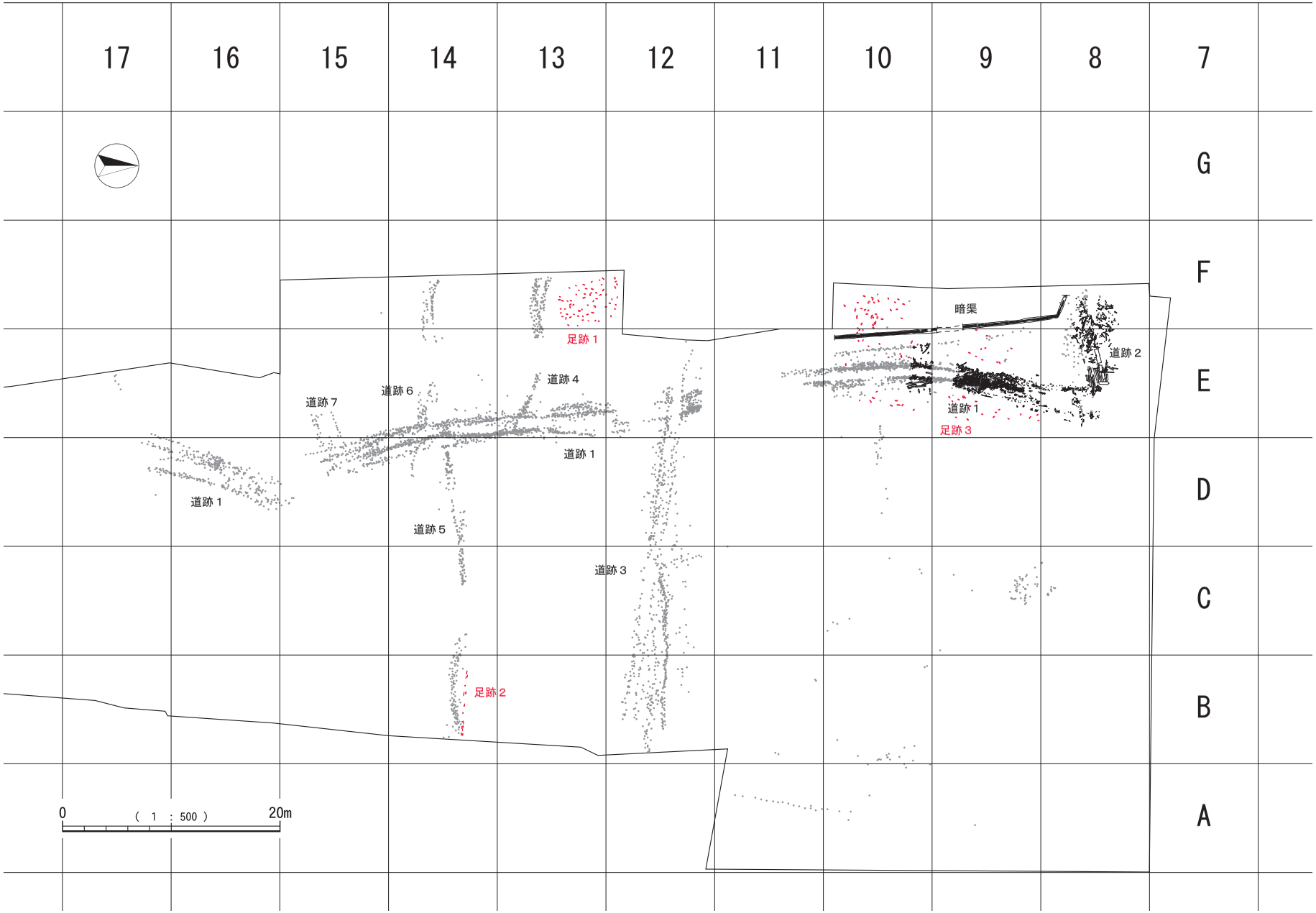
第14図　掘立柱建物跡・柱穴・ピット（Ⅱ層）配置図



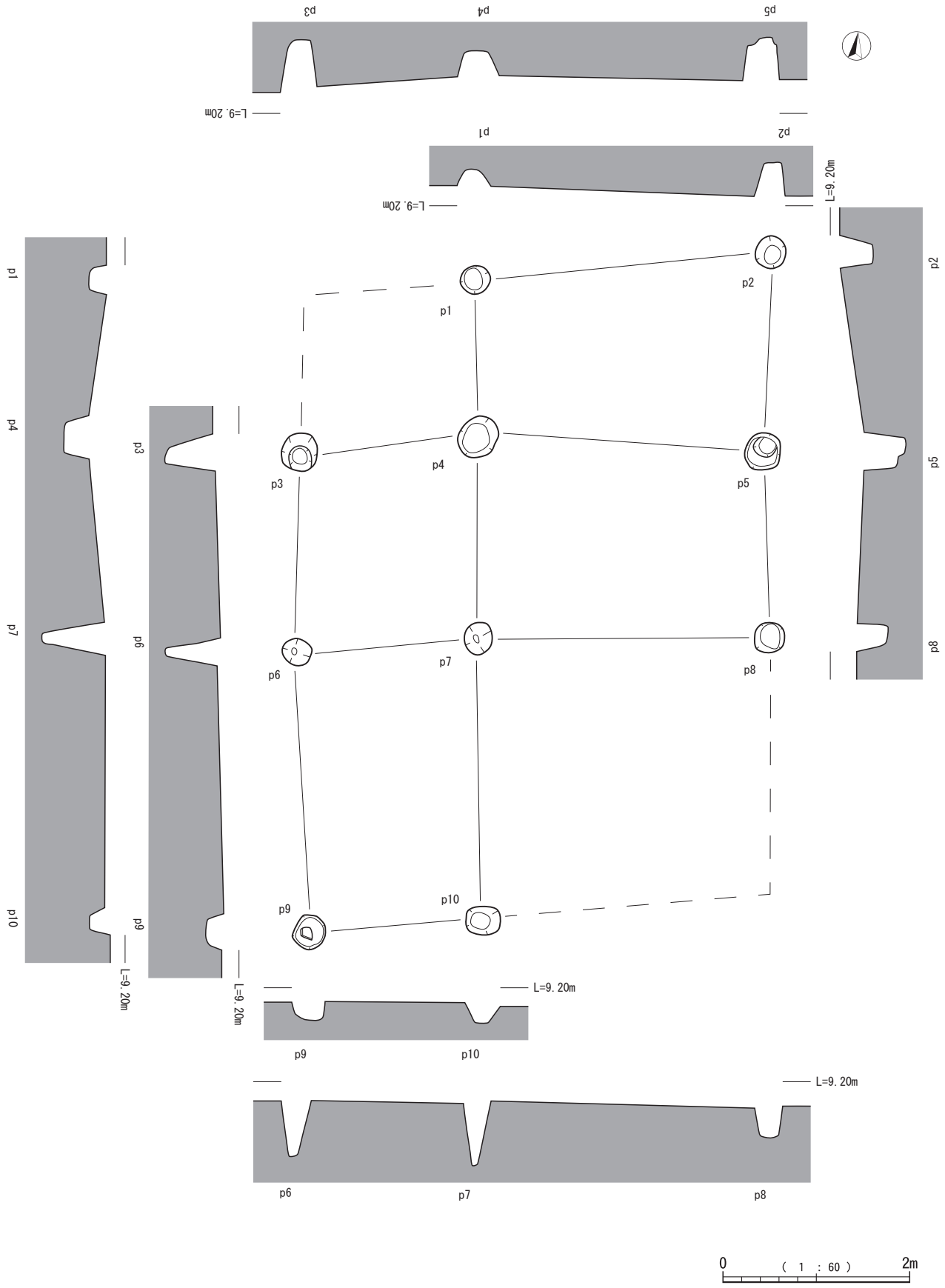
第15図　ピット（Ⅲ層以下検出）配置図



第16図　炉跡・土坑・溝状遺構配置図

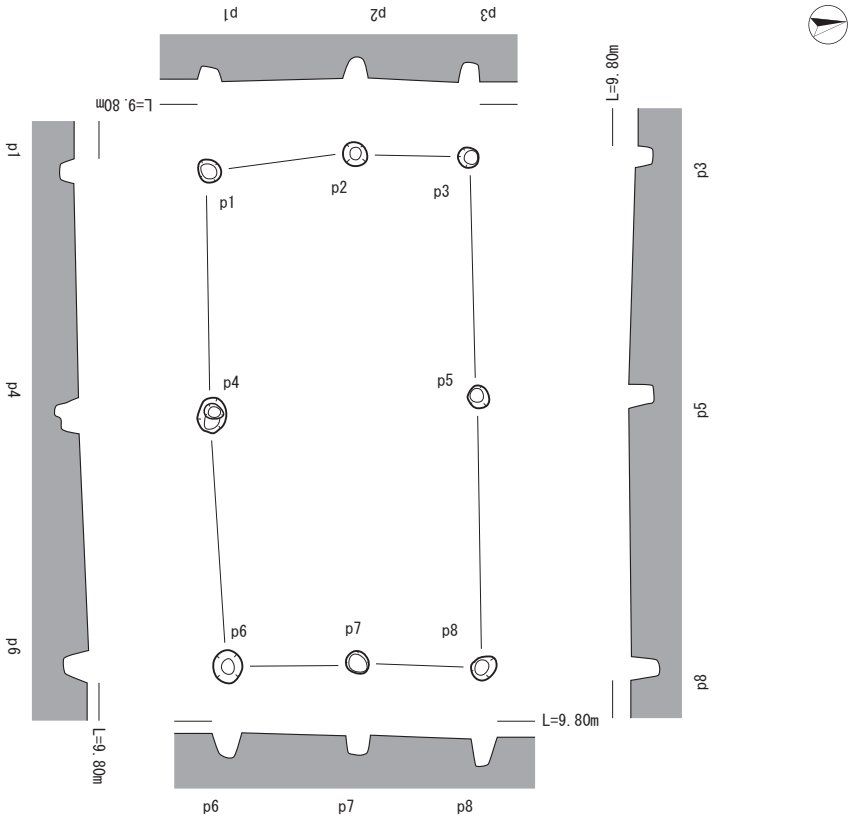


第17図　足跡・土木遺構配置図

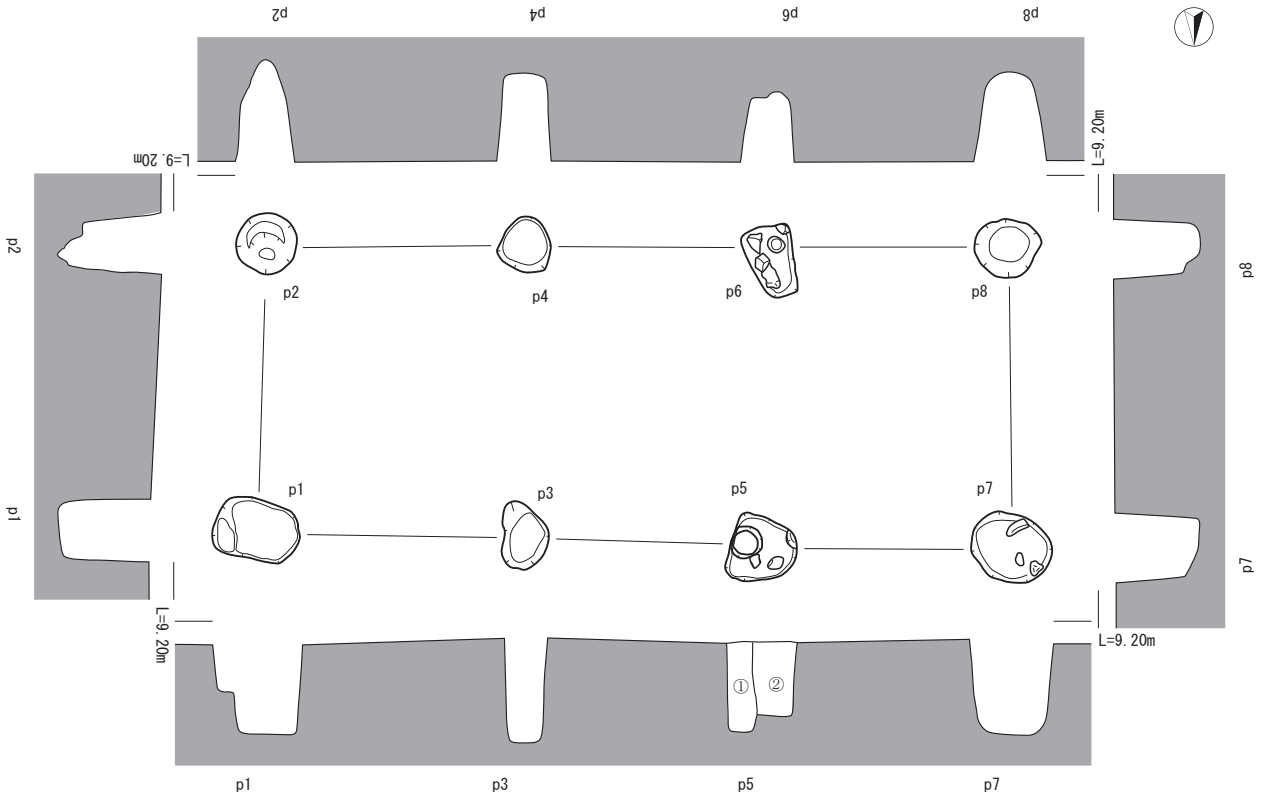


第18図　掘立柱建物跡１号

掘立柱建物跡２号



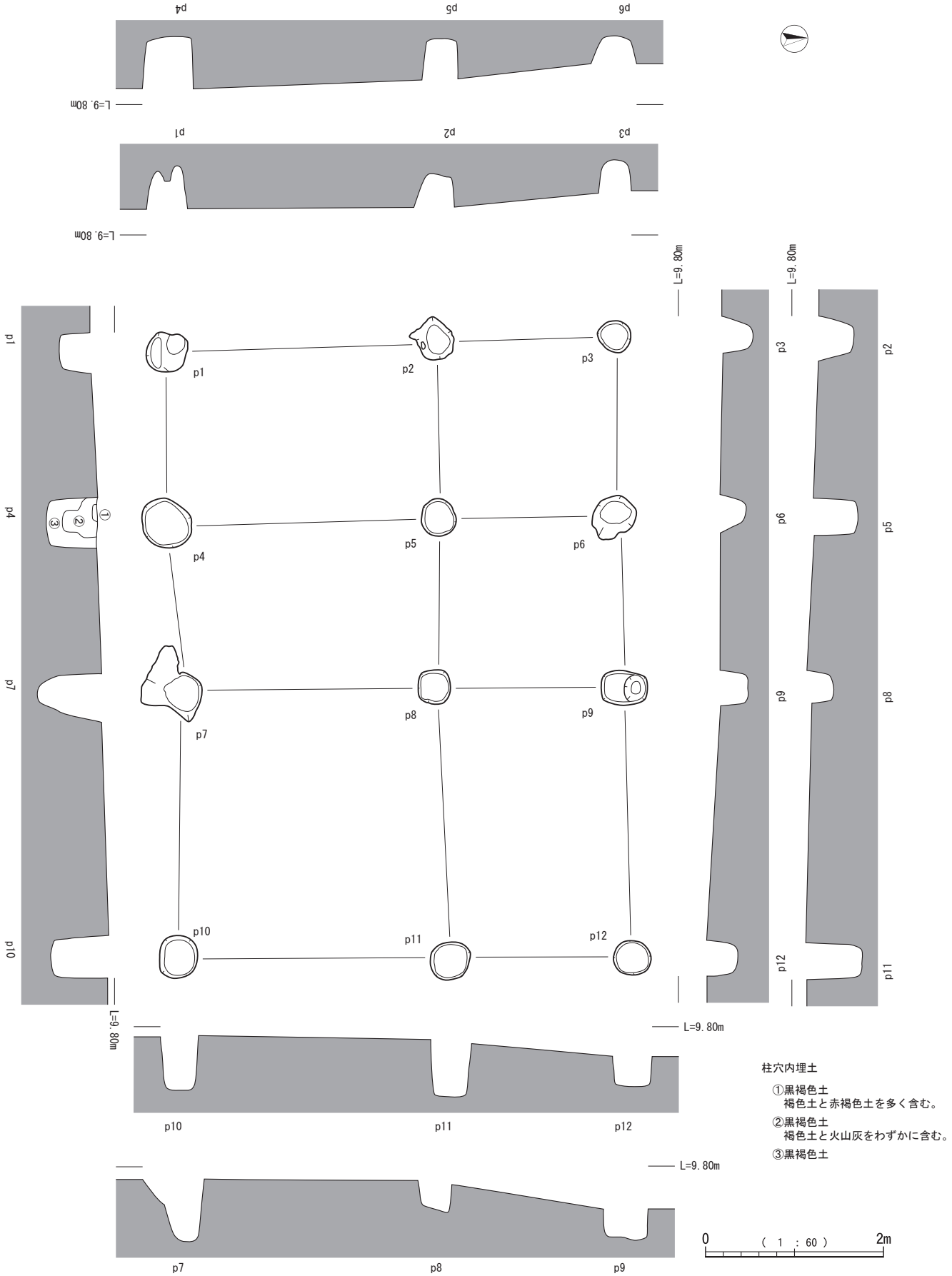
掘立柱建物跡４号



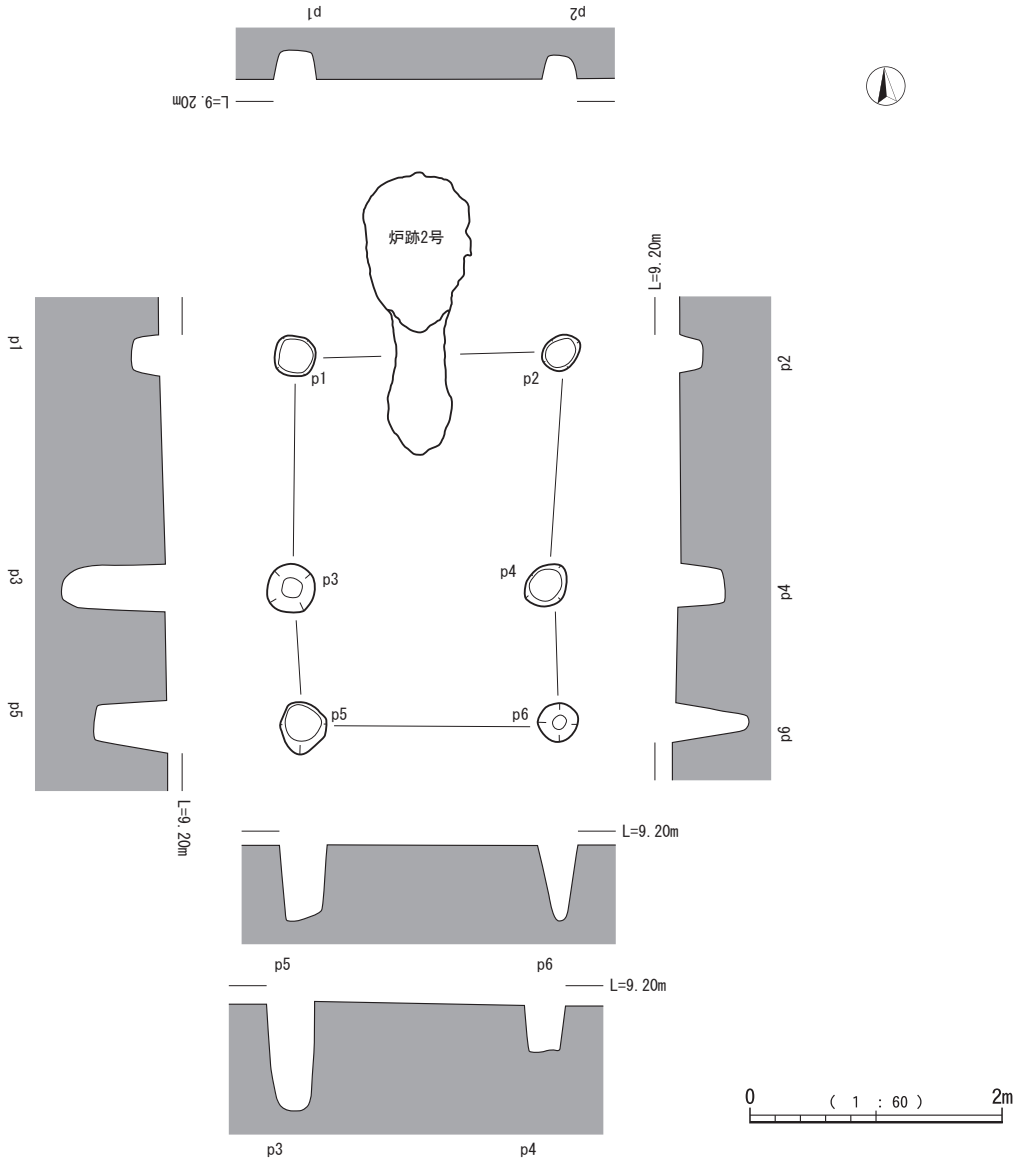
柱穴内埋土
① 黒色土　赤褐色土多く含む。やや軟質土。柱痕。
② 黒色土　①より軟質土。

0　（ 1 ： 60 ）　2m

第19図　掘立柱建物跡２・４号



第20図　掘立柱建物跡３号



第21図　掘立柱建物跡５号

である。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡５号（第21図・第24図１）

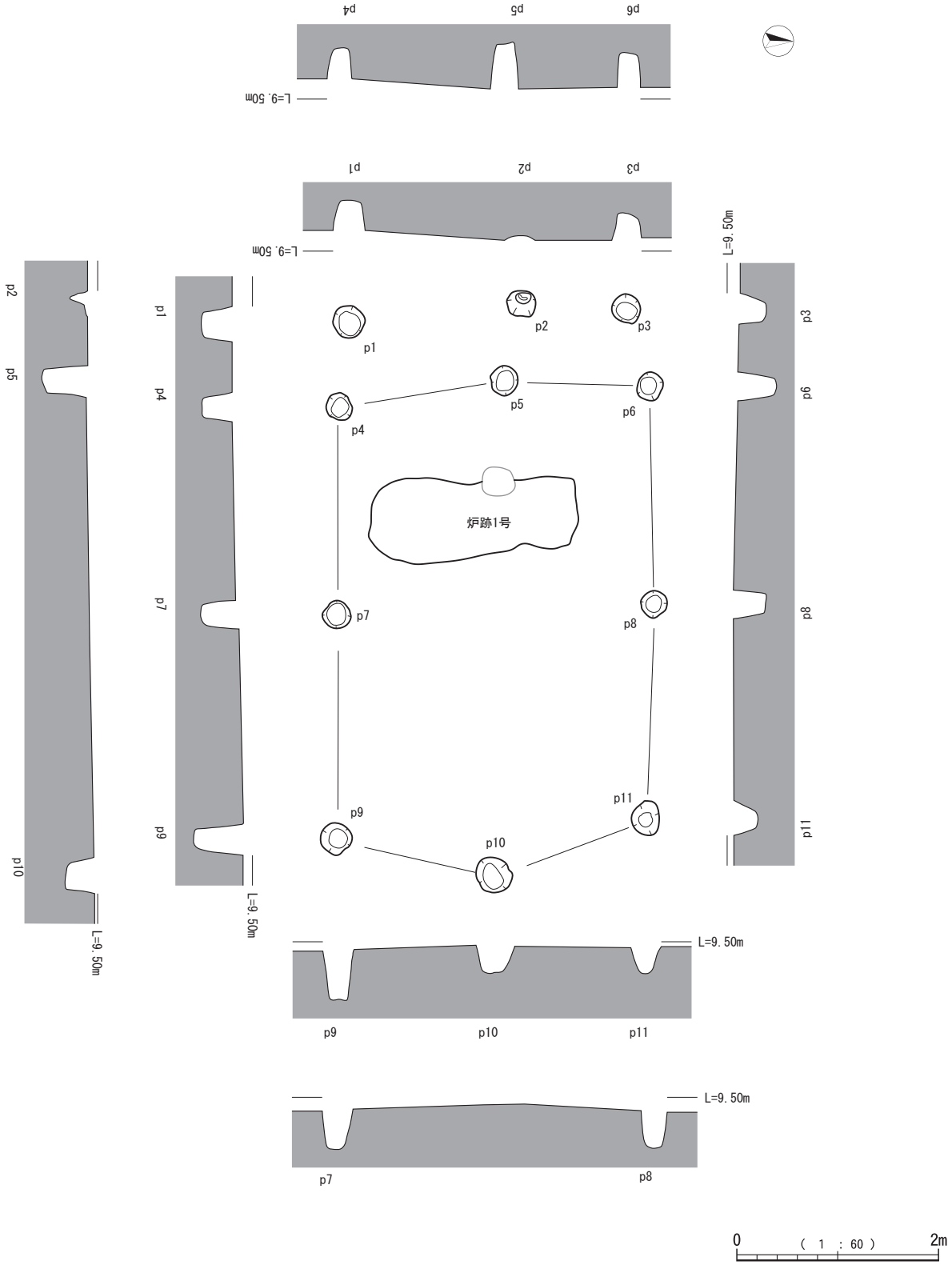
Ｄ－26区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡４号の南側で重複する。Ｓ４°Ｗを長軸とした１間×２間の建物で，平面形長方形を呈する。梁行（ｐ１－ｐ２）211cm，桁行（ｐ２－ｐ６）295cmである。柱穴の形状は円形に近く，平均長径35.7cm，平均短径32.2cm，平均した深さは46.7cmを測る。また，本遺構は炉跡２号と長軸を同じ方向にとり，炉跡２号の南側半分と重複する。何らかの関係性をもつ可能性も考えられるが，詳細については不明である。

ｐ５から近世陶器片が２点，ｐ８から弥生式土器と考えられる胴部小片が１点出土した。１は，ｐ５内で確認された近世陶器の底部である。底径18.5cmを測る。底面は，部分的にいびつで上げ底状となる。底部接地面から胴部にかけては直線的に立ち上がる。内面には，同心円状のタタキ痕が観察できる。薩摩焼苗代川産の甕と考えられる。

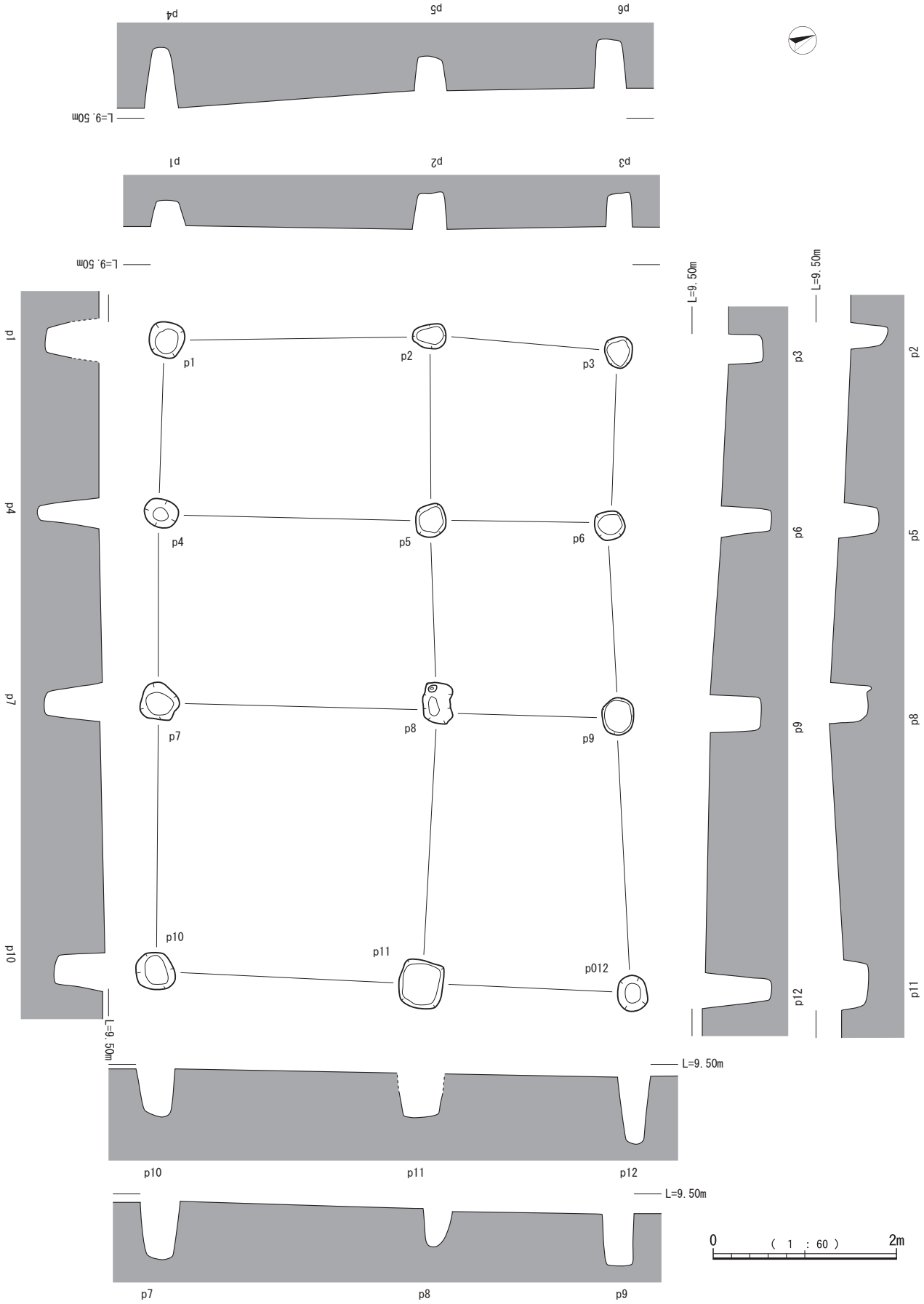
柱穴内から遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡６号（第22図）

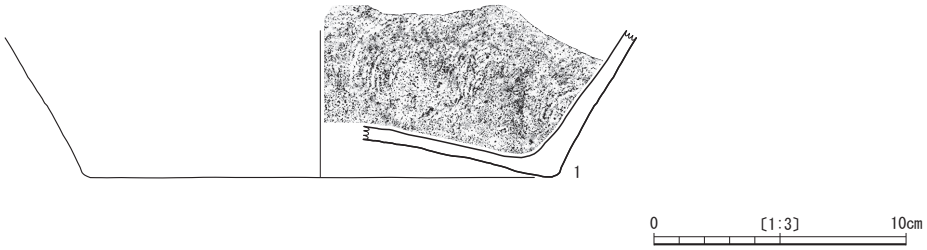
Ｃ－26区のⅡ層で検出された。Ｓ89°Ｗを長軸とした２間×２間の建物で，平面形は長方形を呈する。建物の西側には庇をもつ。梁行（ｐ４－ｐ６）308cm，桁行（ｐ６－ｐ11）431cmを測る。柱穴の形状は円形に近く，平均長径30.3cm，平均短径27.6cm，平均した深さは35.5cm



第22図　掘立柱建物跡６号



第23図　掘立柱建物跡７号



第24図　掘立柱建物跡５号出土遺物

第４表　掘立柱建物跡柱穴計測表

掘立柱建物跡１号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	32	30	18	p1-p2	322
p2	35	33	36	p3-p4	190
p3	42	39	53	p4-p5	306
p4	47	41	27	p6-p7	198
p5	42	39	45	p7-p8	314
p6	31	28	58	p9-p10	187
p7	33	32	68	p1-p4	170
p8	32	32	33	p2-p5	214
p9	36	33	18	p3-p6	214
p10	37	30	20	p4-p7	216
				p5-p8	200
				p6-p9	302
				p7-p10	303

掘立柱建物跡３号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	45	44	35	p1-p2	313
p2	45	41	40	p2-p3	200
p3	37	35	35	p4-p5	308
p4	56	55	58	p5-p6	198
p5	42	39	50	p7-p8	284
p6	49	44	29	p8-p9	228
p7	66	43	72	p10-p11	306
p8	38	36	27	p11-p12	205
p9	52	39	31	p1-p4	193
p10	48	43	65	p2-p5	200
p11	47	38	64	p3-p6	199
p12	42	39	35	p4-p7	191
				p5-p8	191
				p6-p9	194
				p7-p10	298
				p8-p11	309
				p9-p12	305

掘立柱建物跡６号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	32	32	30	p1-p2	172
p2	27	25	4	p2-p3	103
p3	29	27	26	p4-p5	166
p4	27	26	30	p5-p6	143
p5	30	26	45	p9-p10	158
p6	27	24	38	p10-p11	163
p7	28	27	37	p1-p4	84
p8	27	26	32	p2-p5	86
p9	32	32	49	p3-p6	77
p10	37	32	29	p4-p7	206
p11	34	28	24	p6-p8	217
				p7-p9	223
				p8-p11	215

掘立柱建物跡２号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	20	18	11	p1-p2	116
p2	20	19	17	p2-p3	92
p3	17	16	13	p6-p7	103
p4	28	22	19	p7-p8	99
p5	18	17	20	p1-p4	192
p6	24	24	20	p3-p5	189
p7	19	17	16	p4-p6	203
p8	21	15	23	p5-p8	216

掘立柱建物跡４号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	68	47	71	p2-p4	201
p2	76	48	81	p6-p8	189
p3	55	35	83	p1-p3	214
p4	76	39	70	p5-p7	207
p5	54	52	58	p7-p8	227
p6	59	39	56	p4-p6	195
p7	64	55	74	p1-p2	221
p8	76	47	71	p3-p5	187

掘立柱建物跡５号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	32	32	22	p1-p2	211
p2	33	26	19	p5-p6	203
p3	39	36	85	p1-p3	185
p4	37	31	37	p2-p4	185
p5	41	37	58	p3-p5	111
p6	32	31	59	p4-p6	110

掘立柱建物跡７号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	39	38	59	p1-p2	288
p2	37	27	41	p2-p3	206
p3	34	30	38	p4-p5	296
p4	37	32	67	p5-p6	196
p5	39	34	41	p7-p8	300
p6	32	31	55	p8-p9	204
p7	43	43	62	p10-p11	290
p8	63	35	42	p11-p12	232
p9	41	34	56	p1-p4	189
p10	44	40	54	p2-p5	202
p11	52	48	48	p3-p6	188
p12	39	32	74	p4-p7	207
				p5-p8	203
				p6-p9	209
				p7-p10	292
				p8-p11	303
				p9-p12	303

であった。底部分の柱穴の長径と短径はほぼ同じであるが，深さが浅くなる。建物内の西側には長軸をほぼ90°違えた炉跡１号が収まる。建物内に収まることから，両遺構には何らかの関係性があると考えられるが，確証を得るには至らなかった。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡７号（第23図）

Ｃ・Ｄ－26区のⅡ層で検出された。Ｓ92°Ｗを長軸とした２間×３間の総柱の建物である。掘立柱建物跡６号の北側の一部と重複する。梁行（ｐ１－ｐ３）494cm，桁行（ｐ３－ｐ12）701cmを測る。柱穴の形状は隅丸方形に近いものが多く，平均長径41.7cm，平均短径35.3cm，平均した深さ53.1cmである。ただし，ｐ１とｐ11については検出に手間取り，掘下げすぎていることから推定値である。

２　柱穴（第14・25図）

ここで扱う柱穴は柱痕が残り，掘立柱建物跡を構成しないものである。調査区内から５基確認した。低地部のＤ－26区で検出した柱穴１・２は柱痕跡を確認出来たこと，低湿地部のＢ・Ｃ－20区で検出した柱穴３～５は柱の一部が残存していたことから柱穴と判断した。低湿地部で検出した柱穴３～５の３基は，検出面の付近で土壌がすでに水分で重くなっていた。さらに，掘り下げ途中で水が湧いてくる状況であったため，柱穴下面の検出状況については多少不安定な要素もある。このように常に水が供給されるような区域であったことから，柱の一部が残存したと考えられる。しかし，出土した柱は，実測できる強度ではなかった。

柱穴３～５から出土した柱は放射性炭素年代測定を行った結果，15～17世紀という数値が得られている。樹種についてはスダジイ及びクスノキ科であった。詳細については，第３分冊「第８章」を参照いただきたい。

柱穴１・２の時期については検出層及び埋土から，柱穴３～５については柱穴の埋土や放射性炭素年代測定結果から中・近世とした。柱穴の位置については，第14図に示してある。

柱穴１（第25図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡４号のｐ６の南側に位置する。平面形は34×30cmのほぼ円形で，深さは50.3cmを測る。柱穴の埋土は黒色土を基本とするが，混じる土や軟度の違いにより分層した。

柱穴２（第25図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された。柱穴１の南側50cmに位置する。柱穴の平面形は52×52cmの円形に近く，深さは50cmを測る。柱穴１とは柱穴の平面プラン，柱穴埋土の堆積状況がほぼ同じである。さらに，掘立柱建物跡４号のｐ６に柱穴１・２とも隣接することからこれとの関連も考えられる。

柱穴３（第25図）

Ｃ－20区のⅢ層で検出された。平面形が26×23cmのほぼ円形に近く，深さ43cmを測る。柱穴の下部に長さ26cm，太さ15cmの柱の一部が確認された。柱の下側の先端は鋭角になるように加工され，側面は面取りされていた。

柱穴４（第25図）

Ｃ－20区のⅢ層で，柱穴３の南側180cmの位置で検出された。柱穴は25×22cmのほぼ円形で，深さ12cmであった。柱穴より先に柱の一部を確認した。残存する柱は，長さ12cm，太さ15cmであった。柱の太さは，柱穴３とほぼ同じである。下側の先端は丸く加工され，側面の半分は面取されていた。

柱穴５（第25図）

Ｂ－20区のⅢ層中で検出された。最初に89×39cmの不定型なプランを検出した。北東側に隣接して土坑23号・24号が検出され，それらとの切り合い関係が明確でなく，また，樹痕の可能性もあったことから半裁して調査を進めた。その結果，深さ25cmの底面から径18cm，深さ85cmの掘り込みがあり，中に柱の一部が残存していた。柱は長さ65cm，太さ14cmで，下側の先端は鋭く加工が施されていた。柱の半分は面取されていたが，残りの半分には加工痕は見られなかった。周辺に検出された柱穴３・４及びピットとの関連を探ったが，掘立柱建物跡等を構成するものとはならなかった。なお，柱穴５は，弥生時代の土坑23号及び24号を切る。その関係については，第95図に示した。

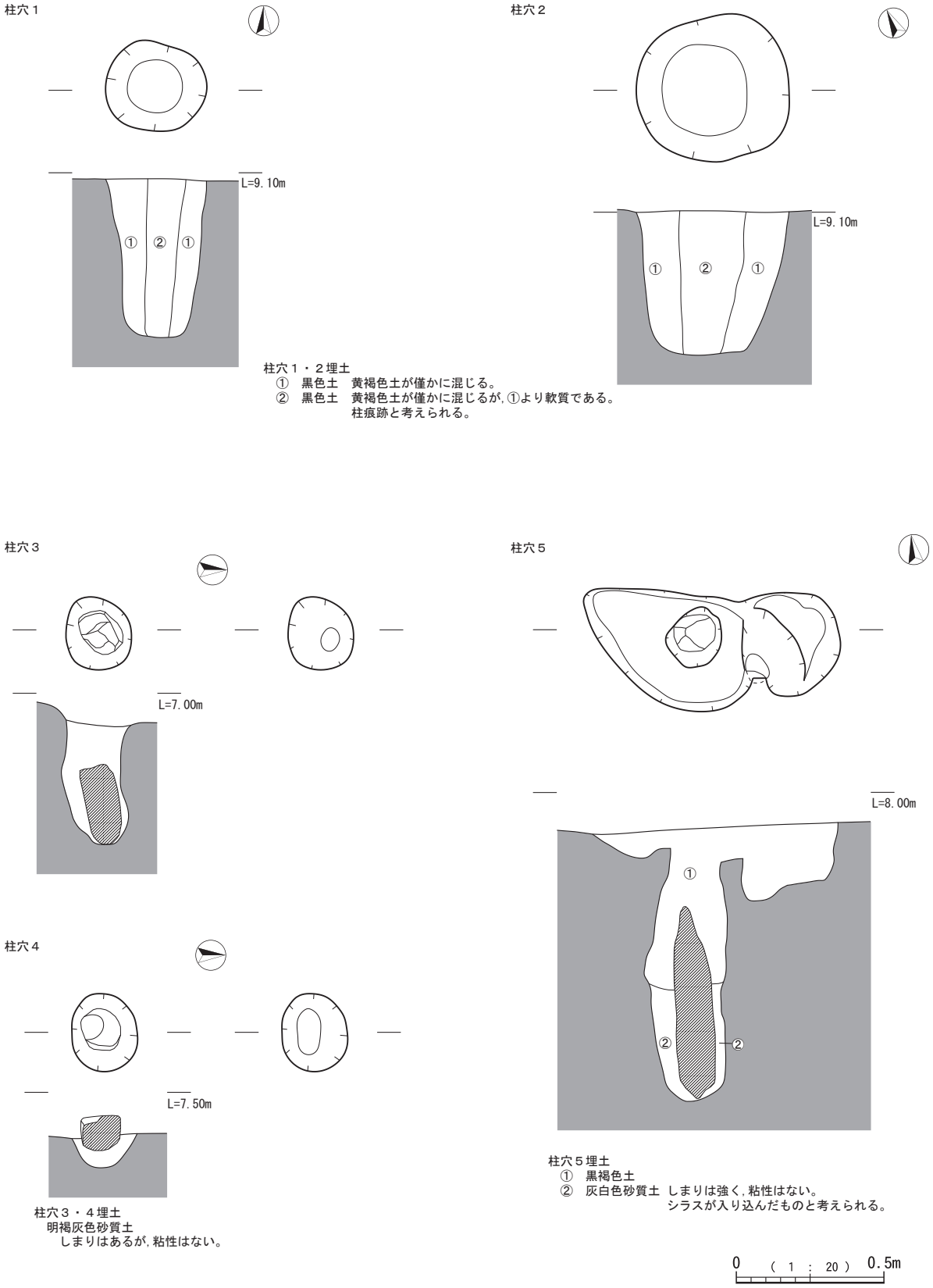
３　ピット（第14・15・26図）

ピットはⅡ層検出とⅢ層以下検出のものに大別できるが，調査区内において1,019基を確認した。前述のとおり，Ⅱ層検出のピットは中・近世，Ⅲ層以下で検出したピットは時代を特定することが困難であることから，Ⅱ層とⅢ層以下で検出されたものに分けて掲載する。Ⅱ層検出のピットの配置図は掘立柱建物跡及び柱穴とともに第14図に，Ⅲ層以下で検出されたピットの配置図は第15図に示した。なお，ピットという名称は柱穴と同様の掘り込みをもち，柱及び柱痕跡が確認できなかった遺構という意味で便宜的に使用している。

（１）Ⅱ層検出ピット（第14・26図）

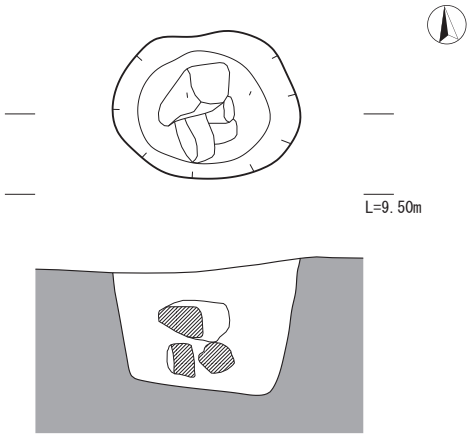
Ⅱ層検出のピットは，20区から29区までで228基を確認した。そのうち大半は25区から29区に集中する。19区から北側には検出されなかった。基本的にⅡ層で検出されたピットの時代は，中近世と判断した。この中で礫がまとまって埋土中に確認されたものを４基（Ｐ１～Ｐ４）掲載する。いずれも柱穴であった可能性も考えられる。

また，ピットの埋土中から出土した遺物で図化し得るものについては，その実測図のみを第27図に掲載し，その出土したピットの位置については第14図の配置図に示した。

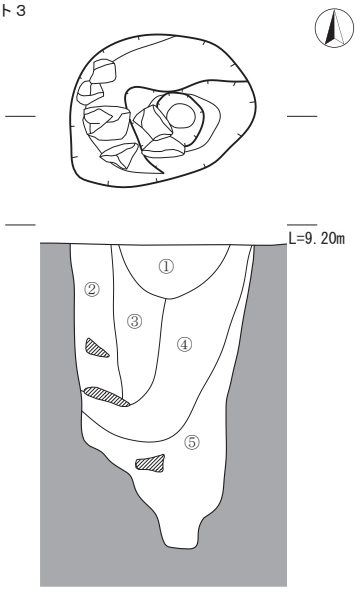

柱穴１
L=9.10m
①
②
①
柱穴２
L=9.10m
①
②
①
柱穴１・２埋土
① 黒色土 黄褐色土が僅かに混じる。
② 黒色土 黄褐色土が僅かに混じるが,①より軟質である。
柱痕跡と考えられる。
柱穴３
L=7.00m
柱穴４
L=7.50m
柱穴３・４埋土
明褐灰色砂質土
しまりはあるが,粘性はない。
柱穴５
L=8.00m
①
②
②
柱穴５埋土
① 黒褐色土
② 灰白色砂質土 しまりは強く,粘性はない。
シラスが入り込んだものと考えられる。
0 (1 : 20) 0.5m

第25図　柱穴

ピット１

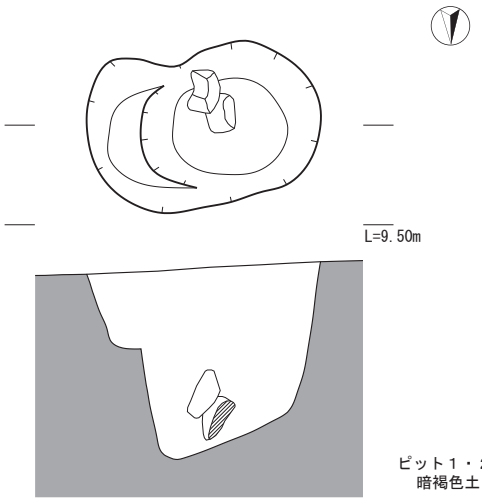


ピット３



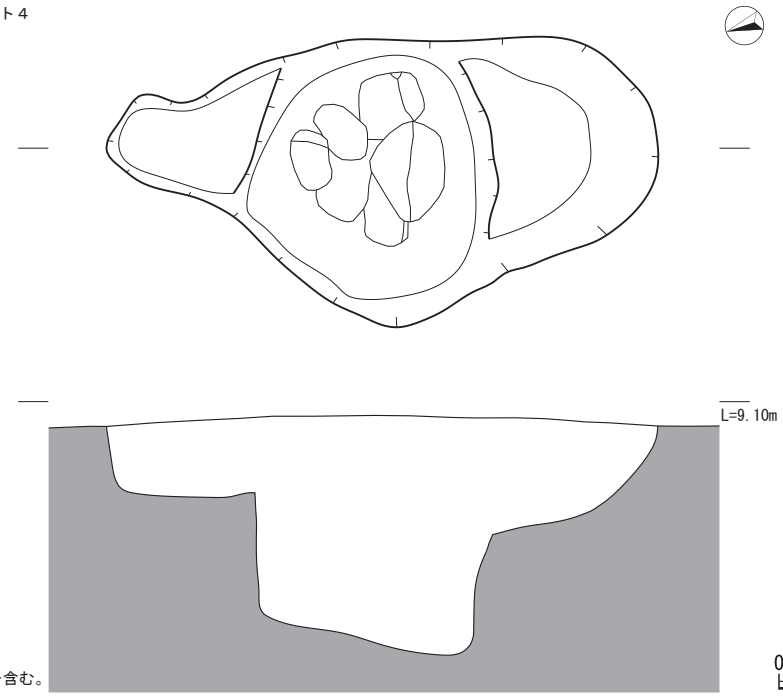
ピット3埋土
①黒色土
φ10mm大の明黄褐色の火山灰を含む。
②黒色土
φ5mm大の黄橙色火山灰を含む。
③黒色土
φ2mm大の褐色火山灰を含む。
④黒色土
φ3～6mm大の黄橙色火山灰を含む。
⑤黒色土

ピット２



ピット１・２埋土
暗褐色土　φ2mm大の明赤褐色土を含む。

ピット４

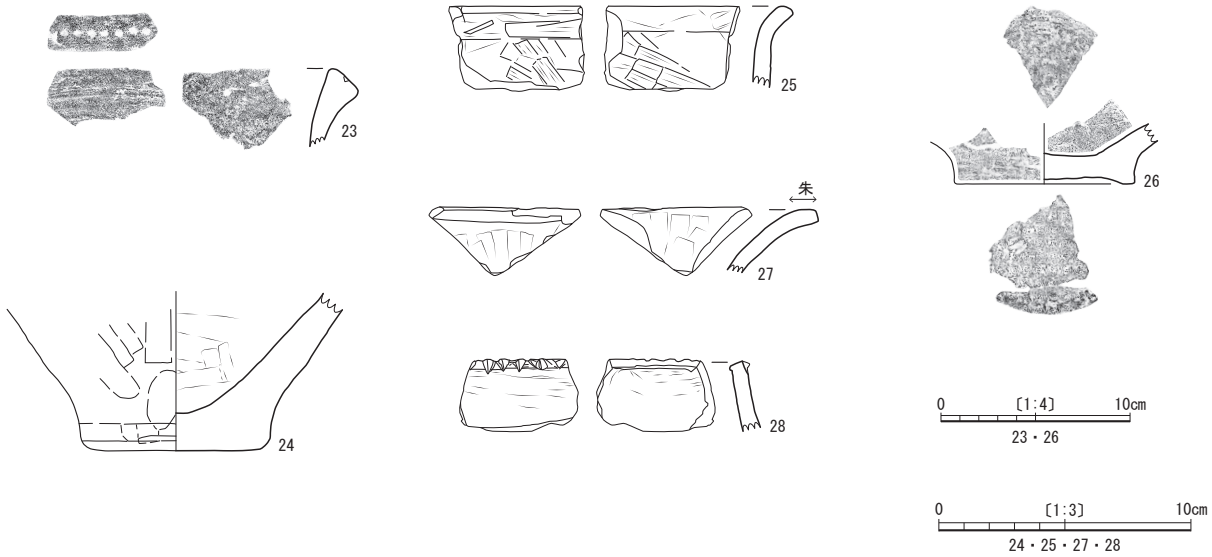


ピット４埋土
暗褐色土　明黄褐色土と赤褐色を含む。

0　（1：20）　0.5m

第26図　ピット

第27図　ピット出土遺物（１）



第28図　ピット出土遺物（２）

Ｐ１（第26図）

Ｄ－28区のⅡ層上面で検出された。平面形は50×38㎝の楕円形で，深さ35㎝を測る。埋土は暗褐色土の単層である。

埋土中から20㎝大と10㎝大の礫がそれぞれ１点，５㎝大の礫が２点出土した。

Ｐ２（第26図）

Ｄ－28区のⅡ層上面で検出された。Ｐ１から南東へ３ｍの位置で，平面形は60×40㎝のいびつな楕円形である。埋土は単層で，暗褐色土である。

埋土中から10㎝大の礫が２点出土した。

Ｐ３（第26図・第27図２・３）

Ｄ－27区のⅡ層で検出された。50×40㎝の楕円形に近いプランである。深さ80㎝を測るが，深さ50㎝程度から底面に向かって細くなる。埋土については，平面図と共に示してある。

埋土中から陶器片と染付，20㎝と10㎝大の角礫７点が出土した。２は青花碗の口縁部，３は青花碗の底部である。いずれも中世後半と考えられる。

Ｐ４（第26図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された２段掘のピットである。平面形は145×75㎝の不定型なプランで20～30㎝の深さをもつ。このピットの中央部には60×65㎝の円形に近いプランで，さらに30㎝ほど垂直に掘り込んでいる。埋土は明黄褐色土と赤褐色土を含む暗褐色土で，２㎜程度の炭化物も確認された。

埋土中から30㎝大，20㎝大，10㎝大の礫が６点出土している。

Ｐ５～Ｐ８（第27図４～７）

以下，Ⅱ層検出のＰ５からＰ８の埋土内から出土した遺物について記述する。

４は，Ｄ－27区で検出されたＰ５埋土から出土した。青花皿の口縁部で，口縁端部が短く外反する。中世後半に比定される。５は，Ｃ－26区で検出されたＰ６出土の土器である。内傾する口縁部の上下に突帯を巡らせ，棒状の工具を強く押し当てて刻みを施すものである。内外面ともナデ調整を施す。弥生時代前期の土器と考えられる。６は，Ｃ－26区で検出されたＰ７から出土した龍泉窯産の青磁皿である。中世後半と考えられる。７はＣ－25区の南端で検出されたＰ８から出土した土器で，薄く仕上げられた底部片である。底部から胴部にかけてはかなり開く器形をもつ鉢と考えられる。内外面ともナデ調整が施される。縄文時代後期から晩期に比定できる。

（２）Ⅲ層検出のピット（第15図）

Ⅲ層検出のピットは，15区から29区にかけて791基を検出した。Ⅱ層検出のピットが調査区の南側に偏在することに対して，Ⅲ層検出のピットはより広い区域に亘って確認された。その中でも，24区から26区にかけて集中している。

ピットから出土した遺物の中で図化し得るものについては，その実測図のみを第27・28図に掲載し，遺物が出土したピットの位置については第15図の配置図に示した。

Ｐ９～Ｐ28（第27図・第28図８～28）

以下，Ⅲ層以下で検出されたＰ９からＰ28の埋土内から出土した遺物について記述する。

８は，Ｄ－29区で検出されたＰ９から出土した小振りの磁器碗である。畳付には釉を施していない。肥前系で近世と考えられる。９は，Ｄ－29区で検出されたＰ10から出土した土器片である。断面が三角形を呈する口縁部

で，外面には巻貝の頂部によると考えられる刺突を横位に施す。内外面とも器面調整の条痕が部分的に残る。縄文時代後期の市来式土器に比定できる。10は，Ｄ－29区，Ｐ11から出土した土器である。口縁部上端の突帯に細かい刻みを施す甕である。内外面ともナデによる丁寧な器面調整が行われている。弥生時代前期と考えられる。11は，Ｃ－29区で検出のＰ12から出土した口縁部から胴部にかけての土器片である。頸部から胴部へは膨らみ，頸部で幾分締まった口縁部はその上方で内側へ屈曲する器形をもつ。口縁部は波状を呈すると考えられる。器壁は厚く，口縁端部は丸く収める。外面屈曲部にはヘラ状工具で横位の区画を施し，その上下に斜位の貝殻刺突を連続して行う。下位の貝殻刺突の下端には横位もしくは横位に近い１㎝程度の貝殻刺突を施す。縄文時代後期の丸尾式土器と考えられる。12は，Ｃ－29区で検出されたＰ13からの出土である。底部片で底面が幾分張り出し，胴部に向かって開く器形である。外面は丁寧なナデが施される。弥生時代前期の土器と考えられる。13は，Ｃ－29区で検出されたＰ14からの出土である。口縁部上端に三角突帯を貼り付け，口唇部を平坦に仕上げ，その先端に細かい刻み目を等間隔に施すものである。弥生時代前期に比定される。14は，Ｃ－28区で検出されたＰ15から出土したものである。口唇部を平坦に仕上げた口縁部は直立し，外面には沈線で文様を施す。器壁は薄く，焼成は極めて良好である。指宿式土器に比定できる。15は，Ｃ－27区で検出されたＰ16からの出土品である。口縁部は大きく外反し，その口唇部は丸く収める。頸部の屈曲部よりやや下方には上下に沈線を伴った低い突帯を巡らせ，細い刻みを施す。さらに下方に横位の沈線が残ることから，突帯は少なくとも２条あったと考えられる。内外面との指押さえとナデで丁寧な器面調整が行われている。弥生時代前期のものと考えられる。16はＤ－23区，Ｐ17から出土した。底部接地面が張り出し，底部から胴部へは開く器形である。底面には網代痕が観察できる。復元底径は7.5㎝であった。縄文時代後期の土器と考えられる。17は，Ｄ－23区から検出されたＰ18から出土した。鉢形土器の口縁部で，内面には口縁部に沿って沈線を施す。内外面とも器面調整はナデを施す。縄文時代後期の土器と考えられる。18は，Ｄ－21区で検出されたＰ19から出土した。深鉢の底部片で，上げ底の底径は3.6㎝を測る。底部から胴部へは開き気味に立ち上がる。外面にはヘラ磨きで器面調整を行う。縄文時代晩期に比定される。19は，Ｄ－21区で検出されたＰ20からの出土である。もじり底で復元底径は11㎝である。底部から胴部へはあまり開かず立ち上がる。成形は全体的に粗い。縄文時代後期の指宿式土器と考えられる。20は，Ｄ－19区から検出されたＰ21から出土した。口縁端部を肥厚させた土器片である。その幅広い口唇部には細い沈線を斜めに施す。成形は粗いが，焼成は良好である。21・22は，Ｄ－19区から検出されたＰ22から出土したものである。21は土器片９点が接合したが，その中でＰ22から出土したものは２点である。そのほかは周辺の包含層出土である。胴径28.5㎝，底径8.3㎝を測る。底部は器壁の厚い平底で，底部から胴部へは湾曲しながら立ち上がる。器面調整は内面がナデと指押さえ，外面がヘラ磨きである。胴下部には被熱により表面が剥落している部分がある。弥生時代中期の入来式土器と考えられる。22は底部端が細く張り出し，胴部へは開きながら立ち上がる器形をもつ。器面調整は内面がナデ，外面が指押さえとナデである。弥生時代の土器と考えられる。23は，Ｄ－19区から検出されたＰ23から出土した。幾分外に開く口縁端部は肥厚し，平坦な口唇部の中央に竹管文を口縁に沿って１条施す。器面調整は，内外面ともナデである。縄文時代後期のものと考えられる。24は，Ｂ－18区から検出されたＰ24から出土したものである。復元底径6.8㎝を測る。全体的に厚い器壁をもつ。内面にはナデ，外面には工具ナデで器面調整を行う。弥生時代の土器と考えられる。25は，Ｂ－18区で検出されたＰ25から出土した。直行する口縁部は，その端部で「く」の字状に外反し，口唇部は丸く収める。内面はナデ，外面は工具ナデで丁寧な器面調整である。弥生時代の土器と考えられる。26は，Ｃ－17区から検出されたＰ26から出土した。厚い器壁をもつ上げ底の底部片である。復元底径9.6㎝を測る。器面調整は，内外面ともナデである。底面にはシダ系植物の圧痕が観察できる。縄文時代後期のものと考えられる。27は，Ｂ－17区のＰ27から出土した。大きく外反する壺の口縁部で，その端部の断面は方形を呈する。器面調整は内外面ともナデが行われる。弥生時代に比定される。28は，Ｃ－16区のＰ28から出土した。口縁部はやや内傾するが，胴部は屈曲すると考えられる。口唇部は平坦面をもち，口縁上端には米粒大の刻みを施した突帯を巡らす甕である。内面の器面調整はナデである。弥生時代前期のものと考えられる。

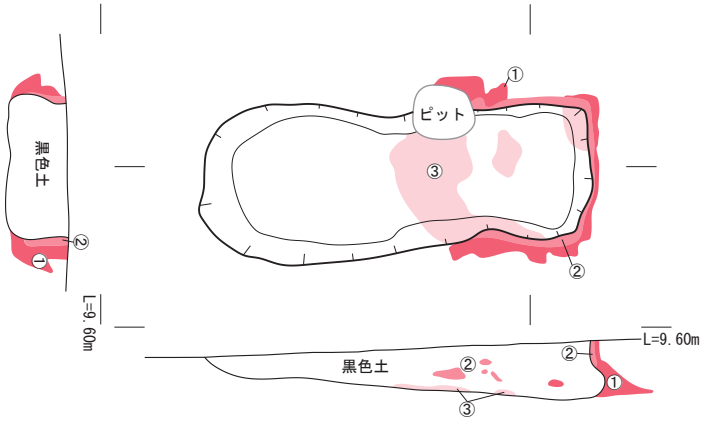
４　炉跡（第16・21・22・29図）

炉跡は平成25年度の調査において，掘立柱建物跡が集中する区域で２基検出された。２基の距離は約10ｍで，主軸はともに北を向く。時期については，検出層，掘立柱建物跡との関連も想定されることから中・近世とした。掘立柱建物跡との位置関係については，第21・22図に示した。また，被熱により変色した部分が炉本体，変色のない部分が灰溜り，本体と付帯部分が分かれる所が焚口と考えられる。

炉跡１号（第16・22・29図）

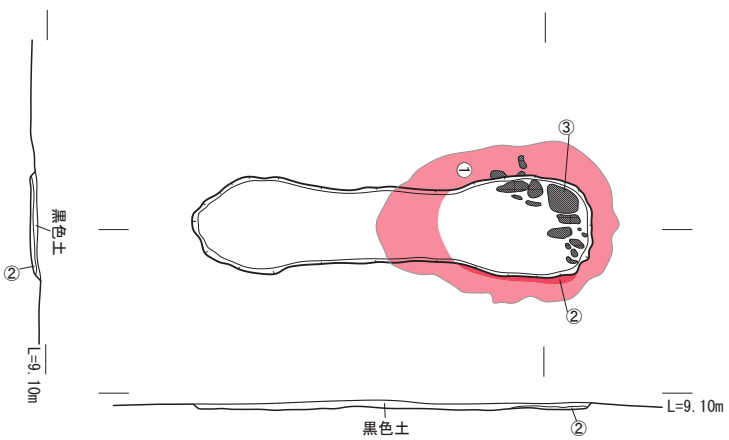
Ｃ－26区のⅡ層で検出された。Ｎ６°Ｅを長軸とする長辺205㎝，短辺85㎝を測る。平面形は隅丸方形で，焚き口と考えられる部分は50㎝程度に狭くなる。断面は南

炉跡１号



① 被熱により，にぶい黄橙色に変色した部分
② 被熱により，橙色に変色した部分
③ 貼り付けられた粘土，被熱により明黄橙色に変色

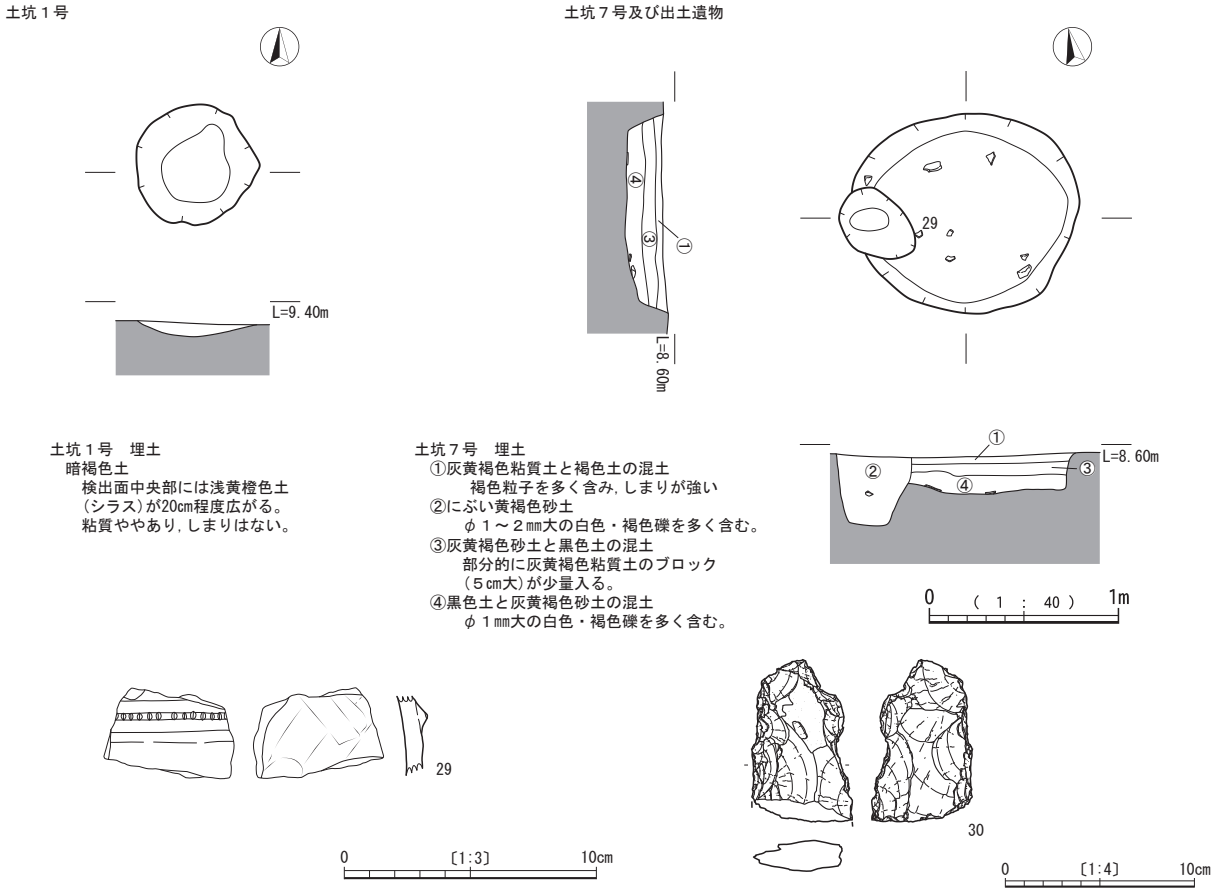
炉跡２号



① 被熱により，赤褐色に変色した部分
② 被熱により，明黄褐色に変色した部分
③ 炭化物

0 （1：40） 1m

第29図　炉跡１・２号



第30図　Ⅰ類土坑及び出土遺物

から北方向へ徐々に深くなり，最深部は30cmとなる。炉本体の壁及び周辺は被熱による変色が著しく，床面には貼り付けられた粘土が部分的に残る。また，焚口付近の西側には炉跡を切るピットが検出されたが，炉跡との関係はないと判断した。

さらに，この炉跡は掘立柱建物跡６号の長軸とはほぼ直交するが，掘立柱建物跡６号の西側のｐ４～６に並行して掘立柱建物跡の中に収まる。炉跡の床面とこの掘立柱建物跡の柱穴の床面を比べると，柱穴のほうが10cm程度低くなる。何らかの関係も考えられるが，判断はできなかった。

遺構内から遺物は確認されなかった。

炉跡２号（第16・21・29図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された。炉跡１号から北西へ約10mに位置する。Ｎ２°Ｅを長軸とし，長辺210cm，短軸53cmを測る。検出面からの深さは５cm程度で，ほぼ床面しか残存していない状況であった。平面形は細長い楕円形であるが，焚口付近は35cmと狭くなる。炉壁及び周辺は一様に被熱による変色が見られた。炉内の北西側には炭化物が集中していた。埋土は黒色土の単層であるが，埋土中には５cm以下の被熱により変色した赤褐色土や明黄褐色土のブロックが散在していた。

この炉跡は掘立柱建物跡５号と長軸がほぼ同じで，炉本体は建物の外にあたるが，灰溜まりは建物の中になる。掘立柱建物跡を構成する柱穴の底面は炉跡の床面より約20cm以上低い。炉跡１号と同様に掘立柱建物跡５号と何らかの関係性も考えられるが，詳細については不明であった。

遺構内からの遺物の出土はなかった。

５　土坑（第16図）

土坑は，平成25・27・28・29年度の調査において16区から29区にかけて13基が検出された。検出面は本来Ⅱ層であるが，攪乱や削平の影響を受けてⅢ層やⅣａ層のものもある。時期について，明記していないものについては中・近世である。

その平面形から次のように分類できる。

Ⅰ類・・・・・　円形もしくは円形に近いもの
（１号・７号）

Ⅱ類・・・・・　方形もしくは方形に近いもの
（６号・９号・10号・12号・13号）

Ⅲ類・・・・・　不定形なもの
（２～５号・８号・11号）

以下，分類に従って記述する。

【Ⅰ類】

土坑１号（第30図）

Ｃ・Ｄ－29区のⅢ層で検出された。平面形は径65cmのほぼ円形で，深さは10cmに満たない。遺構の断面は，ボウル状を呈する。本遺構は溝状遺構１号と土坑３号と重複している。切り合い関係から中・近世と判断した。

遺構内から遺物は確認されていない。

土坑７号（第30図29・30）

Ｃ－23区のⅡ層，溝状遺構７号の西側で検出された。平面形は122×104cmのほぼ円形に近いプランで，深さ20cmを測る。床面はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。

土坑内から８点の土器と１点の石器が出土した。土器は胴部片で，内１点を掲載した。29は，断面三角形の突帯に細かい刻みを密に施すものである。弥生時代前期に比定できる。30は，打製石斧または半磨製石斧の基部と考えられる。破損後の再加工等は見られない。この土坑の時期についてはⅡ層検出であることと溝状遺構７号を切っていることから中・近世とし，出土した遺物は流れ込みの可能性が高いと考えられる。

また，この土坑の西側では，土坑を切った状態でピットを検出した。ピットは土坑より20cm程深く掘り込まれており，底面付近からは水が湧く状況であった。ピットの時期は土坑７号との切り合い関係や埋土から土坑７号より新しいが，ほぼ同時期と考えられる。

【Ⅱ類】

土坑６号（第31図31）

Ｃ－23区のⅡ層，溝状遺構７号の西側で検出された。長軸160cm，短軸90cm，深さ42cmを測る。床面は平坦で壁は急な角度で立ち上がる。本遺構はⅢａ層まで掘り込んで構築しているが，床面付近では水が湧き出る状況であった。

埋土中からは縄文時代の土器や中世・近世の陶磁器等に加えて釘と考えられる鉄片が出土したが，図化し得たのは１点であった。31は磁器の染付碗で，底部から体部まで残存する。畳付は露胎し，見込みと外面には草花文が施される。近世と考えられる。

釘の可能性のある鉄片の出土や埋土の堆積状況が他の土坑とは異質であることから，木棺墓の可能性も考えられる。

土坑９号（第31図32～34）

Ｃ－17区のⅢ層上面で検出した。Ⅲ層上面で検出したが，構築面はⅡ層と思われる。平面形は長軸216cm，短軸174cmの隅丸方形である，深さ62cmを測る。床面は平坦で，壁は急激に立ち上がる。本遺構は15・16世紀の陶磁器が出土している溝状遺構17号を切っていることから，中・近世と考えられる。

埋土中から30数点の土器片と木製の曲物が出土した。土器は縄文土器と考えられるものが７点，その他は弥生土器，土師器であった。その中で，土器２点と曲物を掲載する。32は，弥生時代の壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し，口唇部には横位の沈線を施す。33は，土師器の坏である。口径13.2cm，底径7.3cm，器高4.2cmを測る。回転ヘラケズリによる器面調整で，底部には糸切りとヘラ切り両方の痕跡が観察できる。34は，曲物の底板と考えられる。柾目板を使用している。形状は径12cm程度の円形で，厚さ７㎜である。放射性炭素年代測定を行った結果，10～11世紀の数値が得られた。なお，詳細については「第８章」を参照いただきたい。

土坑10号（第32図）

Ｃ－17区，溝状遺構17号の掘削中にその床面で土坑10号が確認された。溝状遺構17号に切られ，床面付近しか残存しない。土坑９号の北側にも隣接する。検出された平面形は長軸119cm，短軸65cmの方形で，深さは10cmを測る。床面はほぼ平坦で，北壁は緩やかに，南壁は急な角度で立ち上がる。埋土から中・近世と判断した。なお，本土坑は溝状遺構17号に切られ，さらに土坑29号を切っている。その関係の詳細については土坑29号の項で述べる。

遺構内から遺物の出土はなかった。

土坑12号（第32図35・36）

Ｂ－16区のⅣａ層で検出された。本遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層の残存状況が悪く，表土下はほぼⅣａ層となる。平面形は長軸110cm，短軸82cmの台形に近い。深さは11cmを測る。床面はほぼ平坦で，壁は全体的に急激に立ち上がる。Ⅳａ層検出ではあるが，床面近くでの検出であり，また，埋土がⅡ層相当と考えられることから時期は中・近世とした。

35は，指宿式土器の口縁部である。直線的に開く口縁外面に沈線で文様を構成する。器面調整は内外面とも条痕の後ナデを施す。36は市来式土器の口縁部で，上端が欠損する。口縁部文様帯に縦位と斜位の刺突を施す。

土坑13号（第32図）

Ｂ－16区のⅢ層上面で検出されたが，遺構の一部がＣ－16区に及ぶ。平面形は長軸157cm，短軸68cmの隅丸方形で，深さは34cmを測る。床面は平坦で，壁は急に立ち上がる。埋土の①と②については，調査時の埋土観察から遺構の埋没後に掘り返された可能性も考えられる。

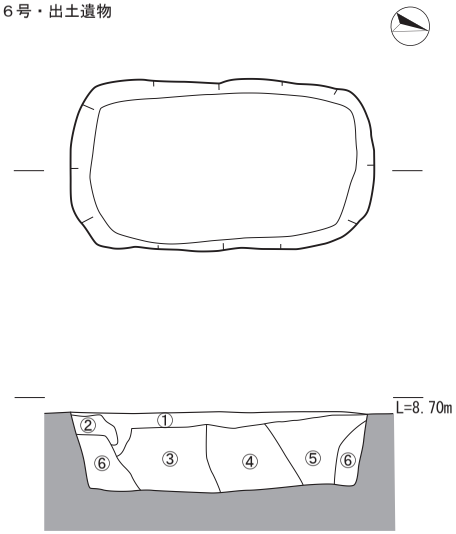
遺物は土器の小片が出土したが，時期を特定できるものはなかった。

【Ⅲ類】

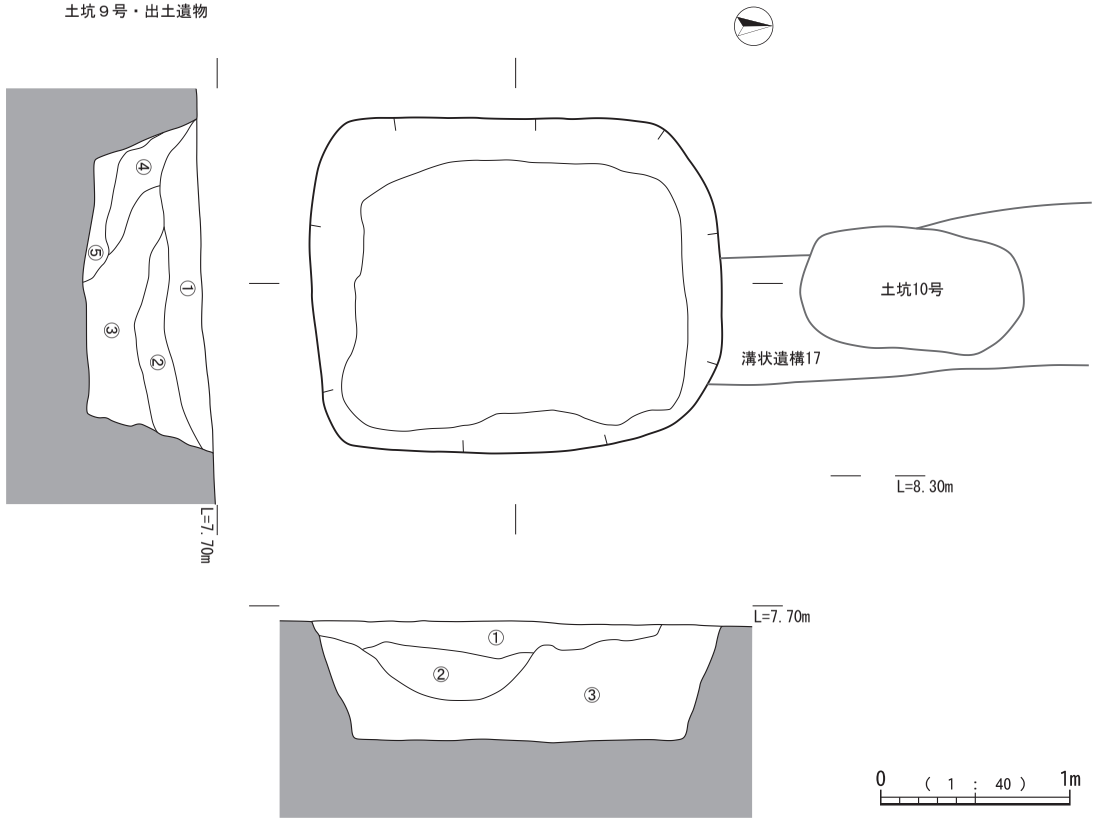
土坑２号（第33図）

Ｃ－29区のⅢ層，土坑１号の北東の隣接して検出された。長軸90cm，短軸52cmを測る不定形なプランである。

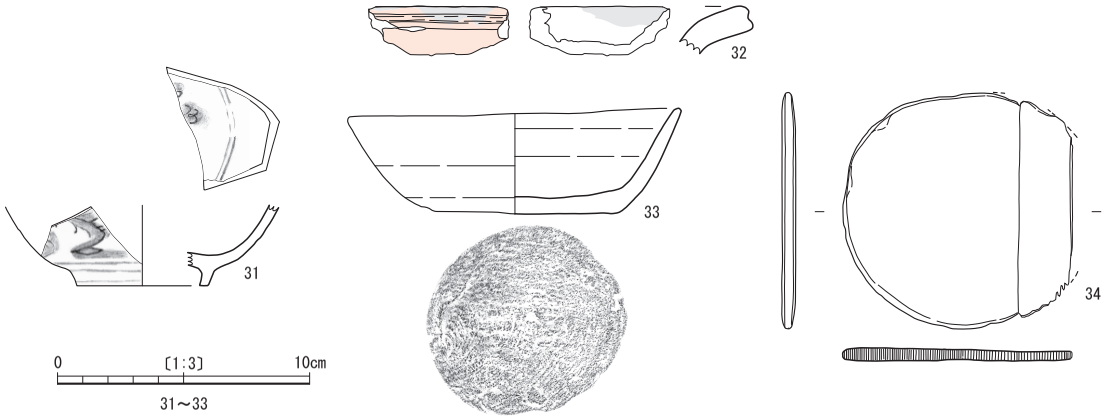
土坑６号・出土遺物



土坑９号・出土遺物



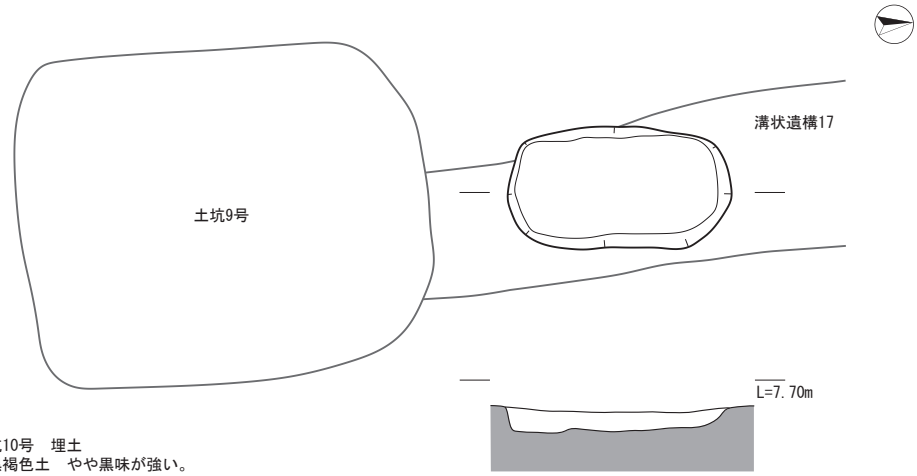
土坑６号　埋土
①灰褐色砂土
　φ１～２cm大の白色軽石を多く含む。
②にぶい褐色砂土と褐灰色砂土の混土
　φ１cm大の白色軽石を含む。
③褐灰色砂土と黒褐色砂土の混土
④黒褐色土とにぶい黄褐色砂土の混土
⑤にぶい黄褐色砂土
　黒褐色土が３～５cm大のブロックで入る。
⑥褐灰色砂土と灰褐色砂土の混土
　φ１mm大の白色軽石を含む。



土坑９号　埋土
①暗褐色土
　明黄褐色（アカホヤ）の１～５mm大のパミスを少量含む。
　しまり・粘性ともある。
②黒褐色土
　１～５mm大の明黄褐色土（アカホヤ）を含む。
　しまりは弱く，粘性は強い。
③浅黄橙色砂質土と黒褐色土の混土
　浅黄橙色砂質土はラミナ状に堆積
④黒褐色土
　浅黄橙砂質土を少量含む。しまりは弱いが，粘性は強い。
⑤浅黄橙色砂質土
　ラミナ状に堆積

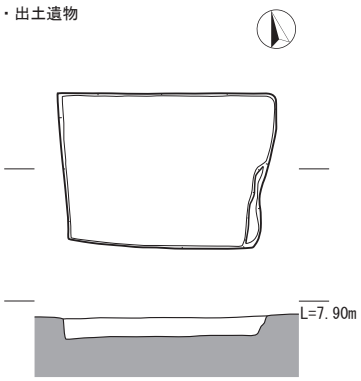
第31図　Ⅱ類土坑（１）及び出土遺物

土坑10号



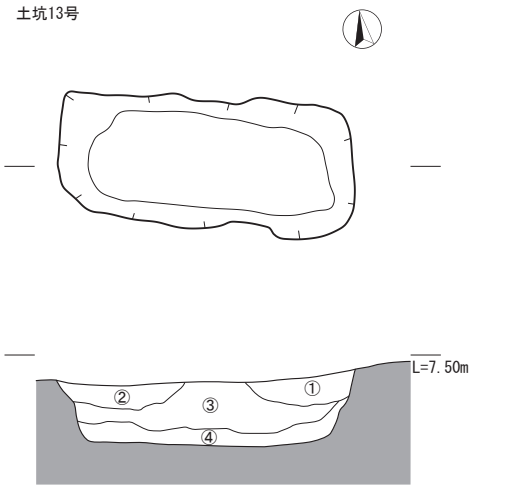
土坑10号　埋土
黒褐色土　やや黒味が強い。
しまり・粘性とも弱い。

土坑12号・出土遺物

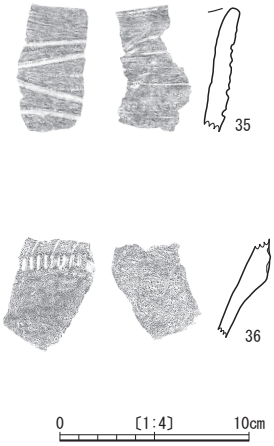


土坑12号　埋土
黒褐色土　赤褐色の鉄成分を少量含む。
しまりは強いが，粘性は弱い。

土坑13号



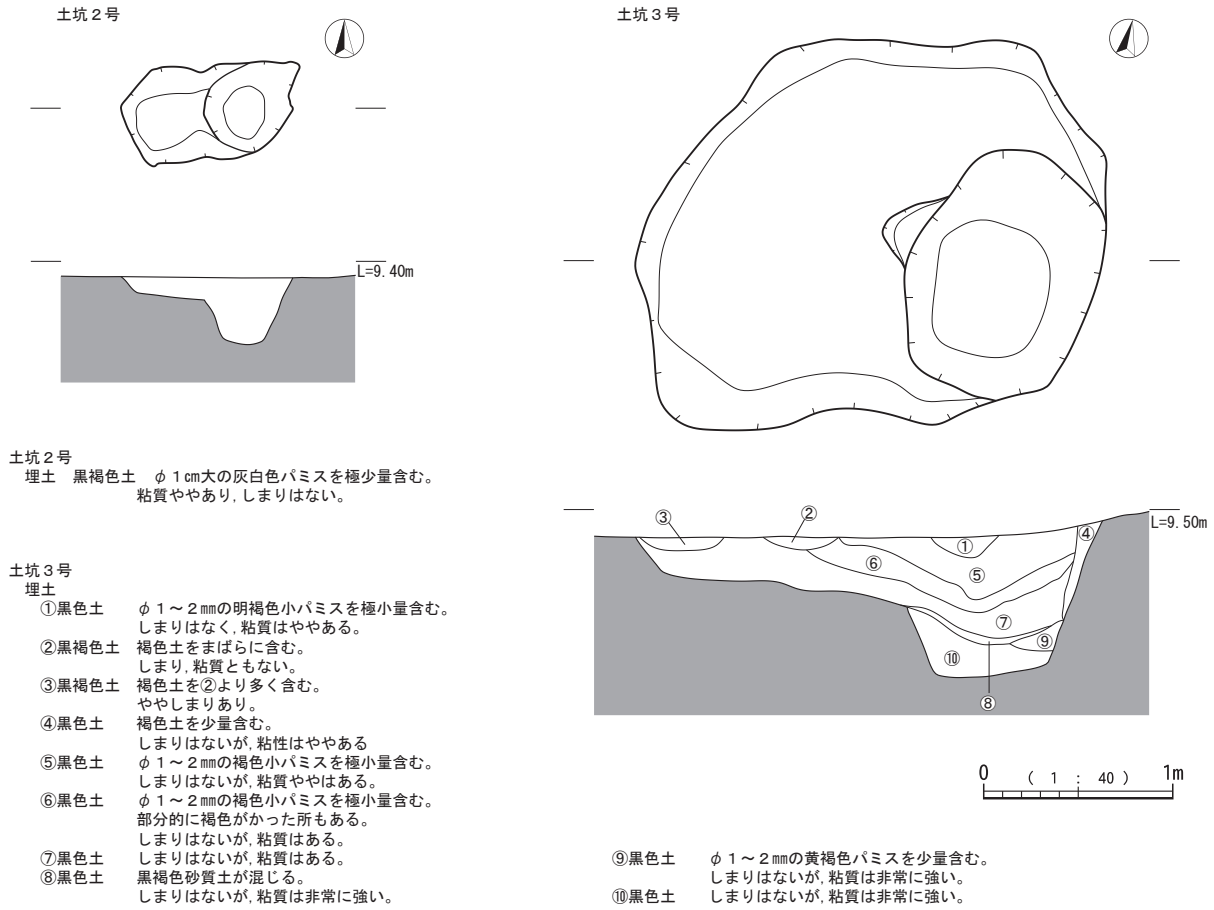
0　（1：40）　1m



0　〔1:4〕　10cm

土坑13号　埋土
①黒褐色土　φ５～10cm大のにぶい黄褐色砂質土がブロックで入る。
しまり・粘性もある。
②黒褐色土　φ５～10cm大のにぶい黄褐色砂質土がブロックで入る。
しまりは弱いが，粘性は強い。
③黒褐色土　にぶい黄褐色パミスを極少量含む。
しまりは弱いが，粘性は強い。
④にぶい黄褐色土

第32図　Ⅱ類土坑（２）及び出土遺物



第33図　Ⅲ類土坑（１）

西側の深さは約10cm，東側はさらに一段掘り込まれて深さ35cmとなる。本遺構は，溝状遺構20号の中に掘り込まれている。

遺構から遺物の出土はなかった。

土坑３号（第33図）

Ｃ・Ｄ－29区のⅢ層で，古墳時代と考えられる溝状遺構20号を分断するような状況で検出された。長軸248cm，短軸200cmを測る不定型なプランの土坑である。検出面からの深さは浅い部分が20～30cmで西から東に向かって下る。また，土坑内の東端はさらに掘り込まれ，二段掘となる。二段掘の検出面からの深さは，75cm程度である。

遺構内から土器小片が出土したが，時代を特定できるものではなかった。

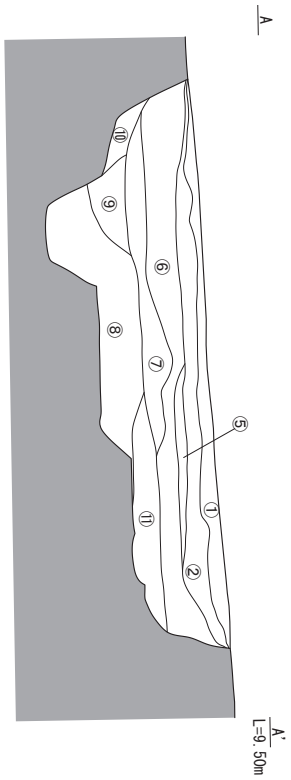
土坑４号（第34・35図37～46）

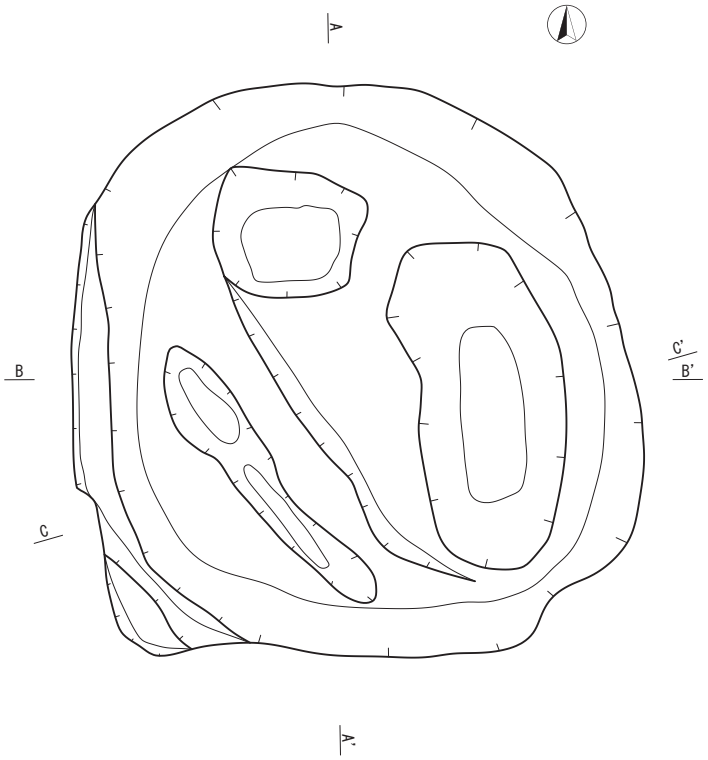
Ｃ－27・28区のⅢ層で検出された。古墳時代と考えられる溝状遺構20号を分断するように掘り込まれている。長軸・短軸とも300cm程度の不定形なプランである。床面の形状は複雑であるが，南東方向に向かって階段状に浅くなる。遺構の北側と東側にさらに掘り込まれた部分がある。検出面からの深さは北側の掘り込みで82cm，東側の掘り込みで95cmである。この二つの掘り込みでは埋土の堆積状況に違いがある。また，土層断面の埋土⑪，⑧，⑨，⑩が南から北に向かって同心円状に面的な広がりをもっていたことから，人為的な埋め戻しが行われた可能性も考えられる。

遺構内からは，弥生時代前期と考えられる土器，土師器，青磁，白磁が出土している。そのうち，７点を図化した。37は，龍泉窯系の青磁の口縁部である。口縁上部に雷文帯をもち，その下にラマ式連弁と考えられる文様を施す。復元口径は17.0cmである。38は中国産の白磁碗の底部で，底径は4.2cmを測る。高台には４か所に抉り込みがあり，見込みには４か所の目跡が残る。39は陶器碗の底部で，復元底径４cmである。高台は台形状で，見込みには黒釉が厚く溜まる。40は，土師器の灯明皿である。口径7.6cm，底径5.6cm，器高1.9cmを測る。糸切り底で，回転ナデによる器面調整が施される。部分的にススが残る。41は土師皿で，口径8.1cm，底径７cm，器高2.1cmを測る。糸切り底で回転ナデによる器面調整が施される。灯明皿に転用されたため内外面にススが残る。

42は，甕の口縁部である。口縁端部に断面三角形の突

土坑４号





土坑４号

埋土

①黒色土
φ１～３㎝大の褐色土のブロックを少量含む。
しまりはややなく，粘性もない。

②黒褐色土
φ５～10㎜大のアカホヤブロックを少量含む。
しまりがあるが，粘性はない。

③黒褐色土
φ１～５㎝大のアカホヤブロックを含む。
しまりはややあるが，粘性はない。

④黒褐色土
しまり，粘性ともない。

⑤黒色土
φ１～２㎝大のアカホヤブロックを含む。
しまりはややなく，粘性はややある。

⑥黒褐色土
φ２～３㎜大のアカホヤパミスを少量含む。
しまりはややあるが，粘性はない。

⑦黒褐色土
φ１～２㎝大のアカホヤブロックを含む。
しまりはややなく，粘性もない。

⑧黒色土
φ１～10㎝大のアカホヤブロックを多く含む。
しまりはあるが，粘性はややない。

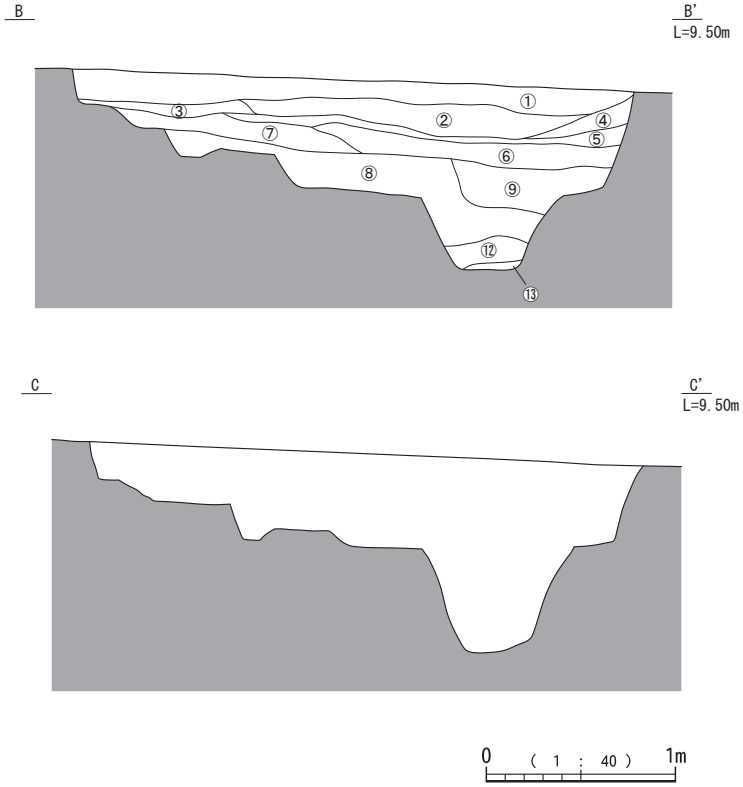
⑨黒色土
φ１～３㎝大のアカホヤブロックを少量含む。
しまりはややあるが，粘性はややない。

⑩黒褐色土
φ１～３㎝大のアカホヤブロックを含む。
しまりはあるが，粘性はややない。

⑪黒褐色土
φ１～10㎝大のアカホヤを含む。
しまりはあるが，粘性はややない。

⑫黒褐色土
φ１～２㎝大のアカホヤブロックを含む。
しまりもなく，粘性もややない。

⑬黒褐色土
φ１～３㎝大のアカホヤブロックを多く含む。
しまりはなく，粘性もややない。



第34図　Ⅲ類土坑（２）

第35図　Ⅲ類土坑出土遺物

帯をもち，その上部は外側に向かって傾斜する。弥生時代前期から中期にかけての土器である。43は壺の口縁部で，端部を欠損する。内外面の三角突帯を貼り付ける。突帯を貼り付けるために，その上下には強く押圧した凹みが残る。弥生時代前期の土器と考えられる。44は，口縁部片である。大きく外反する口唇部に縦の刻みを連続して施す。詳細については不明であるが，器種は壺で，古墳時代の土器と考えられる。

45は二等辺三角形に近い形状で，左脚部を欠損する石鏃の未成品と考えられる。石材は，腰岳産黒曜石である。46も石鏃の未製品で，石材は上牛鼻産黒曜石である。

遺構の時期については，出土遺物から中世と考えられる。

土坑５号（第36図47～49）

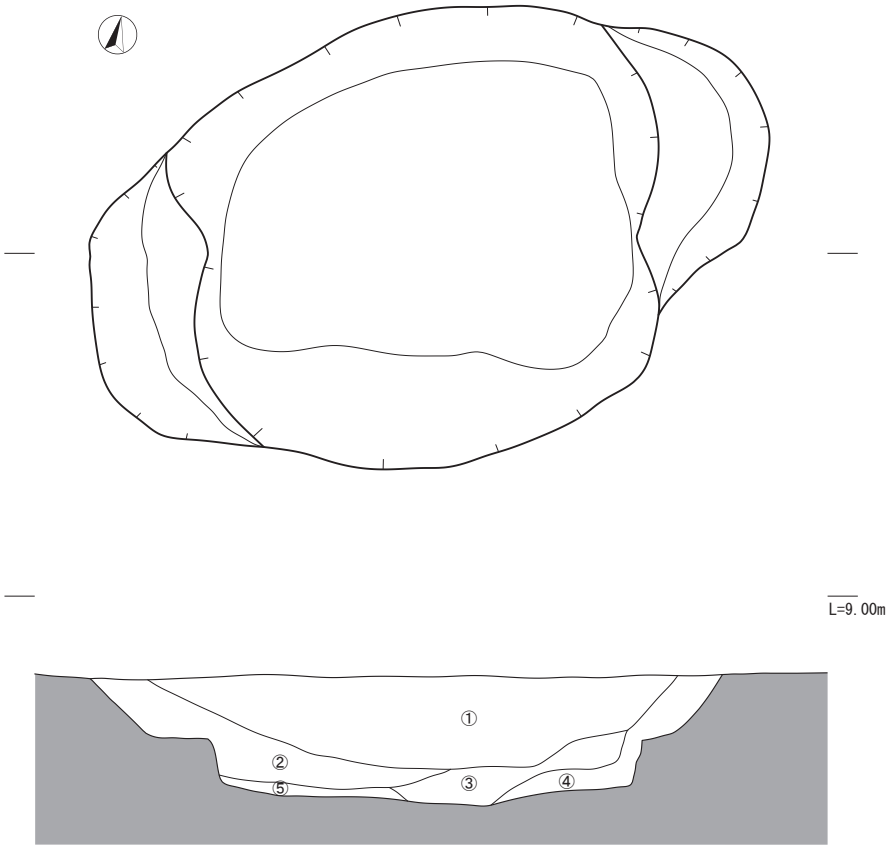
Ｃ－24区のⅡ層下面からⅢ層上面にかけて検出された。この土坑は，同じ調査区を東から西へ延びる溝状遺構６号を切る。平面形は長軸330㎝，短軸240㎝の楕円形の両端に張り出しをもつような不定形となる。深さは検出面から70㎝で，床面はほぼ平坦である。

遺構内からは，弥生時代と考えられる土器，須恵器，土師器，青磁，白磁が出土している。47は口径11.0㎝，底径3.8㎝，器高2.4㎝の青磁皿である。体部は幾分丸みをもつが，口縁部は外反する。高台に釉薬はかからず，その中央部には突起がつく。48は，須恵器の壺である。胴部から底部が残存し，底部から胴部へは直線的に開く。外面には平行タタキが部分的に残る。49は，両脚を欠損する腰岳産黒曜石の石鏃である。基部の抉りは素材の段階で入っていたとみられる。

土坑８号（第37・38図50～57）

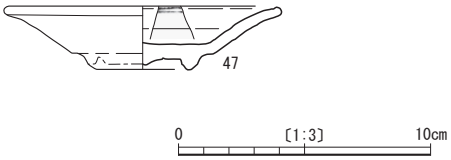
Ｃ－23区のⅡ層で検出された。南端の調査は不十分で，平面プラン全体を検出できなかった。推定する平面形は長軸約196㎝，短軸165㎝の楕円形で南端に方形の張り出しをもつ不定形なプランである。遺構内には３基のピットが検出された。２基は床面からさらに掘り込まれ

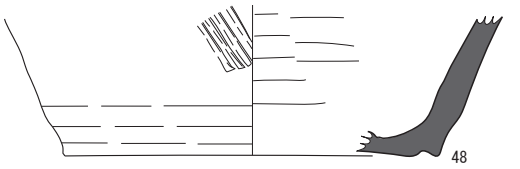
土坑５号

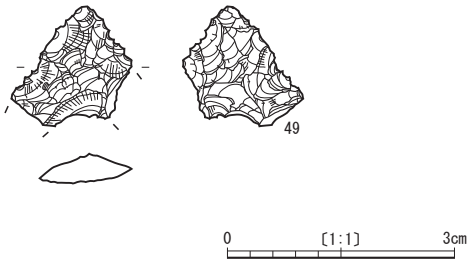


土坑５号　埋土
①黒色土　φ１cm大の灰白色パミスとφ１cm大黄褐色土のブロックを含む。
　下部には３cm大の礫も含む。
②黒色土　φ１～３cm大の黄褐色土のブロックを含む。
③黒褐色土　φ３～４cm大の灰白色パミスとφ１～２cm大の黄褐色土のブロックを含む。
④黒色土　φ１～２cm大の黄褐色土のブロックを含む。
⑤黒色土　黄褐色土(アカホヤ)を含む。

0　（１：40）　1m



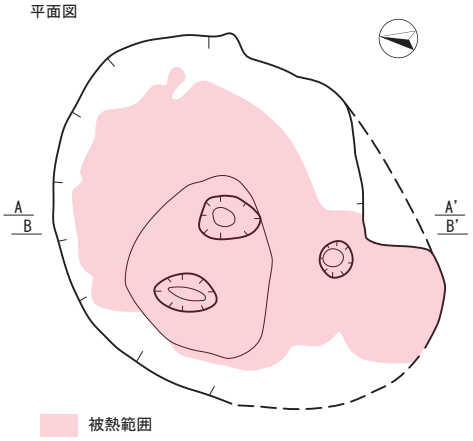


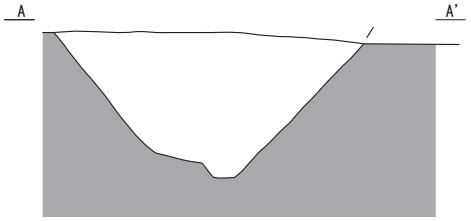


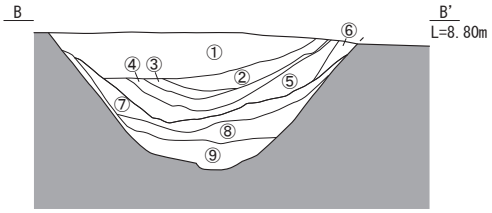
第36図　Ⅲ類土坑（３）及び出土遺物

土坑８号

平面図



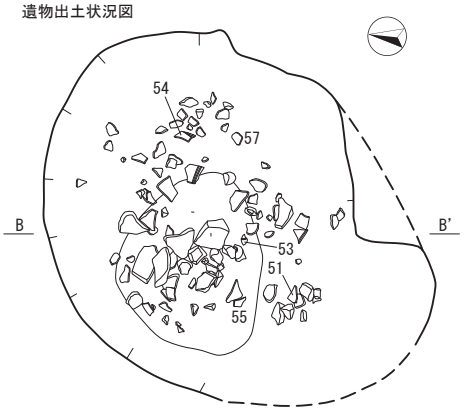


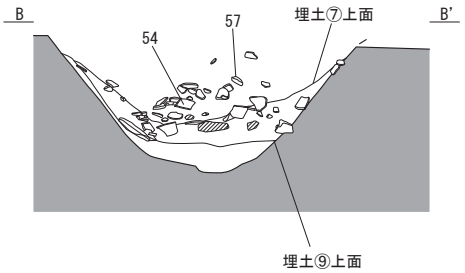


土坑８号　埋土

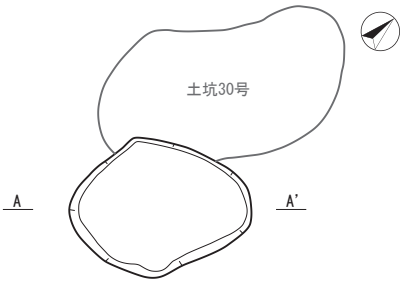
①灰褐色砂土　φ１cm大の白色軽石やφ２mm大の褐色小礫を多く含む。しまりあり。
②褐灰色砂土　灰褐色砂土が混じる。しまりあり。
③黒褐色土　φ５mm大の白色軽石や白色・黄色小礫を多く含む。しまりなし。
④褐灰色砂土　φ１mm大の白色軽石を多く含む。しまりなし。
⑤褐灰色砂土　褐色砂土が混じる。φ５mm大の白色軽石，φ１mm大の白色・黄色小礫を多く含む。しまりなし。
⑥黒褐色土　褐灰色砂土やφ５mm大の褐色粘質土がブロック状に混じる。しまりややあり。
⑦にぶい褐色粘土と褐色粘土が混じる。しまりあり。
⑧黒褐色砂土　にぶい褐色粘土が混じる。
⑨褐色粘土とにぶい褐色粘土が混じる。しまりあり。

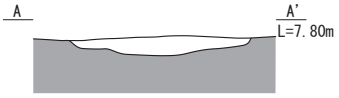
遺物出土状況図





土坑11号



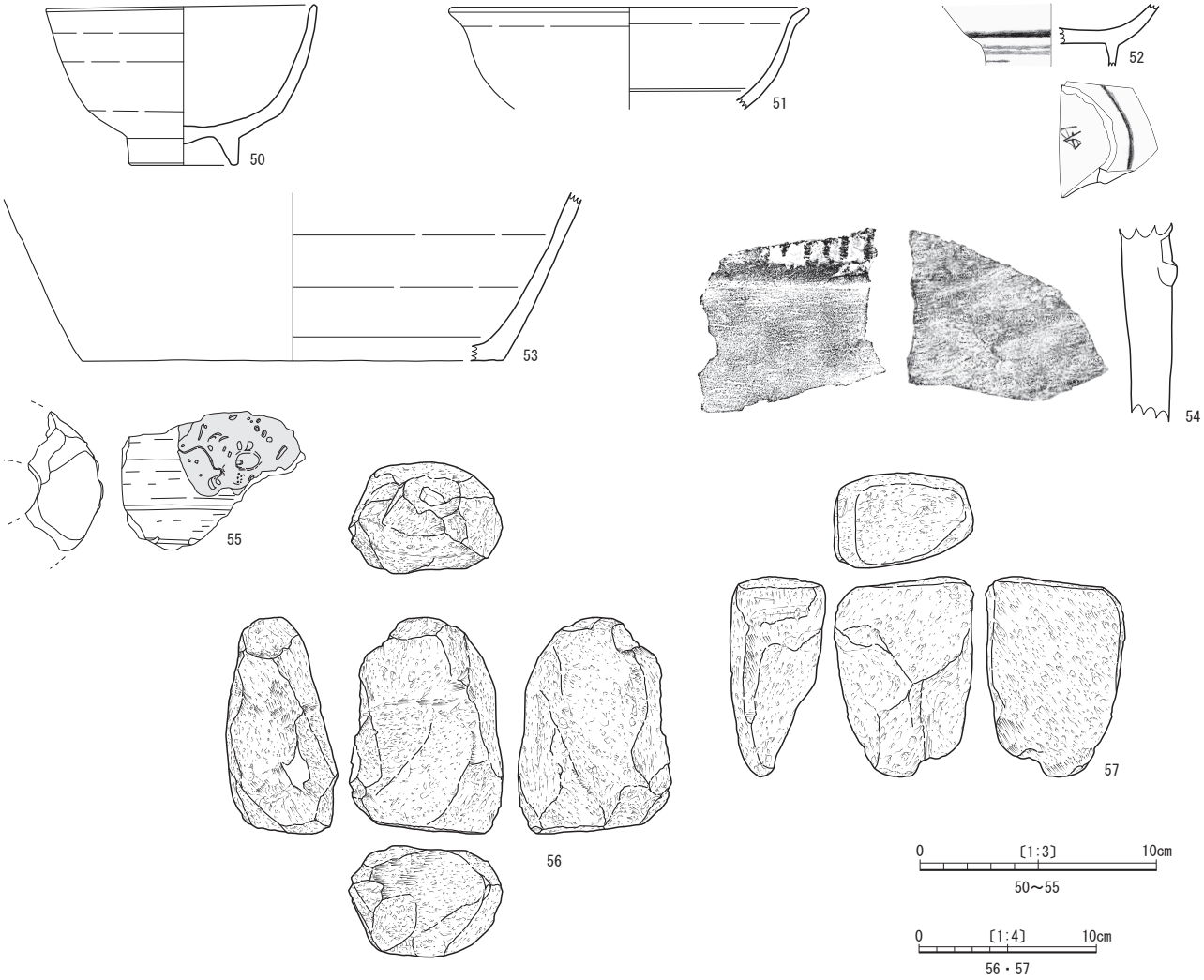


土坑11号　埋土

黒褐色土　φ１mm大の灰白色パミスを極少量含む。しまりは弱く，粘性はややある。

0　（ 1 : 40 ）　1m

第37図　Ⅲ類土坑（４）



第38図　Ⅲ類土坑出土遺物

ていた。最深部は80cmを測り，Ⅳａ層のアカホヤ二次堆積層まで掘り込まれている。調査の過程で底面に貼り付けられた粘土を外すと砂層になり，その下部にはさらに貼り付けられた粘土層が検出された。埋土中から廃棄されたと考えられる礫，鉄滓，鞴の羽口等が出土した。床面には被熱により変色した部分があること等から鉄鍛冶関連の遺構と考えられる。

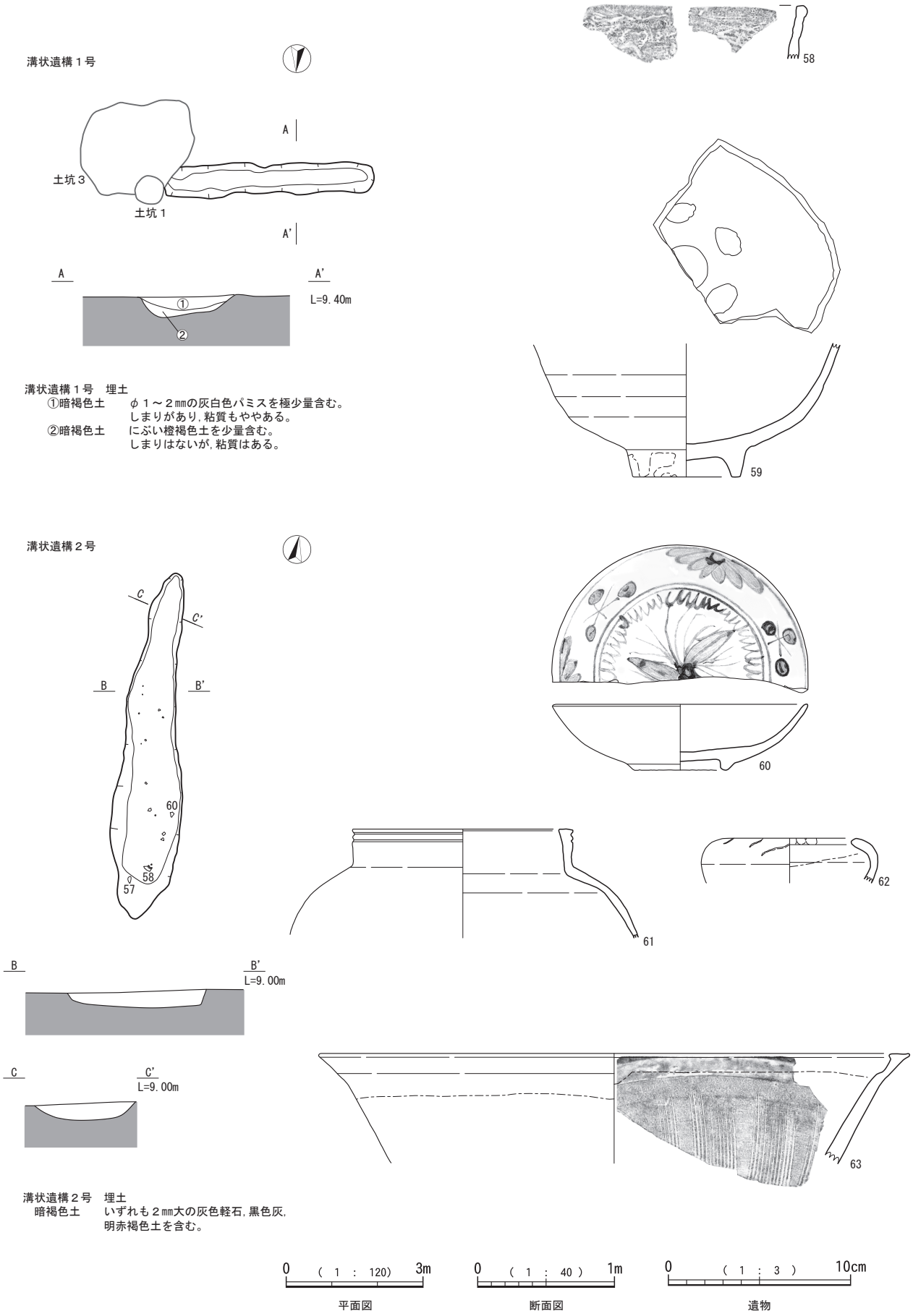
50は，肥前系の青磁碗である。色調はオリーブ黄であるが，部分的に明褐灰色や浅黄橙色となる。口径11.4cm，底径4.6cm，器高6.8cmを測る。底部から直線的に開く体部は屈曲部から口縁部へ湾曲しながら立ち上がる。見込み中央は盛り上がり，畳付と高台内は露胎する。51は，龍泉窯系の青磁碗である。復元口径15.2cmを測る。体部は湾曲しながら立ち上がり，口縁部は外反する。見込みの境には界線を巡らす。52は，磁器の染付碗である。胴部上半と畳付を欠損する。高台は器壁が薄く，高く作られる。高台外面に界線が３条，体部の高台近くに１条巡る。高台内には詳細は不明だが，文字らしきものが施される。53は，鉢の底部である。平底で体部は直線的に立ち上がる。内外面とも黒褐色の釉がかかる。復元底径は17.8cmである。底面には貝目跡が１か所残る。苗代川産の薩摩焼である。54は，瓦質土器の火鉢の胴部と考えられる。突帯が２本巡り，その間に方形状の文様を施す。55は，鞴の羽口の破損品である。内外面とも工具によるナデ調整が施される。表面は赤褐色に変色し，黒色の付着物も残る。

56・57は，軽石製の加工品である。56は各面に切り取った痕跡があり，裏面には一部磨面が観察される。57は，上面と両側面に切り取った痕跡と表裏面には部分的に磨面が残る。

土坑８号は，近世のものと考えられる。

土坑11号（第37図）

Ｃ－17区，Ⅳａ層で検出した。遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層の残存状況が悪い。長軸97cm，短軸74cm，深さ11cm　平面形は楕円形である。遺構の検出面の埋土から洪武通宝３枚が出土した。そのほか土器小片も出土した。遺構の



溝状遺構１号　埋土
①暗褐色土　φ１～２㎜の灰白色パミスを極少量含む。
しまりがあり，粘質もややある。
②暗褐色土　にぶい橙褐色土を少量含む。
しまりはないが，粘質はある。

溝状遺構２号　埋土
暗褐色土　いずれも２㎜大の灰色軽石，黒色灰，
明赤褐色土を含む。

第39図　溝状遺構１・２号及び出土遺物

埋土はⅡ層相当であり，中・近世と判断した。土坑30号を切っている。

埋土中からの出土した遺物の図化は行っていない。

６　溝状遺構（第16図）

溝状遺構は，15区から29区にかけて19条検出された。全長約90mにわたるものから５mに満たないものまで様々な長さがある。また，低地部より低湿地部に多く検出されている。排水を目的とした溝状遺構の可能性も考えられる。報告書作成段階で近代以降の溝状遺構については除外した。時期について明記していない溝状遺構は，中・近世である。溝状遺構の配置図は，第16図に示した。

溝状遺構１号（第39図58）

Ｄ－29区のⅢ層で，ほぼ東西に検出した。検出した長さ4.9m，最大幅72㎝，最大深度19㎝を測る。溝状遺構の東端は土坑１号及び３号に切られ，検出面の西端と東端の比高差はほぼない。

埋土内から遺物が７点出土し，１点を図化した。58は口縁部片で，口縁端部以外は表面が剥離していると考えられる。口縁端部は丁寧ななで調整が行われ，平坦に仕上げられた口唇部は内傾する。弥生時代の土器と考えられる。検出面等から近世の遺構と考える。

溝状遺構２号（第39図59～63）

Ｄ－25・26区のⅡ層，溝状遺構の南端が掘立柱建物跡４・５号に隣接する位置で検出された。長さ7.62m，最大幅1.52m，最大深度0.25mを測る。ほぼ南北に延びる溝状遺構で，その幅は北方向へは狭く，南方向へ広くなる形状である。

土坑内から出土した遺物のうち，59～63を図化した。59は底部から胴部が残存する肥前系の無文の磁器碗で，明緑灰色の釉薬を施す。底径は６㎝，畳付と高台外面の所々には釉薬が施されない。60は口径14㎝，底径５㎝，器高3.6㎝を測る磁器の染付皿である。灰白色の釉薬が施され，口縁部の内面と見込みに界線が巡り，草花文が配される。高台には砂目が付着する。61は，口縁部から胴部上半が残る壷と考えられる。短い口縁部は，頸部からほぼ直立する。口唇部を肥厚させ，平坦に仕上げられる。口縁外面には２条の沈線が巡る。口唇部や肩部には部分的に灰オリーブ色の自然釉がかかる。62は，灰オリーブ色を呈する磁器である。器種については香炉の可能性も考えられる。口縁部には斜位のヒビが同じように走るが，意図的なものなのかは不明である。内面は口縁部付近しか釉は施されない。63は，薩摩焼苗代川産の擂鉢である。復元口径32.4㎝を測る。口縁部上部の内面は窪みをもち，口唇部は平坦になる。口縁部の内外面には浅黄色の釉薬が施される。

近世の溝状遺構と考えられる。

溝状遺構３号（第40図）

Ｄ・Ｅ－25区，Ⅱ層で検出された。本遺構はほぼ東西に延びるが，西側は調査区外となり，その全容は不明である。検出された長さは５m，最大幅は1.5m，最大深度は0.27mであった。

埋土から須恵器片，陶磁器片が出土したが，図化し得なかった。検出面等から近世の遺構と考える。

溝状遺構４号（第41図71～80）

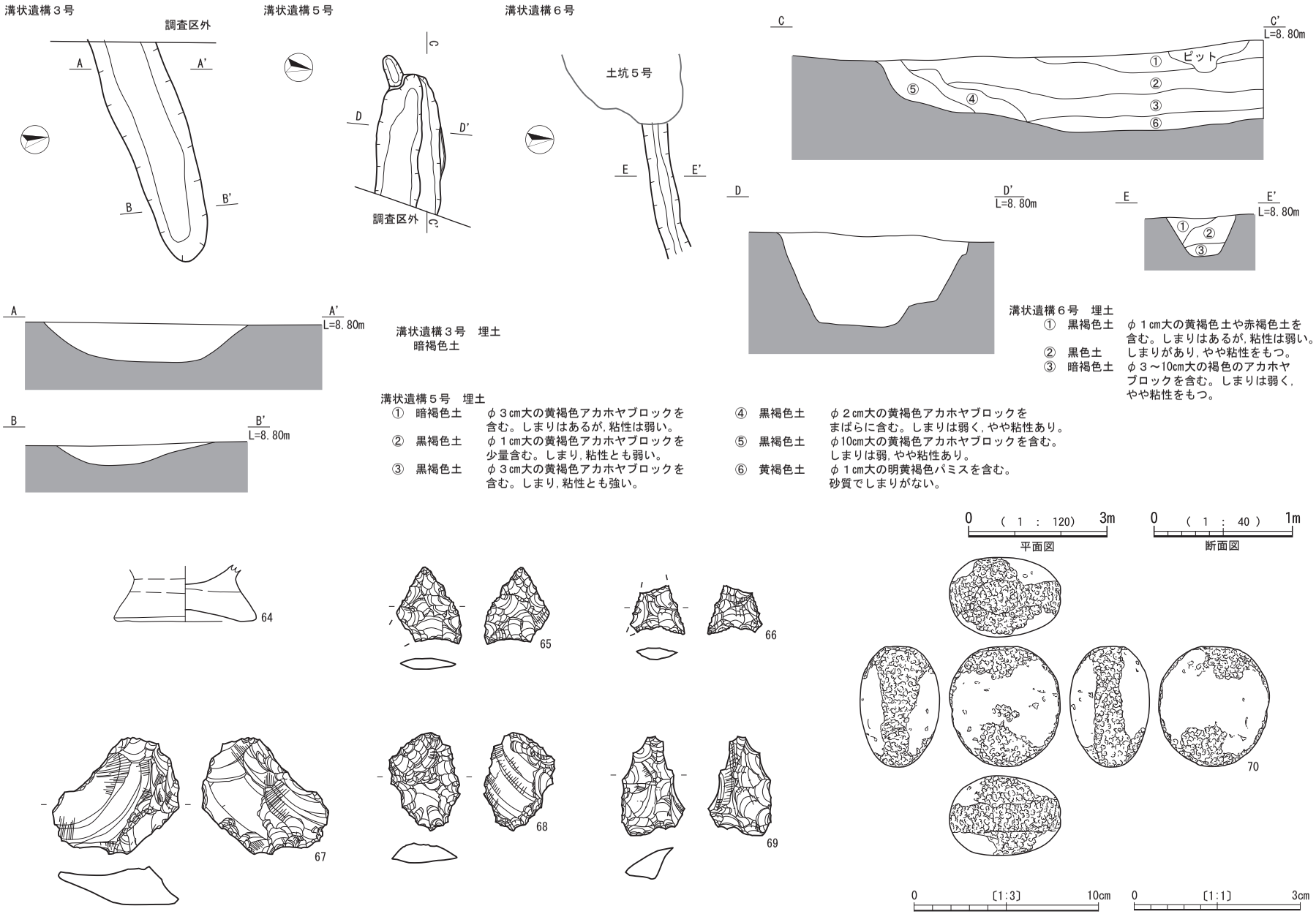
Ｃ－24区からＥ－24・25区の調査区境へ向かって調査区を横断するようにⅡ層で検出された。長さ21.1m，最大幅1.65m，最大深度0.32mを測る。Ｄ－24区から西へ約15mにわたって溝状遺構の南側が撹乱を受け，溝状遺構の幅が幾分狭くなる。また，Ｃ－24区の東端は溝状遺構７号に切られている。出土遺物等から近世の溝状遺構と考えられる。

埋土から縄文土器，土師器，磁器，陶器が出土したが，10点を図化した。71・72は，薩摩焼苗代川系の壺である。71は，胴下部の把手は欠損する。復元底径は12.5㎝で，底面に貝目跡が残る。茶道具の可能性も考えられる。72は壺の胴部から底部で，復元底径16.0㎝である。底面に貝目跡が残る。73は無文の青磁碗で，口縁端部が外反し，外面の一部に釉のかからない部分がある。龍泉窯産と考えられる。74は青花碗で，復元口径は14.6㎝を測る。外面は成形が粗いため凹みが残る。縁部外面には唐草文，体部外面には芭蕉葉文を配する。75・76は瓦質の擂鉢で，いずれも６条のすり目を施す。75は，片口である。77は深鉢の口縁部で，内湾する。内傾した口唇部は面取りを行う。口縁部外面には，斜位もしくは横位に連続した刺突で文様を構成する。内外面ともナデ調整を施す。縄文時代後期に比定できる。78は外傾する深鉢の口縁部で，断面は三角形に肥厚する。肥厚帯には貝殻刺突を斜位に，屈曲部直上には横位に施す。内面には器面調整のための条痕が残る。79は深鉢で，断面三角形の口縁部は肥厚する。口唇部に沿って刺突を巡らせ，その下方には斜位の貝殻刺突を施す。内外面とも器面調整の条痕が残る。78・79とも市来式土器である。80は，明瞭な網代痕のある深鉢の底部である。底径8.8㎝を測る。底部接地面は外に張り出す。縄文時代後期に比定できる。

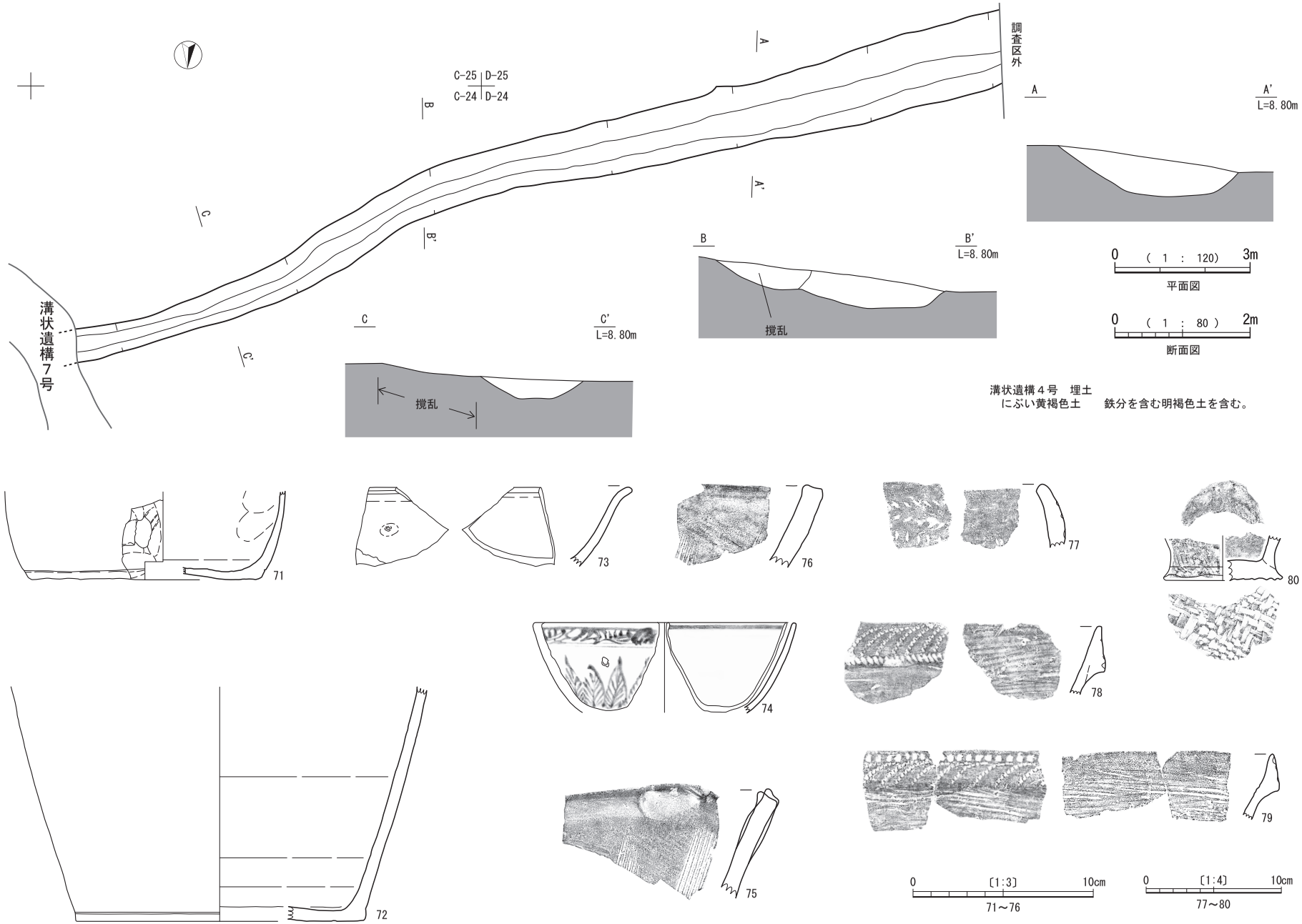
溝状遺構５号（第40図64～70）

Ｂ・Ｃ－24区の溝状遺構６号や土坑５号と隣接した位置にある。Ｂ－24区の調査区境で検出し，長さ約3.4m，最大幅1.5m，最大深度0.67mであった。検出面はⅢ層であるが，本来はⅡ層から掘り込んだ遺構である。西端に張り出した部分があるが，この溝状遺構と一体のものと判断した。調査時には土坑としていたが，さらに調査区外に延びると考えられることや形状が他の溝状遺構に類似することから，溝状遺構と判断した。

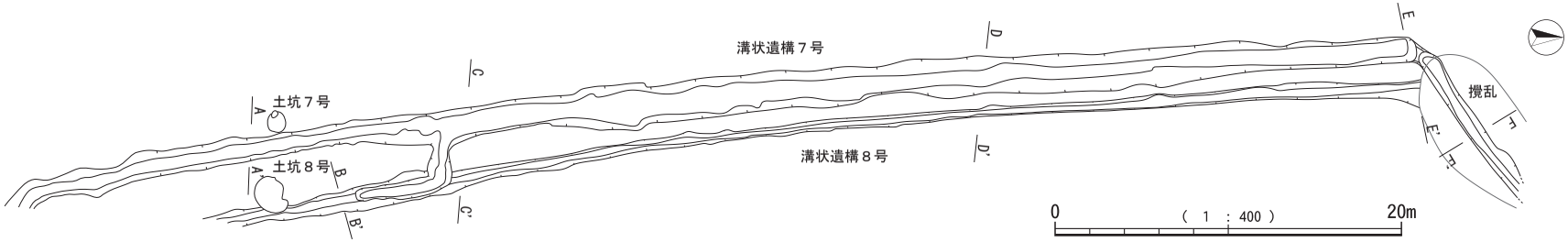
埋土中からは縄文土器，弥生土器，土師器，青磁等の破片及び黒曜石の剥片が確認された。64は，甕の底部である。上げ底で，外面や底面は丁寧なナデが施される。内面には

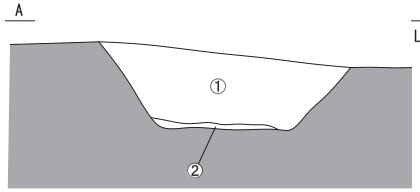


第40図　溝状遺構３・５・６号及び出土遺物

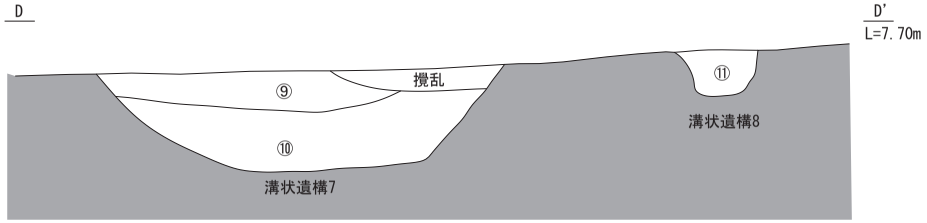


第41図　溝状遺構４号及び出土遺物

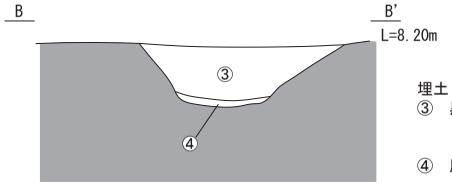




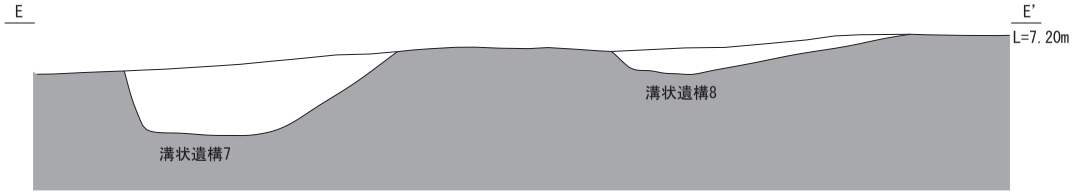
埋土
① 黒色土
暗赤褐色の鉄分粒子を全体的に含む。しまりは弱いが，粘性はある。Ⅱｂ層に相当する。
② 黒褐色土
アカホヤを少量含む。しまり，粘性ともある。

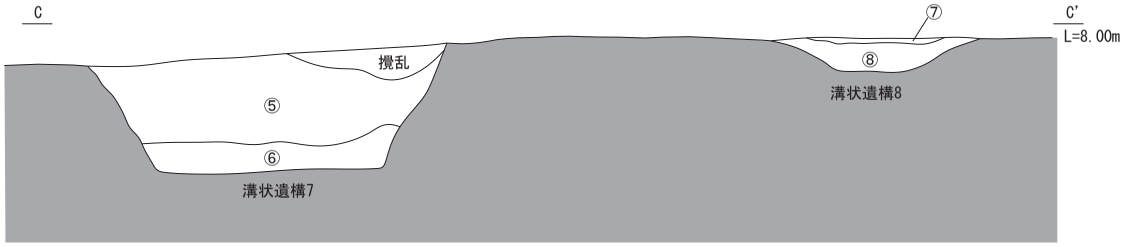


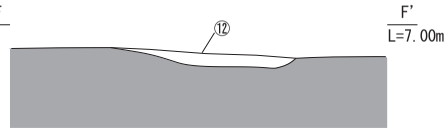
埋土
⑨ 極暗褐色土　Ⅱｂ層に近いが，赤褐色の鉄成分をほとんど含まない。しまりは弱いが，粘性はある。
⑩ 黒褐色土　しまりがあり，粘性も強い。
⑪ 黒褐色土　Ⅱｂ層に相当するが，黒味が強い。赤褐色の鉄成分を全体的に含む。しまり，粘性とも強い。



埋土
③ 黒色土
Ⅱｂ層に相当する。しまり，粘性ともある。
④ 灰黄褐色砂質土
アカホヤが混じる。しまりはあるが，粘性はない。







埋土
⑫ 黒褐色土　しまりは弱いが，粘性は強い。

0 (1 : 40) 1m

埋土
⑤ 黒色土　しまりはややあり，粘性もある。
⑥ 黒色土　φ５～10mm大の明黄褐色パミスを極少量含む。
⑦ 暗褐色砂質土　しまりはあるが，粘性はない。
⑧ 黒褐色土　しまりはないが，粘性はややある。

第42図　溝状遺構７・８号

ケズリの痕跡が残る。弥生時代後期に比定される。65は腰岳産黒曜石製の石鏃で，左脚を欠損する。素材は薄い剥片ではあるが，深い押圧剥離と微細な調整でやや外湾する側縁を形成する。66は小型で薄い腰岳産黒曜石製の石鏃で，先端部が欠損する。67は，厚みのある不定形剥片の縁辺に３か所剥離加工が観察される。石鏃未製品の可能性も考えられる。石材は，腰岳産の黒曜石である。68は，小形の縦長剥片の基部周辺と下縁部に細かい剥離加工が入る。石鏃もしくは異形石器の未製品と考えられる。石材は，腰岳産黒曜石である。69は，左側縁のみやや深い剥離が入る。製作途中の未成品と考えられる。石材は，腰岳産黒曜石である。70は，敲石である。上下端部及び側縁部全体に使用痕が残り，使い込まれている。

溝状遺構６号（第40図）

Ｂ・Ｃ－24区，Ⅳａ層で検出されたが，Ⅱ層からの掘り込みと考えられる。同じ方向を向く溝状遺構４号と５号に挟まれ，西端は土坑５号に切られ，東側は溝状遺構７号により切られていると考えられるが，撹乱等のため詳細は不明である。長さ３ｍ，最大幅58cm，深さ30cmを測る。遺構の時期は，近世と考えられる。

遺構内からの遺物出土はなかった。

溝状遺構７号（第42・43～47図81～156）

Ｂ－24区からＣ－16区にかけてのⅣａ層面で，ほぼ北方向へ直線的に延び，Ｂ－16区で北東方向へ向きを変え，Ｂ－16区とＢ－15区境付近まで延びる溝状遺構である。南端はＣ－24区とＢ－24区の境付近で南東方向へ向きを変える。延長約92ｍ，最大幅3.5ｍ，深さ0.5ｍであった。本遺構は様々な撹乱等で上部が削平を受け，幅が一定しないが，検出した中で最大規模のものである。Ｂ－24区でも本遺構の上部には撹乱が入り，詳細に確認はできなかったが，溝状遺構４号と６号を切っていると考えられる。Ｃ－22区では溝状遺構が枝状に伸び，溝状遺構８号と重なる。床面はＣ－23区付近からＣ－17区付近に向かって約１ｍ下る。Ｄ－16区で北東方向に向きを変えると同時に床面が30cm程度高くなり，Ｂ－15区まではほぼ同じレベルである。埋土がⅡ層に相当することや出土遺物，溝状遺構４号との関係から近世の遺構と判断した。

遺構内から多くの遺物が出土したが，69点を実測し掲載した。81は土師碗の底部で，底径7.4cmを測る。高台の内面中央が幾分膨らむ。内面と高台にススが付着する。82は内黒土師器の坏で，高台を欠く底部である。83～87は，土師皿である。83は，口径13.2cm，底径8.2cm，器高2.9cmを測る。底部から口縁部には，直線的に開く器形である。底部には糸切り痕とヘラ切り痕の両方が残る。84は，口径12.8cm，底径9.8cm，器高2.6cmを測る。口縁端部は，幾分外反する器形である。底部の切り離しは，糸切りである。85は底径8.4cmを測り，内面はヘラケズリによる凹凸が残る。底部切り離しは糸切りによる。86は底径11.0cmで，内面中央部は凹んで器壁がかなり薄くなる。底部には糸切り痕が見られる。87は，底面中央部が肥厚する。底部切り離しは糸切りである。

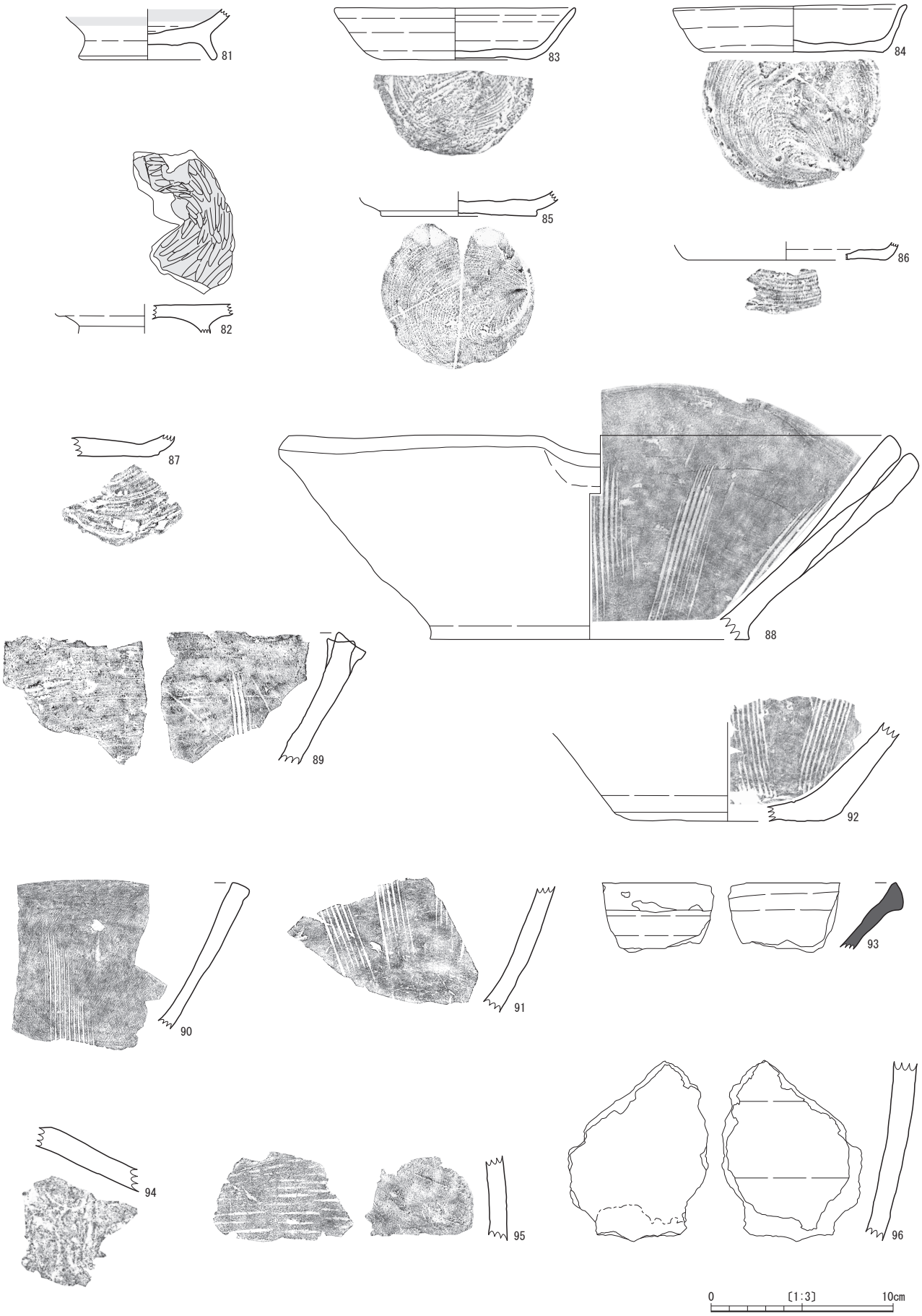
88～92は，擂鉢である。88は片口の擂鉢で，土師質の胎土をもち，内面は橙色，外面は褐灰色の色調を呈する。口径34.2cm，底径17.6cm，器高10.2cmである。89は口唇部に自然釉がかかり，瓦質で放射状に３条のすり目をもつ。破片端部が幾分湾曲することから，注ぎ口をもつと考えられる。90は，11条のすり目をもつ。91と92は，いずれも放射状のすり目をもつ。93は須恵器の捏鉢で，玉縁状の口縁には釉薬がかかる。

94～97は，陶器片である。94は常滑産の甕の肩部で，自然釉がかかる。95は，古瀬戸産と考えられる壺の胴部片である。96は中国産の胴部片で，器種については不明である。97は古瀬戸産で，瓶の胴部と考えられる。

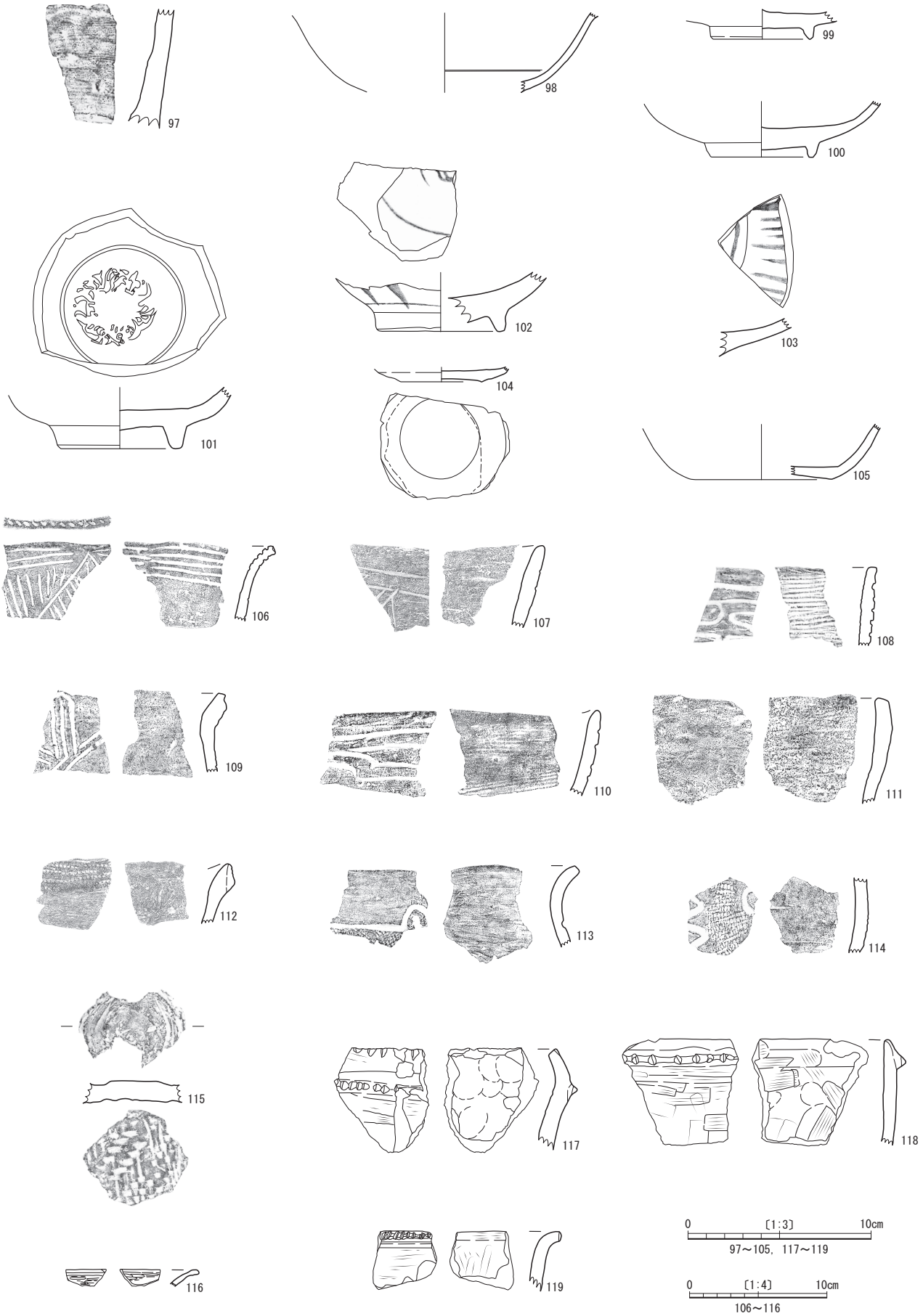
98～104は，青磁である。98は無文の碗で，口縁部は欠損するがやや外反すると考えられる。見込みに界線が巡る。14世紀頃の中国産と考えられる。99は碗の底部で，底径は5.2cmを測る。高台の外端は面取される角高台で，内面は露胎する。見込みの中央が盛り上がる。釉薬の色調は灰黄色，胎土はにぶい橙色を呈する。14世紀頃の中国産と考えられる。100は，底部から胴部が残存する無文の碗である。高台の外端には面取を施す角高台で，内面の一部は露胎する。龍泉窯産と考えられる。101は，見込みに圏線と草花文様の印文を施す碗の底部である。底径は6.6cmを測る。高台内面の一部は露胎する。龍泉窯産と考えられる。102は碗の底部で，底径は7.0cmである。外面には圏線と蓮弁文，見込みには界線と草花文が施される。高台内は露胎する。龍泉窯産と考えられる。103は，盤の胴部片である。釉薬は一定の厚さで均等にかかる。龍泉窯産と考えられる。104は，同安窯系の皿の底部である。底径は4.4cmを測る。体部中位で屈曲する器形である。また，体部下位から底部にかけては露胎する。釉は薄く透明で光沢をもつ。

105は，白磁の皿である。平底で胴部まで残存し，底径7.7cmを測る。中国産と考えられる。

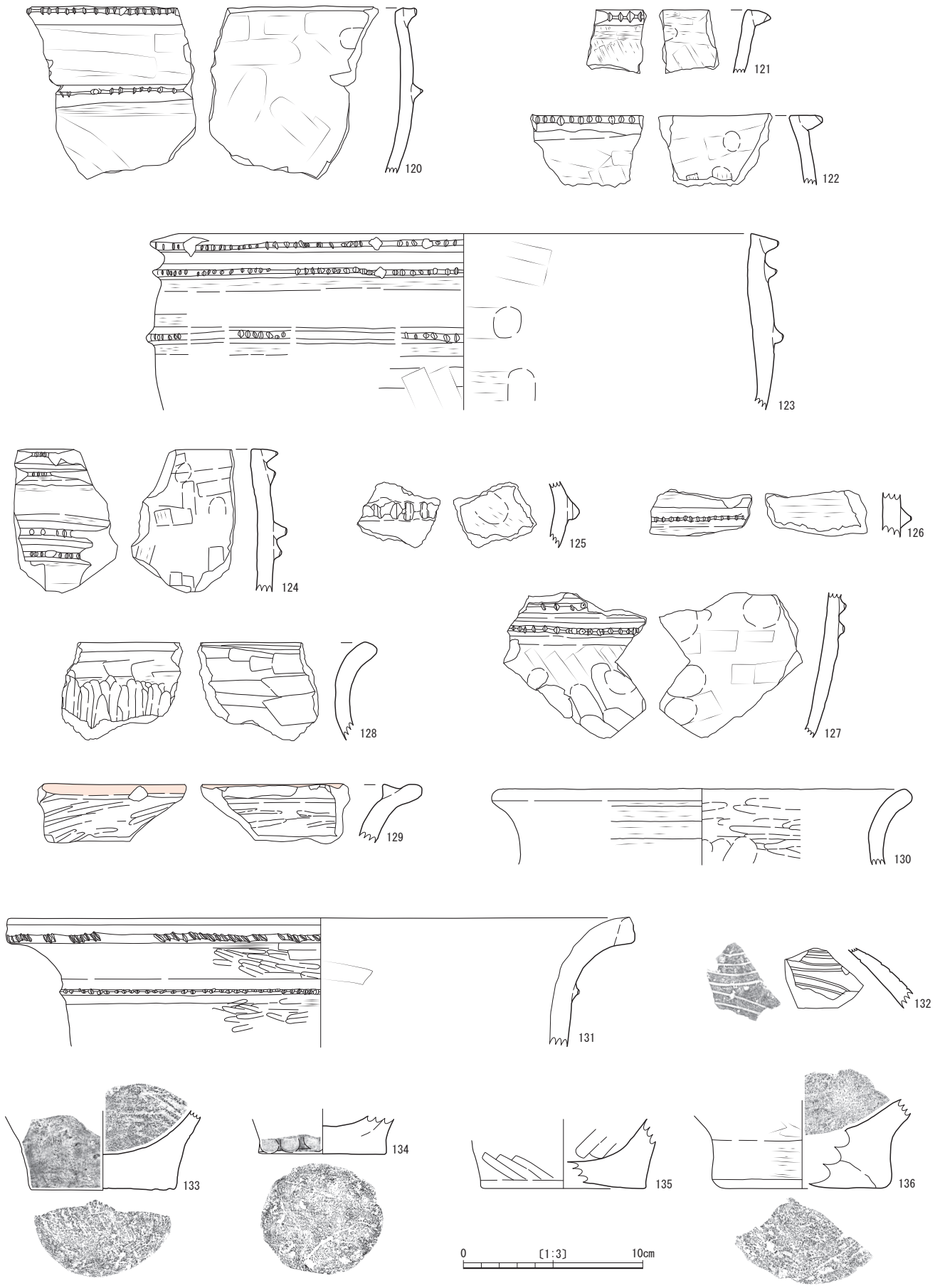
106～116は，縄文土器である。106は，沈線で幾何学紋様を施す曽畑式土器の口縁部である。口縁部内面にも横位の沈線，口唇部にも刺突が施される。107～111は，指宿式土器である。107と110は，波状口縁となる。108の内面には条痕が明瞭に施される。109は口縁部が幾分肥厚し，外反する。111は無文で，幾分内湾する器形である。112は，肥厚した口縁部に横位の貝殻刺突を施す市来式土器である。113・114は，磨消縄文と沈線で文様を構成する土器である。113の口縁部は外反し，口縁部は平坦に仕上げる。器面調整は丁寧で，焼成は良好である。115は，網代痕が残る底部である。116は，玉縁状に口縁端部が肥厚する縄文時代晩期の浅鉢である。全面に



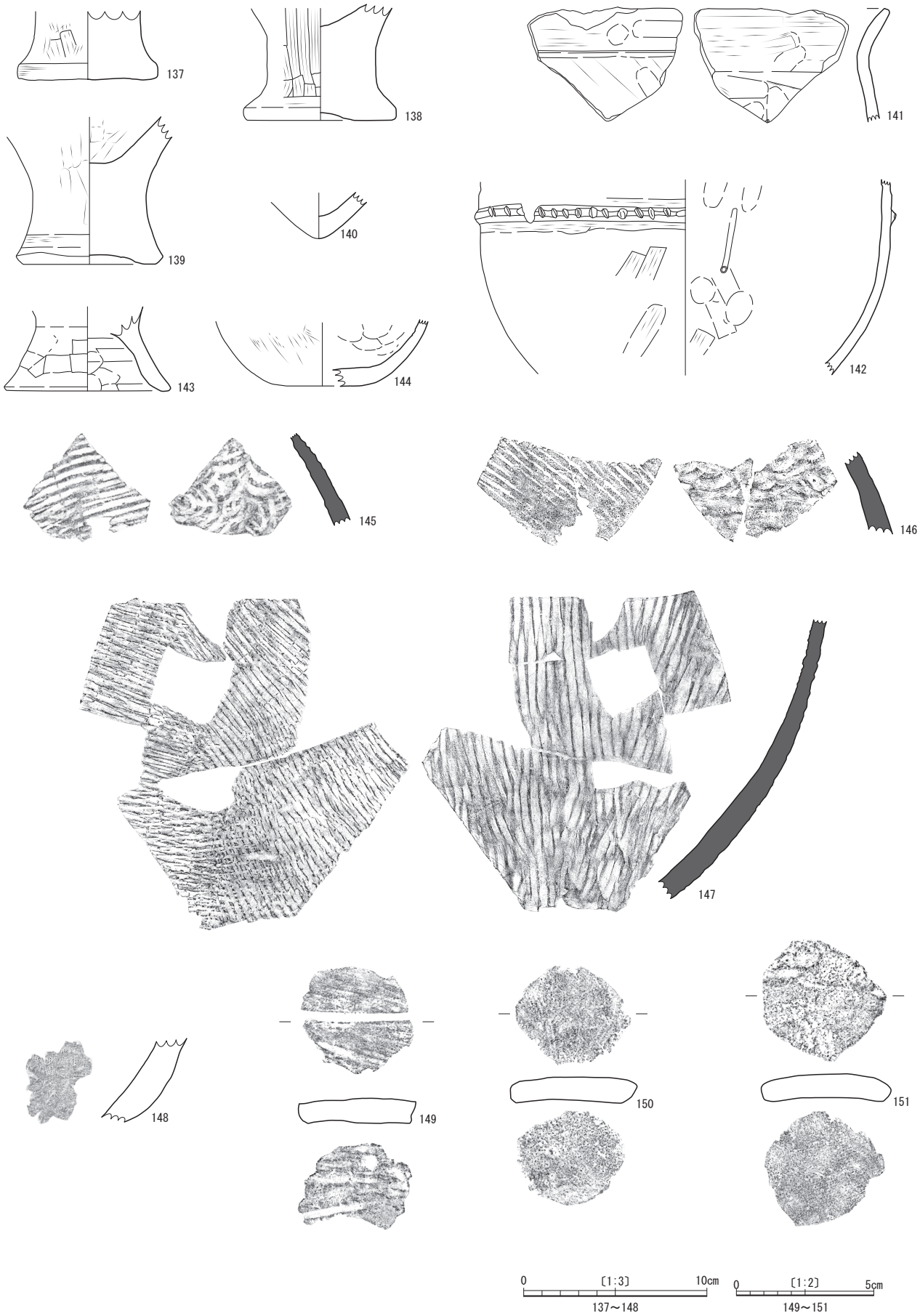
第43図　溝状遺構７号出土遺物（１）



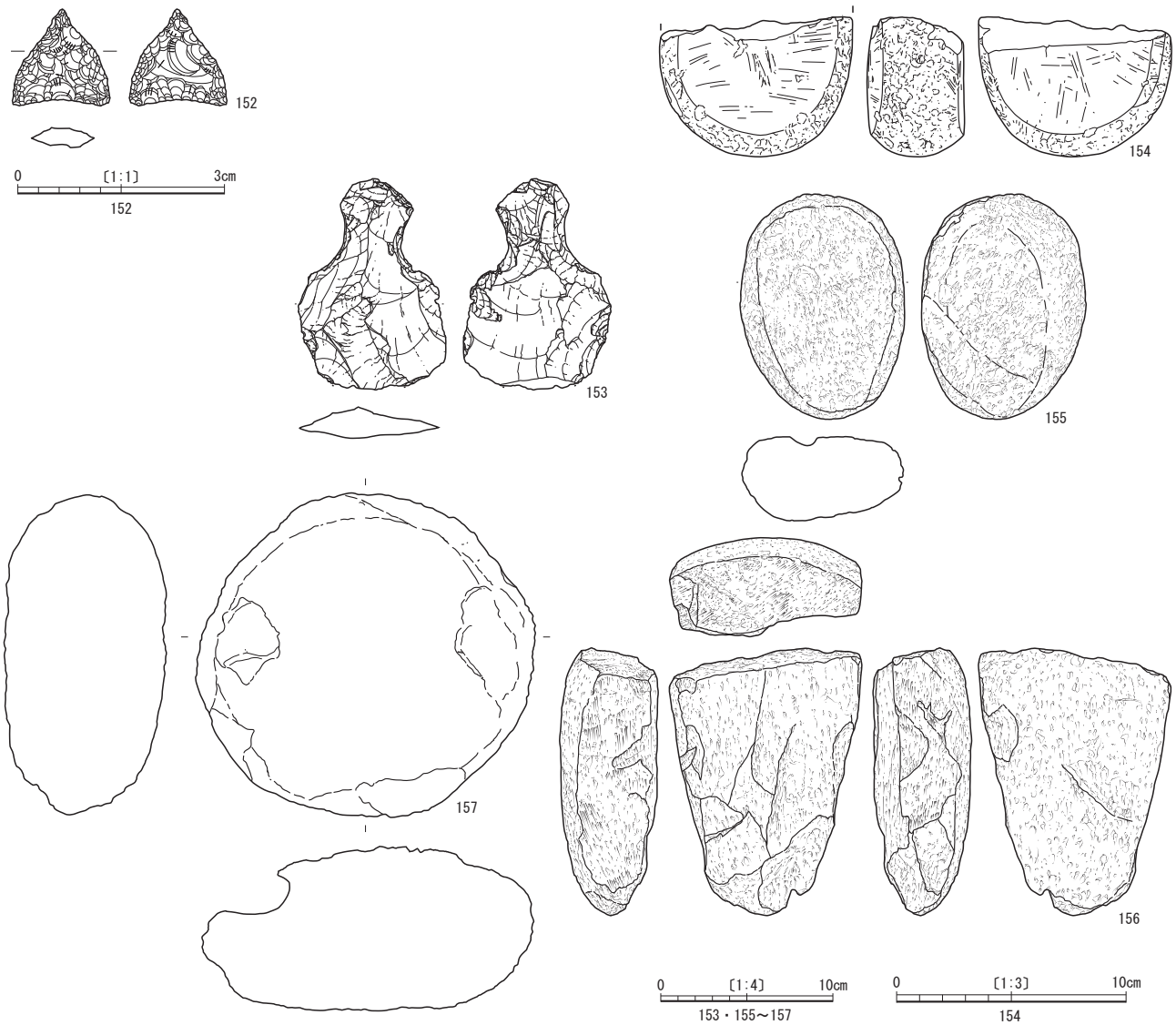
第44図　溝状遺構７号出土遺物（２）



第45図　溝状遺構７号出土遺物（３）



第46図　溝状遺構７号出土遺物（４）



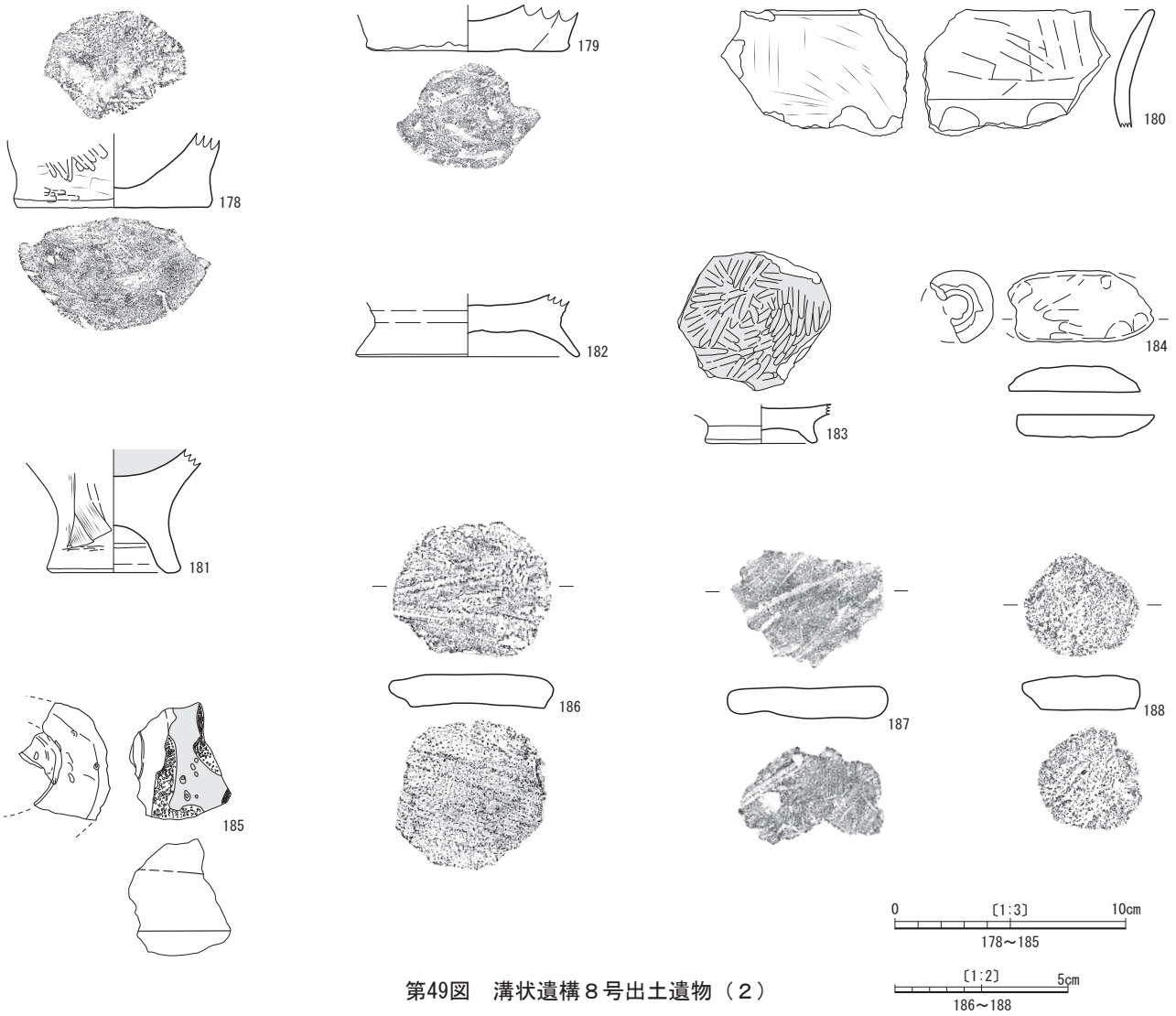
第47図　溝状遺構７号出土遺物（５）

亘ってミガキが施される。

117～140は，弥生土器である。117～127は甕，128～132は壺である。117は，内湾する器形をもつ口縁部である。面取りされた口唇外端と屈曲部に貼り付けられた突帯に刻みが施される。118は直線的に立ち上がる口縁外端に断面三角形の突帯を貼り付け，間隔の空いた刻みを施す。内外面とも器面調整は丁寧である。119は口縁端部が外反し，口唇部に刻みを施す。120はやや内湾する口縁部の外端と胴部に断面三角形の突帯を貼り付け，細かい刻みを施すものである。121・122は口縁部外端に断面三角形の突帯を貼り付け，刻みを施す。123は直線的に立ち上がる口縁部の上端と直下，さらに間隔をおいた下位に突帯を３条貼り付け，それぞれの突帯に刻みを施す。口径は35㎝を測る。124は幾分内湾気味の口縁部外端に２条，間隔を空けた下位に２条の刻み目突帯が巡る。125～127は，いずれも胴部片で刻みのある突帯をもつ。125は，５㎜程度の棒状工具を押し当てて刻みを施す。126は１条，127は２条の突帯に細かな刻みを施す。128～131は，外反する壺の口縁部である。129は内面に三角突帯をもち，口唇部から三角突帯まで朱が塗布される。焼成は堅固である。130は，口径22.4㎝を測る。131は幅広い口唇部の中央に横位の凹線を巡らせ，その上下に刻みを施す。上部の刻みは表面の剥落のため，僅かに痕跡が確認できる。また，口縁部の屈曲部よりやや下方に細い突帯を１条巡らせるが，表面の摩耗で刻みの有無は不明である。口径は34.6㎝である。132は肩部片で，沈線で弧状の文様が施される。

133～139は甕，140は壺の底部である。133～136は平底で，底部は高さのない円柱状となるもので，弥生時代前期と考えられる。137～139は平底で，底部は接地面が

第48図　溝状遺構８号出土遺物（１）



第49図　溝状遺構８号出土遺物（２）

張り出し，高さのある円柱状となる。138・139は，底面中央が凹む。弥生時代中期に比定できる。140は尖底気味の丸底で，小型の壺と考えられる。

141～144は，古墳時代の土器である。141は頸部で締まり，口縁部が外反する。142は胴部に１条の刻目突帯を巡らす。143は甕の脚で，底径は９㎝である。144は，平底気味の丸底である。

145～147は，古代の須恵器である。145・146の外面には平行タタキが，147の外面には格子目タタキが施され，中岳産と考えられる。

148は焼塩壺の底部で，内面には布目痕が残る。

149～151は，土器の胴部片の縁辺部を加工した円盤形土製品である。151の下面には，赤色顔料の痕跡が残る。

152は，黒曜石を素材とした小型の石鏃である。基部の抉りは浅く，ほぼ正三角形の形状を呈する。153は打製石斧で，やや基部が大きく，バランスの悪いラケット形を呈する。下端部は欠損するが，顕著な使用痕は見られない。石材は，ホルンフェルスである。154は磨敲石で，ほぼ半分欠損する。磨面はかなり平坦である。裏面の磨面右端には角度の異なる狭い磨面も見られる。側縁部には敲打痕も残る。155・156は，加工痕がある軽石製品である。155は表裏面に磨面をもち，表面には径1.7㎜，深さ５㎜程度の穴が穿たれる。156は，裏面以外の面に大振りの刃物状のもので大きく切り込まれている。157は暗淡紅色を呈する輝石安山岩を饅頭状に整形し，裏面は平坦面を形成する。用途は不明である。

溝状遺構８号（第42図・第48・49図158～188）

Ｄ－16区からＢ－23区にかけてのⅣａ層で，溝状遺構７号の東側を沿うように検出された。長さ約70m，最大幅１m，深さは0.2～0.4mと溝状遺構７号より規模が小さい。北端は撹乱のため途切れ，南端は調査区外へ延びる。床面は溝状遺構７号より30～50㎝高くなるが，同じように北側に向かって50～60㎝低くなる。埋土や出土遺物から近世と考えられる。

遺構内から出土した遺物の中で，31点を実測・掲載する。158～160は近世の遺物で，肥前系と考えられる。158は磁器碗で，口径11.4㎝，底径4.3㎝，器高6.5㎝を測る。口縁端部がやや外反し，畳付に砂粒が付着する。外面には草花文が施される。159は磁器碗で，外面には唐草文と考えられる文様が，内面には口縁部と見込みに界線が施される。160は陶器皿で，底径4.8㎝を測る。見込みに砂目が４か所残る。

161～167は，中世の遺物である。161は口縁部を欠損する土師器の皿で，底径6.8㎝を測る。成形は粗く，外面には一部ススが付着し，底部の切り離しは糸切りである。162は底部を欠損する青磁碗で，口径15.8㎝を測る。口縁部が外反する器形で，無文である。163は，青磁碗の口縁部である。外面には鎬蓮弁文が施される。162・163は，龍泉窯産と考えられる。164は青磁碗で，厚みのある器壁をもつ。外面には，蓮弁文が施される。165は青花碗の底部で，底径5.6㎝を測る。外面には芭蕉文，見込みには圏線と蓮花文が施される。166・167は擂鉢で，いずれもすり目が放射状に入る。

168～172は，縄文土器である。168は，波状を呈する口縁部片である。凹線を放射状に施文する。表面がかなりざらついており，二次焼成の可能性もある。169は，口縁端部に向かって器壁が薄くなる。外面には短沈線を連続して施す。168・169は，出水式土器と考えられる。170・171は器面調整の条痕が残り，外面には幅広い沈線で文様を構成する。いずれも指宿式土器である。172は直線的に開く口縁部で，その端部で幾分内湾する。口縁部には横位の浅い沈線が施され，内面は浅い沈線により，段差が作られる。内外面ともヘラミガキが施される。西平式土器と考えられる。

173～179は，弥生土器である。173は，甕の口縁部である。口縁端部に貼り付けられた痕跡を残す断面三角形の突帯には，細かい刻みを施す。174は，甕の口縁部である。口縁端部に貼り付けた断面三角形の突帯上面は外側へ傾斜し，その頂点は「M」字状となる。175は壺の口縁部で，口縁端部は丸く仕上げられるが，浅い沈線を施し，「M」字状となる。176は，玉縁状の口縁をもつ壺である。177は壺の肩部で，沈線を２条巡らせる。外面はミガキによる器面調整である。178は底径8.4㎝を測り，底面には白色土が付着している。甕の底部と考えられる。179は底径は8.8㎝を測り，外面はナデで丁寧に器面調整が施される。底面には付着した白色土が観察できる。甕の底部と考えられる。

180・181は，古墳時代の成川式土器である。180は甕の口縁部で，器壁が薄く仕上げられている。181は甕の脚部で，底径5.8㎝を測る。

182・183は古代の土師器で，いずれも底部である。182は，底径9.6㎝の碗である。183は底径4.8㎝の内黒土師器で，底面も一部黒色化している。184は長さ5.9㎝，径3.1㎝の土錘，185は鞴の羽口片である。

186～188は円盤形土製品で，いずれも胴部片を利用している。

溝状遺構９号（第50図）

Ｃ－21区，Ⅲ層上面で検出された。残存する長さ1.75ｍ，幅0.58ｍを測る。この付近では撹乱のため，深さ５㎝と残存状況が悪く，遺構の下部しか検出できなかった。溝状遺構はさらに南側へ延びると考えられるが，Ｃ－22区では検出できなかった。埋土中から遺物は確認できなかったが，埋土から中・近世の遺構と考えられる。

溝状遺構10号（第50図189・190）

Ｂ・Ｃ－19区，Ⅳａ層上面で検出された。検出された長さ３ｍ，最大幅0.57ｍ，深さ0.18ｍを測る。この付近は表層を取り除くとⅢ層となり，遺構の上部層は削平されていた。埋土中から弥生土器等も出土したが，埋土から中・近世の遺構と考えられる。

埋土中から40点ほどの土器小片が出土した。189は，磨敲石である。表裏面に凹みが残る。190は５㎝程度の敲石で，敲打痕が側辺に残る。

溝状遺構11号（第50図191・192）

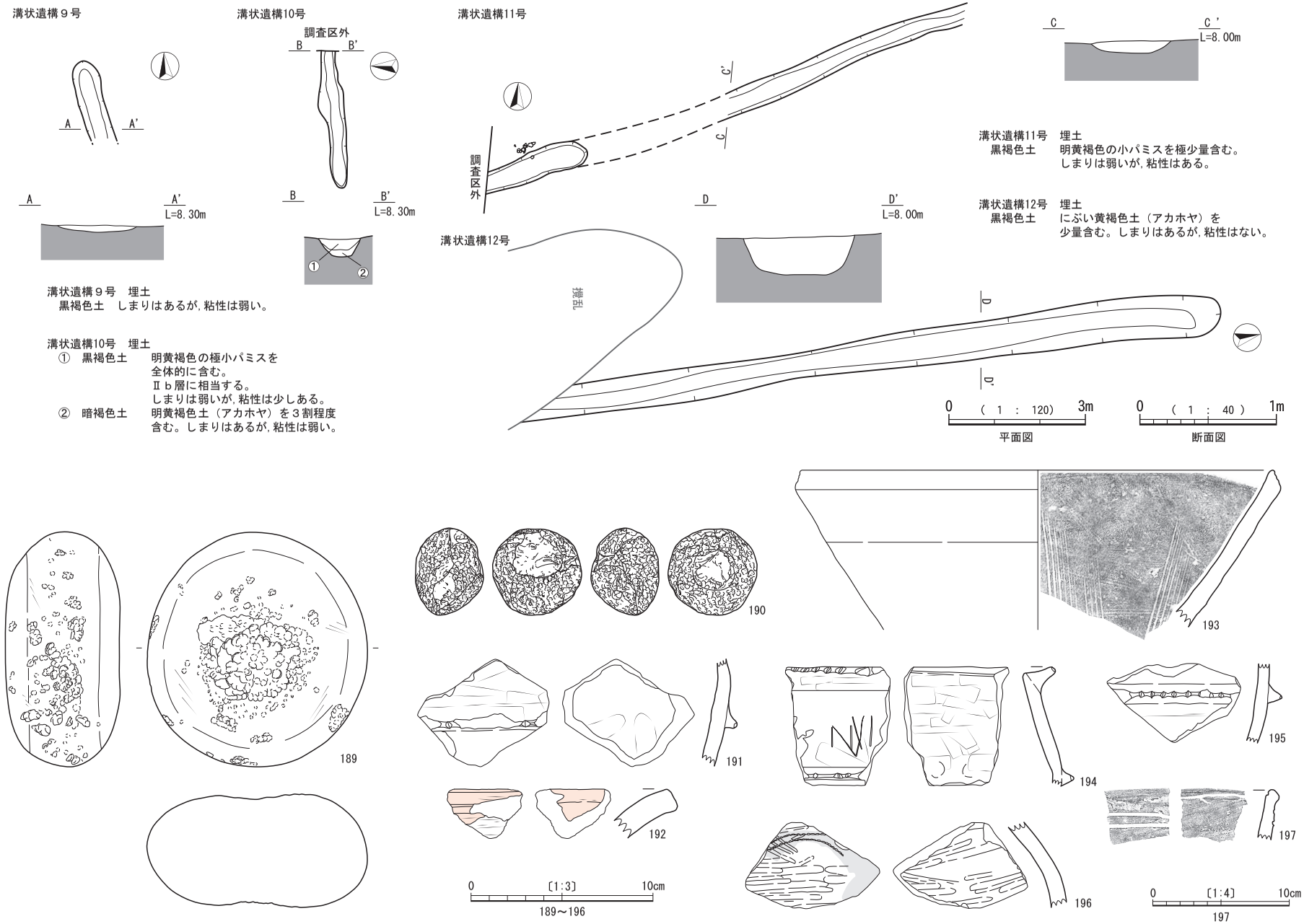
Ｄ・Ｅ－19区，Ⅲ層上面で検出された。Ｅ－19区の調査区境から東へ約２ｍ延びる溝状遺構とＤ－19区を東西に約６ｍ延びる溝状遺構が検出されたが，その規模と埋土の堆積状況から本来は繋がっていた遺構と判断した。検出面での最大幅が0.6ｍ，深さはＥ－19区で６㎝，Ｄ－19区で10㎝程度でいずれも浅いが，本体はⅡ層中から掘り込まれていたことを調査区境の土層断面で確認した。埋土から遺構の時期は，中・近世と考えられる。

埋土中からは主に弥生土器の小片が出土した。191は甕の胴部片で，細やかな刻目を施す突帯が巡る。192は壺の口縁部で，口唇部から内面にかけて赤色顔料が塗られている。

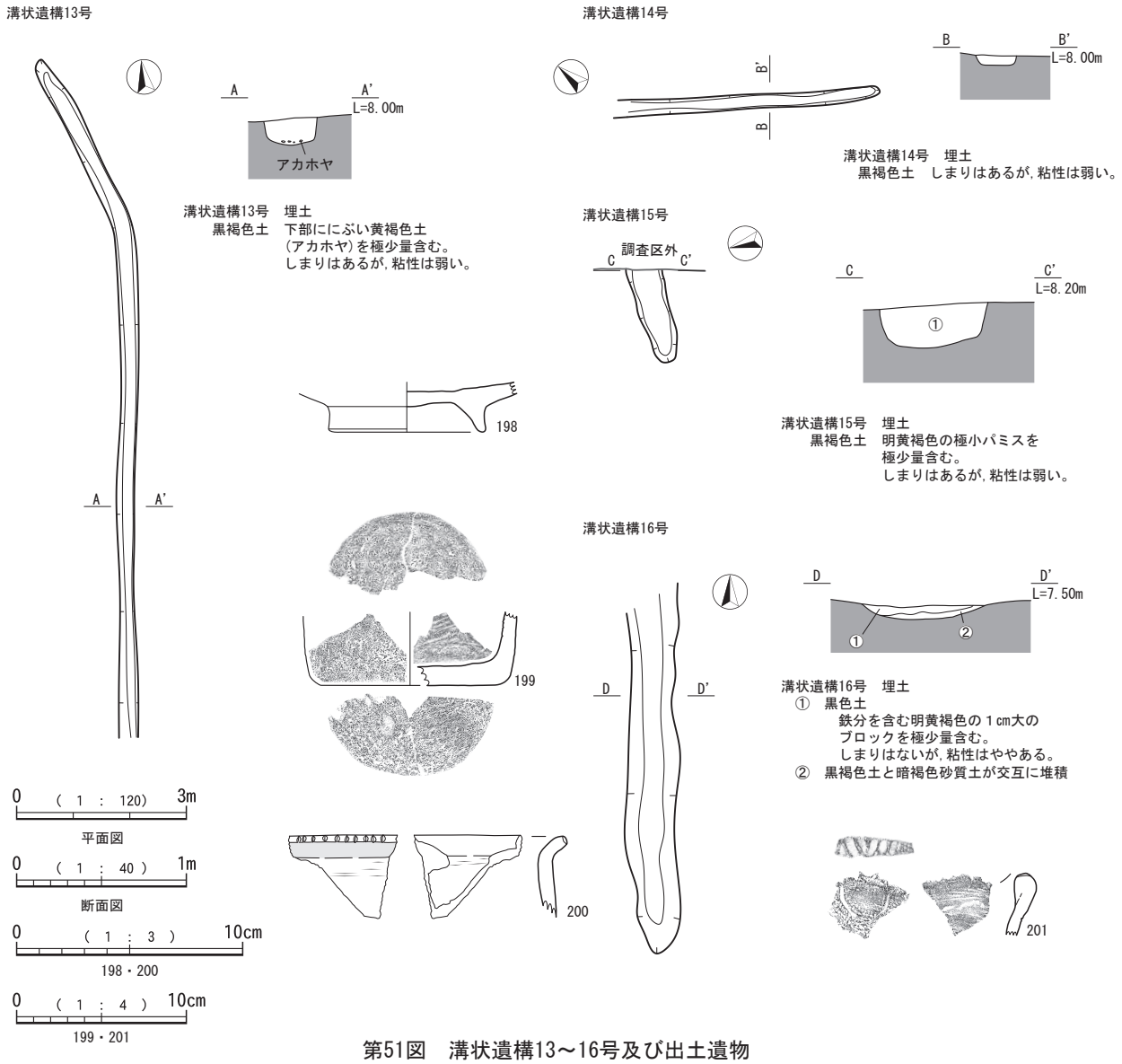
溝状遺構12号（第50図193～197）

Ｃ－17～19区，Ⅳａ層上面で長さ14.6ｍ，最大幅１ｍ，深さ0.28ｍ，ほぼ南北に延びる溝状遺構を検出した。南端は近現代の撹乱のため不明であった。出土遺物及び埋土から中世に比定できる遺構と考えられる。

193は，中世に属する瓦質の擂鉢である。口唇部には浅い沈線が３条，内面には11条のすり目が放射状に施される。194は，内傾する口縁部の上端と下端に米粒大の刻みを施す突帯が巡る。外面には意図的か否かは不明だが，「Ｎ」か「Ｗ」に類似する線刻が観察できる。弥生時代前期に比定できる。195は，胴部片であるが，表面が摩耗している。196は，壺の肩部片である。ヘラミガキで丁寧に仕上げられ，細い貝殻刺突が曲線状に２段施される。搬入品の可能性が高いと考えられる。197は，指宿式土器の口縁部片で，内外面に横位の沈線が施される。



第50図　溝状遺構９～12号及び出土遺物



第51図　溝状遺構13～16号及び出土遺物

溝状遺構13号（第51図198～200）

C－17区から18区に亘って，Ⅳa層上面で検出された。周辺は削平を受け，表層下はⅣa層となる。溝状遺構12号に沿うようにほぼ南北に延びるが，北端は北西方向へ屈曲する。南端は撹乱のため不明であるが，さらに南方向へ延びると考えられる。長さ12.3m，最大幅0.4m，深さ0.15mを測る。

埋土から遺物が数点出土したが，３点図化した。198は内黒土師器の埦で，底径6.8cmを測る。古代・中世に比定できる。199は底部からほぼ垂直に立ち上がる器形で，底径は10.6cmを測る。縄文時代後期と考えられる。200は口縁端部を折り曲げて外反させ，丸く仕上げた口唇部に刻みを施す。弥生時代前期に比定される。

溝状遺構14号（第51図）

B－17区，Ⅳa層上面で検出され長さ4.6m，幅0.25mを測る。検出面からの深さは浅く６cmしかなかった。周辺はⅢ層まで削平を受け，本遺構はⅣa層に掘り込まれた遺構の下部がかろうじて残存する状況であった。

埋土から遺物の出土は確認されなかった。

溝状遺構15号（第51図）

B－17区，Ⅲ層上面で検出された。表土下はⅢ層となり，これに掘り込まれた溝状遺構は長さ1.63m，幅0.63m，深さ0.23mを測る。東端は調査区外へ延び，西端の延長部分は削平により検出できなかった。

遺構内から土器小片が10数点出土したが，図化し得なかった。

溝状遺構16号（第51図201）

C－16・17区，Ⅲ層で検出された。本遺構はほぼ南北に延びるが，北端は削平を受けている。長さ3.1m，最大幅0.9mを測る。削平のため，遺構の下部しか残存せ

ず，検出面からの深さは僅か９㎝であった。遺構内から縄文土器の小片が数点出土したが，埋土から中・近世の遺構と判断した。

201は波状口縁を呈し，波頂部は器壁が肥厚し，口唇部には刻みを施す。小片のため器種は不明であるが，鉢の可能性も考えられる。縄文時代後期の磨消縄文である。

溝状遺構17号（第52図202～204）

Ｃ－16・17区，Ⅳａ層上面で検出された。長さ12.8m，最大幅1.2m，深さ0.1～0.2mを測る。ほぼ南北に延びるが，北端は南端より20㎝程度低くなる。南端で土坑９号に，北端近くでは溝状遺構18号と溝状遺構19号に切られている。さらに，本遺構の床面を検出中に土坑10号を確認したことから，本遺構は土坑10号の上に構築されている。土坑10号は，さらに土坑29号を切る。溝状遺構17号・土坑10号・土坑29号の関係については土坑29号の項で述べる。埋土及び他の遺構との切り合い関係から中・近世に比定できる。

遺構内から弥生土器を中心に50数点の土器片が出土した。出土遺物の内，３点を掲載した。202は甕の口縁部で，端部に三角突帯を貼り付ける。突帯に刻目が施されたか否かについては，摩耗しているため不明である。203は内湾する口縁端部に三角突帯を貼り付け，細かい刻みを施す。いずれも弥生時代前期と考えられる。204は石鏃の未製品で，やや肉厚の素材剥片を用いる。

溝状遺構18号（第52図205～207）

一部Ｄ－16区にかかるが，Ｃ－16区をほぼ北東から南西に横切る本遺構はⅣａ層上面で検出された。北東側は溝状遺構17・19号を切り，南西側は溝状遺構16号の手前まで延びる。長さ6.5m，幅0.8m，深さ0.4mを測る。

遺構内からは100点以上の遺物が出土した。黒曜石の剥片，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器と様々であった。とりわけ多いのが弥生土器片であった。ここでは出土遺物のうち，３点を掲載した。205は，土師器皿である。糸切り底の内面にススが付着する。底径は10.0㎝を測る。206は，内外とも明確な沈線で施文する薄い器壁の土器である。縄文時代前期の曽畑式土器である。207は幾分上底気味の底部で，丈の短い円柱状の形状をもつ。縄文時代後期に比定できる。

溝状遺構19号（第52図）

Ｂ・Ｃ－16区，Ⅳａ層上面で検出された。溝状遺構17号を切り，18号に切られる。Ｂ－16区から西方向へ約８m延びた付近で南西方向へ向きを変えるが，溝状遺構18号に切られているため詳細は不明である。長さ約11m，幅0.8～１mを検出したが，この付近は撹乱のため深さ約0.1m程度しか残存していなかった。

遺構内からの遺物出土はなかった。

７　足跡（第53・54・55図）

足跡はＦ－12・13区の一群（足跡１），Ｂ－14区の一群（足跡２），Ｅ－９・10区及びＦ－10区の一群（足跡３）が検出された。

足跡は指や踵の形状がはっきりしているものを基本とし，平面形が台形状のもの，楕円形状のものを実測した。ただ，平面形は足跡状でも小さいものについては除外した。指の形状が残る足跡は，長さ20㎝で幅10㎝程度のものが多かった。また，埋土は灰白色と明褐色砂質土の混土が多かった。

足跡１は道跡４の北側に63か所，足跡２は道跡５の北側を沿うように16か所，足跡３は道跡１の南側と暗渠の北側に，さらに道跡１と暗渠の間に合わせて79か所確認された。足跡１・２は，低湿地（11～15区）基本層序のⅡ層での検出である。足跡３は，低湿地の基本層序のⅡａ層での検出となる。ただし，Ｅ－10区ではⅡａ層上位と中位で検出されたものがあり，その平均した検出面のレベルには17㎝の差があった。検出面に比高差があることから時期が異なる可能性もある。

調査当初，表層下で検出されたことから新しい時代のものと考えていた。しかし，道跡に沿うように検出され，道跡の造成に使われた杭より総じて20㎝程度検出レベルが低かった。このことから道跡（もしくは畦畔）との関連する水田に残った足跡で，時期については道跡が長い期間使用されていることから判断できなかった。

８　土木遺構

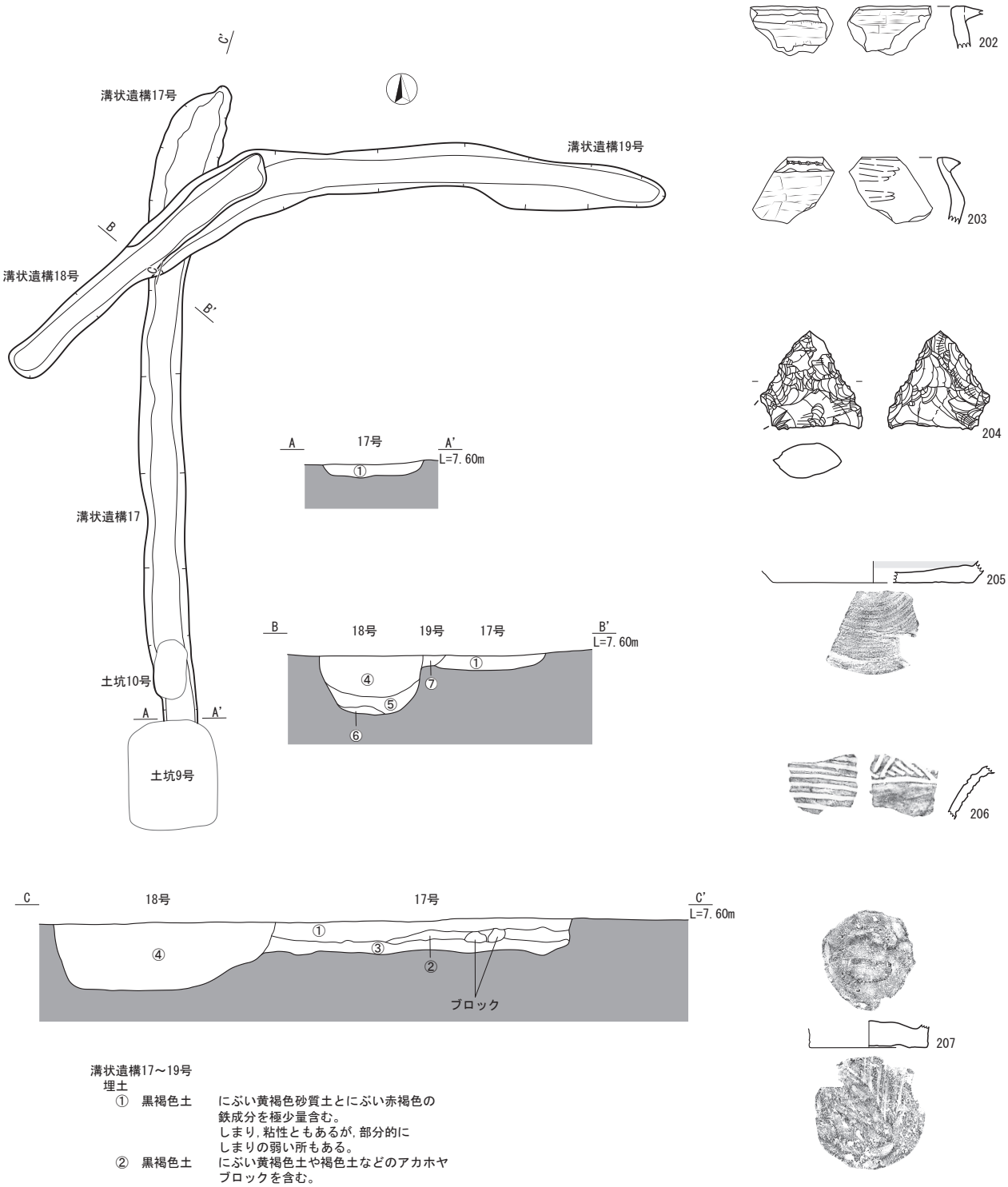
土木遺構は，軟弱な地盤に打ち込んだ杭列と敷丸太・敷粗朶・敷葉によって造られた道跡及び排水のための暗渠で構成されている。検出面は概ねⅡ層であるが，低湿地では層序が一定せず，明確に検出層を確認できなかった区域もある。現在，遺跡の北側を西流する境川は，昭和時代の早い時期までは調査区の７区付近を流れていた。このことから，この周辺の地盤は，かなり軟弱と考えられる。

なお，敷丸太・敷粗朶・敷葉とは，樹木の枝や葉を敷き並べて透水性を良くすることにより地盤や盛土を補強する工法のことである。遺構を検出した周辺は氾濫原で地盤が軟弱なことから，これらの工法が採られたと考えられる。

（１）道跡（第17・53・56～62図208～220）

調査区内において主に南北方向と東西方向に延びる２列一組を単位とした杭列が検出された。杭列は全て連続していないが，同じ幅と方向性をもち，部分的に杭列の間から敷丸太等も確認されたことから道跡とした。杭列は盛り土で道を造成するにあたり，路肩部分に打ち込み補強したものと考えられる。

検出された道跡は，便宜上１から７の番号を付して記述する。道跡の造成に使われたと考える杭９点については，放射性炭素年代測定を行っている。その杭の出土地点については，第58図に示した。詳細な測定結果は，第



溝状遺構17～19号
埋土

① 黒褐色土　にぶい黄褐色砂質土とにぶい赤褐色の鉄成分を極少量含む。しまり，粘性ともあるが，部分的にしまりの弱い所もある。
② 黒褐色土　にぶい黄褐色土や褐色土などのアカホヤブロックを含む。
③ 黒褐色土　明黄褐色土を少量含む。しまりはなく，粘性はある。
④ 黒褐色土　赤褐色の鉄分ブロックを少量含む。しまり，粘性ともややある。
⑤ 黒褐色土　しまりはなく，粘性はややある。
⑥ 黒色土と黒褐色土の混土
⑦ 黒褐色土　にぶい赤褐色の鉄成分を全体的に極少量含む。しまり，粘性とも弱い。

0 (1 : 120) 3m　平面図
0 (1 : 40) 1m　断面図
0 (1 : 1) 3cm　204
0 (1 : 3) 10cm　202・203・205・206
0 (1 : 4) 10cm　207

第52図　溝状遺構17～19号及び出土遺物

３分冊「第８章自然科学分析」を参照いただきたい。

道跡１

低湿地部のＥ－８区から低地部のＤ・Ｅ－17区にかけて検出された。Ｅ－８区から多少湾曲しながらＤ－15区までほぼ南北に延び，Ｄ－16区で南西方向へやや向きを変える。未検出部分もあるが，１条の道跡とすると延長約90ｍとなる。杭列は重複するが，２列一組を単位とすると幅約２ｍと考えられる。低湿地部の８・９区では路床に多量の枝葉・丸太・板材等を敷いた敷粗朶が確認された。この付近では軟弱な地盤に対応するため杭に加えて敷粗朶による工法を用い，その上に盛り土を行い道を造成したと考えられる。杭は路肩部分だけでなく敷かれた粗朶等の間からも検出されている。

部分的ではあるが，道跡１の詳細な実測図及び断面図を第56・57図に示した。断面図は見通しであるが，その範囲については，矢印で示してある。また，道跡１を構成する杭及び丸太８点（試料№58～64・66）の放射性炭素年代測定の結果は次のとおりである。

試料№58　紀元前６～５世紀
試料№59　10～11世紀
試料№60　14世紀
試料№61　14世紀
試料№62　18～19世紀
試料№63　15～16世紀
試料№64　14世紀
試料№66　14世紀

Ｅ－10区では３条の杭列がほぼ平行して南北に延びる。試料№60・№64を含む杭列と試料№59・№61・№63を含む２条の杭列は同じ幅をもちながら東よりにやや湾曲する。試料№60・№61・№64の放射性炭素年代測定結果は14世紀で，ほぼ同時期に道跡に打設された杭と考えられる。同じ杭列でも試料№59・試料№63は異なる測定結果であるが，同じ道が改修や補強を繰り返しながら継続的に使用されたと思われる。試料№62を含む残りの１条は，Ｅ－10区から９区へほぼ北進する。明確に２列一組の杭列は確認されなかったが，その西側には杭列に平行して暗渠が検出されたことから近世の道跡と考えられる。

また，試料№60を含む２列一組の杭列と試料№66を含む２列一組の杭列は連続していないが，その方向性と杭の年代測定結果が同じであったことから連続する道跡と判断した。Ｄ－15・16区境でも道跡は途切れるが，周辺に杭列の検出がなかったことから連続すると判断した。

さらに，試料№59を含む杭列の東側には敷丸太と数本の杭が確認されていることから，それぞれに道跡の可能性もある。つまり，道跡１と便宜的に番号を付したが，試料№60と61を含む杭列で構成される14世紀の道跡の西側に18～19世紀の道跡があり，南側には時代は不明であるが，もう一条の道が造成されたか，道の拡幅が行われた可能性も考えられる。同じように13区から17区にかけても杭列が数条見られることから，道跡は重複していることが考えられる。

Ｅ－10区の道跡１（第56図実測図１）では杭列と杭列の間の粗朶等はＥ－９区と比べると少ない。断面図ではⅡａ層に土層注記の⑦（灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が交互に堆積）が入り込んでいる。このことから杭列の間に人為的に土を入れ，道を造成した可能性もある。ただし，人為的に土を入れた造成面が堅くしまったり，その上部に硬化面が確認されたという記録はなかった。また，Ｅ－９区の道跡１（第57図実測図２）は粗朶でしがらみを組み，そこに杭を打設してる状況が確認できた。しがらみの両側には，さらに多くの杭が打設され，杭列となるが，杭の長さには統一感はない。また，Ｅ－12区では道跡３と交差する付近で敷葉も確認されている。同じ道跡であってもＥ－10区とＥ－９区では工法に違いがあるのは，Ｅ－９区の地盤がより軟弱であったことが推測される。

なお，試料№58はⅢ層出土で，資料№59～64・66はⅡ層出土もしくはⅡ層からの打設である。試料№58の杭は，出土層から道跡１を構成する杭ではないと考えられる。

道跡２

Ｅ・Ｆ－８区をほぼ東西に延びる。長さ約９ｍ，幅約２ｍで検出された。敷丸太・敷粗朶・敷葉工法で造成され，Ｅ－８区で道跡１の北端と交差する。調査時には確認されていないが，平面図では北西から南東へ延びる道跡とも交差しているようにも見える。道跡２は，道跡１より板材や丸太が多く使われている。旧境川が７区付近を西流していたことから堤防の役割も担っていた可能性も考えられる。また，Ｅ－8区ではヘゴの葉柄あるいは中軸と考えられるものがほぼ同じ方向に向きをそろえた状況で確認された。さらに，これの上には板材や丸太を重ねた状況が３つの層にわたって確認された。

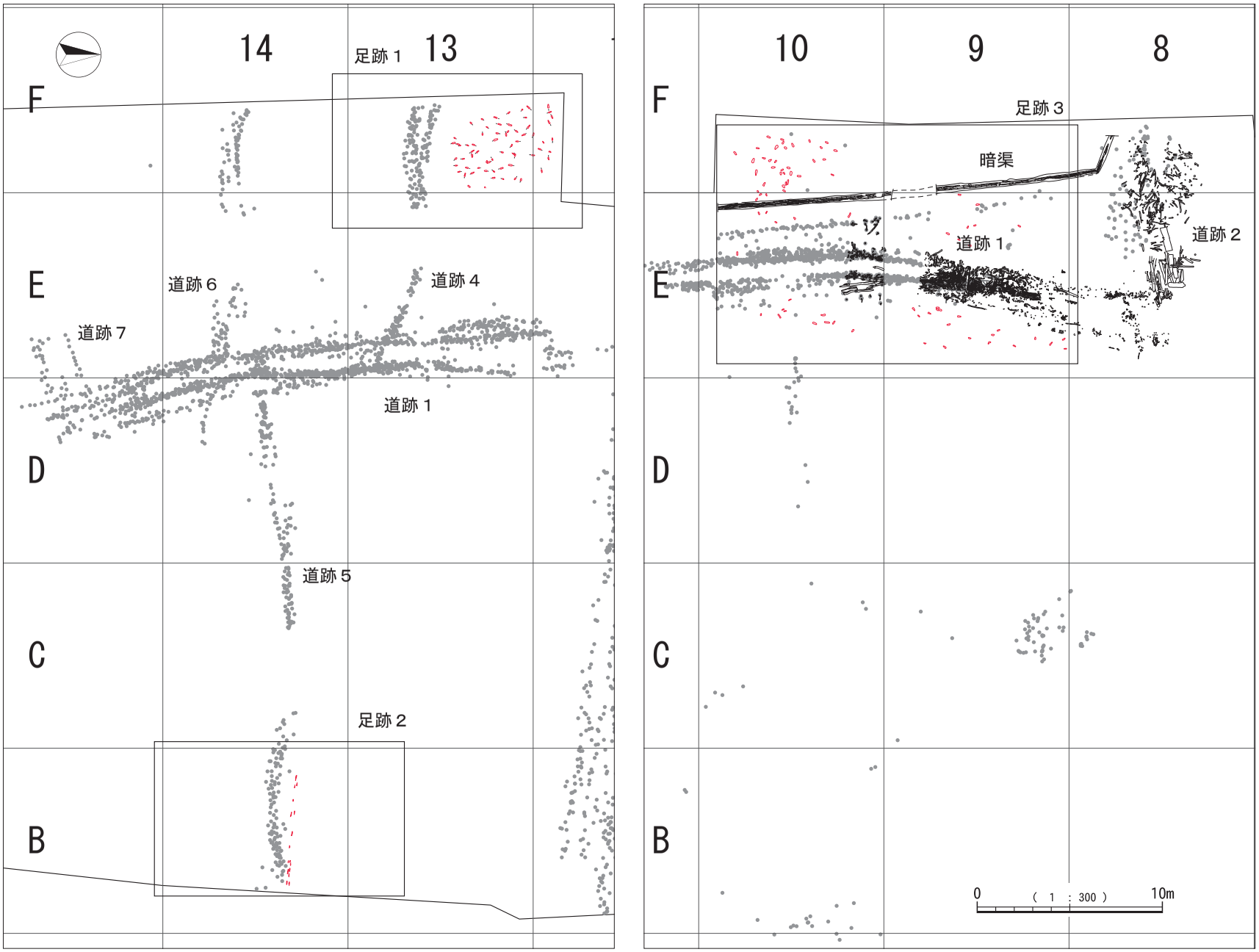
道跡３

Ｂ～Ｅ－12区で検出され，東西方向にほぼ直線的に延びる。延長は調査区の東西幅と同じ約40ｍ，幅は２ｍ程度である。東端に行くにしたがって杭の検出範囲が広がるが，道の補修や付け替え等が考えられる。Ｅ－12区では道跡１とほぼ直角に交わり，さらに西へと延びる。

道跡３を構成する杭１点（試料№65）を放射性炭素年代測定し，11～12世紀の結果が得られた。測定結果から道跡１とほぼ同時期に造られていたと考えられる。

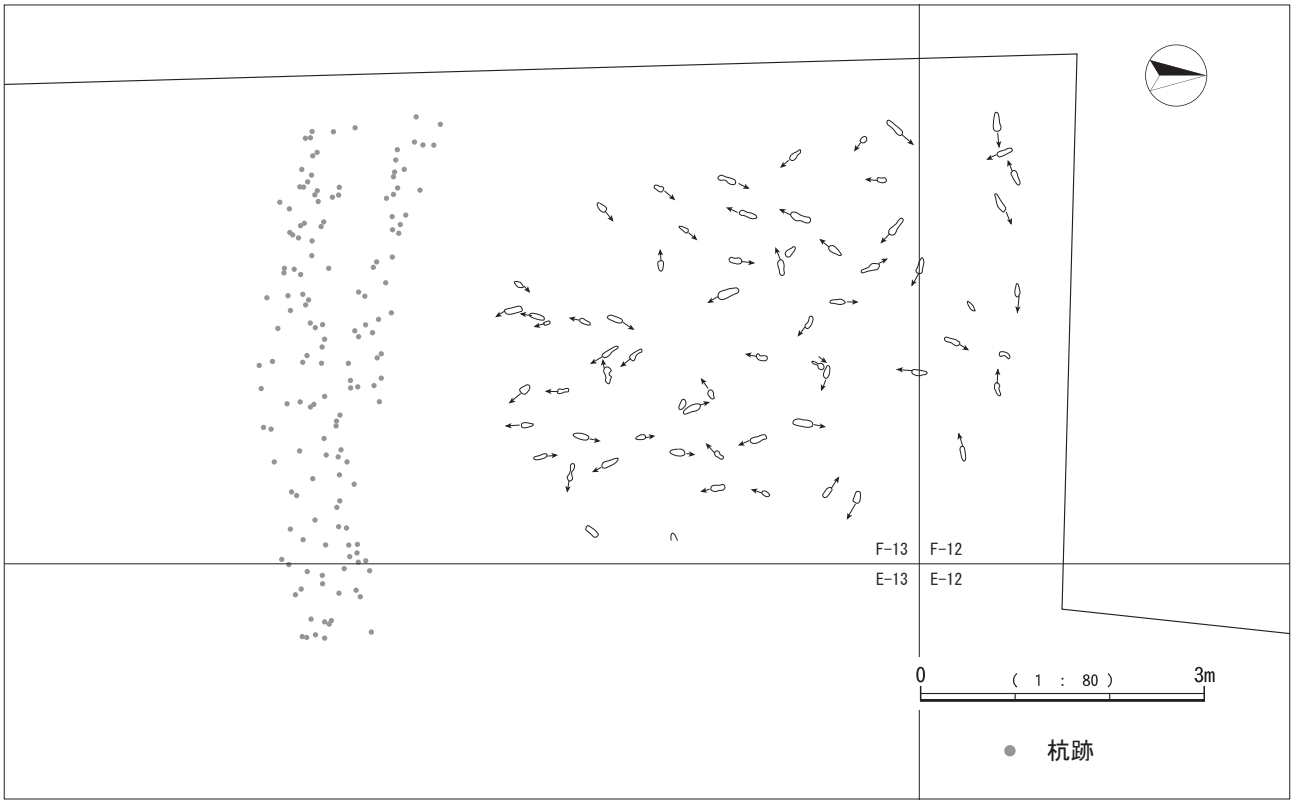
道跡４

一部杭列が検出されなかった部分もあるが，Ｅ－13区で道跡１から分岐し湾曲しながら西へ延び，さらには調査区外へ続くと考えられる。検出された道跡は長さ約12ｍで幅は２ｍに満たないが，西端では幾分広がる。Ｆ－13区では道跡の北側に63か所の足跡が検出されている。

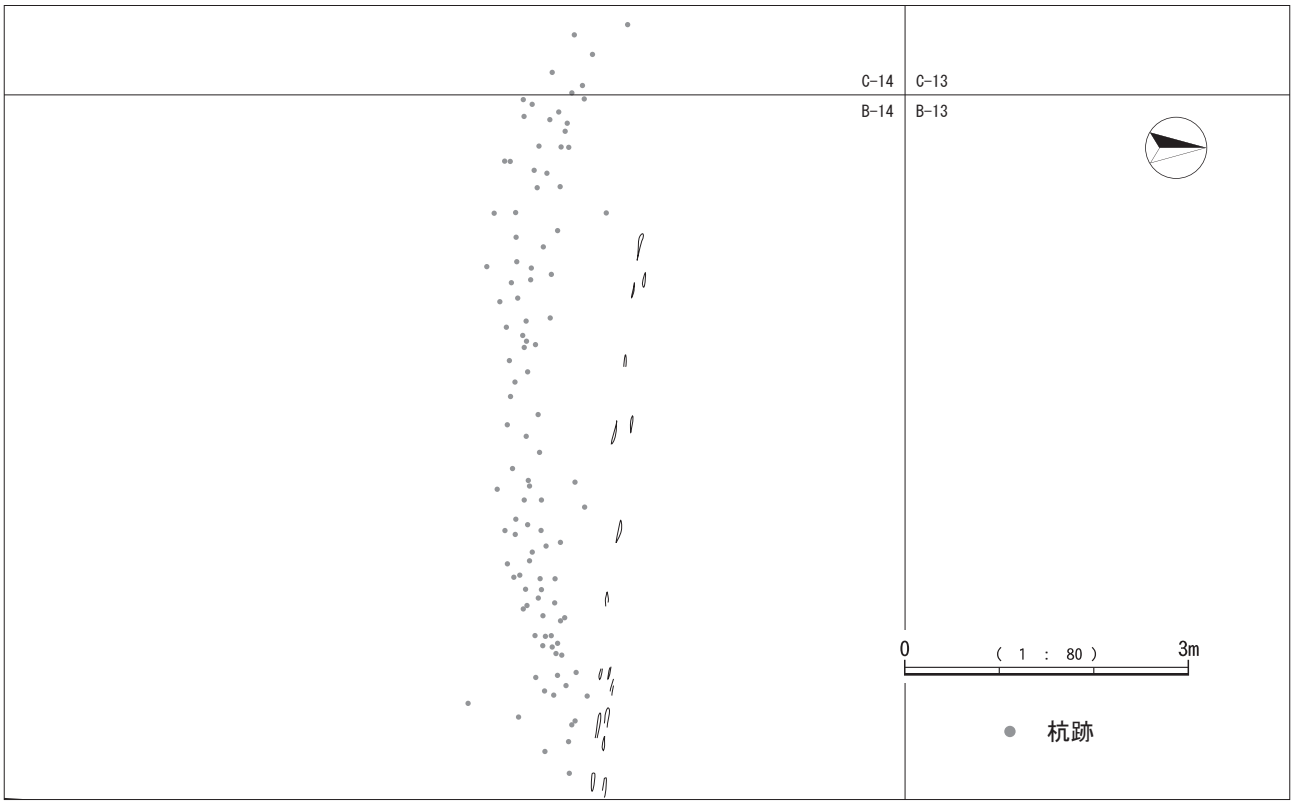


第53図　足跡・土木遺構位置図

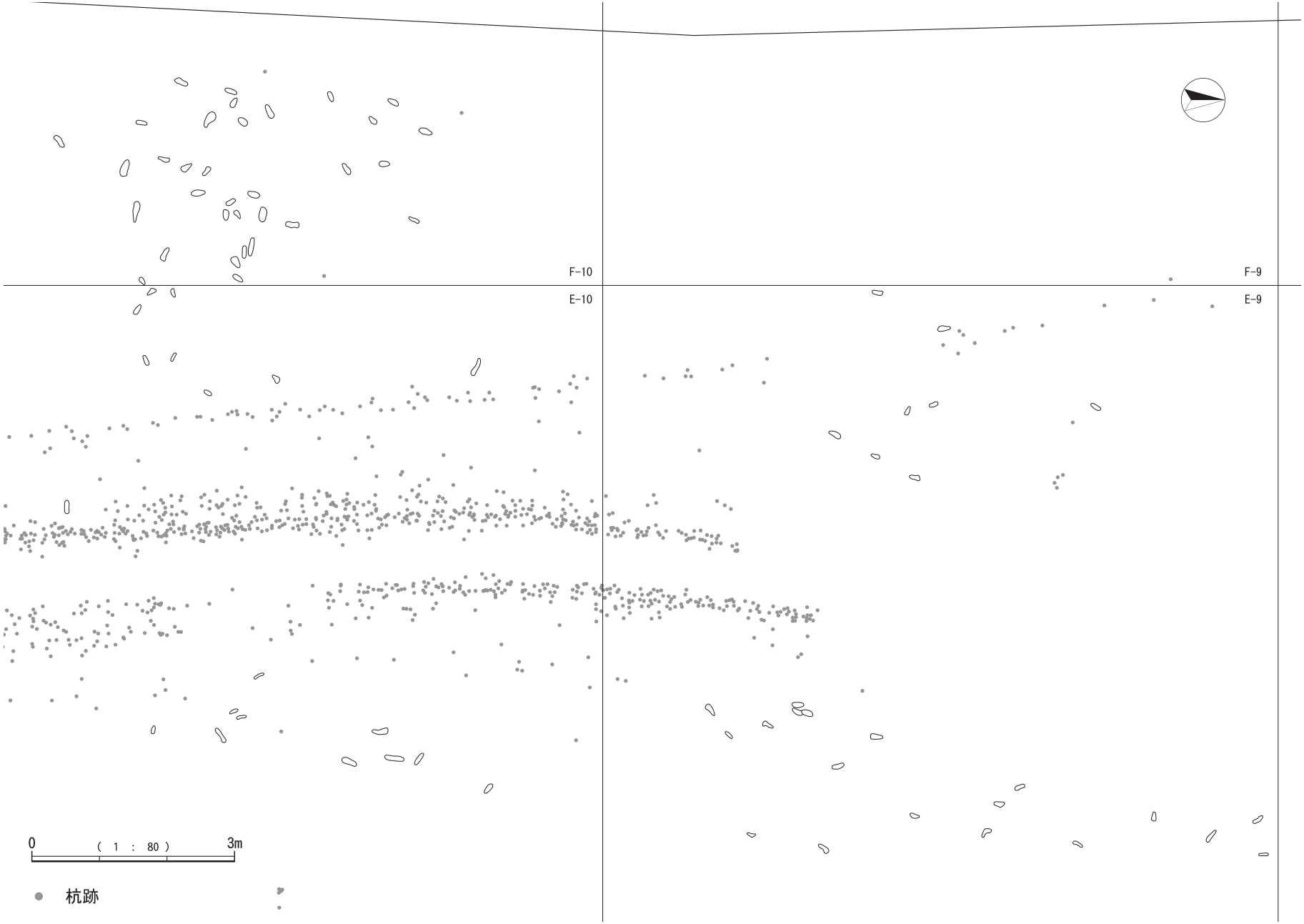
足跡１



足跡２

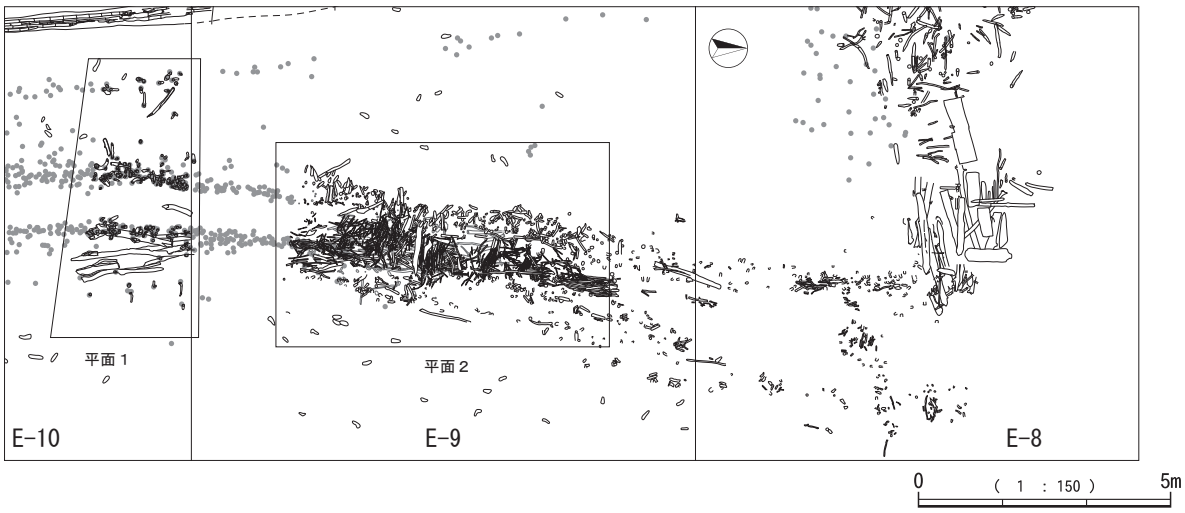


第54図　足跡１・２

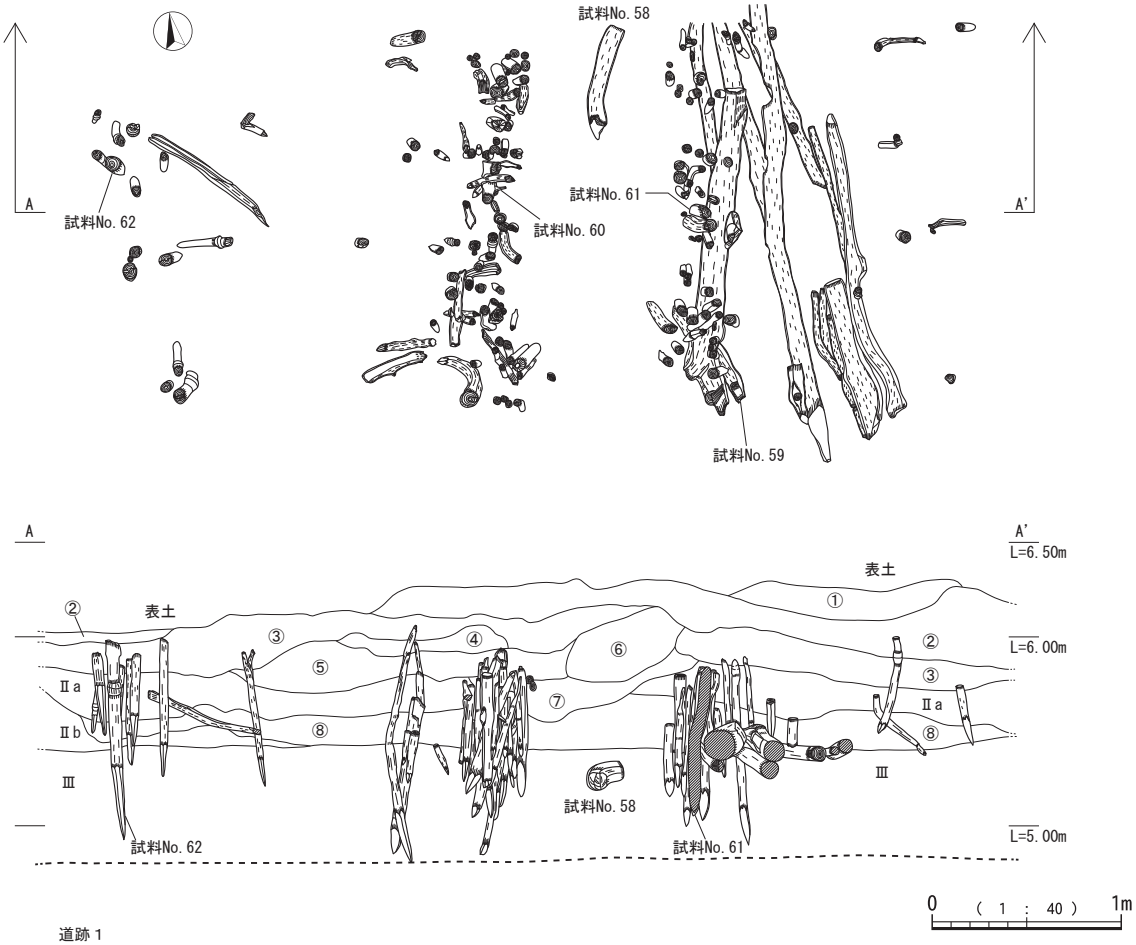


第55図　足跡３

道跡１実測位置図



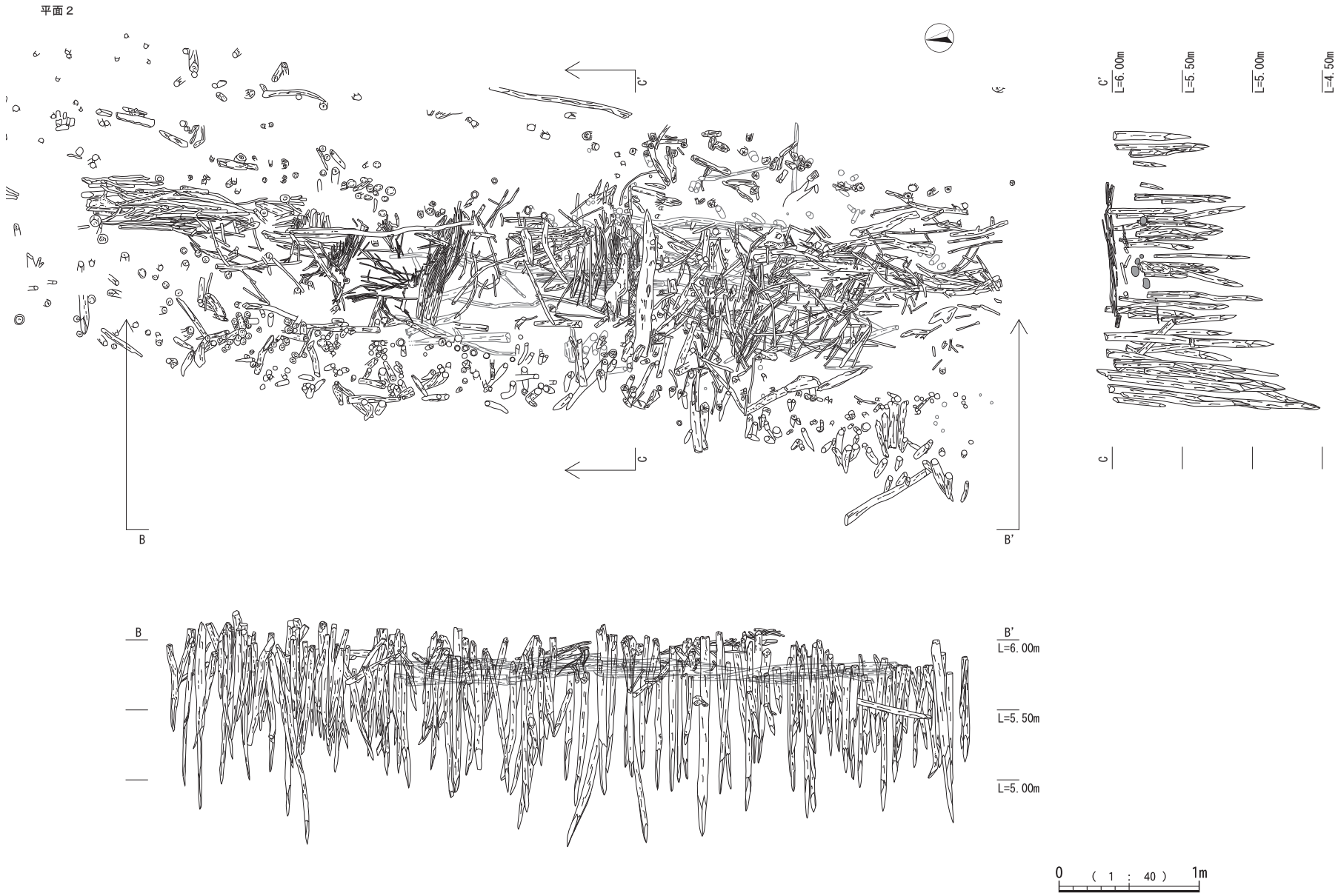
平面１



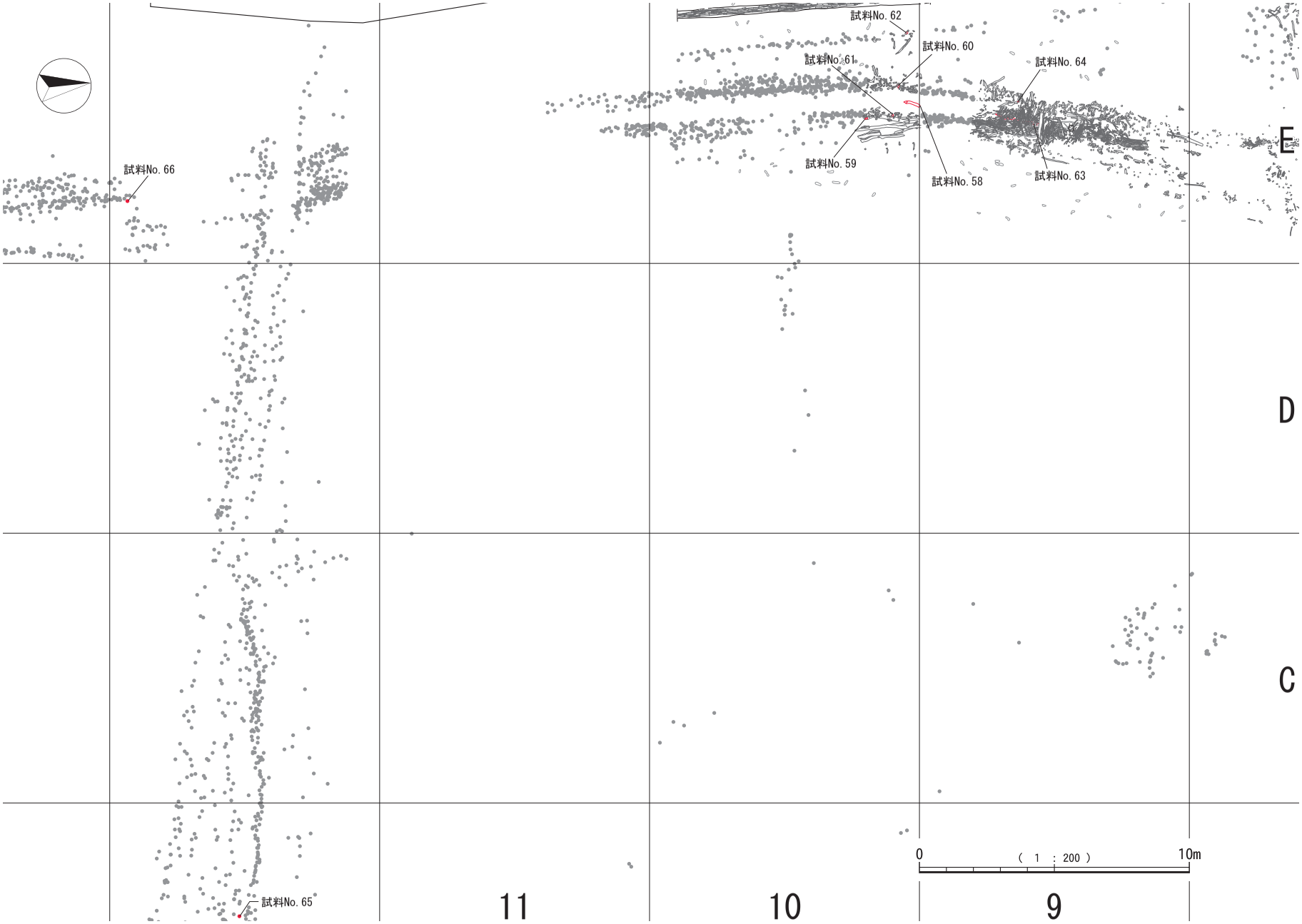
道跡１

① 灰褐色砂質土と褐灰色砂質土が交互に堆積。
　　しまりはない。
② 黒褐色土　鉄分を多く含む。しまりあり。
③ 褐灰色土　φ１cm以下の小礫を含む。
　　鉄分を多く含む。しまりあり。
④ 褐色砂質土と灰褐色砂質土の混土。
　　しまりはない。
⑤ 黒褐色粘質土
　　粘性はあるが，しまりはない。
⑥ にぶい茶褐色砂質土
　　上部は砂質が強い。しまりはない。
⑦ 灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が交互に堆積。
⑧ 灰黄色砂質土と黒褐色砂質土とⅢ層がマーブル状に堆積。

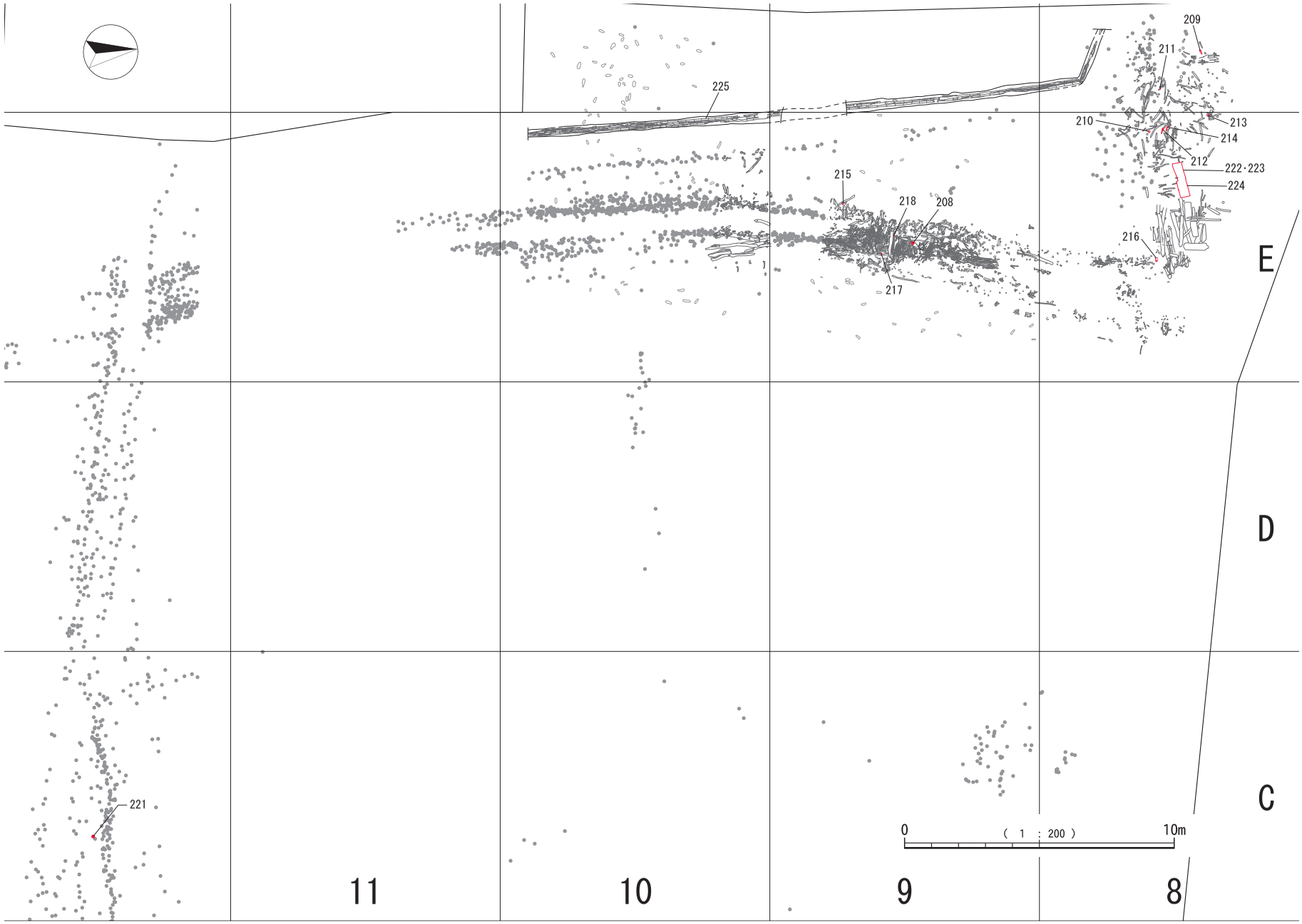
第56図　道跡１実測図（１）



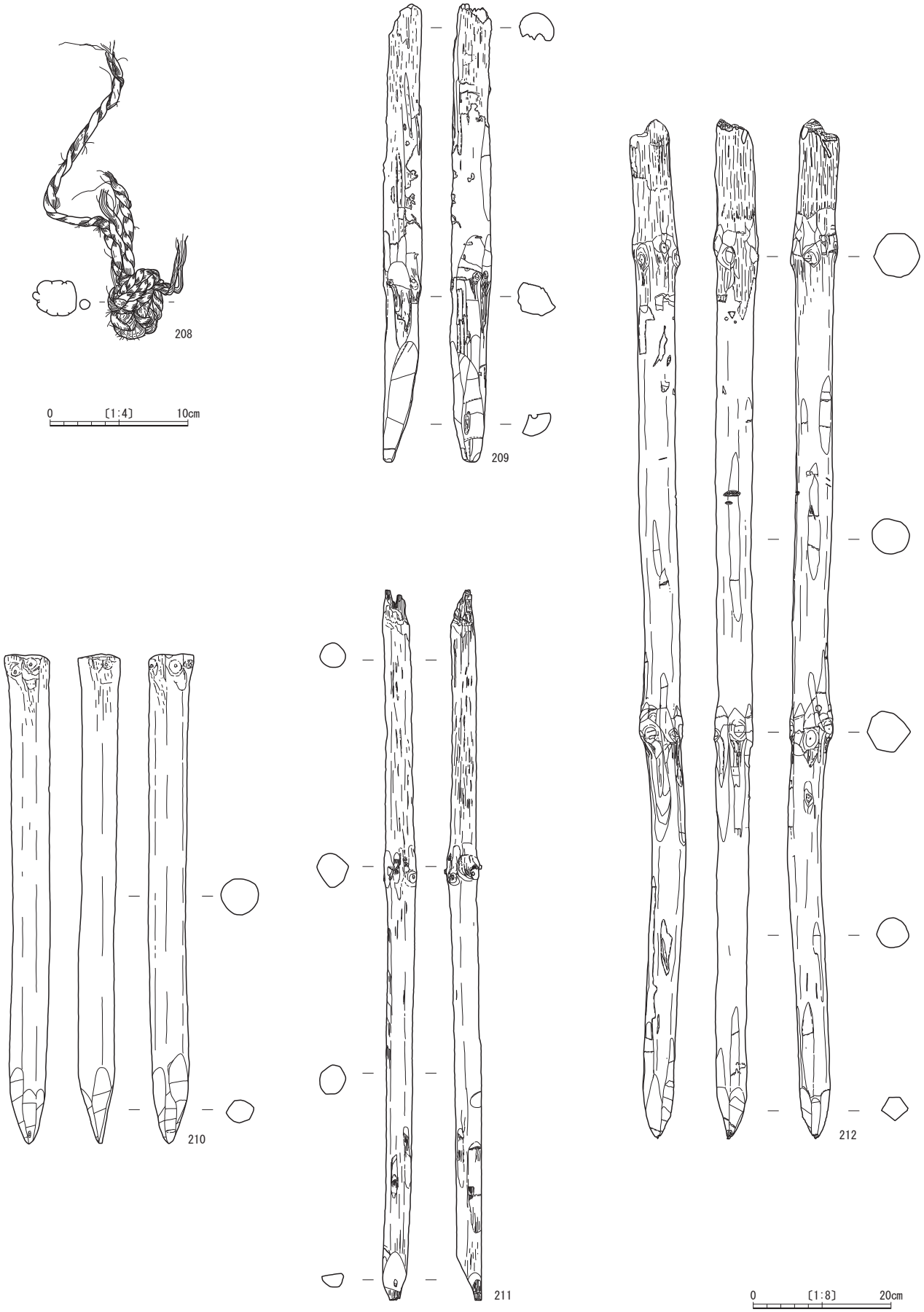
第57図　道跡１実測図（２）



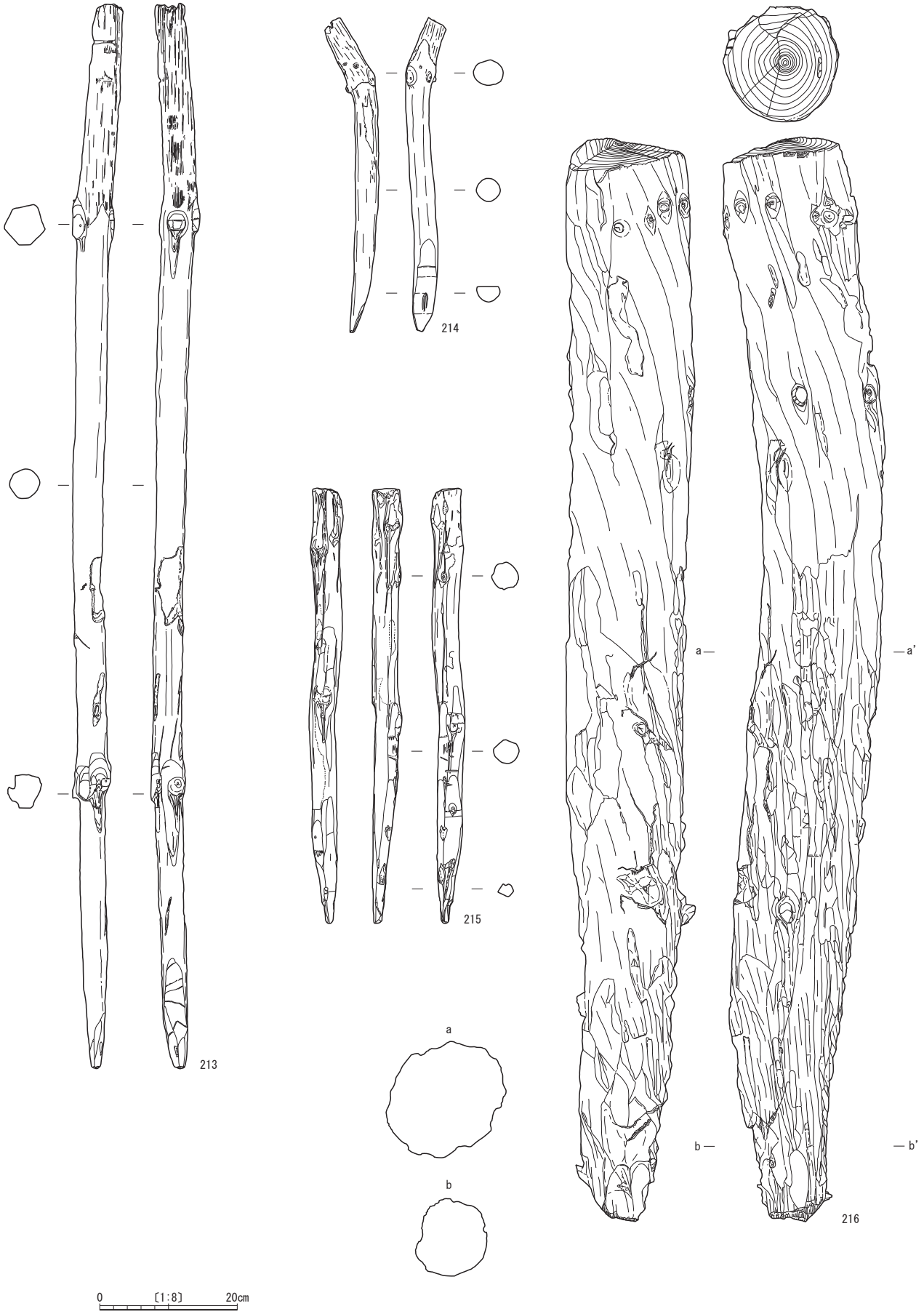
第58図　放射性炭素年代測定試料採収地点


209
211
225
210
213
214
212
222・223
224
215
218
208
216
217
E
D
C
221
0
(1 : 200)
10m
11
10
9
8

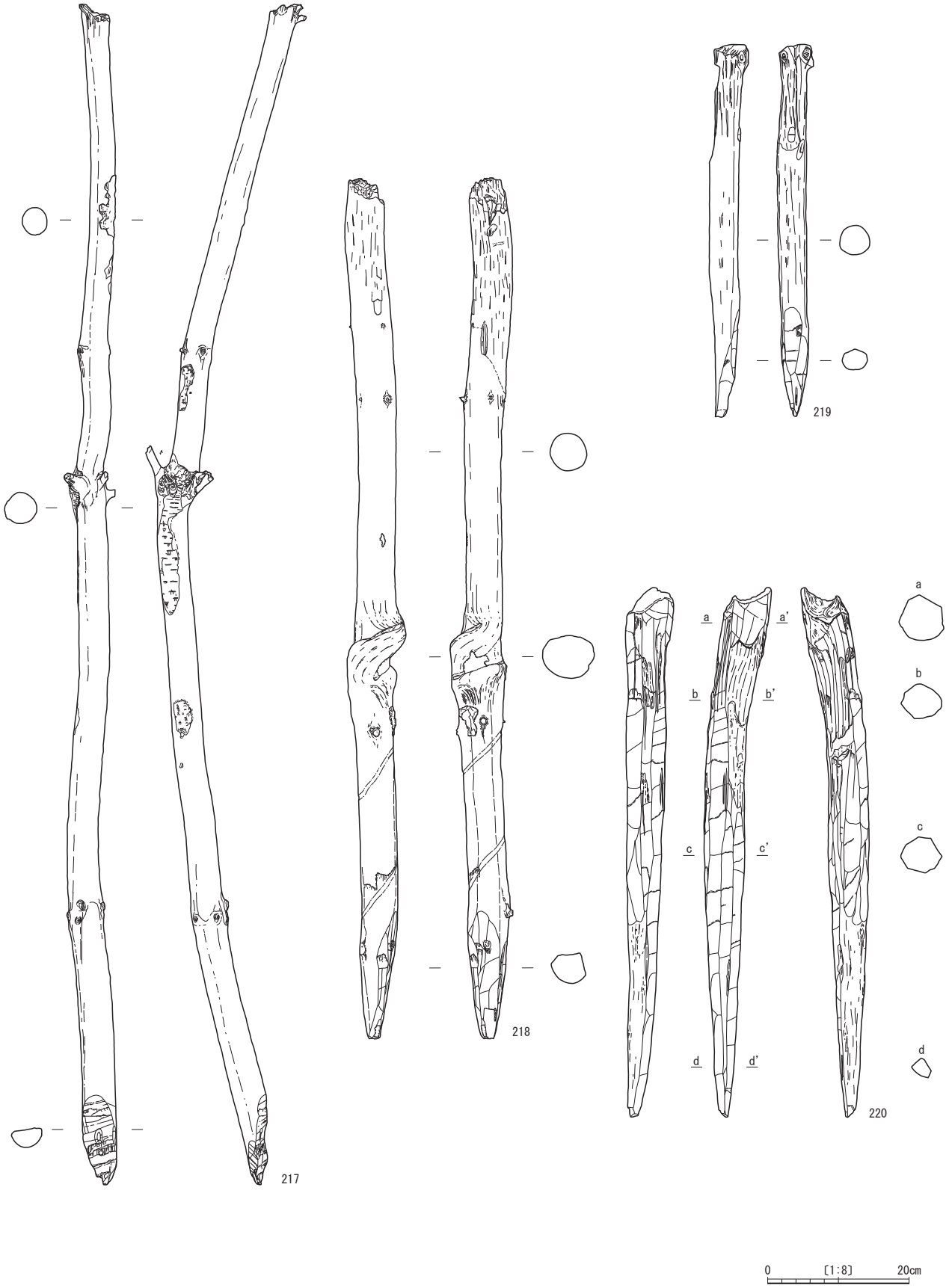
第59図　杭等出土地点



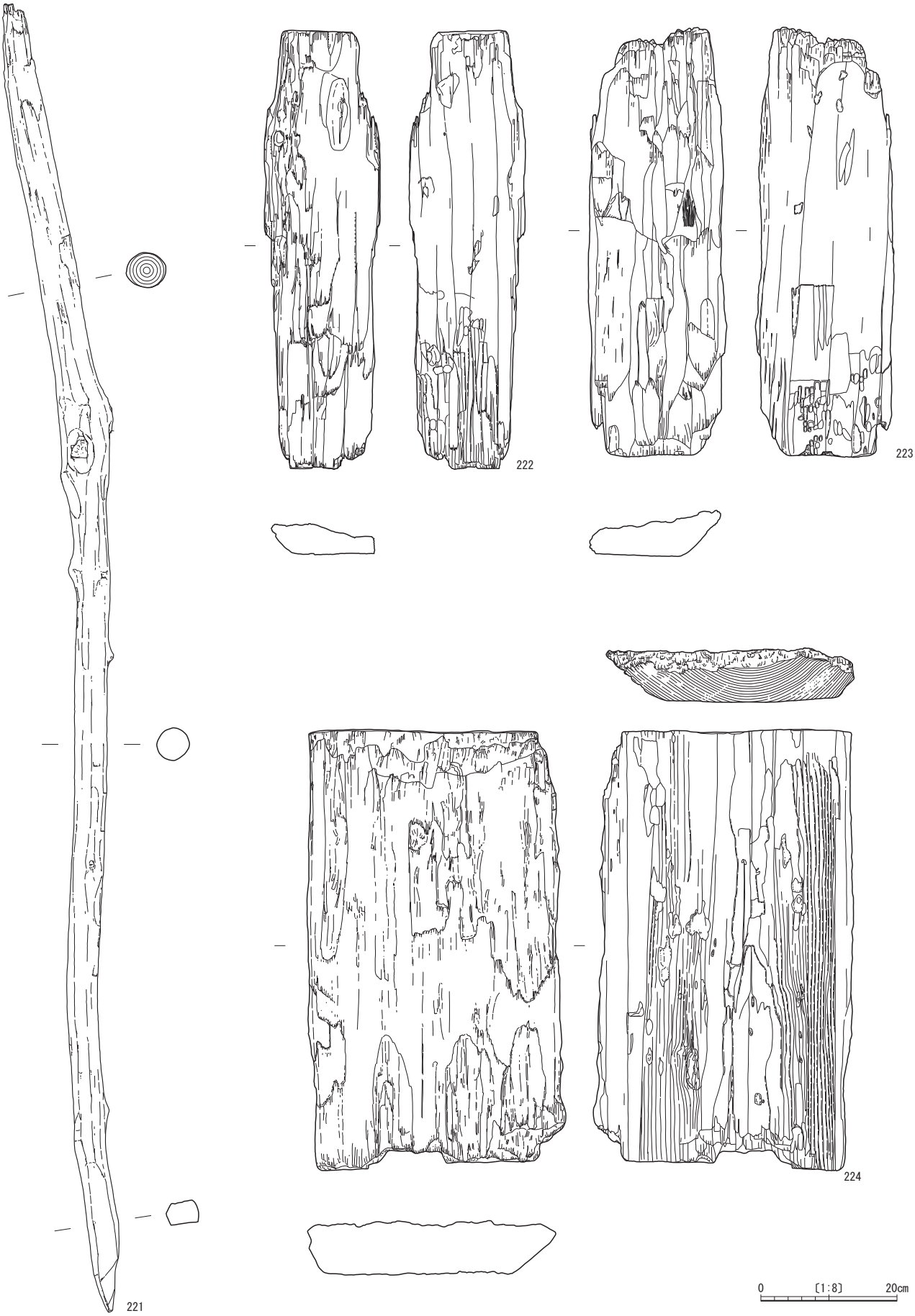
第60図　道跡関連遺物（１）



第61図　道跡関連遺物（２）



第62図　道跡関連遺物（３）



第63図　道跡関連遺物（４）

道跡５

Ｄ－14区で道跡１から分岐し，東側の調査区境まで延びる。途中，未検出部分もあるが，長さ約27ｍ，幅約１ｍ程度を測る。

道跡６

Ｅ－14区で道跡１から分岐し，西側へほぼ直線的に延びる。杭列の検出されなかった部分も含め，その長さは約14ｍ，幅は１ｍ程度である。道跡１を挟んで１列の杭が３ｍ程検出されたが，道跡か否かは不明である。

道跡７

Ｄ－15区で道跡１から分岐し，西側へ３ｍほどしか検出されなかったが，さらに西側へ延びると考えられる。幅は約２ｍと東西の延びる道跡では広い。

道跡１～７以外にＡ～Ｄ－８～11区でも杭が確認されている。まとまりをもちそうなものや列をなしているものもあり，道跡１～７の検出状況からは道跡もしくは畦の可能性も考えられるが，詳細は不明であった。

道跡を造成する際に使用されたと考えられる杭は低湿地部の８区から低地部の17区にかけて検出され，その総数は5,721本を数えた。杭の長いものは192㎝，平均で51.5㎝であった。直径は１㎝から10.5㎝のものがあり，平均は4.0㎝であった。杭先は鉄製工具で１～２回切り取って尖らせてあるが，その尖らせ方に特段の規則性は確認できなかった。また，敷丸太は，特に地盤が軟弱な８区から10区で確認されている。その径は10～15㎝のものが多く，長さは短いもので50㎝，中には200㎝を超えるものもあった。丸太を敷いた同じ範囲に打ち込まれた杭もあり，補強の意味合いもあると考えられる。

道跡関連遺物

道跡に関連する遺物は，まとめて掲載する。遺物の出土地点については，第59図に示した。

208は，Ｅ－9区の道跡１から出土した縄である。道跡の上部の粗朶が検出された砂質土から出土した。結び目があるため全長は不明で，太さは７㎜程度で材質はシュロと考えられる。根元は結ばれており，先端はちぎれたような形状である。放射性炭素年代測定の結果，15世紀の数値を得た。道跡１の敷粗朶を構成する杭（試料№63）の年代測定結果が似たような数値を示すことから道跡１を造成する際の杭や粗朶を束ねた可能性がある。

209～221は，杭である。209～214・216は道跡２を，215・217～220は道跡１を，221は道跡３を構成する杭である。219と220の出土地点は示していないが，Ｅ－９区からの出土で道跡１を構成する杭である。209は長さ66.4㎝，太さ4.9㎝で基部は折れている。杭の先端は，２つの面取りを行っている。210は長さ71㎝，太さ6.5㎝で，基部は折れていると考えられる。杭の先端は，３回面取を行い尖らせている。211は長さ103.2㎝，太さ5.3㎝で基部は折れ，杭の先端は１回だけ面取りが行われる。212は長さ147.9㎝，太さ6.4㎝の完形品である。杭の先端は，３回の面取りを行い尖らせている。213は長さ155㎝，太さ６㎝の完形品で，２つの面取りが残る。214は長さ45.6㎝，太さ4.5㎝で基部は欠損する。杭の先端は，１回の面取で鋭く加工している。215は長さ63.3㎝，太さ4.2㎝で基部は欠損する。面取りを３回行っている。216は長さ158㎝，太さ18.2㎝を測り，地中に打設されていた。他の杭の太さが５㎝程度であることから特徴的な杭である。杭の先端が僅かに加工しているように観察でき，先端部以外には樹皮が残る。217は長さ164㎝，太さ８㎝の完形品である。先端は１回の面取りが行われる。218は長さ121.7㎝と短いが完形品と考えられる。太さ7.3㎝で３回面取りが行われる。219は長さ52.7㎝，太さ4.2㎝で基部を欠損する。杭の先端は，１回の面取りが行われる。220は長さ75.1㎝，太さ6.4㎝で基部を欠損する。杭の先端部の面取りは丁寧に４回行われる。221は出土した杭の中でも最長の192.5㎝，太さ8.2㎝を測る。杭の先端を３回の面取りで尖らせているが，他は樹皮が残る。

222～224は，Ｅ－８区の道跡２から出土した板である。本来１枚の板であったが，軟弱で，取り上げる際に割れたものである。本来は長さ128㎝，幅約36㎝の大きさで，厚さは222が４㎝程度，224が８㎝と一定しない。222の左側面，223の右側面，224の両側面が同じような形状であることから面取りを行った可能性が高い。何らかの部材であったものを再利用したと考えられる。

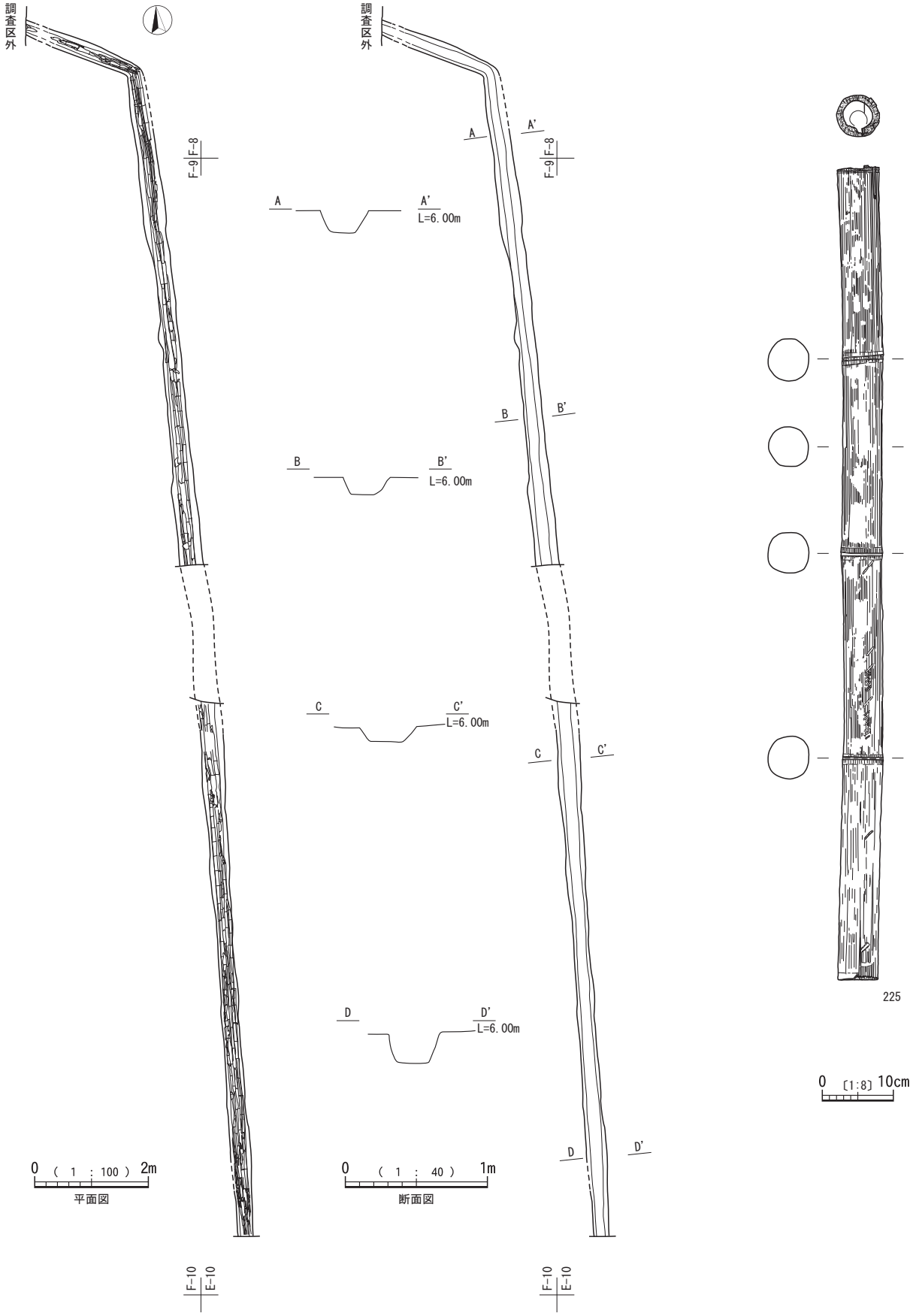
（２）暗渠（第64図225）

Ｆ－８区からＥ－11区のにかけてⅡａ層で，延長約20ｍにわたって暗渠と考えられる遺構が検出された。Ｆ－８区の調査区境から南東方向へ約２ｍ延びた後，ほぼ南側へ角度を変え，Ｅ－10区まで直線的に延びる。幅約25～35㎝，検出面からの深さ10～20㎝の溝の中に長さ約２ｍ，太さ３～６㎝程度の竹を隙間なくほぼ４本ずつ敷き詰められていたが，土圧のために潰れた状態であった。溝の底には竹を支えるためと考えられる横木が３本確認された。床面は南に行くに従って低くなる。

225は，溝に敷き詰められた竹である。長さ114.6㎝，径5.8㎝を測る。節は，他の竹と同様にくり貫かれていた。

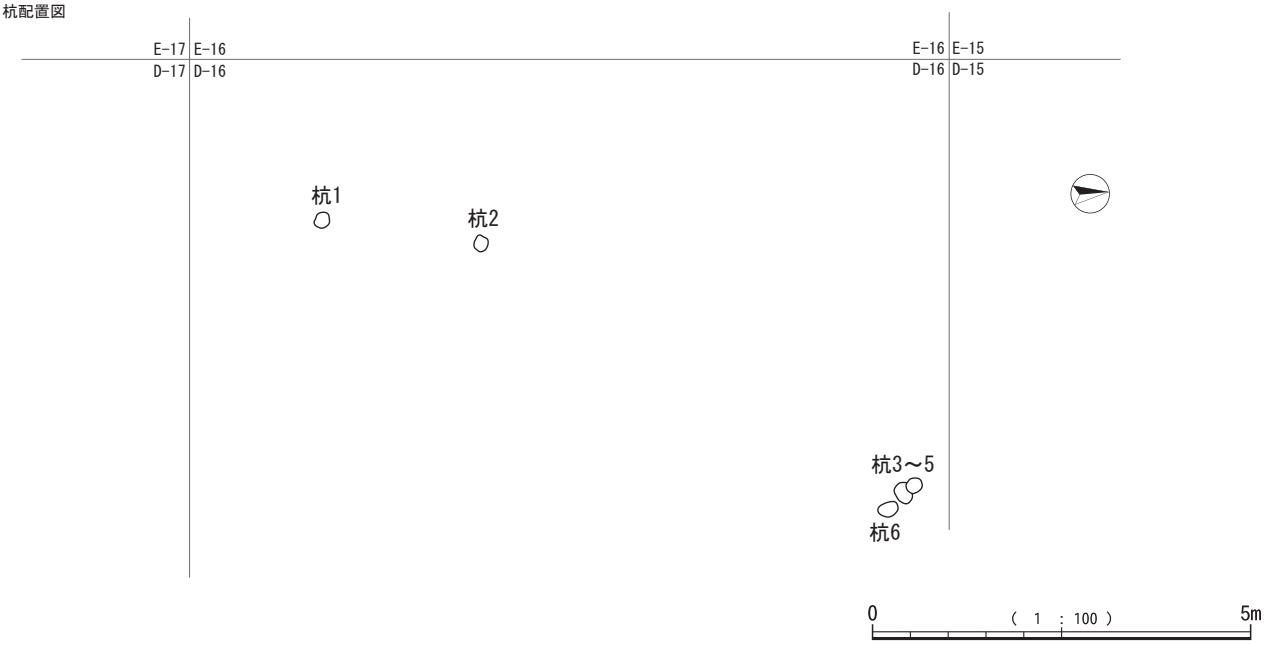
（３）ピットを伴う杭（第65図）

ピットの中に意図的に杭を打設したか否か等の関係性や時期は不明であるが，道跡等との関連も考えられることから，便宜的にここに掲載した。Ｄ－16区でピットに打ち込まれた杭が５本検出された。全ての杭の先端部は加工して尖らせて，ピット内に打設しているように見える。基部は欠損しているため，打設時の全長は不明である。また，ピットの床面からさらに60㎝程度打ち込まれた杭もあれば10㎝程度のものまで様々である。ピットの径は20㎝程度で，平面形は円形もしくは楕円形である。ピットの埋土は黒色土の単層であった。

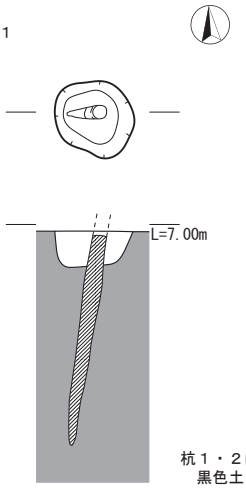


第64図　暗渠及び出土遺物

杭配置図

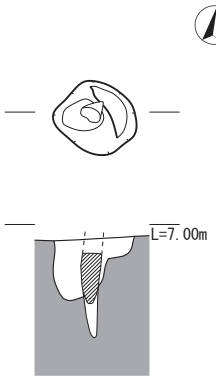


杭１

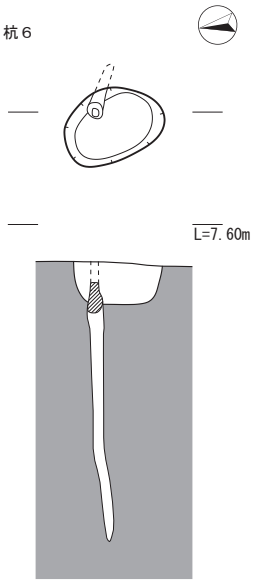


杭１・２に伴うピットの埋土
黒色土　単層でややしまりがある。

杭２

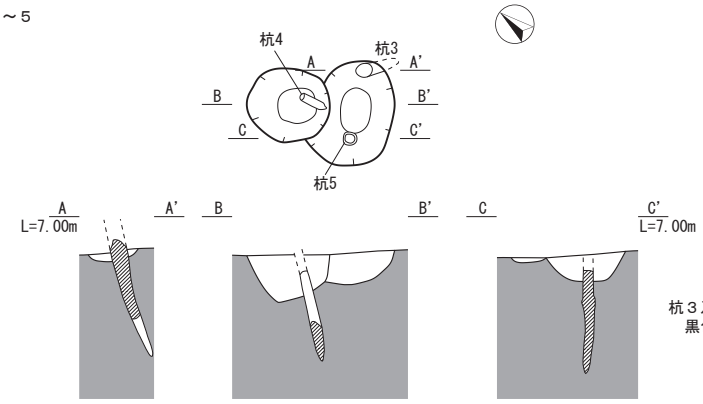


杭６



杭６に伴うピットの埋土
黒色土　単層でややしまりがある。
アカホヤパミスを少量含む。

杭３～５



杭３及び４・５に伴うピットの埋土
黒色土　単層でややしまりがある。アカホヤパミスを少量含む。
杭３を伴うピットの埋土が杭４・５に伴うピットの埋土
と比べ,若干明るい色調である。

0 (1 : 20) 0.5m

第65図　ピットを伴う杭

第５表　中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（１）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
27	5	P6	C−26	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−	○	○	○	○		○				
	7	P8	C−25	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	6.2	(1.2)	ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−	△	○	△							
	9	P10	D−29	土器	深鉢	口縁部	縄文時代中〜後期	−	−	−	指頭圧痕ナデ	ナデ	貝殻刺突	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	−	△		○		○					
	10	P11	D−29	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい褐	黒褐	普通	−	○	○		○						
	11	P12	C−29	土器	深鉢	口〜胴部	縄文時代	−	−	−	工具ナデ条痕	工具ナデ	貝殻刺突	褐	にぶい赤褐	普通	−	○	◎		○						丸尾式
	12	P13	C−29	土器	甕	底部	弥生時代	−	−	−	ナデ	指頭圧痕	−	橙	橙	普通	−		◎		◎		◎				
	13	P14	C−29	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−		○		○						
	14	P15	C−28	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	にぶい褐	灰褐	良好	−	○	○	○							指宿式
	15	P16	C−27	土器	壺	口縁部	弥生時代中期	15.8	−	(4.5)	指頭圧痕ナデ	指頭圧痕ナデ	刻み，沈線	橙	にぶい黄橙	良好	−	◎					○				入来式
	16	P17	D−23	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	7.5	(3.5)	ナデ	ナデ	−	灰黄褐	にぶい黄橙	普通	−	○	○	○							網代痕
	17	P18	D−23	土器	鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	内面に細い沈線	橙	橙	良好	−	○	○		◎		○				西平系
	18	P19	D−21	土器	深鉢	底部	縄文時代晩期	−	3.6	(1.9)	ヘラミガキ	ナデ	−	にぶい褐	褐灰	普通	−	○	○								
	19	P21	D−19	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	11.0	(2.9)	ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙	橙	良好	−	◎	○	○							もじり痕
	20	P21	D−19	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	橙	暗褐	普通	−	○	○								
	21	P22	D−20	土器	壺	胴〜底部	弥生時代	−	8.3	(16.5)	ミガキ，ナデ	ナデ指頭圧痕	−	褐	にぶい橙	良好	−		○	○				○			入来?
	22	P22	D−20	土器	甕	底部	弥生時代	−	−	−	指頭圧痕ナデ	ナデ	−	橙	にぶい橙	普通	−	○	○		○						白色土
28	23	P23	D−19	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	連続刺突(竹管文)	橙	橙	良好	−	◎	△								市来系
	24	P24	B−18	土器	甕	底部	弥生時代	−	6.8	(6.2)	工具ナデ指頭圧痕	ナデ	−	橙	にぶい黄橙	良好	−			○	○					◊	
	25	P25	B−18	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	工具ナデ	ナデ	−	にぶい黄褐	灰	良好	−	○	○	○							
	26	P26	C−17	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	9.6	(3.2)	ナデ	ナデ	−	褐灰	褐灰	良好	−	◎	○		○						
	27	P27	B−17	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	にぶい黄橙	普通	−		○		○						赤色顔料
	28	P28	C−16	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	明褐	にぶい橙	良好	−		◎	○							
30	29	土坑7号	C−22 C−23	土器	甕	胴部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	浅黄橙	やや不良	−		○		○			◎	○		
31	32	土坑9号	C−17	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	明赤褐	にぶい黄橙	良好	−	○	○		△						赤色顔料ススス
	33	土坑9号	C−17	土師器	坏	完形	中世	13.2	7.3	4.2	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	精緻										糸切りヘラ切り
32	35	土坑12号	B−16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	条痕→ナデ	条痕→ナデ	沈線	にぶい黄褐	にぶい黄橙	良好	−	○		△	△						指宿式
	36	土坑12号	B−16	土器	深鉢	胴部	縄文時代中期	−	−	−	条痕，ナデ	指ナデ	刺突	にぶい黄橙	灰白	不良	−	○				◎					市来式
35	40	土坑4号	C−27 C−28	土師器	灯明皿	完形	中世	7.6	5.6	1.9	回転ナデ	回転ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通	精緻										ススス糸切り
	41	土坑4号	C−27 C−28	土師器	皿	完形	中世	8.1	7.0	2.1	回転ナデ	回転ナデ	−	灰白	灰黄	普通	精緻										ススス糸切り
	42	土坑4号	C−27 C−28	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	橙	橙	普通	−		△						△		入来Ⅱ式
	43	土坑4号	C−27 C−28	土器	壺	胴部	弥生時代	−	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	三角突帯	にぶい黄橙	浅黄橙	普通	−		○		○				○		
	44	土坑4号	C−27 C−28	土器	壺	口縁部	古墳時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	にぶい褐	にぶい褐	良好	−		○				◎				成川式
36	48	土坑5号	C−24	須恵器	壺	胴〜底部	古代9c〜	−	14.7	(5.5)	−	−	−	オリーブ黒	褐	良好	−										自然釉
38	54	土坑8号	C−22 C−23	瓦質土器	火鉢	胴部	中世	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	突帯の間に□のスタンプ	浅黄橙	浅黄橙	良好	−							◎			
	55	土坑8号	C−22 C−23	土製品	フイゴ	羽口	近世	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい橙	−	−										
39	58	溝状遺構1号	D−29	土器	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	−	橙	橙	普通	−		○		○						
40	64	溝状遺構5号	B−24 C−24	土器	甕	底部	弥生時代	−	7.6	(3.0)	ナデ	ヘラケズリ	−	橙	灰	良好	−		○							◊	松木園〜中津野式
41	75	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	瓦質土器	鉢(片口)	口縁部	中世	−	−	−	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	褐灰	褐灰	良好	−										
	76	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	瓦質土器	鉢	口縁部	中世	−	−	−	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	灰	灰	良好	−										
	77	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	土器	鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	連続刺突	明褐	明褐	やや不良	−	○	○		△						
	78	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	土器	甕	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	連続刺突	明黄褐	明黄褐	普通	−	○		○			○	○			市来式
	79	溝状遺構4号	D−25	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	貝殻刺突，刺突	にぶい橙	明褐	やや不良	−	○	○	○	△						市来式
	80	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	8.8	(3.3)	ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−	○	○	○				△	○		網代痕
43	81	溝状遺構7号	D−16	土師器	椀	底部	中世	−	7.4	(2.7)	ナデ	ナデ	−	浅黄橙	浅黄橙	良好	−				○						ススス
	82	溝状遺構7号	C−22	土師器	坏	底部	中世	−	−	−	ナデ	ミガキ	−	にぶい黄橙	黒	良好	−						○	○			内黒
	83	溝状遺構7号	−	土師器	皿	完形	古代〜中世	13.2	8.2	2.9	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	浅黄橙	浅黄橙	良好	−							○			ヘラ切り糸切り
	84	溝状遺構7号	C−21	土師器	皿	完形	中世	12.8	9.8	2.6	ヘラケズリ	ヘラケズリ	−	灰白	灰白	普通	精緻										糸切り

第６表　中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（２）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
43	85	溝状遺構7号	D−16	土師器	皿	底部	中世	−	8.4	(1.3)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	浅黄橙	橙	普通	−							○			糸切り
	86	溝状遺構7号	C−19 D−19	土師器	皿	底部	中世	−	11.0	(1.0)	回転ナデ 指頭圧痕	回転ナデ 指頭圧痕	−	赤橙	浅黄橙	普通	精緻						○				糸切り
	87	溝状遺構7号	C−21	土師器	皿	底部	中世	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	−	明褐灰	明褐灰	普通	−						○				糸切り
	88	溝状遺構7号	D−19	瓦質土器	擂鉢	完形	中世	32.8	17.6	10.2	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	褐灰	橙	良好	−										
	90	溝状遺構7号	C−23	瓦質土器	擂鉢	口〜胴部	中世	−	−	−	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	褐灰	褐灰	良好	−										
	91	溝状遺構7号	D−18	瓦質土器	擂鉢	胴部	中世	−	−	−	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	褐灰	褐灰	良好	−										
	93	溝状遺構7号	D−20	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	中世13〜14c	−	−	−	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	黄灰	黄灰	良好	−										
44	106	溝状遺構7号	D−17	土器	深鉢	口縁部	縄文時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線, 刺突	灰黄褐	黄灰	良好	−	○	○		○						曽畑式
	107	溝状遺構7号	D−18	土器	深鉢	口縁部(波状)	縄文時代	−	−	−	沈線	指ナデ	沈線	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	−	◎	○								指宿式
	108	溝状遺構7号	D−18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	条痕	沈線	灰黄褐	にぶい黄褐	良好	−	○	△				○				指宿式
	109	溝状遺構7号	D−16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	−	○	△		△						指宿式
	110	溝状遺構7号	D−16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	褐灰	黄灰	良好	−									○	指宿式
	111	溝状遺構7号	D−16	土器	深鉢	口〜胴部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	−	灰褐	にぶい褐	やや不良	−							○		○	指宿式
	112	溝状遺構7号	D−18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	貝殻刺突	橙	灰黄	やや不良	−	△	○		◎						市来式
	113	溝状遺構7号	D−16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ ミガキ	磨消縄文 沈線	灰白	灰白	良好	−	○		△							磨消縄文
	114	溝状遺構7号	D−17	土器	深鉢	胴部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	磨消縄文 沈線	オリーブ黒	灰	良好	−	○	○					○			磨消縄文
	115	溝状遺構7号	C−15	土器	深鉢	底部	縄文時代	−	−	−	−	指ナデ, 条痕	−	褐灰	褐灰	良好	−	○	○		○						指宿式 網代痕
	116	溝状遺構7号	D−20	土器	浅鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	ミガキ	ミガキ	−	灰	灰	良好	−	○	△								
	117	溝状遺構7号	−	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	不良	−	○	○		○						
	118	溝状遺構7号	D−17	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	褐	橙	普通	−		○	○			○				
	119	溝状遺構7号	C−23	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	橙	橙	やや不良	精緻		○	○							
45	120	溝状遺構7号	C−20 D−20	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	橙	橙	普通	−	○	◎					◎			
	121	溝状遺構7号	C−22	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	指頭圧痕 ヘラナデ	指頭圧痕 ヘラナデ	刻目突帯	褐灰	にぶい黄橙	良好	−		○							○	
	122	溝状遺構7号	C−21	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	灰黄褐	黄灰	良好	−	◎						◎			
	123	溝状遺構7号	C−19	土器	甕	口縁部	弥生時代前〜中期	35.0	−	(9.8)	ナデ	ナデ	刻目突帯	明褐	褐	普通	−		◎		○				○		
	124	溝状遺構7号	C−22	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや不良	−		○		○		○				
	125	溝状遺構7号	C−22	土器	甕	胴部	弥生時代	−	−	−	ナデ	指頭圧痕 ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	−	○	○		○						
	126	溝状遺構7号	C−22	土器	甕	胴部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	灰黄褐	良好	−	○	○								
	127	溝状遺構7号	C−22	土器	甕	胴部	弥生時代	−	−	−	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	−		◎		○				◎		
	128	溝状遺構7号	D−18	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	−	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	−	○	◎				△				
	129	溝状遺構7号	D−20	土器	壺	口縁部	弥生時代前期後半	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	内面突帯	にぶい黄橙	にぶい赤褐	良好	−		○								板付系 赤色顔料
	130	溝状遺構7号	C−19 D−19	土器	壺	口縁部	弥生時代	22.4	−	(4.2)	ナデ	ミガキ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	−		○		○	◎					
	131	溝状遺構7号	C−20 D−19	土器	壺	口縁部	弥生時代	34.6	−	(7.2)	ナデ, ミガキ	ナデ	刻目突帯	明黄褐	にぶい黄褐	良好	−	◎	◎		○		○				
	132	溝状遺構7号	C−23	土器	壺	胴部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	明黄褐	明黄褐	良好	精緻		○		○						
	133	溝状遺構7号	C−21	土器	甕	底部	弥生時代	−	8.0	(4.4)	ナデ	ナデ	−	橙	黒褐	良好	−	△	△					◎			
	134	溝状遺構7号	C−21	土器	甕	底部	弥生時代	−	7.0	(2.5)	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	−	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	−		○				◎				
	135	溝状遺構7号	D−18	土器	甕	底部	弥生時代	−	9.2	(3.8)	ナデ	ナデ	−	明褐	にぶい褐	良好	−	○	○		○						
	136	溝状遺構7号	D−18	土器	甕	底部	弥生時代	−	9.0	(5.0)	ナデ	ナデ	−	橙	灰白	普通	−	○	○	○				◎			
46	137	溝状遺構7号	C−22	土器	甕	底部	弥生時代	−	7.6	(3.6)	ナデ	−	−	灰黄	橙	良好	−		○	○						○	
	138	溝状遺構7号	D−16	土器	甕	脚部	弥生時代	−	8.0	(6.3)	工具ナデ	工具ナデ	−	灰白	にぶい黄橙	良好	−		◎		○		◎				
	139	溝状遺構7号	D−18	土器	甕	脚部	弥生時代	−	7.2	(8.0)	工具ナデ	ナデ	−	灰白	橙	普通	−		○		○						
	140	溝状遺構7号	C−21	土器	壺	底部	弥生時代	−	0.4	(2.5)	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	橙	良好	−	○	◎								
	141	溝状遺構7号	C−21	土器	甕	口縁部	古墳時代	−	−	−	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	−	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	−	○		○				◎			中津野式
	142	溝状遺構7号	C−21 D−22	土器	壺	胴部	古墳時代	−	−	−	ナデ	ナデ, ケズリ 指頭圧痕	刻目突帯	橙	にぶい黄橙	良好	−		◎		◎		○				
	143	溝状遺構7号	C−21	土器	甕	脚部	古墳時代	−	9.0	(5.3)	指頭圧痕 ナデ, ハケメ	指頭圧痕 ナデ, ハケメ	−	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	−	○	◎					○			
	144	溝状遺構7号	D−18	土器	丸底壺	底部	古墳時代	−	5.0	(3.6)	ナデ	指頭圧痕	−	褐	にぶい橙	良好	−	○	○								
	145	溝状遺構7号	C−21	須恵器	甕	胴部	古代	−	−	−	平行タタキ	同心円 あて具	−	黄灰	黄灰	良好	−										

第７表　中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（３）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
46	146	溝状遺構7号	C−22 C−23	須恵器	甕	胴部	古代	−	−	−	平行タタキ	同心円あて具→ナデ	−	にぶい褐	にぶい黄褐	良好	−										
	147	溝状遺構7号	C−16 C−17	須恵器	甕	胴部	古代	−	−	−	格子目タタキ	工具ナデ	−	暗灰黄	灰黄	−	−										
	148	溝状遺構7号	C−23	土製品	焼塩壺	底部	古代	−	−	−	ナデ	布目	−	にぶい橙	明黄褐	普通	−	◎					◎				
	149	溝状遺構7号	D−16	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	4.2	3.9	0.9	打ち欠きナデ	条痕	沈線	褐灰	黄灰	良好	−	○	○								指宿式
	150	溝状遺構7号	D−16	土製品	円盤形土製品	胴部	弥生時代	4.6	3.8	0.9	打ち欠きナデ	ナデ	−	褐灰	褐灰	良好	−		○								
	151	溝状遺構7号	D−16	土製品	円盤形土製品	胴部	弥生時代	4.7	4.6	0.9	打ち欠きナデ	ナデ	−	淡橙	橙	普通	−		○		◎						赤色顔料
48	161	溝状遺構8号	C−20	土師器	皿	胴～底部	中世	−	6.8	(1.0)	−	回転ナデ	−	にぶい橙	にぶい黄橙	普通	精緻							○			スス糸切り
	166	溝状遺構8号	B−23	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	−	−	−	ナデ	すり目	−	褐灰	褐灰	やや不良	−										
	167	溝状遺構8号	C−20	瓦質土器	擂鉢	胴～底部	中世	−	12.7	(5.3)	ヘラナデ	ナデ, すり目 指頭圧痕	−	黄灰	灰白	良好	−										
	168	溝状遺構8号	D−18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ 指頭圧痕	沈線	明褐	明褐	不良	−		○	◎	◎						出水式
	169	溝状遺構8号	D−16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	刺突	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	−	○	○	○							出水式
	170	溝状遺構8号	D−16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	にぶい黄褐	にぶい橙	良好	−	○	○						○		指宿式
	171	溝状遺構8号	C−22	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	褐	橙	普通	−	○	○		○						指宿式
	172	溝状遺構8号	C−22	土器	鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ミガキ	ナデ, ミガキ	沈線	灰黄	にぶい黄	良好	−	○	○		○						西平系
	173	溝状遺構8号	C−22	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	明赤褐	赤褐	良好	−	○	○		○		△				
	174	溝状遺構8号	C−21	土器	甕	口縁部	弥生時代	25.0	−	(4.3)	ナデ	ナデ 指頭圧痕	突帯, 沈線	明赤褐	明赤褐	良好	−		○		○						入来Ⅱ式
	175	溝状遺構8号	D−18	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	−		○		○			○			
	176	溝状遺構8号	C−22	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	指頭圧痕ナデ	ヘラナデ	−	浅黄橙	橙	普通	−	○	○								
	177	溝状遺構8号	C−20	土器	壺	胴部	弥生時代	−	−	−	ナデ, ミガキ	指頭圧痕ナデ	沈線	にぶい褐	褐	良好	−	○									
49	178	溝状遺構8号	C−22	土器	甕	底部	弥生時代	−	8.4	(3.3)	ナデ, ミガキ	ナデ	−	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	−	○	○		○						白色土
	179	溝状遺構8号	C−22	土器	甕	底部	弥生時代	−	8.8	(2.0)	ナデ	ナデ	−	明赤褐	にぶい黄褐	普通	−	◎	◎		○						白色土
	180	溝状遺構8号	−	土器	甕	口縁部	古墳時代	−	−	−	工具ナデ	指頭圧痕 工具ナデ	−	にぶい黄橙	橙	普通	−		○				◎				成川式
	181	溝状遺構8号	D−17	土器	甕	脚部	古墳時代	−	5.8	(5.3)	ハケメ	ナデ	−	灰白	灰	普通	−		○		◎						成川式
	182	溝状遺構8号	D−18	土師器	椀	底部	古代	−	9.6	(2.6)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	−						○	○			
	183	溝状遺構8号	C−22	土師器	椀	底部	古代	−	4.8	(1.7)	回転ヘラケズリ	ミガキ	−	にぶい黄橙	黒	普通	精緻							◎			
	184	溝状遺構8号	C−22	土製品	土錘	−	古代	5.9	3.1	−	ナデ 指頭圧痕	−	−	褐灰	にぶい黄橙	普通	精緻										
	185	溝状遺構8号	−	土製品	フイゴ	羽口	古代以降	−	−	−	−	−	−	褐灰	灰黄	−	−										
	186	溝状遺構8号	C−22	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	4.8	4.3	0.9	ナデ	ナデ	−	灰黄褐	浅黄	良好	−	○	○								側面打ち欠き→部分研磨
	187	溝状遺構8号	D−17	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	4.6	(2.7)	0.9	ナデ	ナデ	−	明褐	にぶい褐	良好	−	○	○	△							側面打ち欠き→部分研磨
	188	溝状遺構8号	C−22	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	3.4	3.3	1.0	ナデ 丁寧な整形	ナデ	−	黄橙	灰黄褐	普通	−		○		△			○			
50	191	溝状遺構11号	D−19	土器	甕	胴部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	灰黄褐	普通	−		○			○					
	192	溝状遺構11号	D−19	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	−	橙	橙	良好	−		○			○					赤色顔料
	193	溝状遺構12号	C−18	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	26.0	−	(8.6)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	沈線	灰	灰	−	−										
	194	溝状遺構12号	C−18	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	褐灰	褐灰	良好	−	○	◎								
	195	溝状遺構12号	C−18	土器	甕	胴部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい黄橙	やや不良	−		○			○			○		
	196	溝状遺構12号	C−18	土器	壺	肩部	弥生時代	−	−	−	ミガキ	ミガキ	貝殻刺突	褐	にぶい黄橙	良好	−	○						◎			
	197	溝状遺構12号	C−18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	灰褐	橙	良好	−		○			○				○	指宿式
51	198	溝状遺構13号	C−18	土師器	椀	底部	古代～中世	−	6.8	(2.2)	回転ヘラナデ	回転ヘラナデ	−	にぶい橙	黄灰	普通	−						○	○			内黒
	199	溝状遺構13号	C−17 C−18	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	10.6	(4.0)	ナデ	ナデ	−	橙	橙	やや不良	−	○		◎	◎						
	200	溝状遺構13号	C−17 C−18	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目	橙	橙	普通	−		○				○				
	201	溝状遺構16号	D−16	土器	鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目, 沈線磨消縄文	赤褐	赤褐	普通	−	○	○	○							
52	202	溝状遺構17号	C−17	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	−		○				○				
	203	溝状遺構17号	C−17	土器	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ミガキ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−		○				○				
	205	溝状遺構18号	C−16	土師器	皿	底部	中世	−	10.0	(1.1)	−	回転ヘラケズリ	−	にぶい黄橙	にぶい橙	普通	−							○			糸切りスス
	206	溝状遺構18号	B−16 C−16	土器	深鉢	胴部	縄文時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	褐	にぶい黄橙	良好	−				○						曽畑式
	207	溝状遺構18号	C−16	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	7.8	(1.6)	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	不良	−		○		○						

第８表　中近世遺構内出土遺物観察表（陶磁器類）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	備考
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
24	1	掘立柱建物跡5号	D－26	陶器	甕	胴～底部	薩摩焼	－	18.5	(5.8)	赤	灰釉	灰オリーブ	全面	薩摩苗代川	近世	
27	2	P3	D－27	青花	碗	口～胴部	染付	11.0	－	(3.6)	灰白	透明釉	灰白	口縁部	漳州窯	中世後半	
	3	P3	D－27	青花	碗	底部	染付	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	中世後期	
	4	P5	D－27	青花	皿	口縁部	小野碗B群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	14c後半～15c前	
	6	P7	C－26	青磁	皿	口～胴部	－	10.8	－	(2.0)	灰白	青磁釉	オリーブ灰	全面	龍泉窯系	中世	
	8	P9	D－29	磁器	碗	胴～底部	肥前系	－	3.9	(3.6)	灰	透明釉	灰白	全面畳付一部釉剥ぎ	肥前	近世	
31	31	土坑6号	C－23	磁器	碗	胴～底部	染付	－	5.3	(3.2)	灰白	透明釉	灰白	畳付以外	肥前	近世	
35	37	土坑4号	C－27 C－28	青磁	碗	口縁部	上田C類	17.0	－	(3.5)	灰白	青磁釉	オリーブ灰	全面	龍泉窯系	14c後半～15c前半	雷文帯ラマ式連弁
	38	土坑4号	C－27 C－28	白磁	碗	底部	森田D群	－	4.2	(1.5)	灰白	白磁釉	灰白	胴部下半	中国福建	中世後期	
	39	土坑4号	C－27 C－28	陶器	碗	底部	天目	－	4.0	(1.3)	灰白	黒釉	黒	内面	中国	中世	
36	47	土坑5号	C－24	青磁	皿	完形	－	11.0	3.8	2.4	灰白	青磁釉	灰オリーブ	高台露胎	中国	明代	
38	50	土坑8号	C－22 C－23	青磁	碗	完形	－	11.4	4.6	6.8	灰白	－	オリーブ黄	内)全面畳付高台内露胎	肥前	近世	
	51	土坑8号	C－22 C－23	青磁	碗	口～胴部	上田D類	15.2	－	(4.3)	褐灰	青磁釉	灰オリーブ	全面(残存部)	龍泉窯系	中世後期	
	52	土坑8号	C－22 C－23	青花	碗	胴～底部	小野碗D群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	－	中世後期	(下部欠損)
	53	土坑8号	C－22 C－23	陶器	鉢	底部	薩摩焼	－	17.8	(7.1)	赤褐	－	黒褐	全面	薩摩苗代川	17c～	貝目跡
39	59	溝状遺構2号	C－26	磁器	碗	胴～底部	－	－	6.0	(7.3)	灰白	－	明緑灰	全面	肥前	近世	
	60	溝状遺構2号	D－25 D－26	磁器	皿	完形	染付	14.0	5.0	3.6	灰白	透明釉	灰白	全面	－	近世～近代	
	61	溝状遺構2号	D－25 D－26	陶器	壺	口～胴部	－	12.0	－	(5.9)	灰黄褐	灰釉	にぶい黄	外面	－	近世	
	62	溝状遺構2号	D－25 D－26	磁器	香炉	口～胴部	－	7.2	－	(2.1)	灰白	緑釉	灰オリーブ	口～胴部内)口縁	肥前	近世	
	63	溝状遺構2号	D－25 D－26	陶器	擂鉢	口～胴部	薩摩焼	32.4	－	(6.0)	赤	鉄釉	浅黄	口縁部	薩摩苗代川	近世～近代	
41	71	溝状遺構4号	C·D·E－24·25	陶器	茶道具	底部	－	－	12.5	(4.9)	褐灰	鉄釉	にぶい黄褐	全面	薩摩苗代川	近世	
	72	溝状遺構4号	C·D·E－24·25	陶器	壺	胴～底部	－	－	16.0	(13.0)	赤 赤灰	褐釉	灰黄褐	全面	薩摩苗代川	近世	底に貝目跡
	73	溝状遺構4号	C·D·E－24·25	青磁	碗	口縁部	上田D類	－	－	－	灰白	青磁釉	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	中世	
	74	溝状遺構4号	C·D·E－24·25	青花	碗	口～胴部	小野碗C群	14.6	－	(5.0)	灰白	透明釉	明緑灰	口～胴部	中国	15c末～16c中	
43	89	溝状遺構7号	C－19 D－19	陶器	擂鉢	口縁部	備前	－	－	－	灰	褐釉	灰褐	口唇部	備前	中世	
	92	溝状遺構7号	D－16	陶器	擂鉢	胴～底部	備前	－	10.6	(5.4)	橙	－	－	－	備前	中世	
	94	溝状遺構7号	C－20	陶器	甕	肩部	常滑	－	－	－	褐灰	自然釉	緑灰	－	常滑	中世	
	95	溝状遺構7号	D－20	陶器	壺	胴部	古瀬戸	－	－	－	灰	－	灰オリーブ	－	瀬戸	中世	
	96	溝状遺構7号	C－21	陶器	－	胴部	－	－	－	－	灰	緑釉	暗オリーブ	胴部	中国	中世	
44	97	溝状遺構7号	D－16	陶器	瓶	胴部	古瀬戸	－	－	－	明褐灰	自然釉	明オリーブ灰	表全面裏底部	瀬戸	中世	
	98	溝状遺構7号	C－20	青磁	碗	胴部	碗Ⅳ類	－	－	－	灰	－	灰白	口～胴部	中国	14c	
	99	溝状遺構7号	C－20	青磁	碗	底部	碗Ⅳ類	－	5.2	(1.6)	にぶい橙	青磁釉	灰黄	高台内面露胎	中国	14c以降	
	100	溝状遺構7号	C－22	青磁	碗	胴～底部	Ⅳ類	－	5.6	(3.0)	灰白	青磁釉	灰白	高台内面一部露胎	龍泉窯系	中世後半	
	101	溝状遺構7号	C－21	青磁	碗	底部	碗Ⅳ類	－	6.6	(3.0)	灰白	－	オリーブ灰	外面内面	龍泉窯系	14c初～中	
	102	溝状遺構7号	C－23	青磁	碗	底部	碗ⅣE類	－	7.0	(3.2)	灰白	－	オリーブ灰	高台内面露胎	龍泉窯	14c～	
	103	溝状遺構7号	C－21	青磁	盤	胴部	－	－	－	－	灰白	青磁釉	オリーブ灰	全面	龍泉窯系	明代	
	104	溝状遺構7号	D－20	青磁	皿	底部	同安窯系皿Ⅰ－1d	－	4.4	(0.8)	褐灰	透明釉	灰	体部下～底部露胎	同安窯系	12c中～後	
	105	溝状遺構7号	C－15	白磁	皿	胴～底部	皿Ⅸ類	－	7.7	(3.0)	灰白	－	灰白	全面	中国(景徳鎮)	13c後半～14c前半	
48	158	溝状遺構8号	C－23	磁器	碗	完形	－	11.4	4.3	6.5	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前	近世	
	159	溝状遺構8号	C－22	磁器	碗	口～胴部	染付	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	口～胴部	肥前	近世	
	160	溝状遺構8号	B－22 C－23	陶器	皿	底部	－	－	4.8	(1.6)	灰白	透明釉	浅黄	全面	肥前	近世	
	162	溝状遺構8号	C－22 C－23	青磁	碗	口～胴部	上田D類	15.8	－	(4.0)	灰	青磁釉	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	14c後半～15c前半	
	163	溝状遺構8号	C－21	青磁	碗	口～胴部	碗Ⅱ類	－	－	－	灰オリーブ	青磁釉	オリーブ黄	口～胴部	龍泉窯系	13c初～前半	
	164	溝状遺構8号	C－22	青磁	碗	口～胴部	上田B類	－	－	－	灰	青磁釉	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	15c	
	165	溝状遺構8号	C－22	青花	碗	底部	小野碗C群	－	5.6	(2.1)	灰白	透明釉	灰オリーブ	全面	中国	15c末～16c前	

第９表　中近世遺構内出土遺物観察表（縄）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	器種	材質	法量(cm)			備考
						最大長	最大幅	重量(g)	
60	208	道跡1	E−9	縄	シュロ	−	0.70	−	試料No 69

第10表　中近世遺構内出土遺物観察表（木製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	器種	樹種	法量(mm)			備考
						最大長	最大幅	最大厚	
31	34	土坑9号	C−17	曲物	スギ	12.5	12.1	0.7	試料No 86
60	209	道跡2	−	杭	マツ属複維管束亜属	6.6	5.9	4.9	(遺構)東西杭列
	210	道跡2	E−8･E−9	杭	マツ属複維管束亜属	71.0	6.6	5.4	(遺構)東西杭列
	211	道跡2	−	杭	マツ属複維管束亜属	103.2	5.3	4.9	
	212	道跡2	−	杭	アカマツ	147.9	6.4	6.6	
61	213	道跡2	−	杭	アカマツ	155.0	6.0	5.9	
	214	道跡2	E−9	杭	マツ属複維管束亜属	45.6	4.5	3.7	
	215	道跡1	E−9	杭	ツバキ属	63.3	4.2	3.7	
	216	道跡2	F−10	杭(丸太)	マツ属複維管束亜属	158.0	18.2	16.8	
62	217	道跡1	E−9	杭(粗朶？)	マツ属複維管束亜属	164.0	80.0	4.5	
	218	道跡1	E−9	杭	マツ属複維管束亜属	121.6	7.3	6.0	
	219	道跡1	E−8･E−9	粗朶(杭)	−	52.7	4.2	4.2	
	220	道跡1	E−9	杭	−	75.1	6.4	6.4	
63	221	道跡3	−	杭	−	192.5	8.2	5.2	
	222	道跡2	E−8	横板	マツ属複維管束亜属	64.3	16.9	4.5	
	223	道跡2	E−8	横板	マツ属複維管束亜属	62.8	19.2	5.6	
	224	道跡2	E−8	板	マツ属複維管束亜属	64.7	36.3	8.0	
64	225	暗渠	E･F−9･10	配水管	竹	114.6	5.8	5.8	

第11表　中近世遺構内出土遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	記載番号	遺構名	出土区	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
30	30	土坑7号	C−23	打製石斧	ホルンフェルス	(8.60)	(5.30)	1.60	93.76	
35	45	土坑4号	C−27･C−28	石鏃	黒曜石(腰岳)	(2.15)	(1.50)	0.30	0.64	
	46	土坑4号	C−27･C−28	石鏃未製品	黒曜石(上牛鼻)	2.15	1.75	0.55	1.68	
36	49	土坑5号	C−29	石鏃	黒曜石(腰岳)	(1.60)	(1.60)	0.40	0.73	
38	56	土坑8号	B−22･B−23	軽石製品	軽石	12.20	8.65	6.30	169.00	
	57	土坑8号	C−22･C−23	軽石製品	軽石	11.30	7.85	5.35	102.45	
40	65	溝状遺構5号	B−24	石鏃	黒曜石(腰岳)	1.35	(1.20)	0.20	0.29	
	66	溝状遺構5号	B−24	石鏃	黒曜石(腰岳)	(0.90)	0.95	0.20	0.13	
	67	溝状遺構5号	B−24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	2.10	2.30	0.70	2.86	
	68	溝状遺構5号	B−24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	1.75	1.30	0.35	0.74	
	69	溝状遺構5号	B−24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	1.80	1.15	0.55	1.05	
	70	溝状遺構5号	B−24	敲石	輝石安山岩	6.50	6.00	4.30	234.72	
47	152	溝状遺構7号	D−16	打製石鏃	黒曜石(腰岳)	1.41	1.42	0.30	0.53	
	153	溝状遺構7号	D−20	打製石斧	ホルンフェルス	12.30	8.60	1.80	183.82	
	154	溝状遺構7号	C−23	磨石	砂岩	6.10	8.40	4.25	328.92	
	155	溝状遺構7号	C−20	軽石製品	軽石	12.15	9.60	4.90	165.27	
	156	溝状遺構7号	C−21	軽石製品	軽石	15.55	11.20	5.75	235.13	
	157	溝状遺構7号	D−16	石製品	輝石安山岩	19.80	18.90	9.60	3,340.00	
50	189	溝状遺構10号	C−21	磨敲石	砂岩	12.90	12.20	6.30	1,510.00	
	190	溝状遺構10号	D−16	敲石	玉髄	4.75	4.90	3.70	114.25	
52	204	溝状遺構17号	C−16	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	1.65	(1.70)	0.55	1.01	

第２節　遺物

１　遺物の出土状況及び分類方法

古代から近世に属する遺物を包含するのは，基本的にⅡ層である。しかし，調査区域には撹乱や削平によりⅡ層は存在しない範囲もあった。従って，遺物が全く出土しないグリッドがあるなど出土状況には偏りが生じている。また，調査区域により土層の堆積状況が一定しないことによりⅡ層を分層して調査を進めた年度もあった。そこで，報告書を作成するにあたり，低湿地部分の一部を除いては標準土層の見直しを行い，古代から近世に属する遺物の包含層はⅡ層に統一した。古代・中世・近世の遺物の出土状況については第66・67図に時期毎に示した。

遺物は古代（８世紀～11世紀），中世（11世紀後半～16世紀），近世（17世紀～19世紀後半）に分け，詳細な分類は時代毎に記載する。

２　近世

近世の遺物は，Ⅱ層及び表土・撹乱からの出土である。ここでは17世紀～19世紀後半（江戸時代）のものを報告する。近世の遺物の出土状況は全体的にはまばらであるが，Ｅ・Ｆ－８区と29区ではまとまって出土している。Ｅ・Ｆ－８区の出土状況は，道跡２とほぼ重なる。Ｅ・Ｆ－８区の調査は土木遺構の検出以前であったため，出土した遺物は包含層出土として取り扱い，土木遺構との関連を想定せずに調査を進めた。報告書を作成する段階において再検証を行ったが，その関連性を明確にすることはできなかった。道跡２の造成土からの出土の可能性もあることも記しておきたい。29区にも遺物の集中域が見られるが，詳細については不明である。

（１）磁器（第68図226～232）

碗

226～230は，碗である。体部が緩やかに膨らみながら口縁部に至る器形をもつ。226は，畳付を欠損するものである。外面と見込みに草花文を描く。外面には５条，内面には３条の界線を巡らせる。227は底部片で，高台が外に開く器形をもつ。外面と見込みには，力強い草花文が描かれる。内外面とも施釉が不十分な部分が窪み状に点在する。228の口縁端部は外反し，外面にはロクロ引きの稜線が明瞭に残る。内面には草花文が印刻される。229の口縁部は，体部と比べて器壁が薄くなる。230は無文で，口縁部は直口気味に立ち上がり，底面中央部が厚くなる。高台は露胎するが，一部釉垂れがある。見込みには砂粒が付着する。外面は緑灰色，内面には灰白色の釉がかかる。226・227・229・230は肥前系磁器で，228は波佐見焼と考えられる。

その他

231は小杯で，腰部がやや張る器形をもつ。体部の器壁は均一さを欠く。高台畳付から高台内面にかけて釉はぎが行われる。外面に唐草文，見込みに草花文が描かれ，高台内面には「福」の字を書く。また，高台内面には朱が付着しているのが観察できる。肥前系と考えられる。

232は仏飯具で透明釉がかかり，脚部中位から下半は露胎する。内野山窯産と考えられる。

（２）陶器（第68図233～246）

碗・皿

233～236は，碗である。233は，白色釉を全面に施す。口縁がゆがみ，やや前傾気味となる。口唇部は溝縁状を呈し，体部には段をつける。底部の器壁は厚く，高台中央部は盛り上がる。透明釉がかかり，内面には貫入が入る。見込みには目跡が輪状に残る。肥前系と考えられる。234は，黒褐色釉を施す天目碗の口縁部である。内面には緩い段を付ける。肥前産と考えられる。235は，苗代川産の碗の底部である。畳付に砂目が３か所あり，見込にも目跡が３か所残る。腰部で強く屈曲し，その内面には段を設け，見込みには白色釉で草花文を描く。236も苗代川産である。腰部から口縁部にかけては直行し，その端部は軽く外反する器形をもつ。外面底部付近まで黒褐色の釉を施す。高台は低く，畳付には砂目が残る。

237・238は内野山窯産の皿で，腰部がやや張り出す。外面には透明釉，内面には青釉が施されるが，外面にも一部青釉が及ぶ。高台と一部腰部が露胎する。見込みに蛇の目釉剥ぎを施し，そこに砂目が残る。いずれも同じような器形，口径，底径ではあるが，237は器高４㎝，238は器高3.3㎝と違いがある。

鉢・片口・土瓶

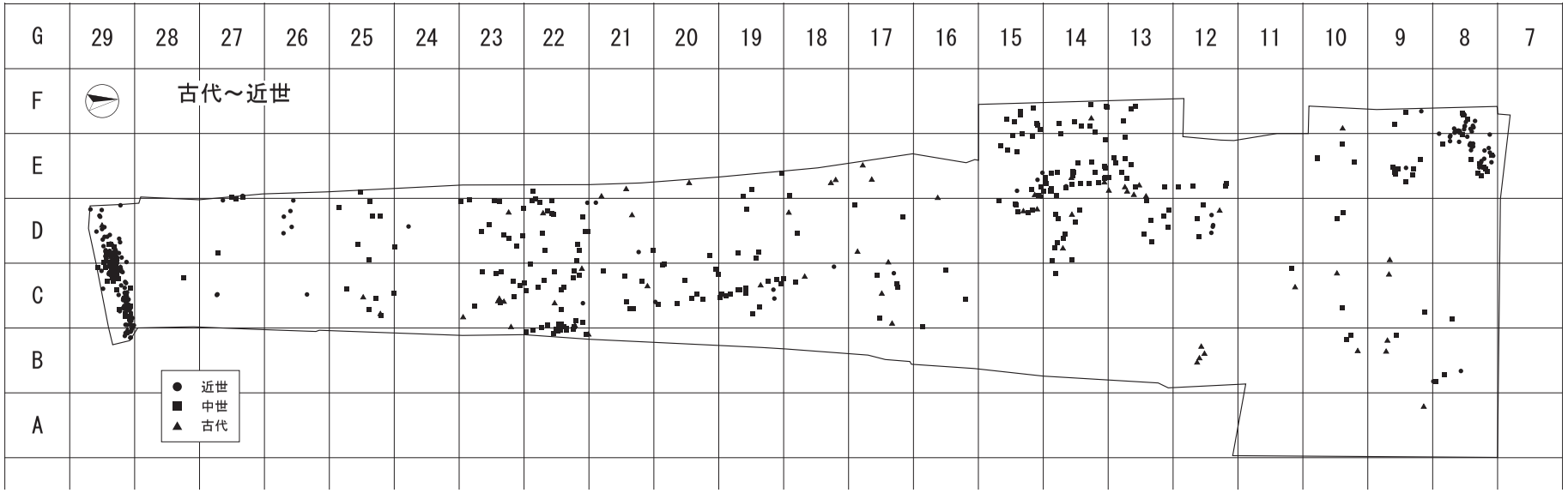
239～242は，苗代川産の鉢である。239の口唇部は釉剥ぎを行い，底部から胴部の屈曲部付近には貝目跡が１か所残り，底部中央部分が凹む。釉薬のかかり具合は濃淡がある。240は底部から胴部にかかる破片で，239と同一個体の可能性も考えられる。241は屈曲部を作りながら口縁部が大きく外反し，その端部は玉縁状に近い。内外面とも褐釉を施すが，胴部は部分的に露胎する。内面に白化粧土で印花を行う。鉢に分類したが，盤の可能性も考えられる。242は粘土を貼り付けて幅広い口唇部に仕上げ，その口唇部に釉はぎを行う。底部には目跡が２か所残る。

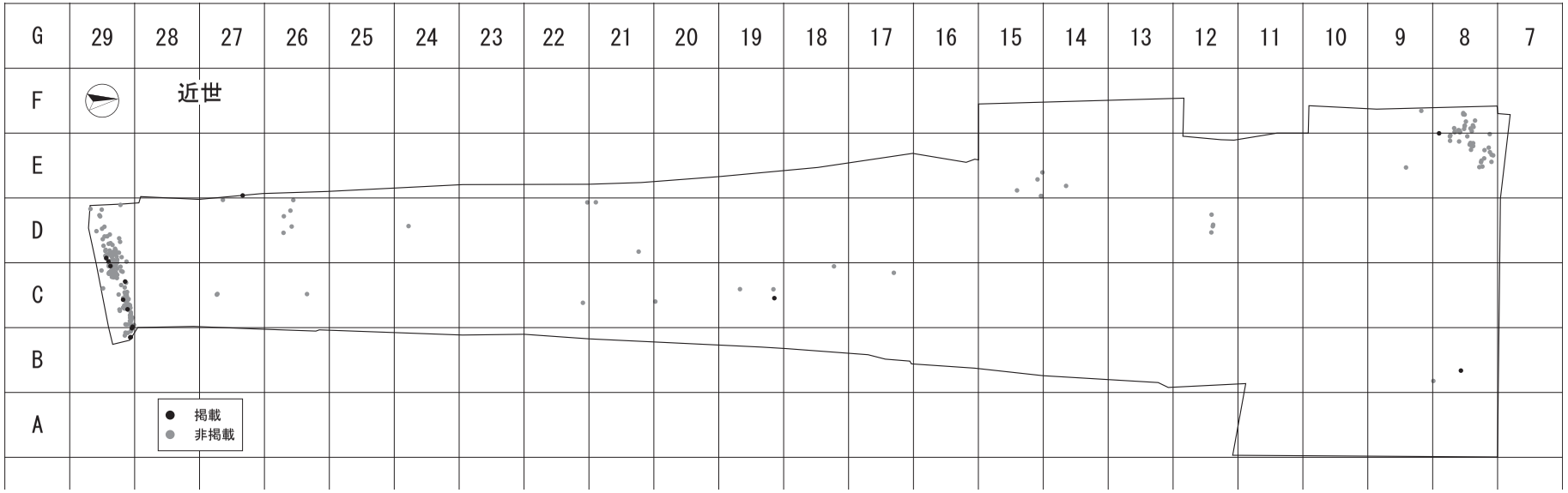
243は，苗代川産の片口である。粘土を貼り付け幅広く仕上げた口唇部には筋状に釉剥ぎが行われる。

244・245は，ともに苗代川産の土瓶の底部である。いずれも胴部中位から底部にかけて筋状のロクロ痕が多く残る。底部は，やや上げ底気味となる。円錐状の粘土を胴下部に貼り付け，脚とする。体部中位まで褐色釉を施す。

その他

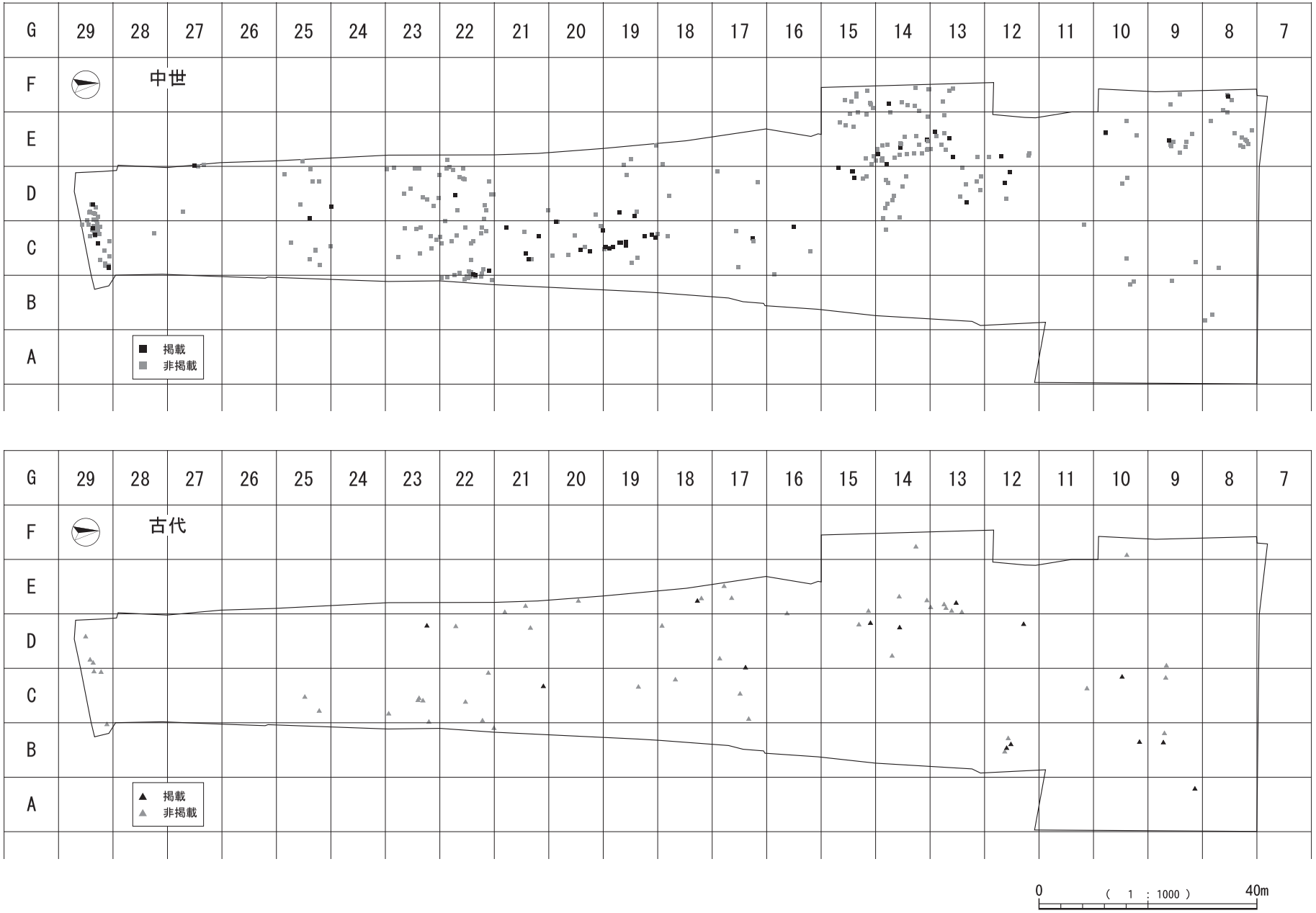
246は，内野山窯産の仏飯具である。青釉が施されているが，二次焼成を受け，外面が白色化する。



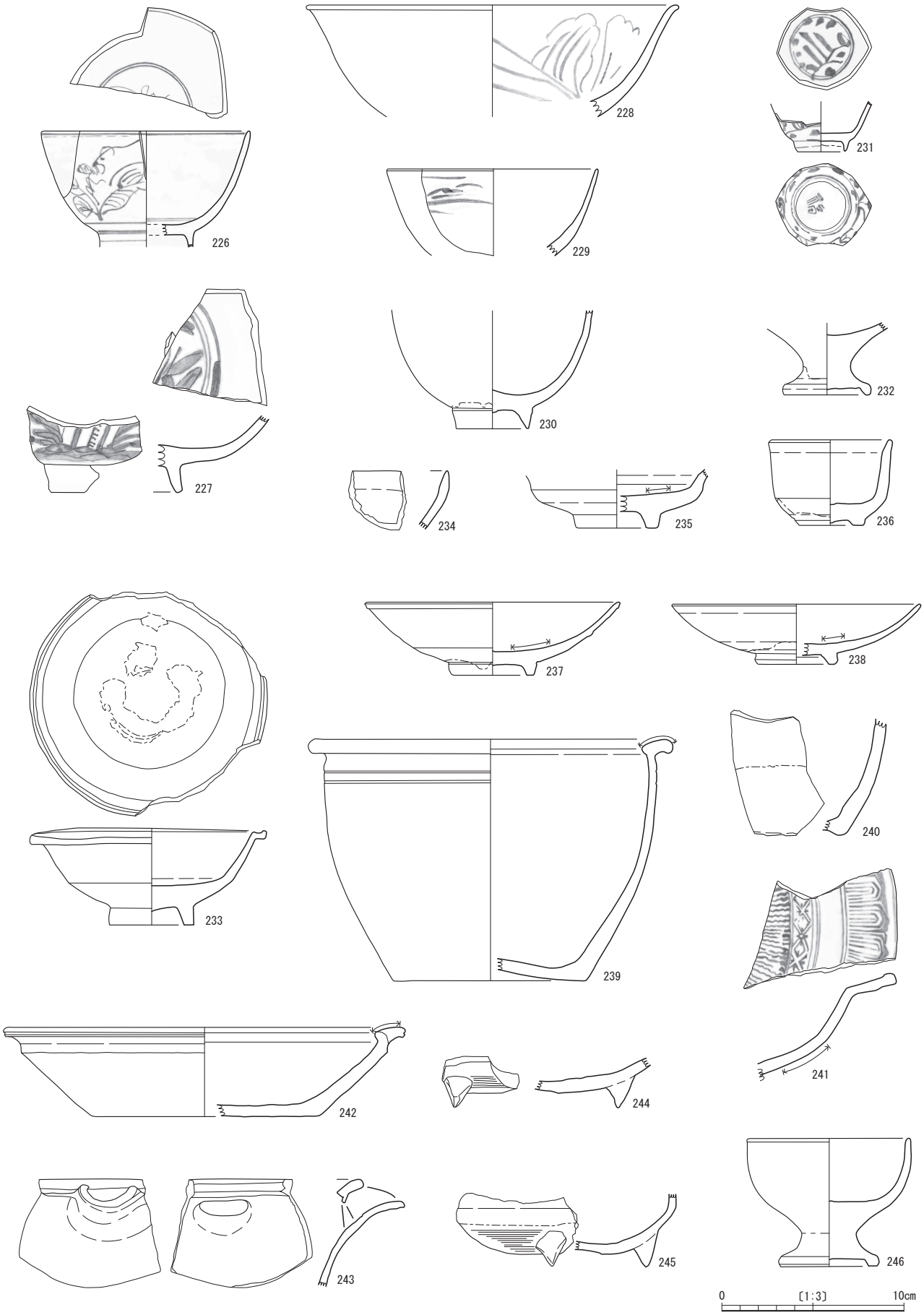


0 (1 : 1000) 40m

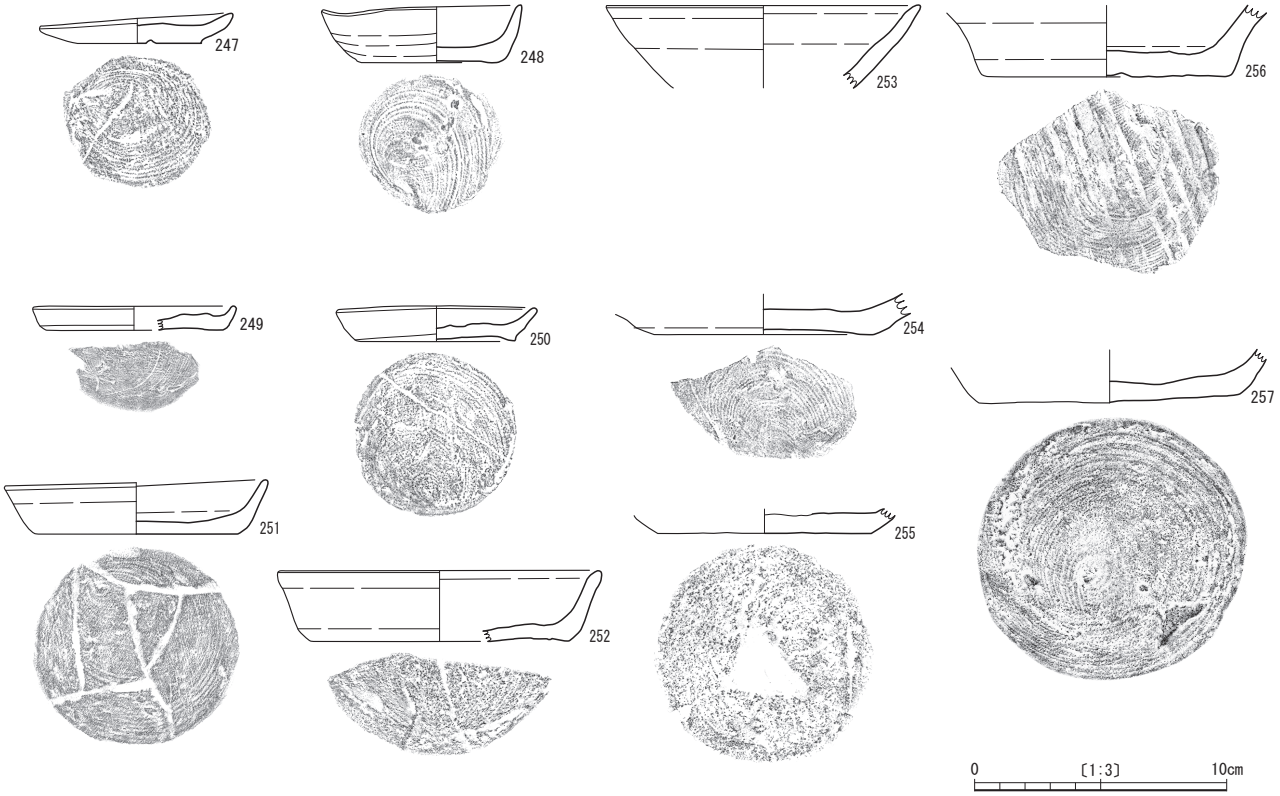
第66図　遺物出土状況図（1）



第67図　遺物出土状況図（２）


226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
0
〔1:3〕
10cm

第68図　近世の遺物



第69図　中世の遺物（１）（土師器）

３　中世

中世の遺物もⅡ層を包含層とする。遺物出土状況は全体的にまばらであるが，その中でもＤ～Ｆ－13～15区，Ｃ・Ｄ－19～23区，Ｃ・Ｄ－29区に集中域が見られる。11世紀後半から16世紀の資料を中世の遺物として報告する。分類方法としては，土師器，輸入磁器，国内産陶器，土師質土器，滑石製品，石製品，古銭，木製品に大分類し，さらに種別や産地，器種を考慮して細分類した。土師器は，底部の切り離しが糸切りの資料を中世土師器として取り扱った。輸入磁器は青磁，白磁，青白磁，青花に分類し，器種毎に分類した。ただし，古代（平安時代末：８～10世紀）に該当する越州系青磁は，中世の青磁の中で報告する。青花についても中世の遺物として取り扱った。

（１）土師器（第69図247～257）

247～257は，底面糸切りの土師器皿である。247～250は，小型の皿である。247は口径7.7cm，底径5.0cm，器高1.2cmを測り，器形はかなりいびつである。248は口径7.9cm，底径5.4cm，器高2.3cmで，口縁がややいびつである。胎土が明るい橙色を呈し，内面に白色土や，やや赤色化する部分が見られる。249は口径8.0cm，底径7.2cm，器高0.9cmを測りかなり浅く，内面は３段のヘラケズリを行う。250は口径8.0cm，底径6.2cm，器高1.4cmで内面に薄くススが残存する。灯明皿に使用されていたと考えられる。

251～255は，中型の土師器皿である。251は，口径10.4cm，底径8.0cm，器高2.2cmを測る。胎土が灰白色を呈し，精緻である。口縁部の一部は，黒色化する。252は口径12.8cm，底径10.2cm，器高2.8cmを測り，内外面とも摩耗する。253は口径12.4cmで，底部を欠損する。口縁部は，逆「ハ」の字に開く。254は底径8.6cmを測り，灰色を呈する須恵質の土師器である。底部は不定形で分厚い作りである。255は底径8.4cmを測り，内外面及び割れ面にススが付着することから二次焼成を受けたと考えられる資料である。

256・257は，大型の土師器皿である。256は底径9.8cmを測り，見込みと底面にススが付着する。底面には幅７～８㎜の板目跡が残る。257は底径10.3cmを測り，底部のみが残る資料である。

（２）輸入磁器（第70・71図258～318）

青磁

258・259は，福建省産もしくは越州窯系と考えられる碗である。258は，外面口縁部下位まで施釉し以下は露胎すると考えられる。Ａ期（８世紀末～10世紀中頃）に比定される。

260～263は，大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（Ｅ

期：13世紀初頭～前半）に比定されるものである。260～262は，Ⅱｂ類で外面に稜を持つ縞連弁文である。260は，口径16cmを測る。262は底径5.6cmを測り，高台は幅広で低く，畳付から高台内面は露胎する。見込みに幾何学文の草花文を描く。263は，Ⅱｃ類の龍泉窯産の碗である。底径5.4cmを測り，高台は幅広で低く，畳付から高台内面が露胎する。外面に連弁，見込みにスタンプ印花文を描く。

264～267は，大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類（Ｇ期：14世紀初頭～中頃）に比定されるものである。264は，Ⅳｅ類の粗製で底径5.0cmを測る。畳付から高台内にかけて露胎し，高台外端部は面取し，角高台を呈する。高台と腰部の境はやや凹み，高台内中央部は凸部がある。見込み境に圏線を入れる。265は粗製のつくりで，Ⅳ類以降のものである。底径は，4.8cmを測る。畳付から高台内にかけて露胎し，角高台となる。見込み境に圏線を入れ，見込み中央及び高台内中央部が盛り上がる。高台は外に開く。266は底径6.4cmを測り，高台内を輪状に掻き取る。見込みに草花文様の印文を行い，高台は釉が厚くかかり，丸みをおびる角高台となる。267は，高台が欠損する。器形は判然としないが，Ⅳ類以降と考えられる。見込みに草花文様の印文を行い，高台内に墨書のような墨跡が残る。

268・269は，上田分類のＢ類（15世紀以降）に比定されるものである。外面に連弁文を有する碗である。268は上田Ｂ２類もしくはＢ３類で，高台が欠損する。見込みの境に圏線を入れる。269は，上田Ｂ３類もしくはＢ4類の体部片である。釉薬はオリーブ色を呈し，外面は細連弁文が施される。

270・271は，上田分類のＣ類（14世紀以降）に比定されるものである。270は上田Ｃ4類と考えられ，ラマ式蓮弁と考えられる文様が施される。16世紀の可能性もある。271は上田Ｃ2類で，高台内面を釉剥ぎする。

272・273は，上田分類のＤ類（14世紀～15世紀）に比定されるものである。口縁部が外反し，高台内面が露胎するものである。272は，上田Ｄ２類で無文である。273は外面に蓮弁文を施し，高高台で端部を広く面取する。口縁部が欠損するため他の分類に含まれる可能性もある。

274・275は，元代までの皿である。274は福建省産と考えられる元代の皿で，龍泉窯系Ⅳ類に比定されるものである。口縁部が外反し，体部下半を露胎する。275は大宰府分類の龍泉窯系青磁皿のⅣ類（Ｇ期：14世紀初頭～中頃）に比定され，底径６cmを測り，畳付は砂粒がよく付着し，釉剥ぎを行う。見込みには菱形を描く。

276・277は，口縁部が外反する明代の稜花皿である。276は口径12cm，底径６cm，器高2.9cmを測り，口縁部が1/4以上残存する。高台は厚く釉がかかり，畳付に３か所の膨らみをもち，高台内面を輪状に掻き取る。体部外面に唐草文，内面に草花文を施す。277は，口縁部内面に２条の界線を引く。

278・279は，坏である。278は口縁が外反し，内外面にヘラ彫りが施される。底部を欠損するが碁笥底と考えられる。279は，口縁部を平坦に仕上げる。外面には蓮弁文を施す。

280～287は，明代の盤である。280～282は，口縁部の鍔が上方に向いた盤である。280は，福建省産の盤である。281・282は口縁部の内面に明瞭な段をもち，その下位にヘラ彫りが施される。283は口縁が稜花を呈する盤で，口縁部内面直下に界線１条を施す。284～287は，底部である。284は低い高台をもち，高台内面に粘土が一部付着する。福建省産の可能性もある。285・287は，碁笥底である。285は見込みに草花文様のスタンプ印文を薄く施し，高台内面を円上に掻き取り露胎する。286はⅣ類以降の福建省産の盤で，見込みに草花文様を薄く施す。高台内面を輪状に掻き取り露胎する。287は内面にヘラ彫りを行い，高台内面を輪状に掻き取り露胎する。二次焼成を受けたと考えられる。

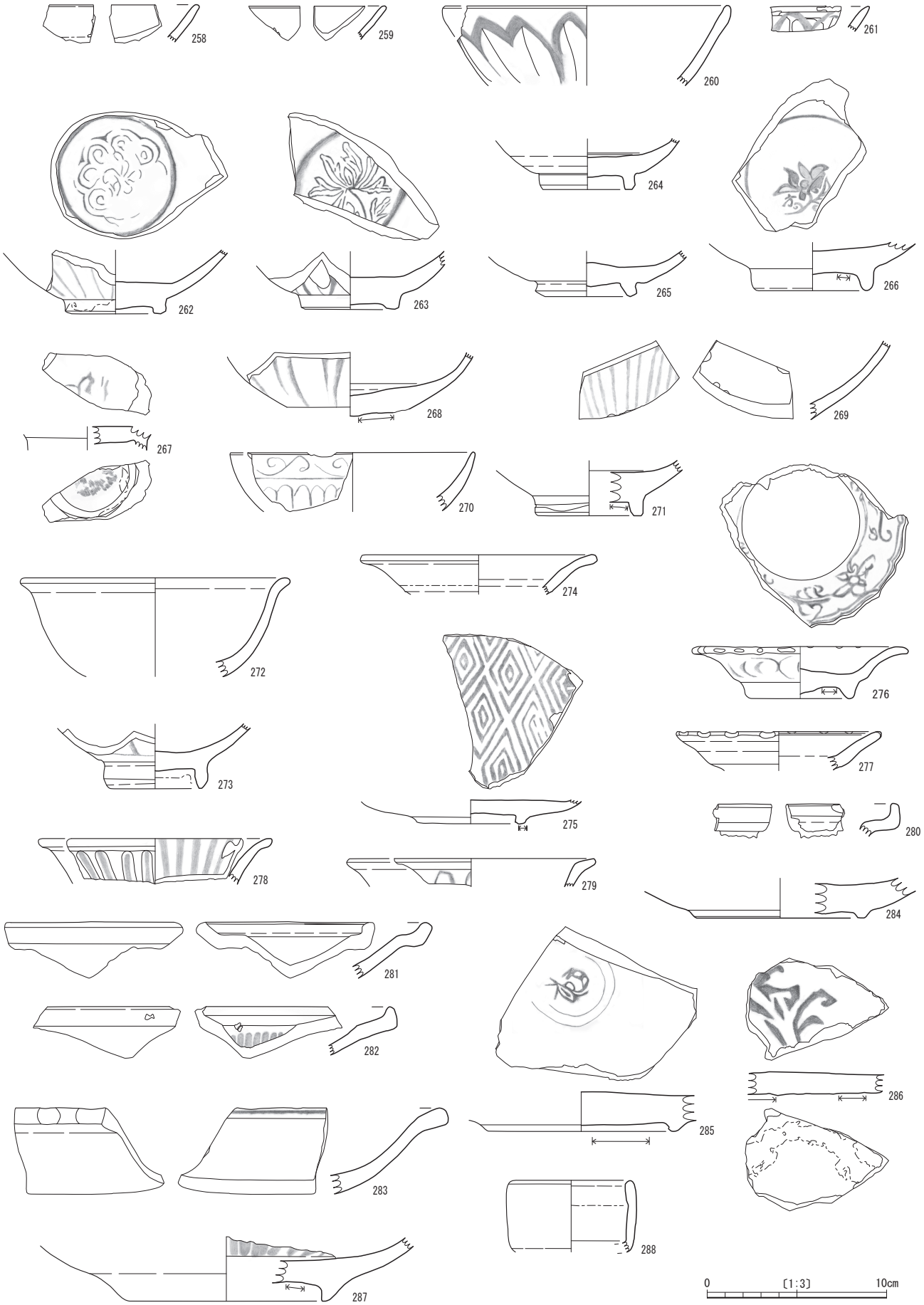
288は，龍泉窯系の香炉である。口径6.7cmを測り，内面口縁部下位まで施釉する。

白磁

289は，大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（Ｃ期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。肉厚で玉縁状の口縁をもつ。粗製で不良品と考えられる資料である。290は，大宰府分類の白磁碗Ⅴ類（Ｃ期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。口縁部は，水平あるいは水平に近い角度で外反する。291は，大宰府分類の白磁碗Ⅵ類（Ｃ期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。口径12.8cmの中型碗で，器高は低く浅形を呈する。口縁部は，弱く外反する。292は，大宰府分類の白磁碗Ⅸ類（Ｆ期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。口縁部周辺の釉を掻き取るいわゆる口禿の碗である。

293は，ビロースクタイプⅢ類（14世紀初頭～15世紀）の碗である。口径16.4cm，底径5.2cm，器高7.0cmを測り，口径に対し底径が小さい。口縁部は弱く外反し，高台は直立する。体部下位まで施釉し，見込みに圏線と草花文のスタンプ印文を弱く施す。

294～296は，14世紀～15世紀の元代までの碗である。294は底径7.8cmを測り，高台は低い角高台で，外面は露胎する。見込みに草花文のスタンプ印文を施す。295は底径６cmを測り，体部下半を露胎し，低い高台を持つ。見込みを輪状に掻き取る。粗製のつくりである。296は底径5.4cmを測り，高台を粗雑につくる。外面は釉垂れがみられ，体部中位まで施釉する。見込みに菊花文のスタンプ印文を施す。



第70図　中世の遺物（２）（青磁）

297～300は，森田分類の白磁皿Ｄ群（14世紀後半～15世紀前半）に比定されるものである。体部下半を露胎する。297は口径7.6cm，底径３cm，器高３cmを測り，口縁がやや内湾する。298は底径4.4cmを測り，見込みを輪状に掻き取る。299は底径4.2cmを測り，高台が低い。300は底径4.4cmを測り，高台に４か所の抉り込みをおこなう。高台内面に「一」の墨書をし，その上に重ねて朱書きをおこなう。

301～304は，森田分類の白磁皿Ｅ群（15世紀～16世紀）に比定されるものである。301・302は，口縁部が外反する。301は，口径10.2cm，底径5.5cm，器高2.5cmを測る粗製のものである。高台内面は露胎し，高台が一部欠損した状態で釉薬をかけて製作している。302は口径8.9cm，底径４cm，器高２cmを測り，体部下位を露胎し，見込みを輪状に掻き取る。303・304は，稜花皿である。303は，口径12cmを測る景徳鎮系の稜花皿である。304は内外面を花弁状に削り出し，立体的な造形をもつ菊皿である。

305・306は，森田Ｄ群の白磁坏である。胴部が八角形を呈する多角坏で，高台に４か所の抉り込みを行い，体部下半を露胎する。305は見込みに３か所の目跡が残り，高台畳付に３か所釉薬が付着する。306は口径８cm，底径3.5cm，器高3.2cmを測り，見込みに２か所の目跡が残り，高台畳付に２か所釉薬が付着する。高台内面に「小」を墨書する。

青白磁

307は，型作りによる合子の身である。受け部は露胎し，外面に菊花文を施す。

青花

308～310は，小野分類の青花碗Ｂ群（Ｈ期：14世紀中頃～15世紀前半）に比定されるものである。口縁部が外反する端反りの碗である。308は，口唇部が欠損する。外面唐草文，口縁内面に界線，見込みに芭蕉葉文を施す。内外面に釉溜まりが見られ，畳付から高台内面にかけては一部露胎する。二次焼成を受けたと考えられる。309は口縁内外面に界線，外面に草花文を施す。310は口縁内外面に２条の界線，外面に唐草文を施す。口縁部は強く外反する。

311～313は小野分類の青花碗Ｃ群（15世紀～16世紀中頃）に比定されるもので，いわゆる「蓮子碗（レンツー碗）」である。311は粗製で，内外面に釉溜まりが多く見られる。外面に芭蕉葉文，見込みに梵字を施す。見込みが緩やかに盛り上がっているが，外面に芭蕉葉文を施すためＣ群に含めた。312は見込みに花卉文を施し，畳付は釉剥ぎする。313は，粗製で畳付が欠損する。外面に簡略化された芭蕉葉文，見込みに草花文が描かれる。

314は小野分類の青花碗Ｅ群（Ｋ期：16世紀中頃～17世紀前半）に比定されるもので，粗製で釉薬のかからない部分が複数か所見られる。口縁内外面に界線を施し，外面に簡易な唐草文を描く。

315～317は小野分類の青花皿Ｃ群（15世紀～16世紀中頃）に比定されるもので，碁笥底をもつ皿である。315は外面に芭蕉葉文を描き，口縁がやや内湾気味である。316は見込みに草花文を描き，体部下半を露胎する。317は，見込みに文字を記す。

318は分類できなかった皿で，16世紀代と考えられる。外面に唐草文を描き，体部下半及び見込みは露胎する。

（３）国内産陶器（第72図319～323）

古瀬戸

319は，古瀬戸の瓶子の底部と考えられる。胎土は灰白色を呈し，外面及び見込みに灰オリーブ色の釉薬をかける。

常滑焼

320・321は，常滑焼の甕である。320は胎土は暗灰色を呈し，白色砂粒・石英を多く含む。口縁部は「Ｎ」字状を呈し，口縁帯は2.7cmを測る。６ｂ型式（13世紀後半～14世紀）に比定される。321は，甕の肩部と考えられる。胎土は灰褐色を呈し，内外面無釉で焼締めである。

備前焼

322・323は，備前焼の擂鉢である。胎土は明赤褐色・灰褐色を呈し，口縁部上角と下角の突出が強く，口縁内面と口縁外面中央に屈曲部をもつ。322は，１単位６条のすり目が放射状に施される。口縁帯中央に浅い凹みを有する。15世紀代と考えられる。323は，内面ににぶい赤褐色を呈する釉薬をかける。口縁帯中央に凹みを２条有する。すり目は１単位７条で密に行う。

（４）中世須恵器（第72図324～331）

東播系須恵器

324～327は，東播系須恵器の捏鉢である。324は，片口部分である。326・327は底部で，内面は使用により滑らかである。326は，底面に糸切り痕が残る。327は，焼成不良である。

樺万丈産

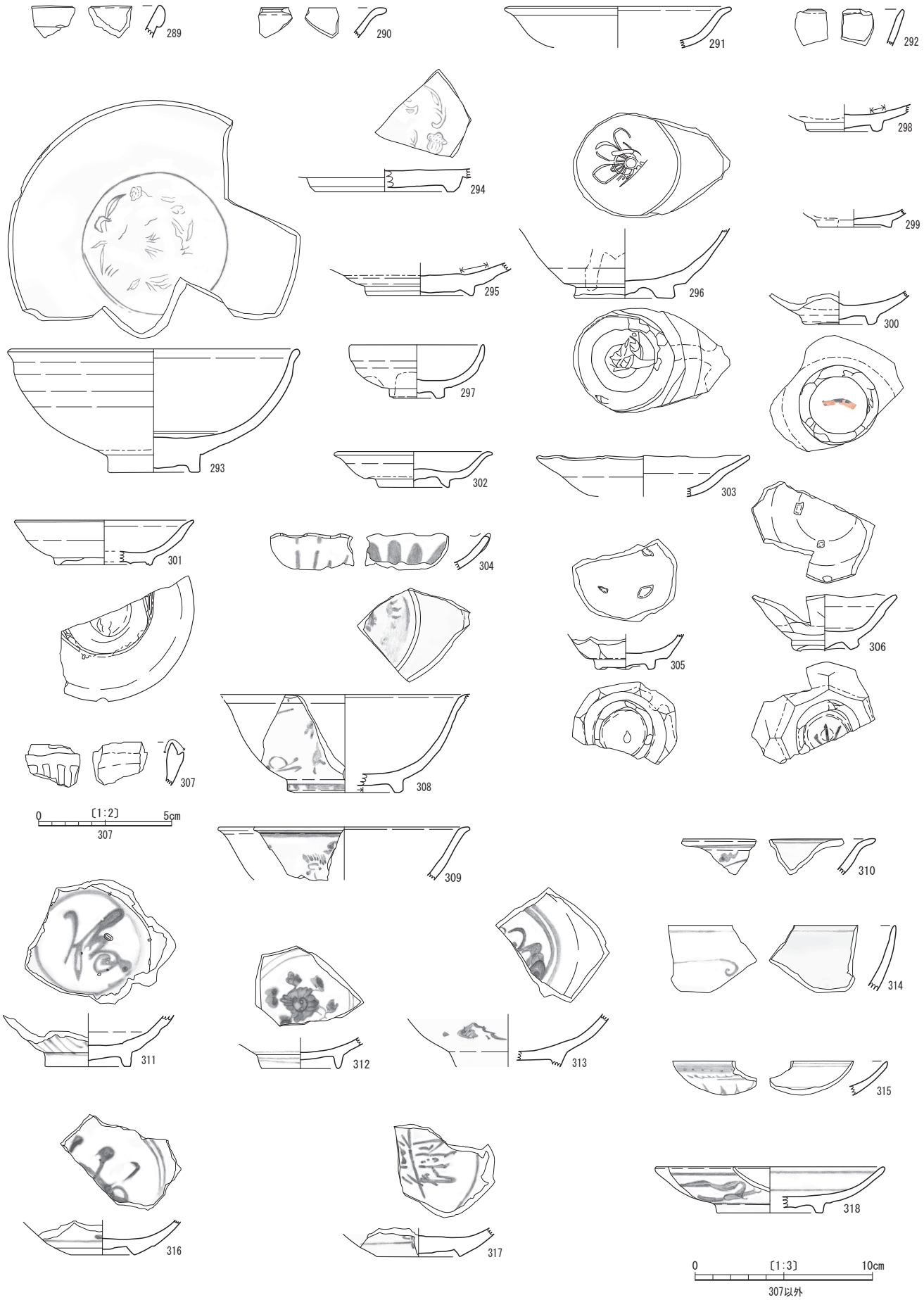
328～330は，樺万丈産の甕である。外面に格子目タタキが残り，内面はハケメ状の調整痕が残る。

その他

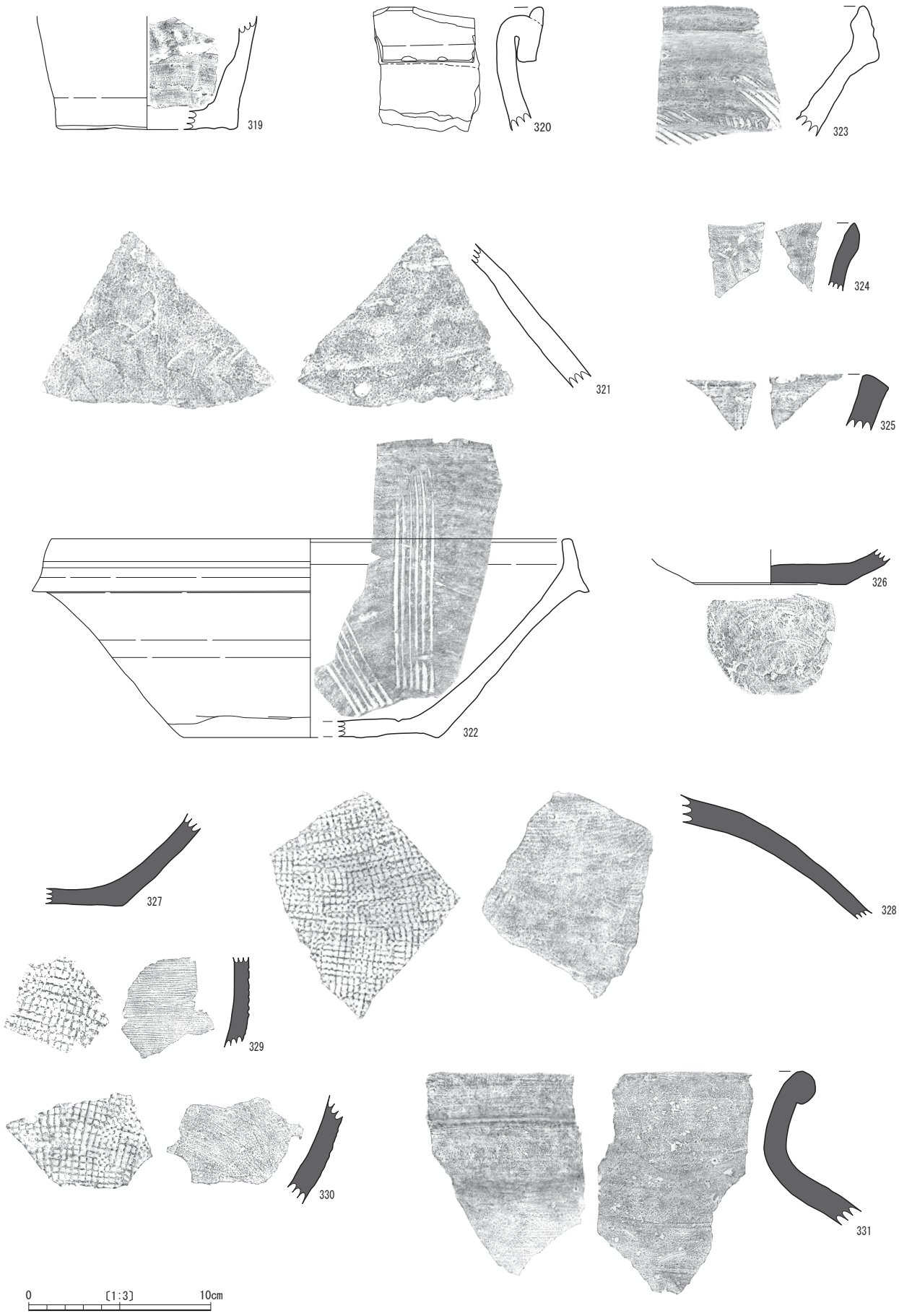
331は，産地が不明の壺の口縁部である。口縁部は玉縁状を呈する。胎土は灰色を呈し，礫や白色砂粒を含む。

（５）瓦質土器（第73図332～340）

332～340は，瓦質土器の擂鉢である。産地等の詳細は不明である。すり目は，放射状もしくは斜位に１単位６条～９条で入る。内面は使用により滑らかになったものがみられる。口縁部は，片口を有するが欠損しているものもある。胎土は瓦質のものとやや焼成不良で土師質のものがみられる。332～335は，口唇部に浅い凹みがある。336・337は，口縁部両端がやや突き出る。339・340は，底部である。



第71図　中世の遺物（３）（白磁・青白磁・青花）



第72図　中世の遺物（４）（国産陶器・須恵器）

（６）木製品（第73図341・342）

341は曲げ物の蓋か底と考えられるが，上部を1/4程度欠損する。残存する長さ15.8㎝，幅10.5㎝である。厚さは0.5～１㎝程度である。342はしゃもじ状の木製品で，柄部分を欠損する。残存する長さ12㎝，幅6.5㎝，厚さは１㎝に満たない。放射性炭素年代測定の結果，341は15～16世紀，342は12～13世紀の数値を得られた。自然科学分析については，第３分冊「第８章」を参照いただきたい。

（７）石製品（第74図343～357）

滑石製品

Ⅱ・Ⅲ層から出土した滑石製品は７点出土しており，そのうち６点を図化した。いずれも滑石を使用しており，形状から中世に帰属する遺物と判断した。

343は，滑石製石鍋である。口縁部はわずかに左側が高く，底部に合わせて口縁部が右にわずかに傾く。鍔は断面三角形を呈する。外面にススが付着し，内面は擦痕が残る。344は滑石製石鍋で，幅0.6㎝の工具で成形される。鍔は断面三角形で，部分的にススが残る。343と344は，木戸雅寿1995『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編のⅢ類-ｅ-１・15世紀前半に属するものと考えられる。

345は本来は取っ手状のものが付き，杓子状の製品だったと思われる。受け部分の断面はU字状で，深さ約1.5㎝ある。全体的に研磨整形による擦痕が残る。346は，いわゆるバレン状製品である。裏面は中央部が光沢を帯びる。一部欠損するが，本来の平面形状も不整半円形だった可能性が高い。347は紡錘車と考えられ，平面形はほぼ円形だが，わずかに横幅が長い。中央には穿孔部が残存するが，穿孔の全形は不明である。348は，半分を欠損している。研磨整形で，上部に径約0.8㎝の両面穿孔による孔が残る。提砥石の可能性がある。

砥石

Ⅱ・Ⅲ層から出土した砥石は９点で，その全てを図化した。金属製品の研ぎに用いた可能性があると判断したため，中世の遺物として報告する。

349は頁岩製で，提砥石と考えられるが，表裏面には横方向の擦痕もあり，裏面には等間隔に剝離痕が見られる。350は砂岩製で，右縁を欠損する。主な作業面は表面で，角側縁端も研磨している。351は砂岩製で，表裏両面を砥面としている。352は砂岩製で，均一な４面を砥面として利用する。側面は長軸に沿って浅く細長く凹み，平滑で軽く光沢を帯びる。353は砂岩製で，正面と裏面・左側面を砥面として利用している。側面は段状だが，本来は浅い溝状と考えられる。354は砂岩製で，正面のみ砥面とし，両側面と裏面は分割時の割れ面を残す。擦痕の状況から金属器の粗砥ぎに用いた可能性がある。355は砂岩製で，正面と裏面・右側面を砥面として利用している。また左側面を敲打部として再利用している。356は頁岩製で，剥片利用の砥石，砥面は表面１面である。357は砂岩製で，小形の石皿もしくは砥石の可能性もある。

４　古代

古代に属する遺物もⅡ層を包含層とする。その出土状況は，近世や中世と比べてさらに希薄となる。特に集中域は見られない。

この時期の遺物としては，土師器，須恵器，黒色土器，赤色土器が出土している。土師器で回転糸切りを行うものは中世で報告している。遺物破片数約400点のうち，24点を図化した。８世紀後半～９世紀前半の資料である。

（１）土師器（第75図358～367）

埦

口径もしくは底径が復元できるもの５点を図化した。358は完形で，口縁部が丸みをもち，口縁部下位がややすぼまる。359～361は，胴部から底部にかけての破片である。359は，腰部で強く屈曲する。360・361の高台は，「ハ」の字状に開く。

坏

口径もしくは底径が復元できるもの５点を図化した。底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。363・364は完形で，底部は回転ヘラ切りを行う。365は底部をヘラ切りし，底部直上に沈線を施す。366は口縁部から胴部まで残存し，胎土がやや赤色を呈する。367の底部では，回転ヘラ切りを行う。

（２）黒色土器（第75図368）

口径が復元できるもの１点を図化した。368は，黒色土器Ⅱ類である。丁寧なミガキを施した小皿である。

（３）須恵器（第75・76図369～382）

墨書土器

369は，須恵器の坏である。底面に「中」を崩したような記号を施す。見込みには墨を擦ったような一方向のキズがみられ，やや黒化しており，転用硯の可能性もある。８世紀前半の資料である。

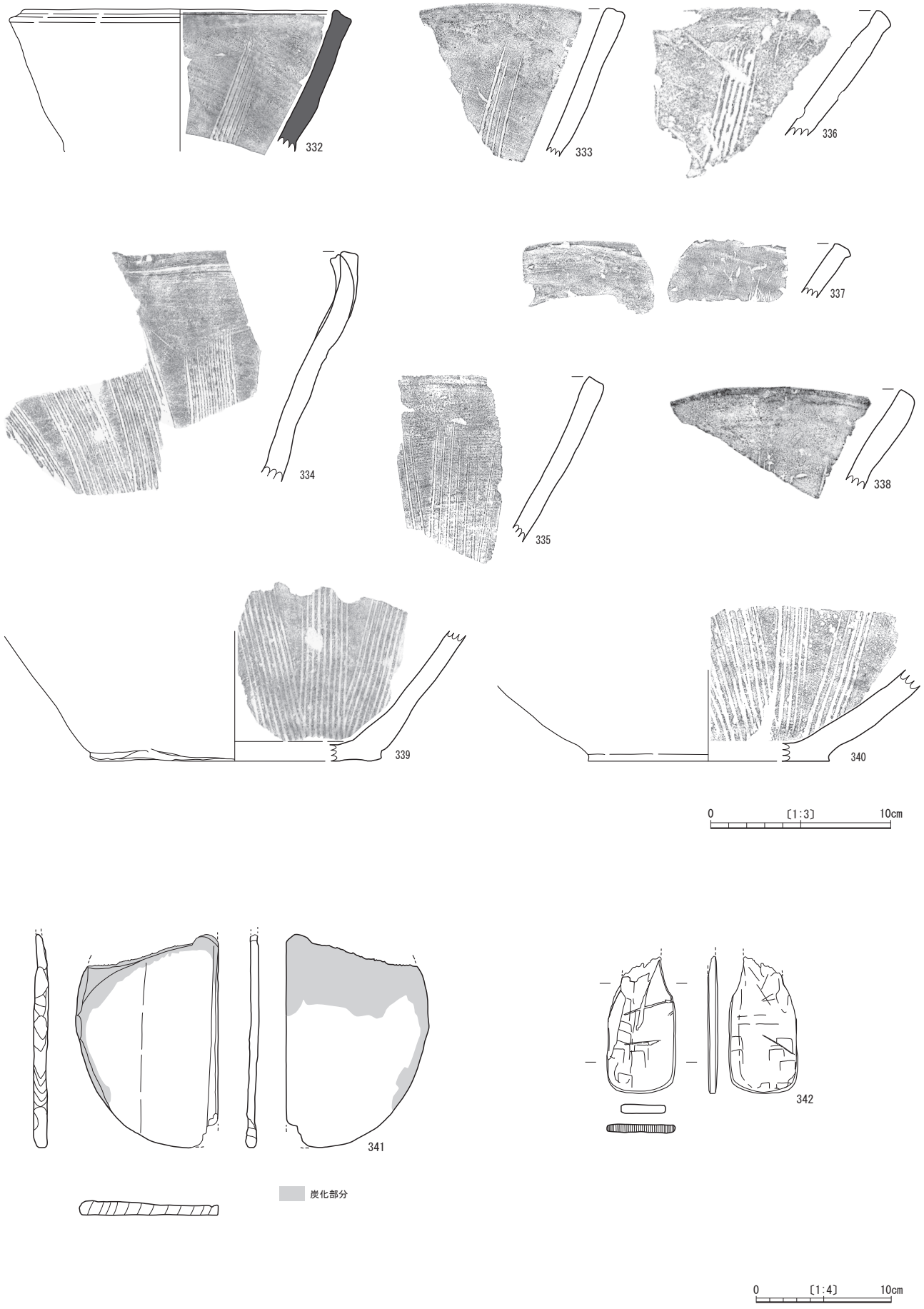
甕

10点を図化した。370は，口縁部から胴部まで残存する。頸部がしまり，口縁部が短く外反している。外面には平行タタキ，内面には同心円状のタタキが施される。

371～373は，頸部から胴部にかけて残存するものである。371・372は内面に同心円状のタタキを施し，371は外面に平行タタキ，372は外面に格子目タタキを施す。

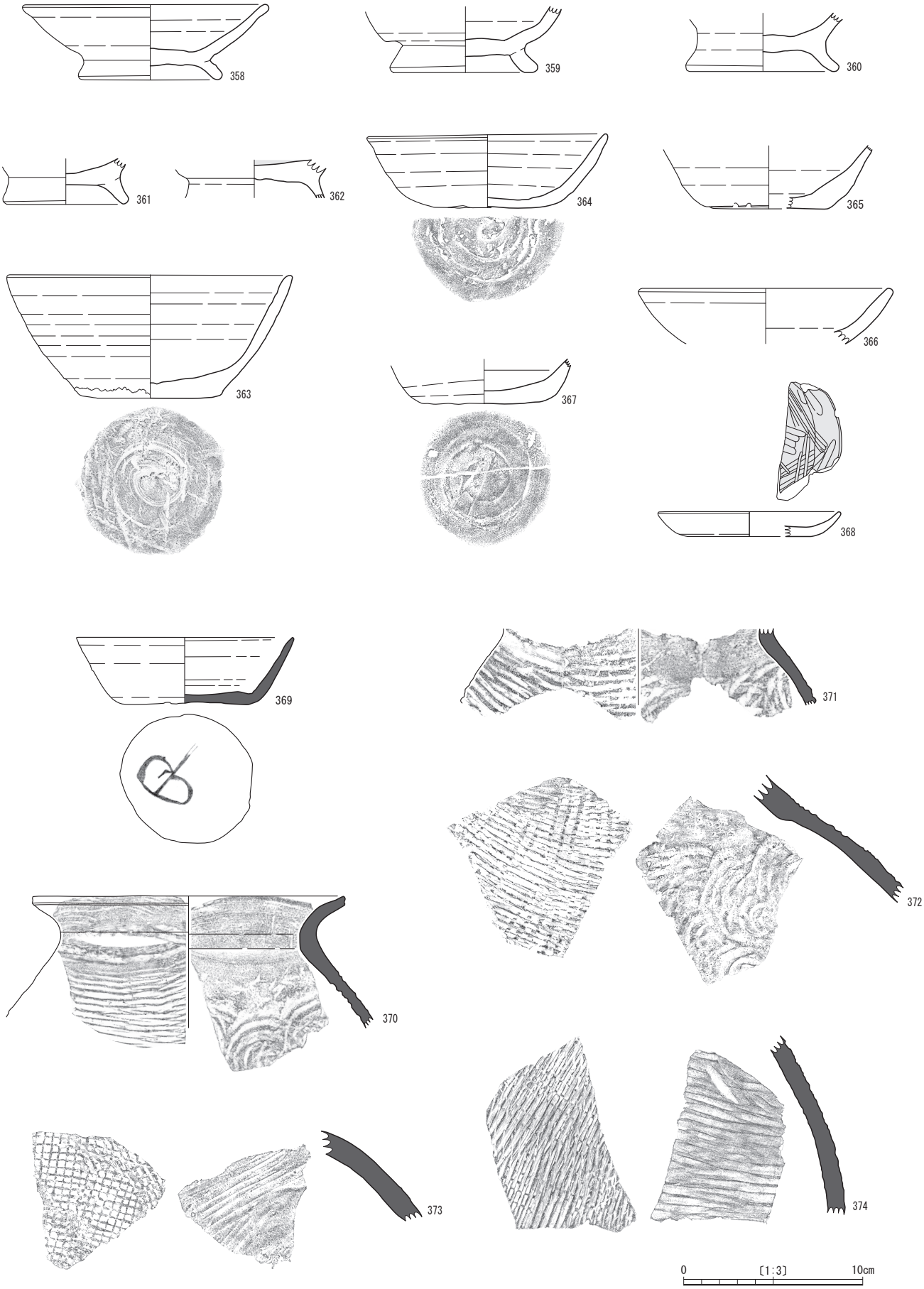
373は外面に格子目タタキ，内面に平行タタキを施す。

374～378は，胴部である。374・375は外面に格子目タタキを施し，374は内面に平行タタキ，375は内面に同心円状タタキを施す。376～378は外面に平行タタキを施し，内面に幅広の平行タタキを施す。

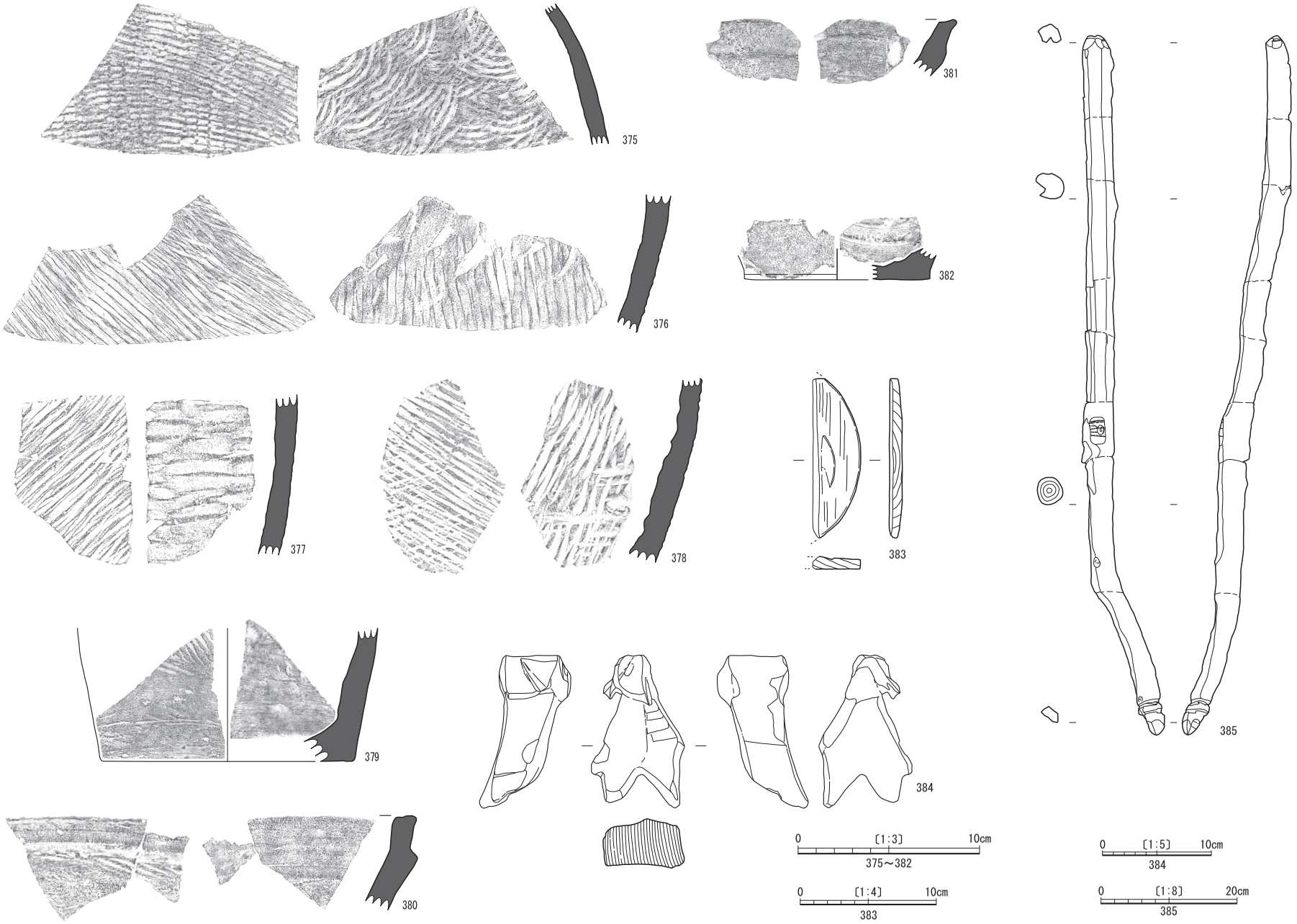


第73図　中世の遺物（５）（瓦質土器・木製品）

第74図　中世の遺物（６）（石製品）



第75図　古代の遺物（１）（土師器・須恵器）



第76図　古代の遺物（２）（須恵器・木製品）

379は底部である。外面に平行タタキを施す。

370～379（373・374・377は除く。）は，中岳山麓窯跡群で生産されたものと考えられる（注１）。

壺

３点を図化した。380・381は，口縁部である。頸部が残存していないが，二重口縁となるものと想定できる。382は底部である。380～382は，いずれも中岳山麓窯跡群産の資料である（注１）。

（４）木製品（第76図383～385）

383は，曲物の蓋か底の一部と考えられる。長さ11.8㎝，幅3.5㎝，厚さ0.9㎝である。384は正面の左側に1.5～２㎝程度の工具幅の残る加工痕が見られる。その他，部分的に加工痕があるが，詳細は不明である。385は，柄として用いられたと考えられる。長さ約52㎝の棒の下端３㎝を丸く加工し，直上に溝を２本巡らせている。柄の下部約22㎝が曲がっているが，下端の形状から組合せ鋤の柄の可能性も考えられる。383～385は，自然科学分析を行った。放射性炭素年代測定において383は７～９世紀，384は10～11世紀，385は10～11世紀という結果であった。詳細については，第３分冊「第８章」を参照していただきたい。

注１　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター中村直子センター長のご教授による。

第12表　古代～近世遺物観察表（土器・土製品）（１）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	時代	法量(㎝)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
69	247	E－15	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	7.7	5.0	1.2	ナデ	－	－	灰白	灰白	普通	－		○	○							糸切り
	248	E－13	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	7.9	5.4	2.3	回転ヘラケズリ	－	－	橙	橙	普通	精緻										糸切り
	249	F－14	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	8.0	7.2	0.9	－	ヘラケズリ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－								○		糸切り
	250	F－14	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	8.0	6.2	1.4	回転ヘラケズリ	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－								○		スス糸切り
	251	C－19	Ⅲ	土師器	皿	完形	中世	10.4	8.0	2.2	回転ヘラケズリ	－	－	灰白	灰白	良好	精緻										糸切り
	252	F－13	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	12.8	10.2	2.8	回転ヘラケズリ	－	－	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	－								○		糸切り
	253	F－15	Ⅲ	土師器	皿	口～胴部	中世	－	12.4	(3.2)	回転ヘラケズリ	－	－	にぶい褐	にぶい褐	良好	－		○								
	254	C－13	Ⅱ	土師器	皿	底部	中世	－	8.6	(1.6)	ヘラケズリ	－	－	灰	灰	良好	精緻										糸切り
	255	D－15	Ⅱ	土師器	皿	底部	中世	－	8.4	(1.0)	－	－	－	灰白	灰白	二次	精緻										スス糸切り
	256	C－21	Ⅲ	土師器	皿	底部	中世	－	9.8	(2.8)	回転ヘラケズリ	－	－	にぶい橙	浅黄橙	良好	－								△		スス糸切り
	257	C－24	Ⅰ	土師器	皿	底部	中世	－	10.3	(2.1)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	浅黄橙	浅黄橙	普通	－		○		○			○			糸切り
72	324	D－13	Ⅱ	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	中世	－	－	－	指ナデ	指ナデ	－	灰	灰	普通	－								△		
	325	C－22	Ⅱ	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	中世	－	－	－	－	－	－	黒褐	黒褐	普通	－										
	326	B－13	Ⅱ	東播系須恵器	捏鉢	底部	中世	－	8.2	(1.9)	回転ヘラケズリ	指ナデ	－	黄灰	黄灰	普通	－										糸切り
	327	D－12	Ⅰ	東播系須恵器	捏鉢	底部	中世	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	－	灰白	灰白	普通	－										
	328	F－13	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	肩部	中世	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ　工具ナデ	－	褐灰	灰	良好	精緻									○	
	329	C－18	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	中世	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ	－	灰	灰	普通	－										
	330	F－14	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	中世	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ	－	灰	暗灰	良好	精緻										
	331	F－13	Ⅱ	中世須恵器	甕	口縁部	中世	－	－	－	ナデ	ナデ	－	褐灰	灰白	普通	－								△		
73	332	C－24	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	19.0	－	(7.8)	回転ヘラケズリ指頭圧痕	回転ヘラケズリ	6条擂目放射状	灰	灰	－	－										
	333	C－24	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	3条擂目斜位	灰	灰白	－	－										
	334	D－16 E－9	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	－	－	－	－	－	－	灰	灰	－	－										
	335	C－23 C－29	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	－	－	－	褐灰	灰白	－	－										
	336	C－24	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	－	－	5条擂目斜位	浅黄	浅黄	－	－										
	337	B－17	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	灰白	灰白	－	－										
	338	C－24	－	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ指頭圧痕	回転ヘラケズリ指頭圧痕	－	灰黄	灰白	不良	－										
	339	C－20	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	底部	中世	－	16.2	(7.2)	－	－	－	褐灰	灰褐	－	－										
	340	C－19	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	底部	中世	－	13.4	(5.1)	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－										
75	358	B－12 E－12	Ⅱ	土師器	塊	完形	古代	13.8	8.0	4.2	回転ナデ	回転ナデ	－	灰黄褐	灰黄褐	良好	精緻								○		
	359	B－9	Ⅱa	土師器	塊	胴～底部	古代	－	8.2	(3.7)	回転ナデヘラナデ?	回転ナデヘラナデ?	－	浅黄橙	浅黄橙	普通	精緻		○					○			
	360	F－15	Ⅱ	土師器	塊	胴～底部	古代	－	8.5	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	－	浅黄橙	浅黄橙	普通	精緻										
	361	A－9	Ⅱa	土師器	塊	底部	古代	－	6.6	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－		○		○						

第13表　古代～近世遺物観察表（土器・土製品）（２）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
75	362	D－23	Ⅱ	黒色土師器	埦	底部	古代	－	－	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	－	橙	黄灰	不良	精緻						◎				ヘラ切り
	363	C－10	Ⅱb	土師器	坏	完形	古代	16.0	8.0	6.9	回転ヘラケズリ ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	－	灰白	灰白	良好	精緻										ヘラ切り →ナデ
	364	C－13	Ⅱ	土師器	坏	完形	古代	13.4	7.0	4.2	ハケメ，ナデ	ハケメ，ナデ	－	灰白	灰白	良好	精緻				○						ヘラ切り
	365	C－14	Ⅱ	土師器	坏	胴～ 底部	古代	－	7.0	(3.5)	－	－	－	灰白	灰白	普通	－							◎			ヘラ切り
	366	D－14	Ⅱ	土師器	坏	□～ 胴部	古代	14.2	－	(3.1)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	にぶい 橙	にぶい 橙	普通	－								△		
	367	B－15	Ⅱ	土師器	坏	胴～ 底部	古代	－	7.3	(2.4)	回転ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラナデ	－	灰白	灰白	普通	精緻										ヘラ切り
	368	F－13	Ⅱ	黒色土器	皿	完形	古代	10.2	7.0	1.4	回転ヘラケズリ	ミガキ	－	オリー ブ黒	黒	良好	精緻										
	369	D－9	Ⅱb	須恵器	坏	完形	8c代	12.2	7.2	3.8	ナデ	ナデ	－	灰色	灰色	－	精緻										底部に墨書
	370	B－13 C－13	Ⅱ	須恵器	甕	□～ 胴部	9c中～ 後半頃	17.4	－	(7.3)	平行タタキ，ナデ	ナデ 同心円状当て具痕	－	にぶい 橙	にぶい 橙	－	－								○	白 ○	
	371	C－19 C－24	Ⅲ	須恵器	甕	頸部～ 肩部	9c～10c	－	－	－	平行タタキ，ナデ	同心円状当て具痕	－	褐灰	暗灰黄	－	－										
	372	E－18	Ⅲ	須恵器	甕	肩部	9c～10c	－	－	－	格子目タタキ	同心円状当て具痕	－	褐灰	褐灰	－	－	◎								白 ◎	
	373	E－13	Ⅱ	樺万丈系 須恵器	甕	胴部	中世	－	－	－	格子目タタキ	平行当て具痕	－	褐灰	褐灰	－	精緻										
	374	D－17	Ⅲ	須恵器	甕	胴部		－	－	－	格子目タタキ	当て具→ヘラナデ	－	浅黄橙	灰黄褐	－	精緻										
76	375	C－21	Ⅱ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	格子目タタキ	同心円状当て具痕	－	灰白	褐灰	－	－								◎	白 ◎	
	376	D－14	Ⅱ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	平行タタキ	当て具→ヘラナデ	－	灰褐	灰黄褐	－	精緻										
	377	C－19	Ⅲ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	平行タタキ	ヘラナデ	－	にぶい 黄橙	暗灰黄	良好	－									白 △	
	378	D－15	Ⅳ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	格子目タタキ	平行当て具痕	－	灰褐	にぶい 赤褐	－	精緻		◎							黒 ◎	
	379	B－10	Ⅱa	須恵器	甕	底部	古代9c ～10c	－	14.0	(7.3)	平行タタキ 回転ヘラナデ	回転ヘラケズリ	－	褐灰	褐灰	－	－									白 ◎	
	380	D－5 D－27	Ⅰ	須恵器	壺	□縁部	古代9c 中～後半	－	－	－	タタキ 回転ナデ	回転ナデ	－	灰白	灰黄褐	－	精緻		○								
	381	B－14	Ⅱ	須恵器	壺	□縁部	古代9c ～10c	－	－	－	回転ヘラナデ	回転ヘラナデ	－	褐灰	褐灰	－	精緻										
	382	D－5	Ⅰ	須恵器	壺	底部	古代	－	10.2	(1.5)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	－	明褐灰	褐灰	普通	－									白 ◎	

第14表　古代～近世遺物観察表（陶磁器類）（１）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	備考
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
68	226	B－27	Ⅰ	磁器	碗	□～ 底部	－	11.4	－	(6.4)	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前系	近世	
	227	C－24	Ⅱ	染付	碗	底部	－	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前系	近世	
	228	C－19	撹乱	青磁	碗	□～ 胴部	－	20.4	－	(6.1)	灰白	青磁釉	－	全面	波佐見	近世	
	229	B－23	埋土	磁器	碗	□～ 胴部	－	11.6	－	(4.7)	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前	近世	
	230	C－24 B·C－22·23	Ⅱ	青磁	碗	胴～ 底部	－	－	4.0	(6.5)	灰白	灰白釉	緑灰	高台露胎	肥前	近世	
	231	B－29	Ⅱ	染付	小坏	底部	－	－	2.6	(2.1)	灰白	透明釉	灰白	高台畳付 付近釉はぎ	肥前系	近世	赤色顔料
	232	C－24	Ⅰ	白磁	仏飯具	脚部	－	－	4.8	(3.9)	灰白	透明釉	明緑灰	内外面， 高台半分下露胎	内野山窯	19c	
	233	E－27	－	陶器	碗	完形	－	13.0	4.6	5.3	灰白	白色釉	－	全面	肥前	近世	
	234	C－19	Ⅲ	陶器	碗	□縁部	－	－	－	－	灰白	黒褐色釉	黒褐 にぶい赤褐	全面	肥前	近世	
	235	E－8	撹乱	陶器	碗	底部	－	－	4.5	(3.2)	赤灰	白色釉	灰褐	全面	薩摩苗代川	近世	
	236	C－20	Ⅰ	陶器	碗	完形	－	6.8	3.5	4.7	灰白	黒褐色釉	褐	外面胴部下半	薩摩苗代川	近世	
	237	D－5	Ⅰ	陶器	皿	完形	－	14.0	4.6	4.0	灰白	透明釉，青釉	灰白 灰オリーブ	外）胴部下半 内）蛇の目釉はぎ	内野山窯	近世	
	238	C－29 D－29	Ⅱ	磁器	皿	完形	－	13.7	4.2	3.3	灰白	透明釉，青釉	オリーブ灰	外）胴部中位 内）蛇の目釉はぎ	内野山窯	近世	
	239	C－18 C－19	Ⅱ	陶器	鉢	完形	－	20.0	10.6	13.2	橙	褐釉	暗灰黄	口唇部釉はぎ	薩摩苗代川	近世	
	240	C－20	Ⅰ	陶器	鉢	胴～ 底部	－	－	－	－	にぶい 赤褐	鉄釉	黒褐	外面胴部下半	薩摩苗代川	近世	
	241	C－29	Ⅱ	陶器	盤	□～ 胴部	－	－	－	－	暗赤褐	褐釉	灰黄褐	外面体部上半	薩摩苗代川	近世	
	242	C－24	Ⅰ	陶器	鉢	完形	－	22.0	12.4	4.9	赤	褐釉	灰オリーブ	□～胴部 口唇部，底部除く	薩摩苗代川	18c	
	243	B－29	Ⅱ	陶器	片口	口縁部	－	－	－	－	黄灰	鉄釉	褐	口唇部釉はぎ	薩摩苗代川	近世	
	244	B－8	Ⅱa	陶器	土瓶	底部	－	－	－	－	黄褐	鉄釉	黒褐	内面	薩摩苗代川	近世	
	245	E－12	Ⅱb	陶器	土瓶	底部	－	－	－	－	赤褐	褐釉	暗オリーブ	胴部下半	薩摩苗代川	近世	
	246	B－29	Ⅱ	陶器	仏飯具	完形	－	8.8	5.2	7.0	灰白	緑釉	緑灰	脚部中位まで	内野山窯	近世	

第15表　古代～近世遺物観察表（陶磁器類）（２）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	備考
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
70	258	B－18	Ⅲ	青磁	碗	口縁部	－	－	－	－	黄灰	－	灰オリーブ	体部下半露胎	越州窯	8c～10c中	
	259	D－22 D－23	Ⅱ	青磁	碗	口縁部	－	－	－	－	褐灰	－	暗灰黄	全面	越州窯	8c～10c中	
	260	C－21 E－20	Ⅱ Ⅲ	青磁	碗	口～ 胴部	碗Ⅱb類	16.0	－	(4.4)	灰白	－	オリーブ灰	全面	龍泉窯	13c初～前半	
	261	B－14	Ⅱ	青花	碗	口縁部	碗Ⅱb類	－	－	－	灰白	－	オリーブ灰	全面	龍泉窯	13c初～前半	鎬連弁
	262	E－13	Ⅱ	青磁	碗	胴～ 底部	碗Ⅱb類	－	5.6	(3.5)	灰白	－	灰オリーブ	畳付～内面露胎	龍泉窯	13c初～前半	鎬連弁
	263	E－8	撹乱	青磁	碗	胴～ 底部	碗ⅡC類	－	5.4	(3.2)	灰白	－	灰オリーブ	畳付～内面露胎	龍泉窯	13c初～前半	
	264	C－21	Ⅰ	青磁	碗	胴～ 底部	碗ⅣE類	－	5.0	(2.8)	灰	－	灰オリーブ	畳付･高台内露胎	龍泉窯系	14c初～中	
	265	D－29	Ⅱ	青磁	碗	胴～ 底部	碗Ⅳ類 以降	－	4.8	(2.5)	灰白	－	明緑灰	高台露胎	龍泉窯系	元以降14c～	
	266	D－19	Ⅱ	青磁	碗	胴～ 底部	碗Ⅳ類	－	6.4	(2.7)	灰白	－	オリーブ灰	高台内輪状 にかきとる	龍泉窯	元代14c初～中	
	267	C－17	撹乱	青磁	碗	底部	碗Ⅳ以降	－	(6.6)	(1.3)	灰白	－	明オリーブ灰	高台内露体	龍泉窯	元以降	
	268	C－19	撹乱	青磁	碗	胴～ 底部	上田 B2～3類	－	－	－	灰白	－	オリーブ灰	高台内面釉はぎ	龍泉窯	14c～16c	
	269	C－20	Ⅰ	青磁	碗	胴部	上田B 3～4類	－	－	－	灰白	－	オリーブ	胴部	龍泉窯系	14c～16c中	
	270	H－25 E－27	Ⅱ	青磁	碗	口～ 胴部	上田C類	13.7	－	(3.2)	灰白	－	明緑灰	全面	中国	上田c	
	271	C－19	Ⅱ	青磁	碗	胴～ 底部	上田C2類	－	5.8	(3.1)	灰白	－	明緑灰	高台内釉はぎ	龍泉窯系	14c～16c中	
	272	C－20	Ⅲ	青磁	碗	口～ 胴部	上田D2類	15.0	－	(5.5)	灰白	－	オリーブ黄	全面	龍泉窯系	14c～15c中	
	273	C－19	Ⅱ	青磁	碗	胴～ 底部	上田D類	－	5.2	(3.6)	灰白	－	灰オリーブ	高台内面中位露 体	龍泉窯系	14c～16c	
	274	D－28	Ⅰ	青磁	皿	口～ 底部	－	13.2	－	(2.2)	灰白	青磁釉	灰オリーブ	体部下半露胎	福建	14c初～中	
	275	C－21	Ⅰ	青磁	皿	胴～ 底部	－	－	6.0	(1.3)	灰白	－	明緑灰	畳付釉はぎ	龍泉窯系	14c～16c	
	276	C－19	Ⅲ	青磁	稜花皿	完形	上田D2	12.0	6.0	2.9	灰白	青磁釉	オリーブ灰	高台内一部釉はぎ	龍泉窯	15c	
	277	D－12	Ⅱ	青磁	稜花皿	口～ 胴部	－	11.4	－	(2.1)	灰	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	14c後～	
	278	C－16	Ⅲ	青磁	杯	口～ 胴部	碗Ⅳ類以降	13.0	－	(2.5)	灰白	－	オリーブ灰	全面	龍泉窯	14c～	
	279	C－20	Ⅲ	青磁	杯	口～ 胴部	－	14.4	－	(1.6)	灰白	－	明緑灰	全面	龍泉窯系	14c～	
	280	B－20 C－20	撹乱	青磁	盤	口～ 胴部	－	－	－	－	浅黄橙	－	黄褐	全面	福建	元以降14c～	
	281	E－10	Ⅱa	青磁	盤	口縁部	－	－	－	－	灰白	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯	明代(14c～ 16c)	
	282	C－21	Ⅲ	青磁	盤	口縁部	－	－	－	－	灰白	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯	明代	
	283	C－19	Ⅱ	青磁	盤	口～ 胴部	－	－	－	－	灰白	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯	明代(14c～ 16c)	
	284	C－21	Ⅱ	青磁	盤/ 大型碗	胴～ 底部	－	－	9.3	(2.2)	灰白	－	黄褐	全面	龍泉窯系	明代	
	285	D－19	Ⅲ	青磁	盤	底部	－	－	10.6	(2.1)	灰白	－	オリーブ灰	高台内輪状 に釉はぎ	龍泉窯	明代(14c～ 16c)	
	286	C－20	Ⅰ	青磁	盤	底部	－	－	－	－	灰白	－	灰黄	高台内輪状 にかきとり	福建	14c～	
	287	C－20	Ⅲ	青磁	盤	胴～ 底部	－	－	11.2	(3.6)	灰白	－	明緑灰	高台内輪状 にかきとり	龍泉窯系	明代 14c後～	
	288	C－19	Ⅰ	青磁	香炉	口～ 胴部	－	6.7	－	(4.0)	灰白	－	灰オリーブ	外)全面 内)口縁上部	龍泉窯	－	
71	289	C－23	Ⅱa	白磁	碗	口縁部	碗Ⅳ類	－	－	－	浅黄	－	灰白	全面	中国	11c後～12c前	
	290	D－27	Ⅰ	白磁	碗	口縁部	碗Ⅴ類	－	－	－	灰白	－	灰白	全面	中国	11c後～12c前	
	291	C－24	Ⅰ	白磁	碗	口～ 胴部	白磁Ⅵ類	12.8	－	(2.3)	にぶい 黄橙	白色釉	灰白	口縁部	中国	11c後半～12c 前半	
	292	D－26	Ⅰ	白磁	碗	口縁部	碗Ⅸ類	－	－	－	灰白	－	灰白	口唇部釉はぎ	中国	13c中～14c初	
	293	C－19 C－22	Ⅱ	白磁	碗	完形	ピロースク タイプⅢ類	16.4	5.2	7.0	灰白	－	灰白	体部下半以下露胎	中国	14c初？～15c	
	294	C－17	撹乱	白磁	碗	底部	－	－	7.8	(1.3)	灰白	－	灰	高台露体	中国	元代(14c～ 15c)	
	295	D－25	Ⅰ	白磁	碗	底部	森田E群	－	6.0	(1.8)	浅黄橙	－	灰白	体部下半以下露胎見 込み輪状に釉はぎ	中国	14c～16c	
	296	C－29	Ⅱa	白磁	碗	胴～ 底部	－	－	5.4	(3.9)	外)灰白 内)浅黄橙	－	灰白	胴部	中国	14c～16c	
	297	C－20	撹乱	白磁	皿	完形	森田D群	7.6	3.0	3.0	灰白	－	灰白	体部中位以下露胎	中国	14c後～15c前	
	298	D－28	Ⅰ	白磁	皿	底部	森田D群	－	4.4	(1.5)	灰白	－	灰白	外体部下半露胎見 込み輪状に釉はぎ	中国	14c後～15c前	
	299	C－22	Ⅱ	白磁	皿	底部	森田D群	－	4.2	(1.0)	灰白	－	灰白	体部下半以下露胎	中国	14c後～15c前	
	300	D－5	Ⅰ	白磁	皿	底部	森田D群	－	4.4	(1.9)	灰白	－	灰白	体部下半以下露胎	中国	14c後～15c前	
	301	B－22	Ⅰ	白磁	皿	完形	森田E群	10.2	5.5	2.5	灰白	－	明オリーブ灰	高台内露体	中国	15c～16c	
	302	B･C －22･23	Ⅱ	白磁	皿	完形	上田E'群	8.9	4.0	2.0	明褐灰	－	明オリーブ灰	腰部以下露胎	中国	15c中～16c中	
	303	C－19	Ⅰ	白磁	稜花皿	口～ 胴部	森田E群	12.0	－	(2.3)	灰白	－	灰白	全面	景徳鎮系	15c中～16c中	
	304	D－28	Ⅰ	白磁	稜花皿	口縁部	森田E群	－	－	－	－	－	灰白	全面	中国	15c～16c	

第16表　古代～近世遺物観察表（陶磁器類）（３）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	摘　要
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
71	305	C－19	Ⅲ	白磁	八角坏	胴～底部	森田D群	－	3.3	(2.0)	灰白	－	灰白	胴部下半以外露胎	中国	14c後～15c前	
	306	C－24	Ⅰ	白磁	八角坏	完形	森田D群	8.0	3.5	3.2	灰白	透明釉	灰白	全面(底部一部)胴部半分下露胎	中国	中世	
	307	D－25	Ⅱ	青白磁	合子の身	口縁部	－	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	受部露胎	中国	中世	
	308	C－18	Ⅰ	青花	碗	完形	小野碗B群	14.0	6.6	5.5	灰白	透明釉	灰白	畳付･高台内一部露胎	漳州窯	14c後～15c前	
	309	C－26	Ⅰ	青花	碗	口縁部	小野B群	14.2	－	(3.0)	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	中世	
	310	C－29	Ⅱ	青花	碗	口縁部	小野B群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	15c～16c	
	311	D－5	Ⅰ	青花	碗	底部	小野碗C群	－	4.8	(2.9)	にぶい黄橙	透明釉	灰白	高台露胎	漳州窯	15c末～16c中	
	312	C－24	Ⅱ	青花	碗	底部	小野碗C群	－	4.6	(1.7)	灰白	透明釉	明緑灰	畳付釉はぎ	中国	16c～	
	313	D－28	Ⅰ	青花	碗	胴～底部	小野碗C群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	畳付釉はぎ	漳州窯	中世	
	314	B,C－22･23	Ⅱ	青花	碗	口縁部	小野碗E群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	漳州窯	16c中～17c前半	
	315	C－20	Ⅰ	青花	皿	口縁部	小野皿C群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	漳州窯	15c末～16c中	
	316	B,C－22･23	Ⅱ	青花	皿	胴～底部	小野皿C群	－	3.6	(1.9)	灰白	－	灰白	体部下半露胎	漳州窯	15c末～16c中	碁笥底
	317	C－19	Ⅰ	青花	皿	底部	小野皿C群	－	4.8	(1.9)	灰白	－	灰白	高台内露胎	漳州窯	15c末～16c中	碁笥底
	318	C－17	撹乱	青花	皿	完形	森田Ⅲb類	13.0	6.0	2.6	灰白	透明釉	灰白	外面体部下半見込み露胎	漳州窯	16c	
72	319	E－16	Ⅱ	陶器	瓶子	底部	古瀬戸	－	9.6	(6.2)	灰白	自然釉	灰オリーブ	外面	瀬戸	中世	
	320	C－18	Ⅲ	陶器	甕	口縁部	－	－	－	－	暗灰	自然釉	灰オリーブ	外面	常滑	13c後半～14c	
	321	B－12	Ⅱ	陶器	甕	肩部	－	－	－	－	灰褐	－	－	－	常滑	中世	
	322	C－19 C－24	Ⅲ	陶器	すり鉢	完形	－	28.4	14.0	10.9	明赤褐	自然釉	にぶい赤褐	口縁外面	備前	中世15c	
	323	C－29	Ⅱ	陶器	すり鉢	口縁部	－	－	－	－	灰褐	自然釉	にぶい赤褐	内面	備前	中世	

第17表　古代～近世遺物観察表（木製品）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	樹種	法量(cm)			備考	
						最大長	最大幅	最大厚		
73	341	F－15	Ⅰ	曲物	モミ属	15.8	10.5	1.1	柾目板, 焦げ有	試料No 83
	342	D－14	Ⅱ	製品	－	(12.6)	6.3	0.9		試料No 87
76	383	－	Ⅱb	曲物	－	11.8	3.5	0.9		試料No 47
	384	E－10	Ⅱc	鍬	イチイガシ？	14.0	8.5	4.5		試料No 70
	385	A－10	Ⅱa	柄	タイミンタチバナ	120.9	12.0	5.5	陽物形？	試料No 49

第18表　古代～近世遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
74	343	D－15	Ⅱ	石鍋	滑石	口径　19.7	底径　11.8	器高 10.4	－	
	344	C－19	Ⅲ	石鍋	滑石	－	－	－	－	
	345	E－14	Ⅱ	杓子状製品	滑石	2.70	(3.70)	2.00	24.85	
	346	D－22	Ⅱ	パレン状製品	滑石	6.10	4.75	1.80	80.06	
	347	D－25	Ⅱ	紡錘車	滑石	4.10	3.00	0.65	12.31	
	348	C－17	Ⅲ	提砥石	滑石	(5.70)	(2.85)	(1.25)	27.60	
	349	E－14	Ⅱ	砥石	SH	9.50	2.40	1.80	68.50	
	350	D－12	Ⅲ	砥石	SA	8.70	3.70	0.70	36.10	
	351	E－14	Ⅱ	砥石	SA	11.80	8.10	1.30	147.50	
	352	E－12	Ⅱ	砥石	SA	13.30	11.60	3.30	524.50	
	353	D－24	Ⅲ	砥石	SA	13.10	7.80	5.20	644.10	
	354	D－18	Ⅱ	砥石	SA	11.20	17.60	4.00	1101.80	
	355	D－12	Ⅱ	砥石	SA	10.10	8.60	3.10	364.40	
	356	E－15	Ⅱ	砥石	SH	15.50	4.70	2.20	162.50	
	357	E－13	Ⅲa	石皿or砥石？	SA	12.90	13.10	7.20	1220.00	

第５章　縄文時代晩期～古墳時代の調査

第１節　遺構

調査区域は，大まかに７区から15区にかけての低湿地部と15区から29区にかけての低地部に分かれる。古墳時代の遺構は，Ｃ－27～29区で溝状遺構が検出された。弥生時代の遺構は17区から27区の低地部で，竪穴建物跡，集石，土坑が検出された。弥生時代から古墳時代にかけての遺物を包含するのは，低地部基本層序のⅡ層となる。本来ならⅡ層が遺構の検出面となるが，低地部においても撹乱や削平のため遺構の検出面がⅢ層以下となることもあった。検出された古墳時代と弥生時代の遺構の配置図は，第77図に示した。なお，縄文時代晩期に属する遺構は，検出されなかった。

１　古墳時代の遺構（第77図）

古墳時代の遺構は，調査区の南側で検出された溝状遺構のみである。検出された遺構の位置は，第77図に弥生時代の遺構と共に示した。

溝状遺構20号（第80～82図386～420）

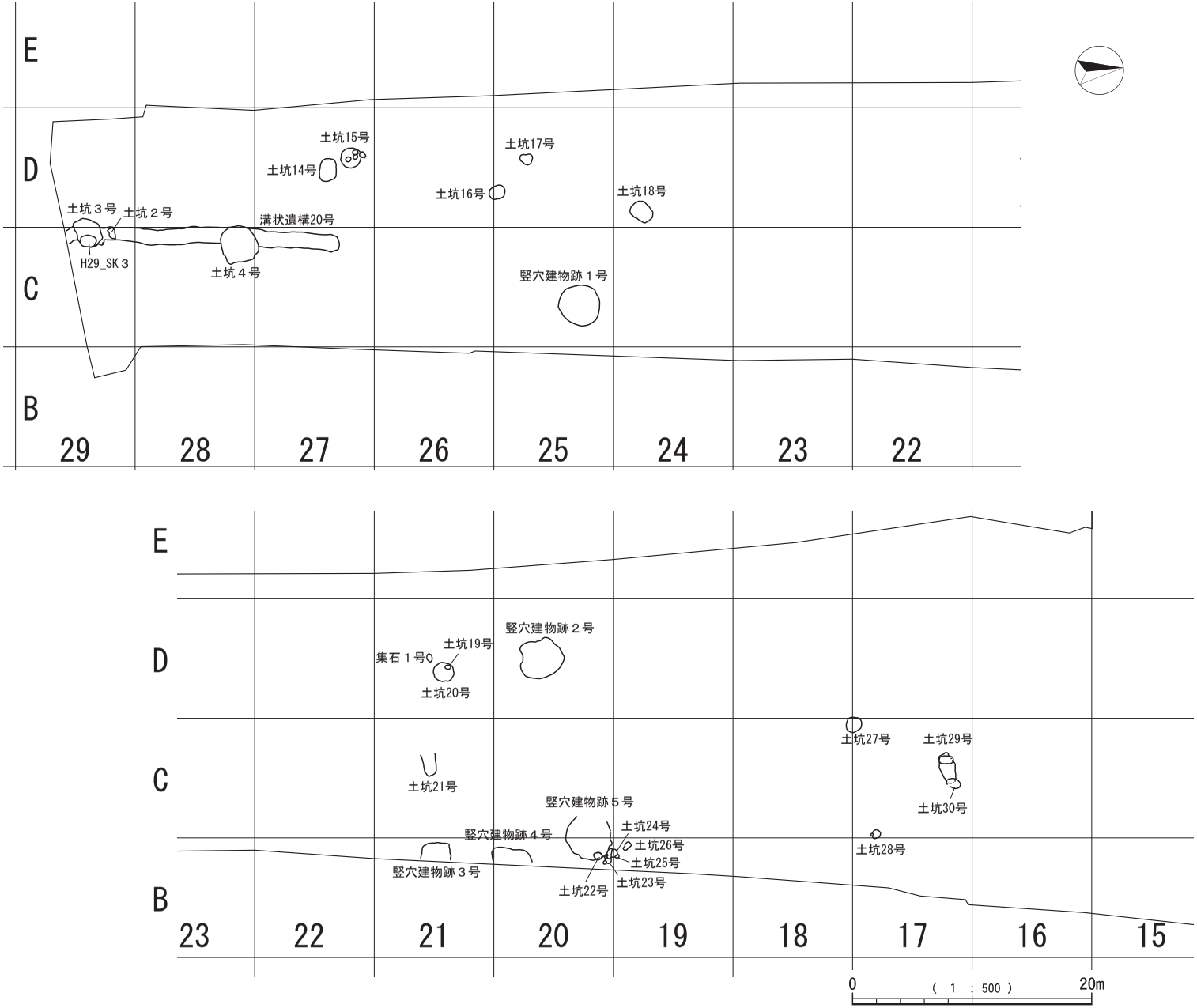
Ｃ－27～29区，Ⅲ層で検出されたが，本来はⅡ層からの掘り込みであったことが土層断面で確認されている。全長22.8m，最大幅1.4m，最大深度0.4mであった。Ｃ－28区で土坑４号に，Ｃ－29区で土坑２・３号に切られる。南端はＣ－29区の調査区境を越えて延びると考えられる。埋土から古墳時代，弥生時代，縄文時代の遺物が出土した。以下，時代毎に記述する。

386～400は，古墳時代の土器である。甕，壺，鉢，高坏を図化した。全て中津野式土器と考える。

386～394は，甕である。「ハ」の字状に開く脚部から胴部へは緩やかに膨らみながら立ち上がり，頸部で締まり，口縁部は外反する器形をもつ。口唇部は，丸味をもつものと平坦となるものがある。386は完形品で，口径23.8cm，底径9.0cm，器高25.4cmを測る。頸部の内面には明瞭な稜をもつ。口唇部は丸く収めるが，一部平坦な部分もある。内外面ともハケメ，ナデ，指押さえの器面調整が施される。胴部中央付近から口縁部にかけてススが付着し，被熱による表面の剥落が２か所で見られる。387も完形品で，口径24.9cm，底径９cm，器高24.4cmを測る。頸部で締まる器形だが，その締まりはやや弱い。頸部の内面には稜をもつ。やや丸味のある口唇部である。外面はハケメ，ナデ，ケズリ，指押さえで，内面はハケメ，ナデ，指押さえで器面調整を行う。胴下半から口縁部までススが付着し，被熱による表面剥落が見られる。388は完形品で，口径25.5cm，底径10.3cm，器高30.6cmを測る。口縁部の高さが一定でなく，歪な器形となる。386・387と比べると脚が高い。外面はハケメ，工具ナデ，内面はハケメ，工具ナデ，指ナデで器面調整を行う。胴下半から口縁部までススが付着する。389は脚部を欠損し，口径は14.8cmを測る。胴部は緩やかに膨らみ，外反する口縁部の器壁は薄くなる。内面には明瞭な稜をもつ。外面はハケメ後ナデ，内面ハケメ後ナデで器面調整を行うが，指頭痕も残る。外面の大半が剥落し，内面も一部剥落する。外面の剥落のない部分にはススが付着する。390は脚部を欠損し，口径は21.0cmである。頸部の屈曲は緩やかである。赤みの強い色調である。外面はケズリ，ナデ，内面はナデ，ハケメで器面調整を行う。外面には部分的にススが付着する。391は脚部を欠損し，口径は25.4cmを測る。頸部の締まり具合がやや緩やかで，頸部から口縁端部までの長さも一定しない。口縁端部の断面は方形で，部分的に口唇部がくぼむ。外面はハケメ後ナデ，指ナデ，指押さえ，内面はハケメ後ナデ，工具ナデ，指ナデ，指押さえで器面調整を行う。胴部下位から口縁部にかけてススが付着し，被熱による表面剥落が多く見られる。中津野式土器の中でも最新相もしくはそれよりやや下る時期と考えられる。392は「く」の字状に外反する口縁部だが，端部も欠損する。内面に稜をもつ。内外面とも器面調整のハケメが残る。393・394は，脚部である。394は底径9.9cmを測り，器面調整は内外面ともケズリ後ナデを行う。内面にはススが付着し，外面には剥落が見られる。

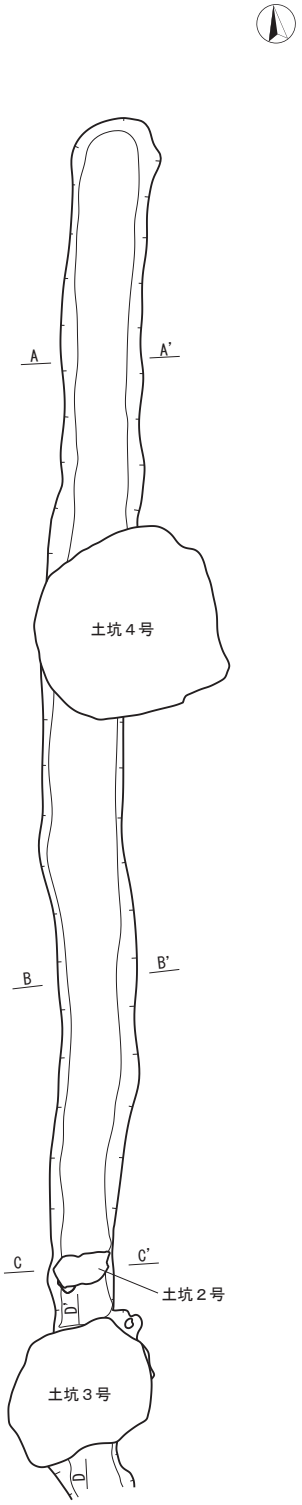
395～397は，鉢である。395は台付鉢で，口径25.4cm，底径9.4cmを測る。大きく開く台部から緩やかに膨らむ胴部を経て，口縁部は外反する。内面には緩やかな稜をもつ。丁寧な成形及び調整である。外面は指押さえ，ナデ，ハケメ，内面はナデ，ハケメ，ミガキで器面を調整する。外面に広範囲にわたって黒斑が付き，口唇内面はススの付着が一周する。396・397は，鉢の胴部から底部にかけての破片である。両者の大きさは異なるが，同じ製作技法である。396は，底部から胴部に向かって器壁が薄くなる。成形は丁寧で，器面調整は外面がケズリ後ハケメ，内面はハケメ後ナデが行われる。また，外面に黒斑が付き，広範囲で表面の剥落が見られる。397は396と同じ器形だが，大きさが2/3程度となる。器面調整は外面がケズリ後ハケメ，内面がハケメ後ナデである。器面の色調は赤みが強く，外面に黒斑が付く。

398・399は，壺である。398は胴部から口縁部が残存し，口径は7.0cmを測る。膨らんだ胴部に，短い口縁部は頸部から直立し，端部は丸味を帯びる。内面はナデで器面調整を行い，外面には工具ナデ痕が，口縁部から頸部直下まで筋状に巡る。399は，胴部から口縁部が残存する。口径は14.6cmを測る。なで肩で頸部が締まり，口縁部は外反する。赤みの強い色調を呈する。器面調整は



第77図　弥生・古墳時代の遺構配置図

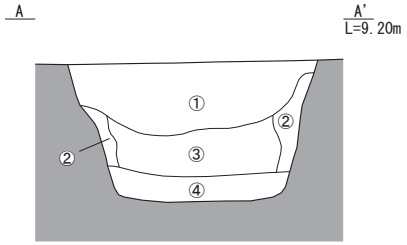
平面図



0 (1 : 125) 5m

平面図

断面図

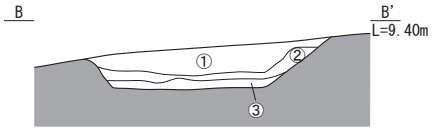


埋土 ①黒褐色土　φ5mm大のにぶい黄橙色パミスを少量含む。また，φ5～20mm大のアカホヤブロックを含む暗褐色も散見できる。

②暗褐色土　φ10mm大の黄橙色パミスや明黄褐色パミスやアカホヤブロックを含む。粘性は弱い。

③黒色土　φ５mm大のにぶい黄橙色パミスを含む。しまりがあり，粘性もややある。

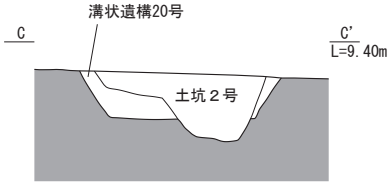
④黒褐色土　φ10cm大のアカホヤブロックを含む。粘性は弱い。

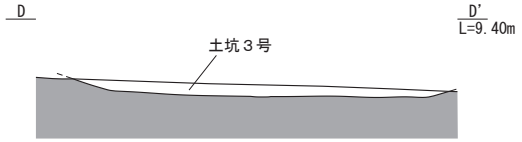


埋土 ①黒色土　砂質でφ5mm大のパミスを含む。しまり，粘性とも弱い。

②黒褐色土　褐色やにぶい黄褐色のアカホヤブロックを含む。しまりは弱い。

③明黄褐色土　砂質で黒褐色土を所々含む。しまりはない。

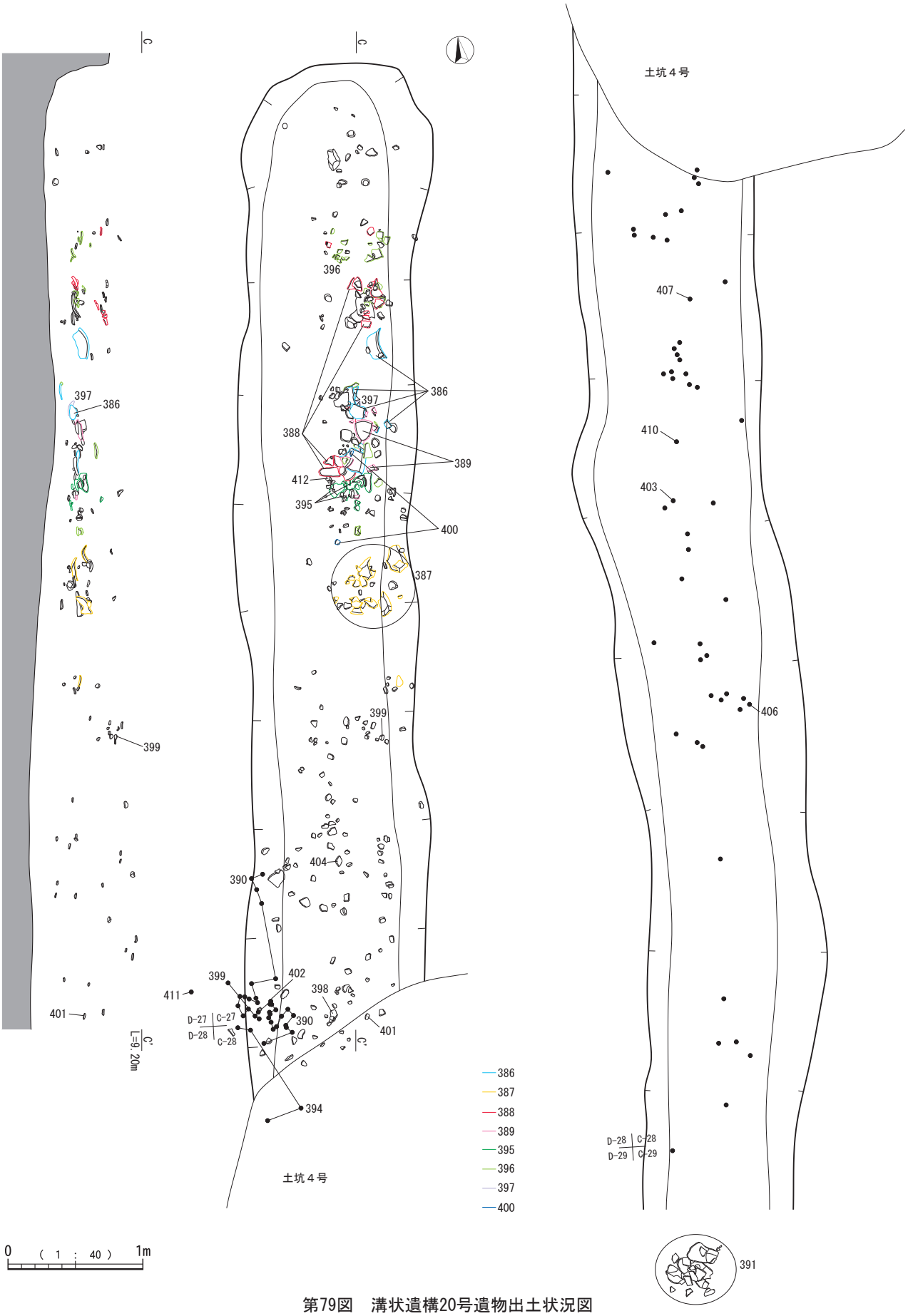




0 (1 : 40) 1m

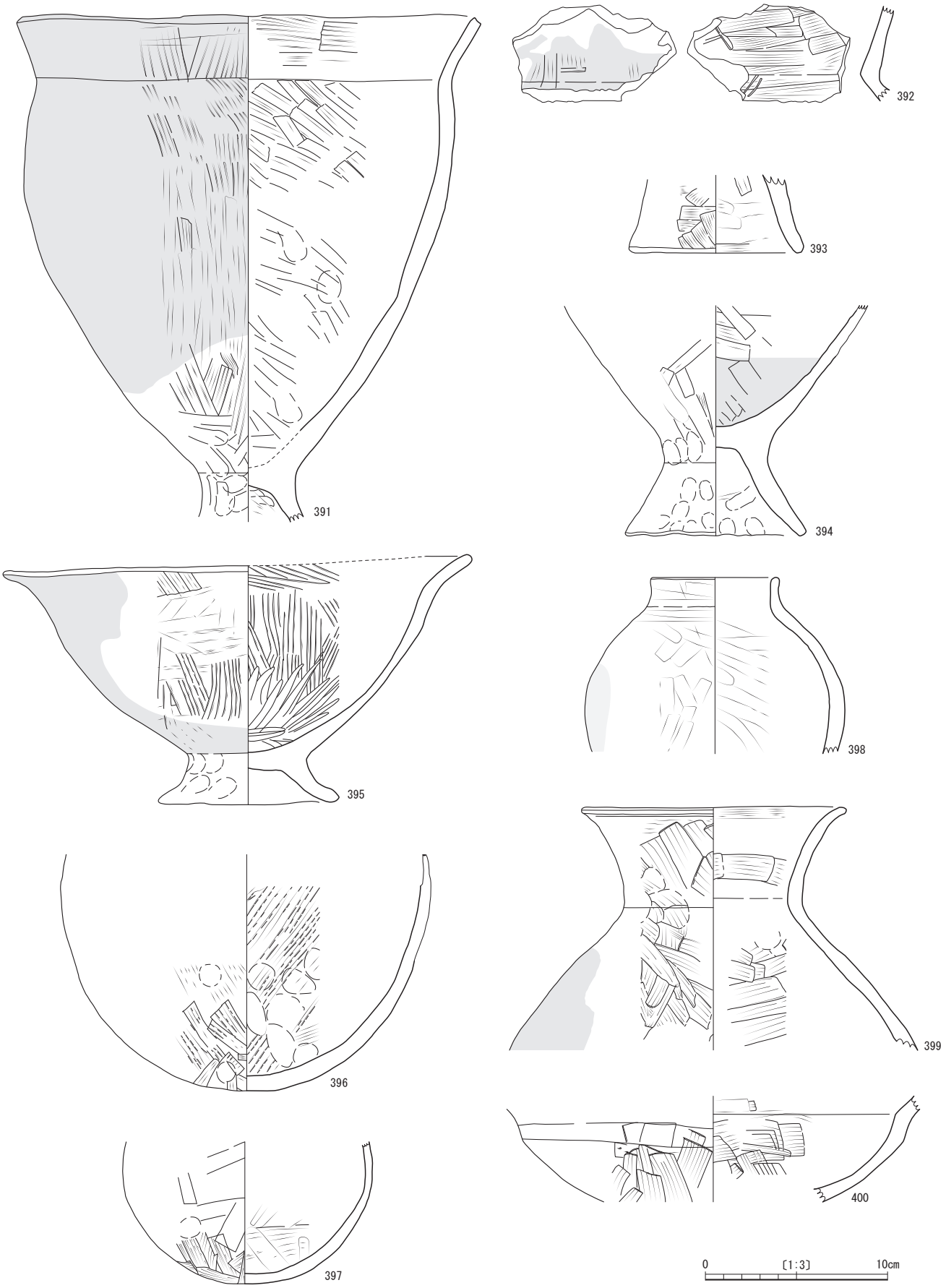
断面図

第78図　溝状遺構20号



第79図　溝状遺構20号遺物出土状況図

第80図　溝状遺構20号出土遺物（１）



第81図　溝状遺構20号出土遺物（２）

外面がハケメ，口縁部付近はナデ，内面はハケメ，ナデで調整される。内面には部分的に剥落が見られる。

400は高坏の坏部で，口縁端部を欠損する。外面の成形や器面調整は粗い。内面はハケメ，外面はケズリ後ハケメで器面調整が行われる。

401～414は，弥生時代に属する土器である。甕，浅鉢，壺，高坏，土製品を掲載した。

401～405は，甕である。401は如意形の口縁部で，口唇部には刻みを施す。内外の器面には丁寧なナデが施される。402も如意形の口縁部で，口唇部外端から口縁部にかけて押圧刻目が連続して施される。401・402ともに弥生時代前期の土器である。403は口縁部で，内湾する口縁端部に断面が方形状の突帯を貼り付け，刻みを施す。さらに，突帯は下方に垂れる。内外面とも器面調整は，ナデである。弥生時代前期の土器に比定できる。404・405は，底部片である。404の底径は，7.0cmを測る。外面にはハケメ，指頭痕が残り，内面はハケメやナデで器面調整が施される。405は接地面がやや張り出し，内外面ともナデの調整が行われる。

406は，無文の浅鉢である。胴部に屈曲部をもち，口縁部は内傾する器形で，屈曲部から口縁部にむかって器壁が徐々に薄くなる。内外面ともナデによる器面調整である。

407～411は，壺である。407は，外反する口縁部である。口唇部は浅い「M」字状となる。内外面ともミガキが施される。408は，やや外開きの口縁部外端に断面「M」字状の突帯を貼り付ける。内外面ともナデ調整が行われる。弥生時代中期に比定できる。409は胴部片で，貝殻刺突を横位に２段施す。410・411は，底部である。410は底部から開きながら立ち上がる器形で，底径9.2cmを測る。外面にミガキとナデ，内面にはナデが施される。411は上げ底で，内外面ともナデによる器面調整が施される。

412・413は，高坏の脚部である。412は，脚部と胴部の境に三角突帯を巡らせる。内外面ともナデで調整する。413は，内外面を指ナデで調整を行う。414は，弥生土器の胴部片を打ち欠く円盤状土製品である。

415～420は，縄文時代の遺物である。415は，波状口縁の波頂部に口唇部から口縁部内面までヘラ状工具による刻みを施す。外面にはヘラ状工具で直線と曲線で文様を施す。内外面ともナデ調整が行われる。416は，口縁端部内面を斜めに面取する。外面には，ヘラ状工具で斜位の沈線を施す。417は口縁部で，補修孔をもつ。内外面ともナデで調整を行う。415～417は，指宿式土器である。418は波状を呈す断面三角形の口縁部で，沈線と刺突で文様を施す。市来式土器である。419は，無文の深鉢である。直線的に伸びる胴部は，口縁部でやや内湾気味となる。口径21.8cm，底径10cm，器高16.8cmを測り，器壁の厚さは１cmを超え，重量感がある。内外面ともナデで調整される。縄文後期の土器と考えられる。420は，縄文後期と考えられる土器の胴部片を打ち欠いて作製した円盤形土製品である。

２　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は，竪穴建物跡５軒，集石１基，土坑17基である。前述のとおり，検出層は本来Ⅱ層であるが，撹乱等の影響によりⅣ層で検出された遺構もある。遺構配置図は，第77図に示した。以下，遺構の種別毎に記述する。

（１）　竪穴建物跡

竪穴建物跡は，20区で３軒，21区で１軒，25区で１軒検出された。検出面は１軒だけⅡ層で，他はⅣ層であった。平面形は円形もしくは隅丸方形であるが，不明確なものもあった。５軒の竪穴建物跡の時期については，出土遺物や埋土から弥生時代早期から前期に属すると考えられる。

竪穴建物跡１号（第83図421）

Ｃ－25区，東側の調査区境近くのⅡ層で検出された。3.42×3.38ｍのほぼ円形プランで，深さは最深部で0.3ｍ程度であった。床面および床面から壁にかけて５基の柱穴が確認された。柱穴は径0.2ｍ前後のものが３基，径0.1ｍ程度のものが２基で，深さは0.1ｍから0.3ｍであった。また，柱穴の埋土は，黒色土の単層であった。

埋土中から50点ほどの遺物が出土したが，小片が多く一括で取り上げた。縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，石鏃，礫が出土した。遺物のほとんどが弥生土器の胴部片で，胎土及び調整から弥生時代前期と考えられる。また，珪化木と考えられるものも出土した。長さ７cm，幅10cm，重さ380ｇを測る。

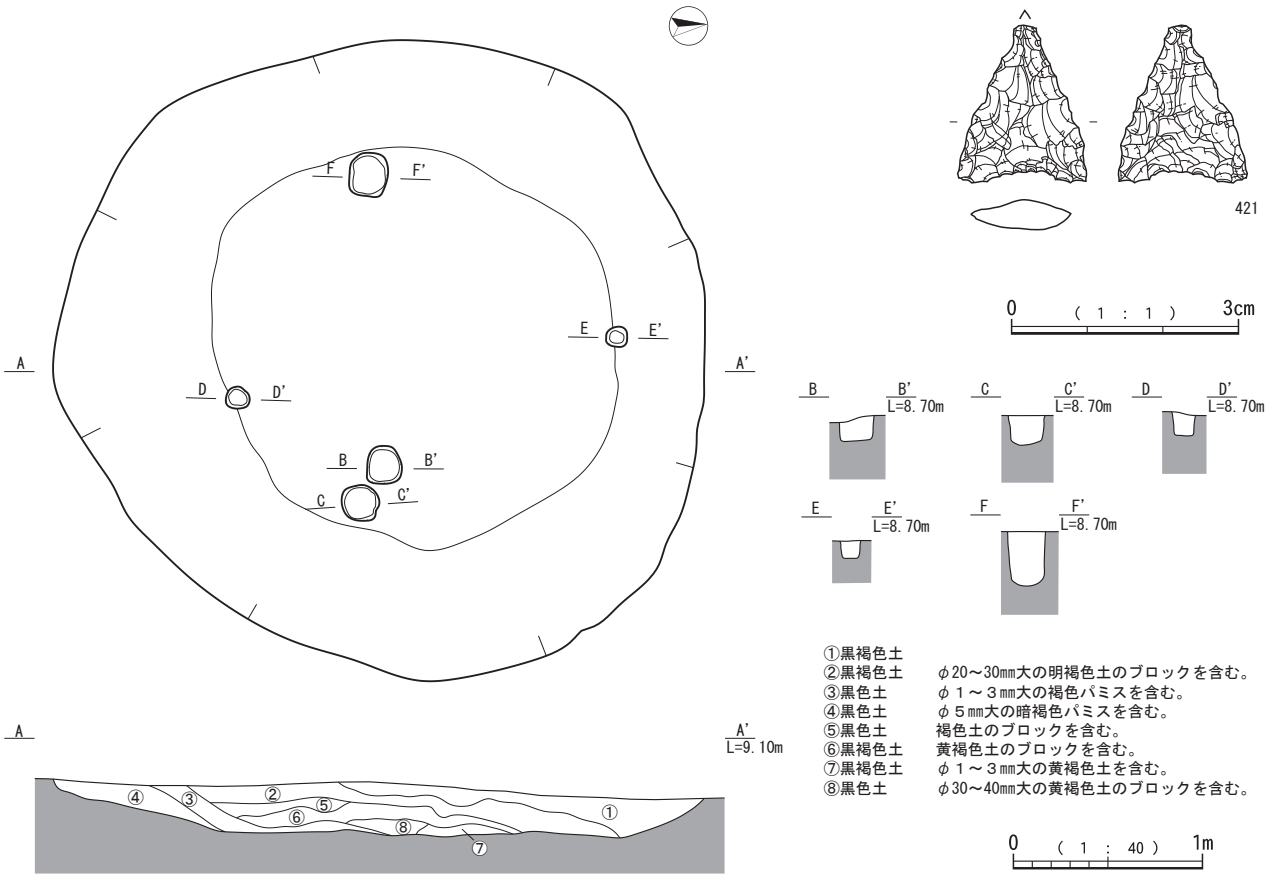
421は，安山岩製の石鏃である。先端は欠損し，浅い凹基で辺縁部は僅かに潰れている。

竪穴建物跡２号（第84・85図422～431）

Ｄ－20区，Ⅳａ層上面での検出である。ほぼ床面しか残らない状況で検出したため平面形は不明確であるが，円形と考えられる。残存部分は長軸3.61ｍ，短軸3.1ｍ，深さは0.2ｍほどであった。遺構内から２基の柱穴を検出した。さらに，東側に隣接し，柱穴が１基検出された。本来の遺構の広がりを考えると，この柱穴も本遺構に伴うものと考えられる。この柱穴の埋土は軽石がふやけたような灰白色土を多く含んでいた。３基の柱穴は最大径が0.2ｍと0.4ｍのものがあり，深さは0.2～0.4ｍであった。埋土は，黒褐色土もしくは暗褐色土を主体とする。

遺構内からは78点の遺物が確認され，大半が弥生土器の胴部片であった。他には縄文時代後期と考えられる土器片，黒曜石の剥片等が出土した。出土した遺物のうち８点を図化した。422～426は，甕である。422は口縁部で，折り曲げて口縁端部を作る。工具ナデによる丁寧な

第82図　溝状遺構20号出土遺物（３）



第83図　竪穴建物跡１号及び出土遺物

器面調整である。423は，口縁端部に断面が三角形の突帯を貼り付ける。外面にはススが付着する。424は完形品で，口径23.3cm，底径８cm，器高27.9cmを測る。口縁部は左右で高低差があり，歪な器形となる。胴部は，膨らみをもちながら口縁部に至る。口縁端部に断面が台形状の突帯を貼り付け，口縁部と一体となった平坦な面を作るが，やや下方に垂れる。また，その先端には浅い凹みを巡らせる。口縁部下位には低い突帯を３条施す。弥生時代中期の入来Ⅰ式に比定できる。425は胴部片で，米粒大の刻みをもつ突帯を貼り付ける。器面調整は，ナデが施される。426は，弥生土器の底部と考えられる。内外面ともミガキによる器面調整が施される。

427・428は，壺である。427は口縁部で，端部は丸く収める。内外面ともミガキによる器面調整が施される。428は口縁部で，端部は方形に近い断面となる。ミガキ，ナデによる器面調整である。入来Ⅰ式土器である。

429は，弥生土器と考えられる胴部片を打ち欠いて作った円盤形土製品である。

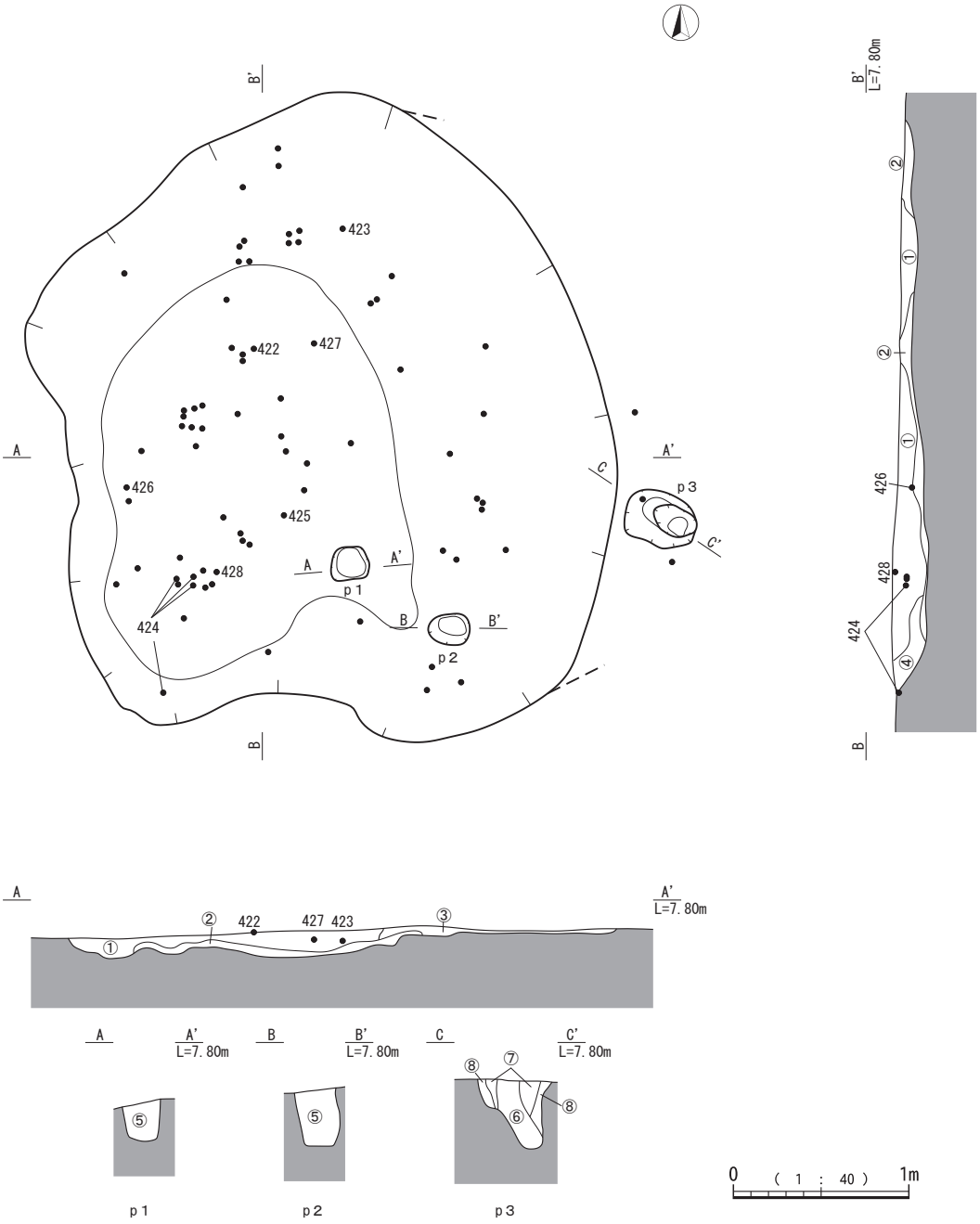
430は，安山岩製の石鏃である。二等辺三角形に近い形状で，浅い凹基である。両側縁には微細剥離が顕著である。431は，敲石である。三角柱状の素材の鋭利な右辺のみ敲打痕とこれに伴う衝撃剥離が認められる。他の面の稜線は摩耗している。

422～428は，弥生時代前期から中期の土器である。また，弥生時代中期と考えられる424・428は埋土の中位以上で出土し，埋土の下位には掲載できなかったが弥生時代前期の土器が出土していることから本遺構の時期は弥生時代前期と考えられる。

竪穴建物跡３号（第86図432・433）

Ｂ－21区の東側，調査区境のⅣｂ層で検出された。Ｂ・Ｃ－20・21区付近は近現代の攪乱のため，Ⅱ層からⅣａ層は残存しない。平面形が不明確だったため，調査区境にミニトレンチを設定して立ち上がりを確認した。遺構の半分程度は調査区外に延びるため全容は不明であるが，平面形は隅丸方形と考えられる。検出した規模は，長軸2.52m，短軸1.45m，深さ0.19mであった。

出土した遺物のうち，２点を図化した。432は，甕の口縁部である。口縁端部に突帯を貼り付け，平坦な口縁部を作る。突帯には刻みが施される。433は壺の胴部で，間隔の開いた細かい刻みが施される突帯が１条貼り付け



埋土

①黒褐色土
　暗褐色を呈する鉄分を含む。
　φ5mm大の黄橙色及び浅黄橙色パミスを極少量含む。
　しまり，粘性ともある。

②黒褐色土と明黄褐色土の混土
　しまりはややあるが，粘性はない。

③暗黒色土
　Ⅲ層土を少量含む。
　しまりはややあるが，粘性はない。

④黒褐色土
　φ15mm大の黄褐色パミスを含む。
　しまり，粘性ともある。

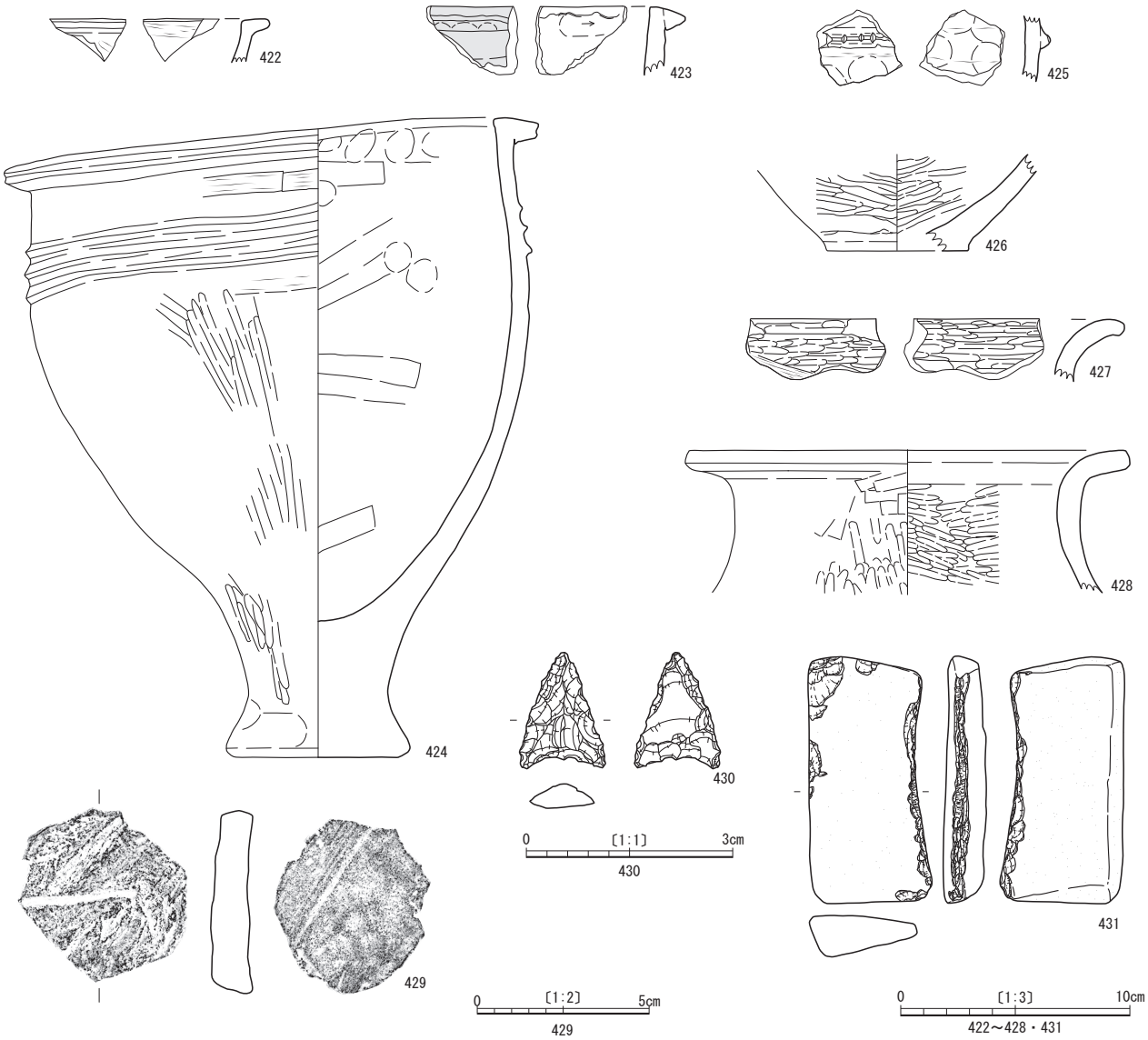
⑤黒褐色土
　明黄褐色小パミスを極少量含む。
　しまりはあるが，粘性は弱い。

⑥暗褐色土
　軽石状の小片がふやけた状態に似た灰白色土が多量に混じる。しまりはないが，粘性は強い。

⑦黒褐色土
　明黄褐色土を極少量含む。しまりはないが，粘性は強い。

⑧黒褐色土
　⑦と比べ，しまりはあるが，粘性は弱い。明黄褐色土は見られない。

第84図　竪穴建物跡２号



第85図　竪穴建物跡２号出土遺物

られる。いずれも弥生時代前期に比定できる。

竪穴建物跡４号（第86図）

Ｂ－20・21区のⅣａ層で検出された。本遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層は削平を受け，表層下はⅣａ層であった。遺構の大部分は調査区外へ拡がり，全容はつかめなかった。残存する長軸3.3m，短軸0.9m，深さは0.1mから0.15mであった。平面形は隅丸方形と考えられる。

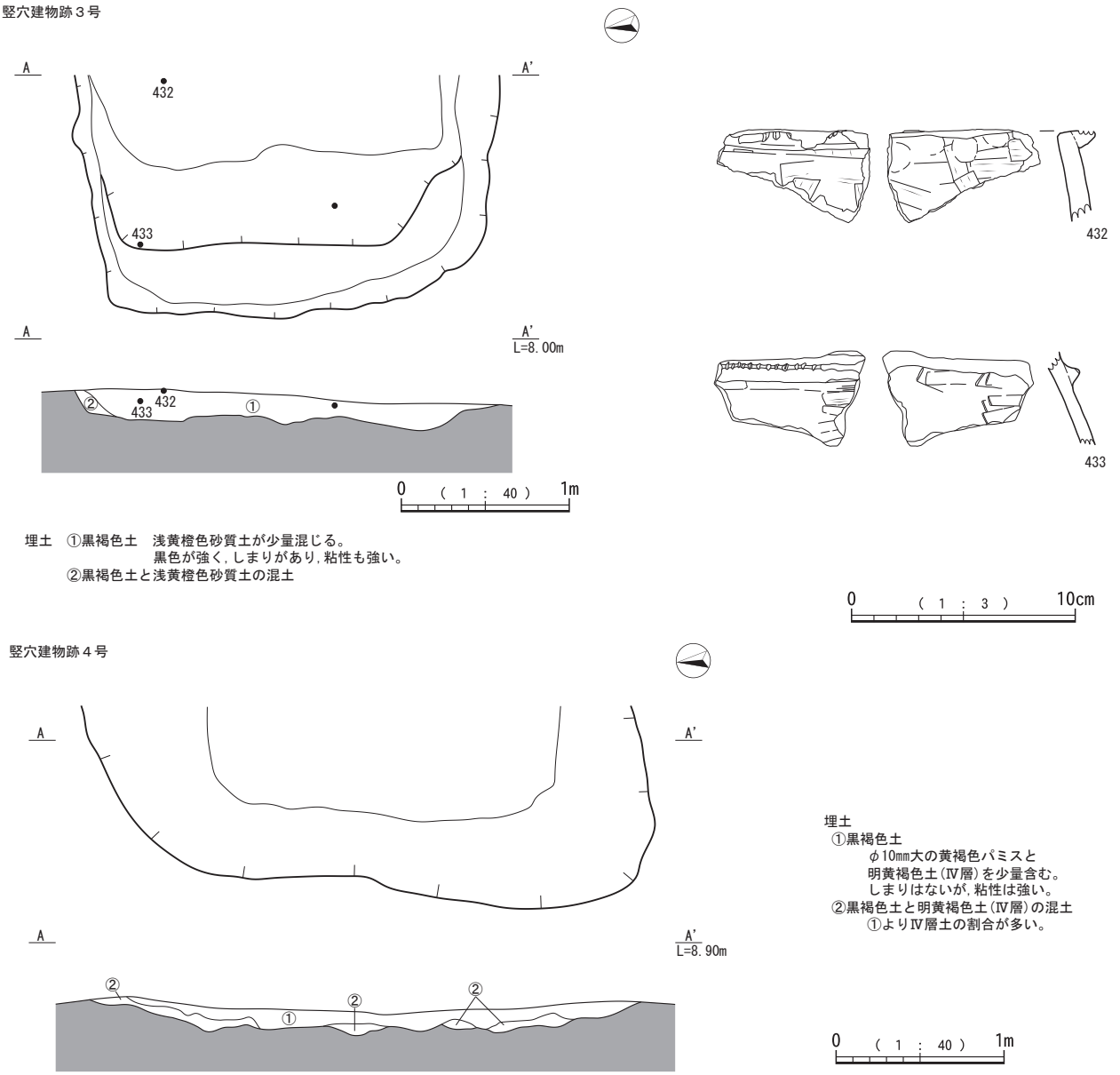
埋土中から遺物の出土は確認されなかった。

竪穴建物跡５号（第87図434・435）

Ｂ・Ｃ－20区，Ⅳａ層で検出された。遺構の西側部分は1/3程度が削平され，床面からも0.15mほどしか残存しない。平面形は円形と考えられ，径は約3.7m程である。本遺構に伴うと考えられる柱穴が床面から１基，壁面から４基確認された。５基の柱穴は径が0.2～0.3m，平面形が円形もしくは楕円形を呈する。深さは浅いもので0.2m，深いもので0.58mであった。埋土は単層で，黒褐色土もしくは類似する暗褐色砂質土であった。

また，東側の一段高い部分の床面で上部を本遺構に切られた土坑22号が検出された。さらに，この土坑22号の北東隅を切る柱穴ｐ５が検出されている。

埋土中から20数点の遺物が出土し，その大半が弥生土器であった。その中の２点を図化した。**434**は甕の口縁部で，その端部に刻目突帯を貼り付け，平坦に仕上げるものである。突帯の下に棒状工具を押し当てた痕跡が残る。**435**は，甕の底部である。いずれも弥生時代前期に比定される。他には土師器，青磁が各１点出土しているが，混入と判断した。



第86図　竪穴建物跡３・４号及び３号出土遺物

（２）　集石１号（第88図）

Ｄ－21区，土坑20号の南西に隣接したⅡ層で検出された。数㎝から10㎝大の４個の礫で構成される。掘り込みをもち，その平面形は長軸0.68m，短軸0.44mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.14mで，底面は西から東へ低くなる。

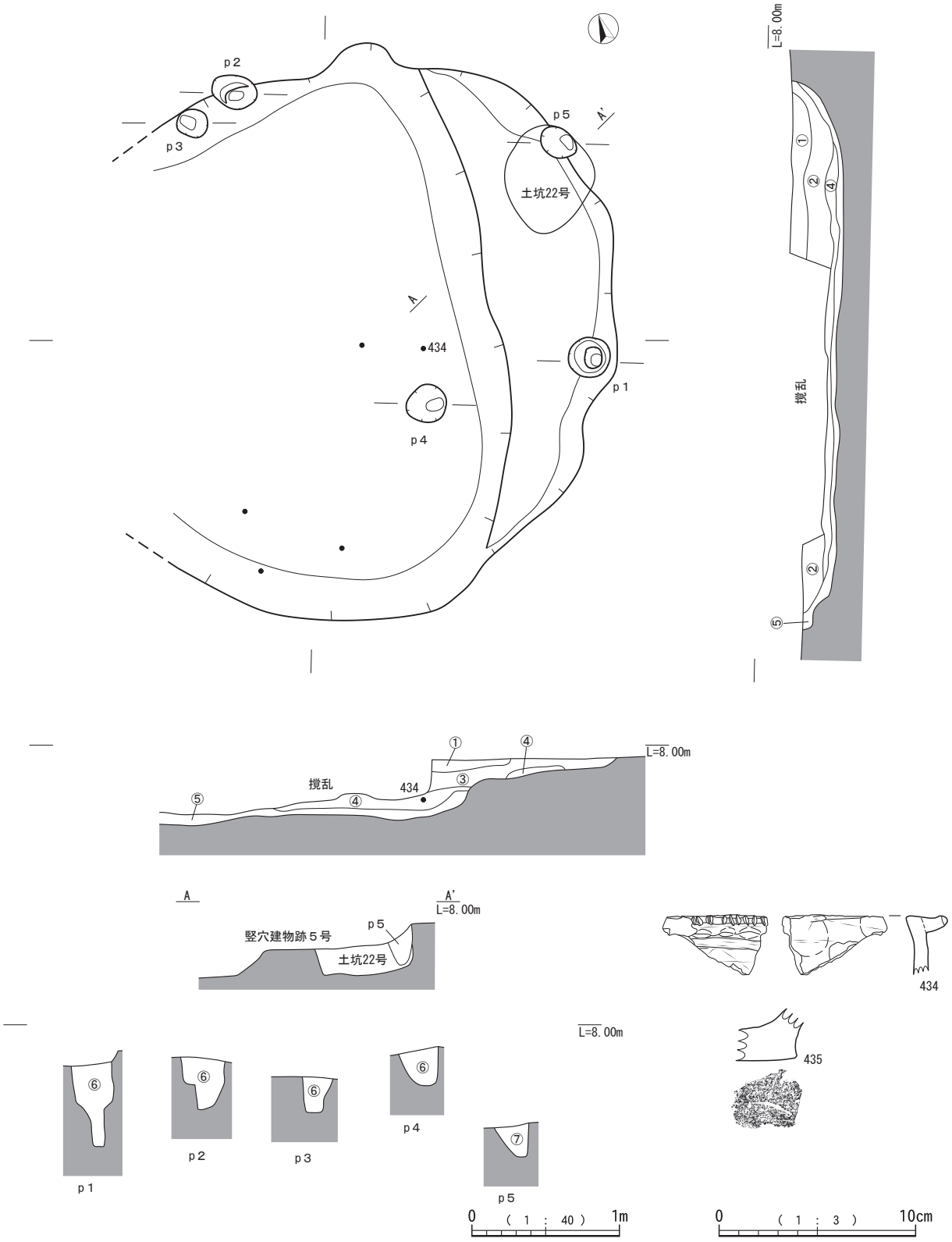
遺構内から遺物の出土は確認されなかった。

（３）　土坑

土坑は17区から27区にかけての低地部で，土坑14号から30号までの17基が検出された。検出層は，Ⅲ層である。土坑の埋土は，基本的に黒色土もしくは黒褐色土を主体とする。

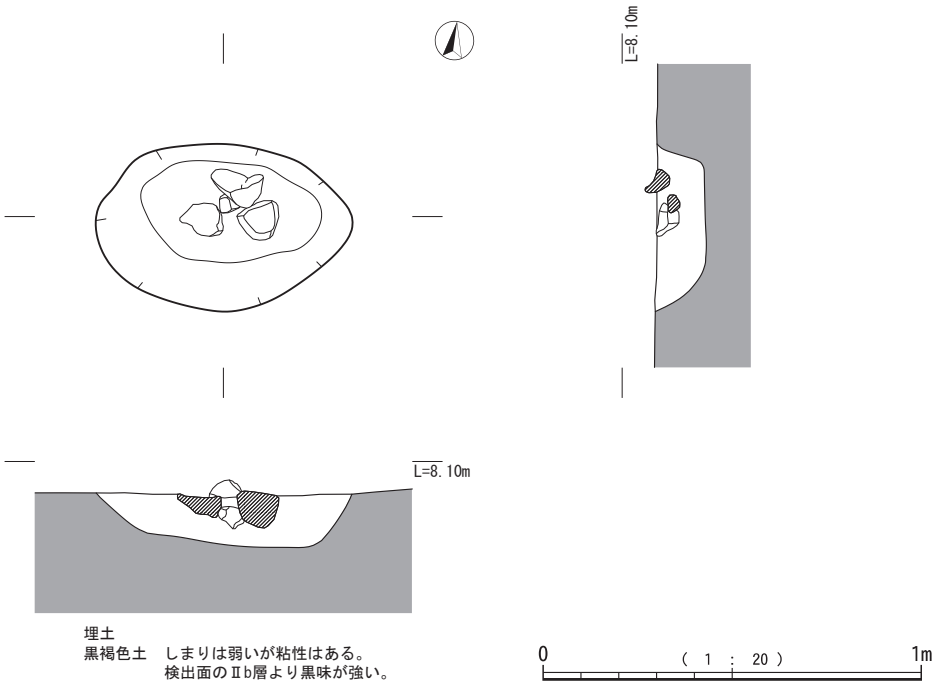
17基の土坑は，その形状で次のように分類した。なお，切り合い関係があることから，挿図の都合上，遺構番号順に掲載した。分類は平面形を基にしており，中・近世と同じである。

Ⅰ類　円形もしくは円形に近いもの
　　15号　19号　20号　22号　27号　28号
Ⅱ類　方形もしくは方形に近いもの
　　14号　16号　18号　23号　24号　25号　30号
Ⅲ類　不定形，攪乱等で形状が不明なもの
　　17号　21号　26号　29号



埋土　①黒褐色土　φ1mm大の赤褐色のパミス(アカホヤ)を極少量含む。しまりはあるが,粘性は弱い。
②黒褐色土　φ1mm大の赤褐色のパミス(アカホヤ)を極少量含む。しまりは弱いが,粘性をもつ。①よりも黒味が強い。
③黒褐色土(①)と黄褐色砂質土(アカホヤ)の混土
④黒褐色土　黄褐色砂質土(アカホヤ)が一部混じる。しまりは弱いが,粘性はある。
⑤黒褐色土と浅黄橙色砂質土(シラス)の混土　しまり,粘性とも弱い。
⑥黒褐色土　明黄褐色(アカホヤ)がまばらに含む。しまりは弱いが,粘性はある。
⑦暗褐色砂質土　明黄褐色砂質土(アカホヤ)が多く混じる。しまりはあるが,粘性はない。

第 87 図　竪穴建物跡５号及び出土遺物



第88図　集石１号

土坑14号（第89～91図436～443）

Ｄ－27区，Ⅲ層で検出された。長軸1.95m，短軸1.4mでⅡ類に分類した。深さは0.85mで，断面は方形に近い。

埋土中から82点の遺物を確認した。弥生土器が大半で，縄文土器５点と頁岩や砂岩，黒曜石の剥片等も出土した。そのうち，８点を図化した。

436～440は，甕である。436は口縁部から胴部までが残存し，口径は36cmを測る。やや膨らみをもつ胴部は口縁部でわずかに内湾する。口縁部外端に断面三角形の突帯を貼り付け，口唇部は幅広く，水平に仕上げる。胴部にも断面三角形の突帯を巡らす。いずれの突帯の頂部には細かい刻みを密に施す。内外面とも調整は基本的にナデで行う。部分的に胴部から口縁部までススが付着する。弥生時代前期後半の高橋Ⅱ式土器に比定できる。437は，胴部から底部が残存する。平底の底部から直線的に胴部へと立ち上がる器形をもつ。外面はミガキとナデで，内面はナデで器面調整を行う。外面の一部にはススが付着する。438・439・440は，平底の底部である。440は器面調整が粗いことから，古くなる可能性もある。

441は，壺である。頸部から胴部までが残り，屈曲部の内面には緩い稜をもつ。外面は５mm幅のミガキが丁寧に施され，全面に朱が塗られる。内面は，ナデ調整が行われる。

442は深鉢の口縁部で，口唇部の一部を欠損する。断面を三角形に肥厚させ，その上半には斜位の連続刺突を横位に巡らせ，「Ｃ」字状の押圧を横位に施す。また，下半には横位の沈線を３条施す。縄文時代後期の市来式土器である。

443は，磨敲石である。全面にわたって敲打痕があり，それ以外は磨面が残る。側面にリタッチも観察でき，各作業痕の切り合いから，敲石としての利用が最後と考えられる。

土坑15号（第89・93図444～446）

Ｄ－27区のⅢ層，土坑14号の北西に隣接して検出された。長軸1.75m，短軸1.68mのⅠ類である。断面は，皿形を呈する。土坑内には４基のピットが検出されたが，いずれも近世のピットである。埋土は，主にⅡ層の黒褐色土が入り込む。

埋土内から出土した土器は，全て弥生土器片であった。この他に，黒曜石，頁岩，砂岩の剥片や礫が確認された。445は，自然科学分析を行った。遺物出土が遺構の南側に偏る傾向にあった。出土遺物の内，３点を掲載した。444は甕の胴部片で，断面三角形の突帯を貼り付け，細かい刻みを施す。器面調整はナデが施される。445は甕の底部片で，内面に炭化物が付着する。

446は，左脚を欠損する石鏃である。調整剥離はやや

粗く，平面が非対称となる。

土坑16号（第89・93図447・448）

Ｄ－25・26区，Ⅲ層で検出された。長軸1.33m，短軸1.12mを測る。床面には凹凸があるが，壁は緩やかに立ち上がる。床面は北側が深く，最深部が0.32mであった。

埋土中からはまとまった土器片と黒曜石のチップ・フレイクが出土した。447は，自然科学分析を行った。

447・448は甕で，埋土の上部からまとまって出土した。遺構が埋没する過程で廃棄されたことが考えられる。447は，胴部と口縁端部に刻目突帯を貼り付ける。口縁部突帯は平坦に仕上げるが，やや垂れる。内外面とも丁寧なナデで器面調整が行われる。弥生時代前期後半～中期にかけての土器と考えられる。448は447と同じような器形，胎土，焼成であるが，刻目突帯は口縁部だけに貼り付ける。口縁部突帯は平坦に仕上げるが，447よりもさらに垂れる。弥生時代中期の入来Ⅰ式土器に比定できる。

土坑17号（第92・93図449）

Ｄ－25区，Ⅲ層で検出した。土坑16号の北西約３ｍに位置する。長軸1.04m，短軸0.91mの不定形な形状を呈する。床面は南側に向かって傾斜するが，断面はほぼ方形である。最深部は0.67mを測るが，床面近くでは湧水する。

埋土中から縄文土器と弥生土器が10数点ずつ，頁岩と砂岩の剥片が出土した。そのうち１点を掲載した。449は底部を欠損する浅鉢である。胴部で屈曲し，口唇部を外側につまみ出して折り曲げる。内外面ともナデで器面調整を行う。弥生時代前期前半の土器と考えられる。炭化物が付着し，自然科学分析を行った。

土坑18号（第92・94図450～458）

Ｄ－24区，Ⅲ層で検出した。長軸1.91m，短軸1.5mでⅡ類に分類した。深さは0.3m程度であった。遺構の南側は溝状遺構４号と重複していることから検出面が低くなったことが考えられるが，詳細は不明である。

埋土からは縄文土器数点，黒曜石の剥片等が出土した。そのうち９点図化し掲載した。454は自然科学分析を行った。

450～453は，甕である。450は口唇部を幅広く平坦に仕上げ，外端に刻みをやや広い間隔で施す。451は口縁外端に突帯を貼り付けるもので，突帯の先端部は丸味をもち，刻みは施さない。外面にはススが付着する。内外面ともナデを施す。452は口縁部片で，その端部を短く外反させる。丸く収めた口唇部の外端に刻みを施す。内外面とも丁寧なナデを施す。外面にはススが付着する。453は平底の底部からあまり膨らみをもたずに立ち上がり，胴部上部から内湾する口縁部は端部で大きく外反し，口唇部には刻みが施される。また，胴屈曲部のやや上方に小振りの突帯を貼り付け，ヘラ状工具で刻みを施すが，その痕跡が胴部にも部分的に及ぶ。口径23.3cm，底径7.3cm，器高28cmを測る。内外面ともナデによる器面調整が丁寧に施される。胴部上半にススが付着する。出土状況から遺構が埋没する過程で廃棄されたと考えられる。弥生時代前期の板付Ⅱ式土器に比定できる。

454は，小型の鉢もしくは脚付鉢と考えられる。上げ底気味の底部をもち，胴部から口縁部へはやや膨らみながら立ち上がる。全体的に器壁が厚く，重量感がある。内外面ともナデとミガキで器面調整を行う。内外面にススが付着している。455は内外面をナデとミガキで，丁寧に仕上げる浅鉢の口縁部である。

456は口縁端部を肥厚させ，外面に幅広い沈線を横位に施す。外面はナデ，内面は条痕による器面調整を行う。縄文時代後期の土器である。

457・458は，いずれも石鏃の未製品である。457は，左側縁と下縁に剥離加工が見られる。458は，両側縁に連続した剥離加工が見られる。

土坑19号（第92・94図459・460）

Ｄ－21区，Ⅲ層で検出した。長軸0.48m，短軸0.32m，深さ0.1mでⅠ類に分類した。本土坑は土坑20号と平面的には重複するが，本土坑の床面は土坑20号の検出面より上位である。

土坑中央部に明確な加工痕のない軽石が３点と土器小片６点が出土した。軽石は15cm大，10cm大，５cm大のものであった。出土遺物の中で２点を図化した。459は，口縁部と胴部に突帯をもつ。口縁部に貼り付けた突帯の先端は欠損する。胴部の突帯は下向きに貼り付けられ，刻み目をもつ。460は壺の口縁部で，外反する。精製された胎土には１～２mmの小礫を含む。内外面とも光沢を残すほど丁寧に仕上げられる。

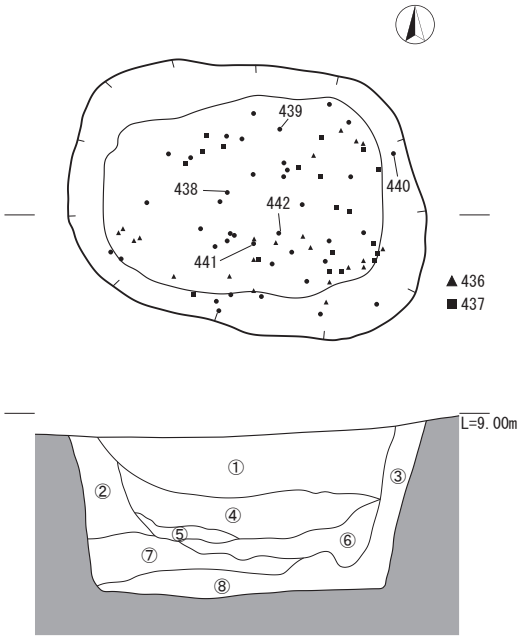
土坑20号（第92・94図461～465）

Ｄ－21区のⅢ層，土坑19号の下位に検出された。長軸1.73m，短軸1.58m，深さ0.35mを測り，Ⅰ類に分類した。遺構内から３基の柱穴が検出された。中央の柱穴は９cmと浅いが，東西の柱穴の埋土は中央の埋土と同じ黒褐色土であるが，やや黒色が強い。柱穴は掘下げ途中で湧水し，下面については不確定な要素もある。東西で検出された柱穴はいずれも0.3mの深さをもつ。

埋土中から30数点の弥生土器，３点の縄文土器が出土し，５点を掲載した。461は，壺の外反する口縁部である。焼成は堅固で，内外面ともミガキがかかる。弥生時代に比定できる。462は，壺の肩部である。三角突帯を上下に貼り付けて巡らす。器面調整はナデで，丁寧に仕上げる。弥生時代中期に比定できる。463は，甕の底部である。平底の底部から緩やかに膨らみながら立ち上がる器形である。弥生時代の土器と考えられる。464は，壺の頸部付近と考えられる。幾何学文様が細沈線で施される。瀬戸内もしくは中国地方の土器と考えられる。

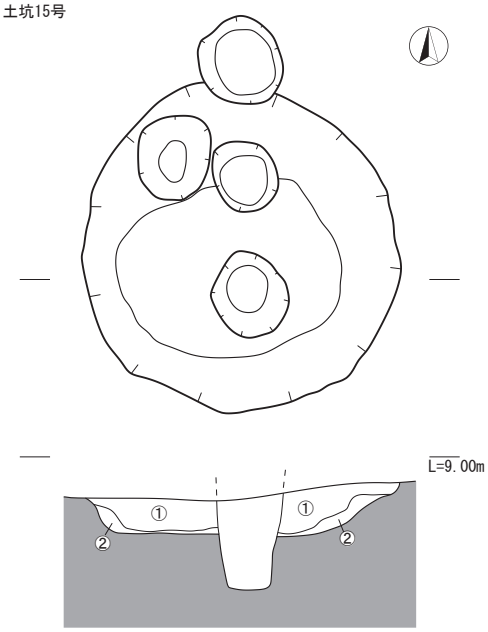
465は，断面三角形に肥厚させた口縁部に斜位の貝殻

土坑14号



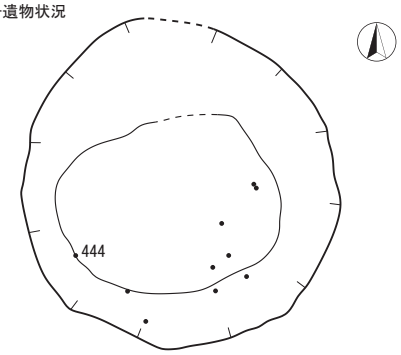
埋土
①黒褐色土　φ５～20㎜大の灰白色パミスを含む。粘性がある。
②黒褐色土　黄褐色土を多く含む。
③褐色土　φ２～３㎜大の明黄褐色のパミスを含む。粘性がある。
④黒褐色土　φ３～５㎜大の褐色と黄橙色パミスをまばらに含む。炭化物を散見される。粘性がある。
⑤黄褐色土　粘性のある黒色土を含む。砂質で粘性は弱い。
⑥黒色土　黄褐色土をわずかに含む。粘性がある。
⑦黒色土　褐色土を２割程度含む。粘性がある。
⑧黒色土　褐色土を多く含む。粘性がある。

土坑15号

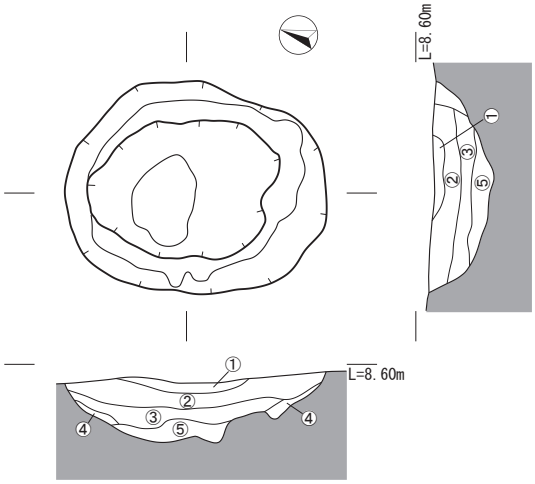


埋土
① 暗褐色土　φ5㎜大の黄褐色土ブロックを含む。
② 黒褐色土　Ⅱ層土を主体とする。

土坑15号遺物状況

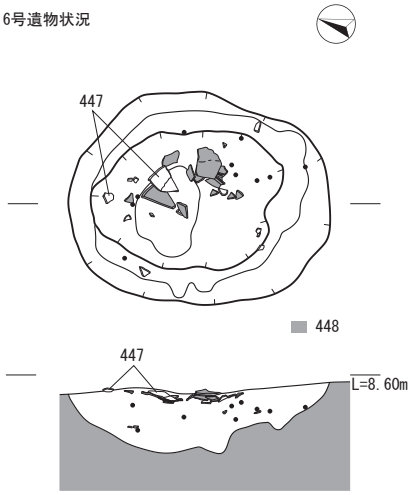


土坑16号



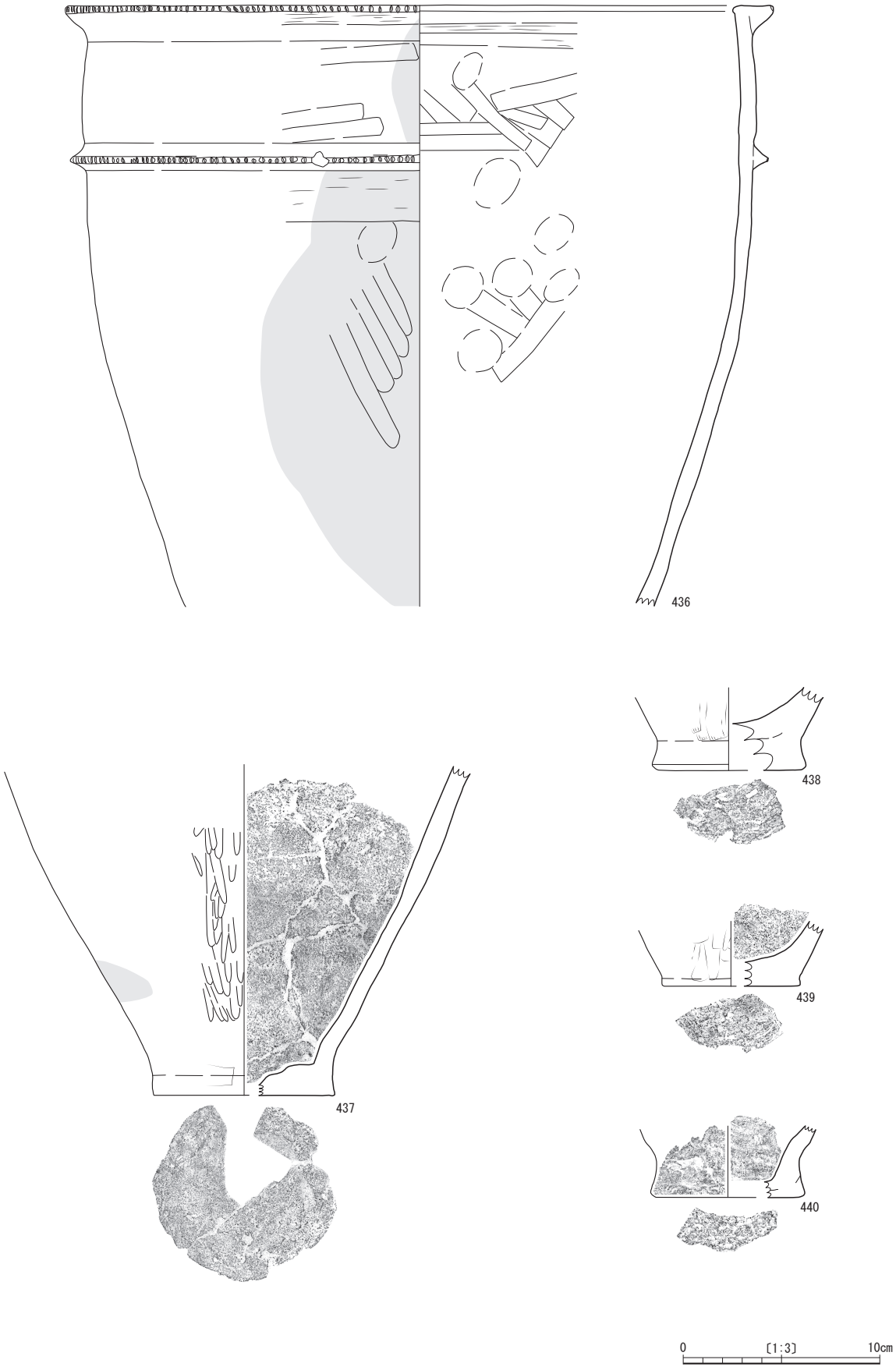
埋土
① 黒色土　しまり弱い。
② 黒色土　粘性弱く,粘性はややある。
③ 黒色土　しまり,粘性ともある。φ5㎜大のアカホヤパミスを含む。
④ 黒色土　しまり,粘性とも弱い。φ1～10㎜大のアカホヤブロックを含む。
⑤ 黒褐色土　しまり,粘性ともややある。φ5㎜～10㎜大のアカホヤブロック多く含む。

土坑16号遺物状況

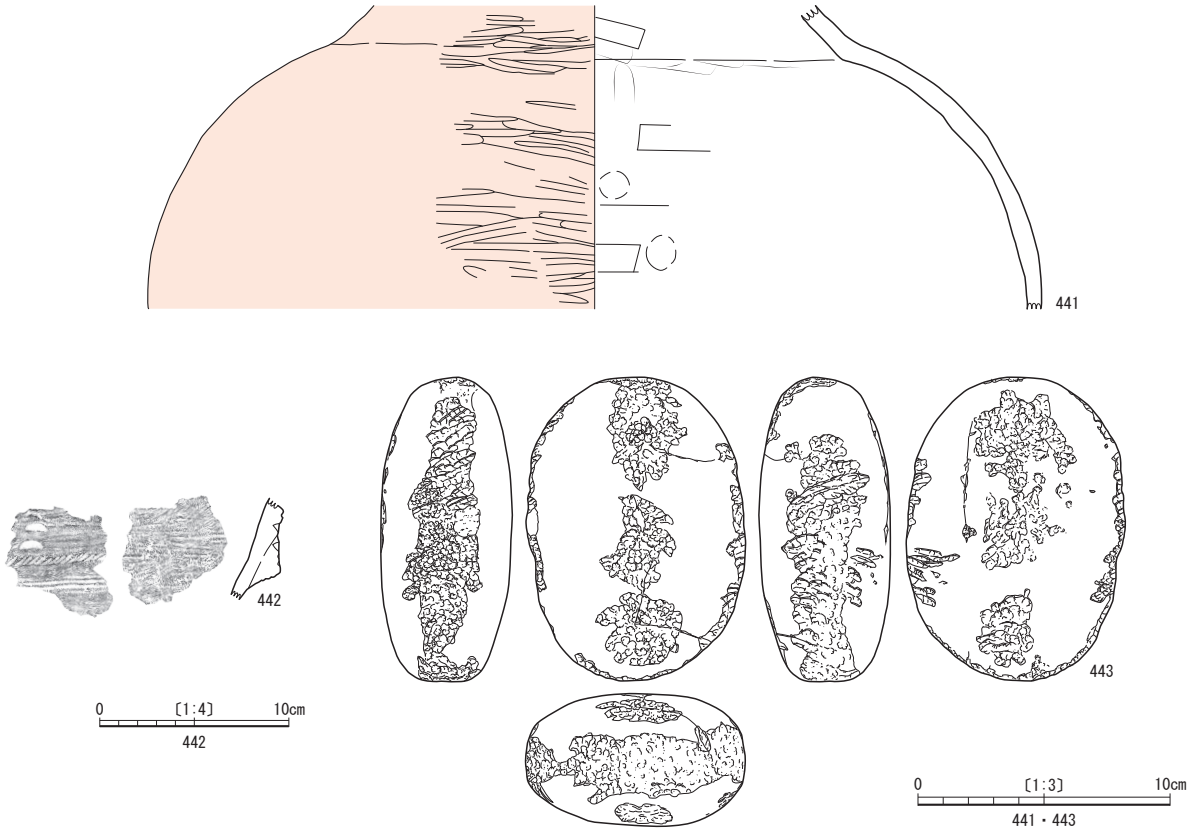


0　(1 : 40)　1m

第89図　土坑14～16号



第90図　土坑14号出土遺物（１）



第91図　土坑14号出土遺物（２）

刺突と工具による連続刺突で文様を構成する。外面はナデ，内面は条痕とナデで器面調整を行う。縄文時代後期の市来式土器である。

土坑21号（第95・97図466・467）

Ｃ－21区，Ⅲ層で検出された。溝状遺構７号に切られるが，溝状遺構７号を挟んだ西側部分には検出されないことから土坑とした。残存部分で長軸1.94m，短軸1.02m，深さ0.23mを測る。全体の形状が不明なことからⅢ類とした。

埋土中から10数点の土器片と黒曜石，ホルンフェルスの剥片等が出土したが，２点を掲載する。466は浅鉢の胴部で，屈曲部直上の接合面で剥がれ，底部も欠損する。屈曲部内面には段差を設ける。内外面とも横方向のミガキが丁寧にはいる。縄文時代晩期の黒川式土器である。

467は，甕の底部片である。平底の底面には白色土が残り，接地面がやや張り出す。弥生時代の土器と考えられる。

土坑22号（第95・97図468・469）

Ｂ－20区，Ⅲ層で検出された。径0.63×0.61mのⅠ類である。本遺構は竪穴建物跡５号の構築により削平を受け，さらに，竪穴建物跡５号に伴う柱穴ｐ５が堀り込まれている。竪穴建物跡５号との位置関係については，第87図に示した。切り合い関係から本遺構が竪穴建物跡５号より古いと考えられる。

埋土から土器片，砂岩の剥片，黒曜石が出土している。このうち，２点を図化した。468は，甕の口縁部である。刻目突帯を口縁外端に貼り付ける。内外面ともナデ調整が行われる。弥生時代前期に比定できる。469は内湾する口唇部に刻みを施し，内面にも沈線で曲線を描く。縄文時代後期の指宿式土器と考えられる。器種については小片のため詳細は不明であるが，Ⅲの可能性もある。

土坑23号（第95図）

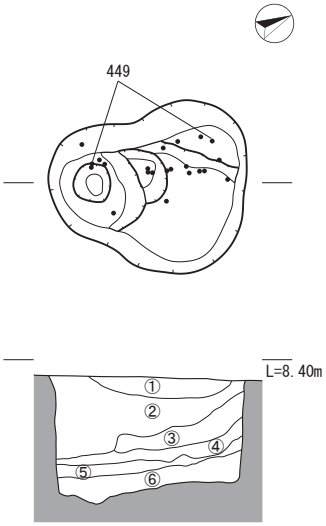
Ｂ－20区，Ⅲ層で検出された。竪穴建物跡５号に隣接し，柱穴５号に切られる。また，南側の一部はⅢ層検出のピットに切られている。残存する長軸，短軸も0.5mで深さは0.2mであった。

埋土中から土器小片が５点出土したが，図化は行っていない。１点は胴部片で刻目突帯を巡らすもので，弥生時代前期と考えられる。

土坑24号（第95・97図470～472）

Ｂ－19区，Ⅲ層で検出された。柱穴５号及び土坑25号とは切り合い関係にある。残存する長軸0.6m，短軸0.5m，深さ0.3mを測る。床面はほぼ平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴５号に切られ，土坑25号を切る。

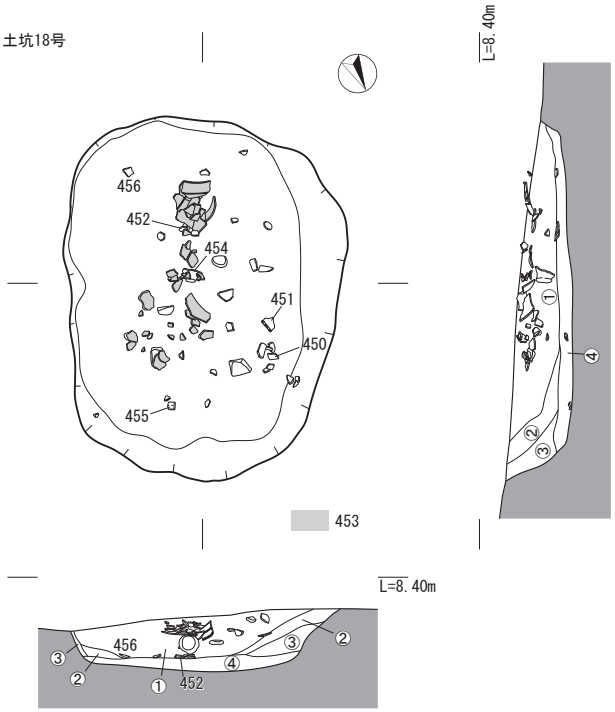
土坑17号



埋土

① 黒色土　φ3mm大の黄褐色パミスと灰白色パミスをまばらに含む。しまりがあり，粘性強い。
② 黒褐色土　φ3～20mm大の明褐色パミスと灰白色パミスをまばらに含む。しまりがあり，やや粘性がある。
③ 明褐色土　φ15mm大の黄褐色土ブロックを含む。しまりがあり、やや粘性がある。
④ 黒色土　やや粘性がある。
⑤ 暗褐色土　φ10mm大の黄褐色パミスや明黄褐色パミスを含む。所々10cm大の黄褐色土ブロックが散見される。しまりがあり，やや粘性がある。
⑥ 黒色土　④と似るがより粘性が強い。底部付近からは湧水がある。

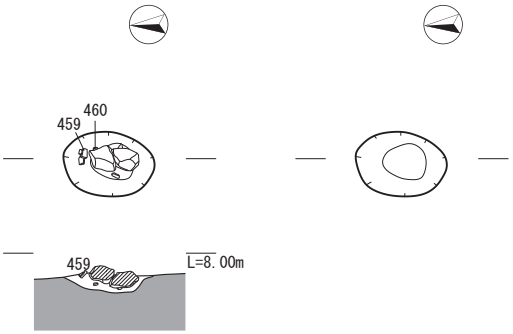
土坑18号



埋土

① 黒色土　しまりがあり，粘性がややある。φ5～20mm大の灰白色パミス含む。粘性がある。
② 黒褐色土　φ10mm大のアカホヤ火山灰のブロックを少量含む。しまり，粘性弱い。
③ 極暗褐色土　φ1～5mm大のアカホヤ火山灰のブロックを多く含む。
④ 黒色土　しまり，粘性とも①より強い。

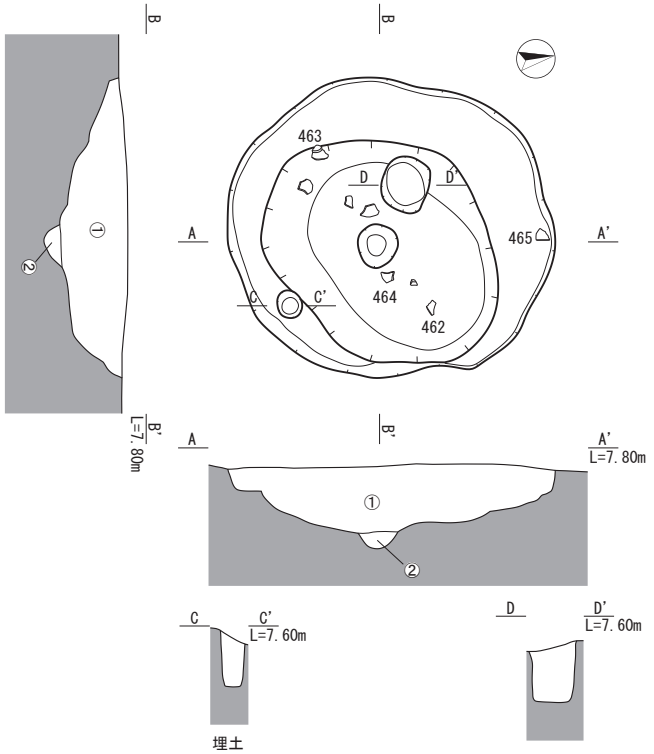
土坑19号



埋土

黒褐色土　しまりはあるが，粘性は弱い。

土坑20号



埋土

① 黒褐色土　にぶい黄橙色の極小パミスを全体的に含む。しまりは強く，粘性は弱い。
② 黒褐色土　①のように赤みは帯びず，黒色が強い。しまり，粘性ともある。

0 （1：40） 1m

第92図　土坑17～20号